勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡
シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡
山守免遺跡・石地蔵遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書2

2000年3月

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡
シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡
山守免遺跡・石地蔵遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書2

2000年3月

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

序

中国横断自動車道尾道・松江線は、「国土開発幹線自動車道法」に基づいて、均衡ある国土の開発に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、このうち三刀屋～松江間につきましては、平成９年３月から鋭意建設を進めてまいりました。その過程で、路線敷地内にある遺跡について島根県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は松江工事事務所担当区域である宍道町における勝負廻Ⅰ遺跡などの貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。

この記録調査が、はるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を時代を超えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位のご尽力に対し、深甚なる誠意を表すものであります。

平成１２年３月

日本道路公団中国支社松江工事事務所

所　　長　**村　田　一　廣**

序

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社の委託を受けて、平成８年度より中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきておりますが、このほど報告書第２集を刊行する運びとなりました。

本報告書は、八束郡宍道町来待から白石に所在する６カ所の遺跡での調査成果を取りまとめたものです。中でも野津原Ⅱ遺跡から山守免遺跡にかけては、弥生時代後期の高地性集落と考えられる遺跡群であり、中国の歴史書に書かれた「倭国大乱」の島根での様子を連想させる貴重な資料になるものと思われます。

なお、調査にあたりご協力いただきました日本道路公団中国支社、宍道町をはじめ、関係のみなさまに厚くお礼申し上げます。

平成１２年３月３１日

島根県教育委員会

教育長　山崎悠雄

例　言

1．　本書は、日本道路公団中国支社の委託を受けて、島根県教育委員会が平成８～１０年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．　本書に掲載した遺跡の所在地・調査年度は次のとおりである。

平成８年度

勝負廻Ⅰ遺跡（八束郡宍道町来待）

シトギ免遺跡（八束郡宍道町白石）

野津原Ⅱ遺跡（東区）（八束郡宍道町白石）

平成９年度

山守免遺跡（八束郡宍道町白石）

平成10年度

白石大谷Ⅱ遺跡（八束郡宍道町白石）

山守免遺跡（八束郡宍道町白石）

石地蔵遺跡（八束郡宍道町佐々布）

3．　調査組織は次のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

平成８年度〔事務局〕　勝部　昭（文化財課長）　宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）　古崎蔵治（課長補佐）　澁谷昌宏（企画調整係主事）

〔調査員〕　川原和人（文化財課主幹・調査第２係長）　丹羽野裕（同文化財保護主事）　田中史生（同主事）　東森　晋（同主事）植田　良司（同教諭兼文化財保護主事）　亀井彰子（同講師兼主事）　上河敦史（同臨時職員）　大西憲和（同臨時職員）　沙魚川聡子（同臨時職員）　中岡宏樹（同臨時職員）

平成９年度〔事務局〕　勝部　昭（文化財課長）　宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）　古崎蔵治（課長補佐）　澁谷昌宏（企画調整係主事）

〔調査員〕　川原和人（文化財課主幹・調査第２係長）　林　健亮（同文化財保護主事）　植田　良司（同教諭兼文化財保護主事）　原田敏照（同主事）　東山信治（同主事）　梶田勝造（同教諭兼主事）　難波孝之（同教諭兼主事）　岩田文昭（同臨時職員）　内田直美（同臨時職員）　越野幹司（同臨時職員）

平成10年度〔事務局〕　勝部　昭（文化財課長）　宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）　秋山　実（課長補佐）　川崎　崇（企画調整係主事）

〔調査員〕　川原和人（文化財課主幹・調査第１係長）　林　健亮（同文化財保護主事）　是田　敦（同主事）　神柱靖彦（同主事）　橘　弘章（同教諭兼文化財保護主事）　石橋俊朗（同教諭兼主事）　難波孝之（同教諭兼主事）　名越顕秀（同教諭兼主事）　勝部幸治（同講

師兼主事）　影山厚司（同臨時職員）　岡本育子（同臨時職員）

4．　発掘作業（発掘作業員雇用、測量発注ほか）については、島根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会島根支部

平成８年度　布村幹夫（現場事務所長）　原　博明（技術員）　木村昌義（技術員）
与倉明子（事務員）

平成９年度　布村幹夫（現場事務所長）　原　博明（技術員）　永原昌巳（技術員）
倉橋博之（技術員）　飯塚春美（事務員）

平成10年度　布村幹夫（現場事務所長）　原　博明（技術員）　永原昌巳（技術員）
藤原　恒（技術員）　深田明子（事務員）　馬庭明美（事務員）

5．　発掘調査、並びに報告書作成にあたっては、次の方々から有益な指導・助言を得た。記して謝意を表しておきたい。（敬称略）

田中義昭（島根大学法文学部教授）　渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）

6．　挿図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系Ｘ軸の方向を指す。従って、磁北より７°12′、真北より０°32′東の方向を示す。

7．　本報告書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院のものを利用した。また、第５・50・51・80図は株式会社ジェクトが、第28図は有限会社創互技研が作成したものを元に作成している。

8．　本報告書に使用した実測図は各調査員の他、調査補助員福田市子、遺物整理作業員高木和子、河野真由美、小豆沢美貴、松崎恵美子が作成した。また、本報告書に掲載した写真は、各調査員が撮影した。

9．　本報告書の執筆は、各調査員が分担して行い、目次にその分担を記した。

10．　本報告書の編集は、各調査員の協力を得て林が行った。

11．　出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会（埋蔵文化財調査センター）で保管している。

目　次

第１章　調査に至る経緯	（川原）	1
第２章　遺跡の位置と歴史的環境	（橘・石橋）	2
第３章　勝負廻Ⅰ遺跡	（田中）	9
第１節　調査の経過と概要		9
第２節　調査の結果		11
第３節　まとめ－勝負廻城と来待の谷－		32
第４章　白石大谷Ⅱ遺跡	（林）	35
第１節　遺跡の位置と調査の経過		35
第２節　調査の概要と土層堆積状況		35
第３節　遺構・遺物		39
第４節　小結		55
第５章　シトギ免遺跡	（川原）	57
第１節　調査の概要と経過		57
第２節　検出した古墳		58
第３節　出土遺物		59
第４節　まとめ		60
第６章　野津原Ⅱ遺跡（東区）	（丹羽野）	63
第１節　野津原Ⅱ遺跡の位置と立地		63
第２節　調査の概要と経過		65
第３節　調査の結果		69
第７章　山守免遺跡	（原田・是田）	104
第８章　石地蔵遺跡	（林）	153
第１節　遺跡の位置と調査の経過		153
第２節　遺構		153
第３節　遺物		157
第４節　石造地蔵菩薩座像		159
第５節　小結		158

挿　図　目　次

第１図　調査地の位置　4
第２図　各調査地の位置と周辺の遺跡　6
第３図　勝負廻Ⅰ遺跡の位置　10
第４図　勝負廻Ⅰ遺跡周辺切図　11
第５図　勝負廻Ⅰ遺跡調査前地形測量図　13
第６図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区地形測量図（調査後）及び遺構配置図　15
第７図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区土層断面図（Ａ－Ａ’）　16
第８図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区土層断面図（Ｂ－Ｂ’、Ｃ－Ｃ’）　17
第９図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区土層断面図（Ｄ－Ｄ’、Ｅ－Ｅ’）　18
第10図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区山城遺構実測図　19
第11図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区ＳＫ０１実測図　20
第12図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区石切り場実測図　21
第13図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区１号・２号石棺実測図・土層断面図　22
第14図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区１号石棺南側土層断面図　23
第15図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区１号石棺実測図　24
第16図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区２号石棺実測図　25
第17図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区１号・２号石棺除去後掘り方実測図　26
第18図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区出土遺物実測図　26
第19図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅱ区地形測量図（調査後）及び遺構配置図　27
第20図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅱ区通路状遺構断面図　27
第21図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅱ区土層断面図　28
第22図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅲ区地形測量図（調査後）及び遺構配置図　29
第23図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅲ区土層断面図　30
第24図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅲ区道状遺構実測図　31
第25図　勝負廻城縄張り図　33
第26図　白石大谷Ⅱ遺跡地形測量図（調査前）及びトレンチ配置図　36
第27図　白石大谷Ⅱ遺跡土層断面図　37
第28図　白石大谷Ⅱ遺跡地形測量図（調査後）及び遺構配置図　38
第29図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段２実測図（東側）　40
第30図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段２実測図　41
第31図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段２出土遺物実測図　42
第32図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段３実測図（西側）　43
第33図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段３実測図　44
第34図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段３出土遺物実測図　45
第35図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段１実測図　46
第36図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段１出土遺物実測図　47
第37図　白石大谷Ⅱ遺跡出土石器実測図　48

第38図　白石大谷Ⅱ遺跡出土土器実測図（１）　49
第39図　白石大谷Ⅱ遺跡出土土器実測図（２）　50
第40図　白石大谷Ⅱ遺跡出土土器実測図（３）　51
第41図　白石大谷Ⅱ遺跡出土土器実測図（４）　52
第42図　白石大谷Ⅱ遺跡出土土器実測図（５）　53
第43図　白石大谷Ⅱ遺跡出土土器実測図（６）　54
第44図　白石大谷Ⅱ遺跡出土磁器実測図　54
第45図　シトギ免遺跡地形測量図（調査前）及び調査区配置図　57
第46図　シトギ免古墳実測図　58
第47図　シトギ免遺跡出土遺物実測図　59
第48図　野津原Ⅱ遺跡周辺地形測量図　63
第49図　野津原Ⅱ遺跡の位置と周辺の主要な遺跡　64
第50図　野津原Ⅱ遺跡東区調査前測量図　66
第51図　野津原Ⅱ遺跡東区調査後測量図・遺構配置図　67
第52図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１古実測図　70
第53図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１実測図①　71
第54図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１遺物出土状況　73
第55図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１・ＳＩ０１外周溝出土遺物実測図　75
第56図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１外周溝出土遺物実測図　76
第57図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２平面図　78
第58図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２断面図　79
第59図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２遺物出土状況　81
第60図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２・ＳＩ０２外周溝出土遺物実測図　82
第61図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２外周溝出土遺物実測図　83
第62図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２外周溝出土遺物実測図　84
第63図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＢ０１実測図　86
第64図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＢ０１出土遺物実測図　87
第65図　野津原Ⅱ遺跡東区第１加工段実測図　87
第66図　野津原Ⅱ遺跡東区第１加工段出土遺物実測図　88
第67図　野津原Ⅱ遺跡東区第２加工段実測図　89
第68図　野津原Ⅱ遺跡東区第２加工段東側炉状土坑実測図　90
第69図　野津原Ⅱ遺跡東区第２加工段出土遺物実測図　91
第70図　野津原Ⅱ遺跡東区第３加工段実測図　92
第71図　野津原Ⅱ遺跡東区第３加工段出土遺物実測図　93
第72図　野津原Ⅱ遺跡東区第４加工段・第５加工段・第６加工段実測図　94
第73図　野津原Ⅱ遺跡東区第４加工段・第５加工段・第６加工段土層断面実測図　95
第74図　野津原Ⅱ遺跡東区第４加工段・第５加工段出土遺物実測図　97
第75図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＫ０１・ＳＫ０２・ＳＫ０３・ＳＫ０４実測図　98

第76図　野津原Ⅱ遺跡東区遺物出土状況　99
第77図　野津原Ⅱ遺跡東区遺構に伴わない遺物実測図　100
第78図　山守免遺跡調査区周辺地形測量図　105
第79図　山守免遺跡調査前地形測量図　106
第80図　山守免遺跡調査後地形測量図　107
第81図　山守免遺跡１区ＳＩ０１・ＳＤ０１実測図　109
第82図　山守免遺跡１区ＳＩ０１出土土器実測図　110
第83図　山守免遺跡１区ＳＤ０３出土鉄器実測図　110
第84図　山守免遺跡１区ＳＩ０２・ＳＤ０３実測図　111
第85図　山守免遺跡１区ＳＩ０３・ＳＤ０４実測図　113
第86図　山守免遺跡１区ＳＩ０３遺物出土状況　114
第87図　山守免遺跡１区ＳＩ０３（ＳＤ０４）出土遺物実測図　114
第88図　山守免遺跡１区ＳＢ０１実測図　115
第89図　山守免遺跡１区ＳＢ０２実測図　115
第90図　山守免遺跡１区ＳＫ０１実測図　115
第91図　山守免遺跡１区ＳＫ０２実測図　116
第92図　山守免遺跡１区ＳＤ０２実測図　116
第93図　山守免遺跡１区ＳＤ０２・土器溜まり出土土器実測図　117
第94図　山守免遺跡１区ＳＸ０１実測図　117
第95図　山守免遺跡１区遺構外出土遺物実測図　118
第96図　山守面遺跡２区ＳＩ０１実測図　120
第97図　山守免遺跡１区・２区遺構配置図・２区土層図　120
第98図　山守免遺跡２区ＳＩ０１遺物出土状況　121
第99図　山守免遺跡２区ＳＩ０１出土遺物実測図　121
第100図　山守免遺跡２区ＳＫ０１実測図　122
第101図　山守免遺跡２区ＳＫ０２実測図　122
第102図　山守免遺跡２区ＳＫ０３実測図　123
第103図　山守免遺跡２区ＳＫ０２出土土器実測図　123
第104図　山守免遺跡２区ＳＫ０４実測図　123
第105図　山守免遺跡２区ＳＸ０１実測図　124
第106図　山守免遺跡２区ＳＸ０１・ＳＸ０２出土土器実測図　124
第107図　山守免遺跡２区ＳＸ０２実測図　125
第108図　山守免遺跡２区遺構外出土遺物実測図　126
第109図　山守免遺跡３区遺構配置図・土層図　127
第110図　山守免遺跡３区ＳＢ０１実測図　128
第111図　山守免遺跡３区ＳＢ０１出土土器実測図　128
第112図　山守免遺跡３区ＳＢ０２実測図　129
第113図　山守免遺跡３区ＳＢ０２土層断面図　130

第114図 山守免遺跡３区ＳＢ０２遺物出土状況 130
第115図 山守免遺跡３区ＳＢ０２（北側建物）出土遺物実測図 131
第116図 山守免遺跡３区ＳＢ０２（南側）出土遺物実測図 132
第117図 山守免遺跡３区ＳＢ０３・ＳＢ０６・ＳＢ０７実測図 133
第118図 山守免遺跡３区ＳＢ０３・ＳＢ０７遺物出土状況 134
第119図 山守免遺跡３区ＳＢ０３出土土器実測図 135
第120図 山守免遺跡３区ＳＢ０３出土鉄器実測図 136
第121図 山守免遺跡３区ＳＢ０７出土遺物実測図 136
第122図 山守免遺跡３区ＳＢ０６実測図 137
第123図 山守免遺跡３区ＳＢ０４実測図 137
第124図 山守免遺跡３区ＳＢ０４出土土器実測図 137
第125図 山守免遺跡３区ＳＢ０５実測図 138
第126図 山守免遺跡３区ＳＢ０４・ＳＢ０５遺物出土状況 138
第127図 山守免遺跡３区ＳＢ０５出土遺物実測図 139
第128図 山守免遺跡３区ＳＤ０１実測図 139
第129図 山守免遺跡３区遺構外出土土器実測図 141
第130図 山守免遺跡３区遺構外出土石器実測図 142
第131図 山守免遺跡３区ＳＢ０８・ＳＢ０９・ＳＢ１２実測図 143
第132図 山守免遺跡３区ＳＢ０８遺物出土状況 144
第133図 山守免遺跡３区ＳＢ０８出土土器実測図 145
第134図 山守免遺跡３区ＳＢ０９遺物出土状況 146
第135図 山守免遺跡３区ＳＢ０９出土土器実測図 146
第136図 山守免遺跡３区ＳＢ１０実測図 147
第137図 山守免遺跡３区ＳＢ０９遺物出土状況 148
第138図 山守免遺跡３区ＳＢ１０出土土器実測図 148
第139図 山守免遺跡３区ＳＢ１１・ＳＢ１２実測図 149
第140図 山守免遺跡３区ＳＢ１１・ＳＢ１２遺物出土状況 150
第141図 山守免遺跡３区ＳＢ１１出土土器実測図 150
第142図 山守免遺跡３区ＳＢ１２出土土器実測図 150
第143図 石地蔵遺跡調査前地形測量図及び調査区配置図 152
第144図 石地蔵遺跡土層断面図 153
第145図 石地蔵遺跡調査後地形測量図 154
第146図 石地蔵遺跡出土遺物実測図 155
第147図 石地蔵遺跡石造地蔵菩薩座像立面図 156

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧 4

第２表　勝負廻Ⅰ遺跡周辺小字名一覧　10

図　版　目　次

図版１　勝負廻Ⅰ遺跡全景（西側上空から）
同（東側上空から）
図版２　勝負廻Ⅰ遺跡遠景（東（来待の谷）から）
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区第２郭検出状況（南から）
同（北から）
図版３　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区第２郭検出状況（南西から）
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区第２郭北西下方斜面土層
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区第２郭北側土層
図版４　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区ＳＫ０１土層
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区ＳＫ０１完掘状況
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区第３・第４郭検出状況（西から）
図版５　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区第３・第４郭検出状況（第２郭から）
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区第２・第３・第４郭（北西下方から）
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区外郭３・東１郭間土層
図版６　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区外郭１・２検出状況（第２郭から）
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区外郭・第２郭（北東下方から）
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区石切り場検出状況
図版７　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区１・２号石棺上土層
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区１号石南側溝検出状況（西から）
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区１号石棺検出状況（西から）
図版８　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区２号石棺検出状況（東から）
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区２号石棺崩落石除去後状況（西から）
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区１・２号石棺完掘状況（西から）
図版９　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区１号石棺蓋石除去後状況（西から）
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区１号石棺床検出状況（東から）
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区１号石棺内完掘状況（西から）
図版10　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区石棺調査風景
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅱ区加工段（東２～８郭）検出状況（南から）
図版11　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅱ区通路状遺構検出状況（北から）
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅲ区全景（第４郭から）
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅲ区西２郭検出状況（北西から）
図版12　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅲ区道路状遺構検出状況
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅲ区敷石遺構検出状況
図版13　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区第２郭出土土器
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区第２郭出土土器
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区第２郭出土金属球

図版14　白石大谷Ⅱ遺跡調査前全景（東から）
白石大谷Ⅱ遺跡調査後全景（東から）
図版15　白石大谷Ⅱ遺跡加工段２検出状況（東から）
白石大谷Ⅱ遺跡加工段２検出状況（西から）
図版16　白石大谷Ⅱ加工段３完掘状況（南から）
白石大谷Ⅱ加工段１遺物出土状況（北から）
図版17　白石大谷Ⅱ加工段１完掘状況（西から）
白石大谷Ⅱ加工段１完掘状況（東から）
図版18　白石大谷Ⅱ西側谷部遺物出土状況（北から）
白石大谷Ⅱ調査後近景（西から）
図版19　白石大谷Ⅱ調査後近景（北から）
白石大谷Ⅱ調査後近景（東から）
図版20　白石大谷Ⅱ遺跡出土遺物（1）
図版21　白石大谷Ⅱ遺跡出土遺物（2）
図版22　白石大谷Ⅱ遺跡出土遺物（3）
図版23　白石大谷Ⅱ遺跡出土遺物（4）
図版24　白石大谷Ⅱ遺跡出土遺物（5）
図版25　白石大谷Ⅱ遺跡出土遺物（6）
図版26　シトギ免古墳全景
シトギ免古墳同溝土層状況
図版27　シトギ免遺跡出土土器
図版28　野津原Ⅱ遺跡東区全景（上空から）
野津原Ⅱ遺跡東区全景（東側上空から）
図版29　野津原Ⅱ遺跡東区全景（南側上空から）
野津原Ⅱ遺跡東区全景（北側上空から）
図版30　東側の谷から望む野津原Ⅱ遺跡東区
西側の丘陵から望む野津原Ⅱ遺跡（中央の禿げた部分。上野遺跡から）
図版31　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１全景（上空から）
野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１全景（北から）
図版32　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１全景（東から）
野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１土層堆積状況（東から）
図版33　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１外周溝遺物出土状況
野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１外周溝土層堆積状況
野津原Ⅱ遺跡東区調査風景
図版34　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２全景（上空から）
野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２全景（西から）
図版35　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２外周溝遺物出土状況
野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２外周溝土層堆積状況
図版36　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１中央ピット土層堆積状況

野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２中央ピット土層堆積状況
野津原Ⅱ遺跡東区ＳＢ０１柱穴土層堆積状況
図版37　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＢ０１全景（東から）
野津原Ⅱ遺跡東区ＳＢ０１全景（北から）
図版38　野津原Ⅱ遺跡東区第１・第２加工段
野津原Ⅱ遺跡東区第２加工段全景（東から）
図版39　野津原Ⅱ遺跡東区第２加工段東側炉状土坑土層堆積状況
野津原Ⅱ遺跡東区第２加工段東側炉状土坑全景
野津原Ⅱ遺跡東区第４・第５加工段
図版40　野津原Ⅱ遺跡東区第３・第４・第５加工段
野津原Ⅱ遺跡東区第４・第５加工段土層堆積状況
図版41　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＫ０１全景
野津原Ⅱ遺跡東区ＳＫ０２全景
図版42　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１出土遺物
野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１出土遺物
図版43　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１出土遺物
野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１出土遺物
図版44　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０１出土遺物
野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２出土遺物
図版45　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２出土遺物
野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２出土遺物
図版46　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２出土遺物
野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２出土遺物
図版47　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２出土遺物
野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２出土遺物
図版48　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＢ０１第１加工段出土遺物
野津原Ⅱ遺跡東区第２加工段出土遺物
図版49　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ０２・第３加工段出土遺物
野津原Ⅱ遺跡東区第４加工段出土遺物
図版50　野津原Ⅱ遺跡東区第４・第５・第６加工段出土遺物
野津原Ⅱ遺跡東区遺構に伴わない遺物
図版51　山守免遺跡全景
図版52　山守免遺跡１・２区全景
山守免遺跡３区全景
図版53　山守免遺跡調査前（３区）
山守免遺跡１区ＳＩ０１完掘状況
山守免遺跡１区ＳＩ０１中央土坑
図版54　山守免遺跡１区ＳＤ０１完掘状況
山守免遺跡１区ＳＩ０２（ＳＤ０３）完掘状況

山守免遺跡１区ＳＤ０３鉄器出土状況
図版55　山守免遺跡１区ＳＩ０３遺物出土状況
山守免遺跡１区ＳＩ０３（ＳＤ０４）完掘状況
山守免遺跡１区ＳＩ０３中央土坑土層断面
図版56　山守免遺跡１区ＳＤ０４土層断面
山守免遺跡１区ＳＢ０１
山守免遺跡１区ＳＢ０２
図版57　山守免遺跡１区ＳＫ０１検出状況
山守免遺跡１区ＳＫ０２完掘状況
山守免遺跡１区ＳＫ０２土層断面
図版58　山守免遺跡１区ＳＤ０２完掘状況
山守免遺跡１区ＳＤ０２土層断面
山守免遺跡１区ＳＸ０１調査状況
図版59　山守免遺跡２区ＳＩ０１遺物出土状況
山守免遺跡２区ＳＩ０１土層断面
山守免遺跡２区ＳＩ０１完掘状況
図版60　山守免遺跡２区ＳＫ０１完掘状況
山守免遺跡２区ＳＫ０２土層断面
山守免遺跡２区ＳＫ０４完掘状況
図版61　山守免遺跡２区ＳＸ０１完掘状況
山守免遺跡２区ＳＸ０２土層断面
山守免遺跡２区調査後全景
図版62　山守免遺跡３区調査区土層
山守免遺跡３区ＳＢ０１土層断面
山守免遺跡３区ＳＢ０１完掘状況
図版63　山守免遺跡３区ＳＢ０２完掘状況
山守免遺跡３区ＳＢ０２遺物出土状況
山守免遺跡３区ＳＢ０２土層断面
図版64　山守免遺跡３区ＳＢ０３・ＳＢ０７完掘状況
山守免遺跡３区ＳＢ０６完堀状況
山守免遺跡３区ＳＢ０４・ＳＢ０５完掘状況
図版65　山守免遺跡３区ＳＢ０３・ＳＢ０６・ＳＢ０７完掘状況
山守免遺跡３区ＳＢ０３遺物出土状況
山守免遺跡３区ＳＢ０３・ＳＢ０７土層断面
図版66　山守免遺跡３区ＳＢ０４土層断面
山守免遺跡３区ＳＢ０５土層断面
山守免遺跡３区ＳＢ０５遺物出土状況
図版67　山守免遺跡３区ＳＤ０１土層断面
山守免遺跡１区・２区遠景

山守免遺跡３区全景
図版68　山守免遺跡３区ＳＢ０８完掘状況
山守免遺跡３区ＳＢ０９・ＳＢ１１・ＳＢ１２完掘状況
山守免遺跡３区ＳＢ１０完掘状況
図版69　山守免遺跡１区ＳＩ０１・ＳＩ０２出土弥生土器
山守免遺跡１区ＳＤ０２（土器溜まり）出土弥生土器
図版70　山守免遺跡１区遺構外出土弥生土器
山守免遺跡２区ＳＩ０１・ＳＫ０２・ＳＫ０３・ＳＸ０２遺構外出土土器
図版71　山守免遺跡３区ＳＢ０２（北側建物）出土土器
山守免遺跡２区ＳＩ０１出土砥石
山守免遺跡２区ＳＸ０１出土弥生土器
山守免遺跡３区ＳＢ０１・ＳＢ０２（北側建物）出土土器
図版72　山守免遺跡３区ＳＢ０２（北側建物）出土須恵器甕
山守免遺跡３区ＳＢ０２（南側建物）出土土器
図版73　山守免遺跡３区ＳＢ０３出土須恵器
山守免遺跡３区ＳＢ０３出土須恵器
図版74　山守免遺跡３区ＳＢ０７・ＳＢ０４・ＳＢ０５出土土器
山守免遺跡３区ＳＢ０５出土土器
図版75　山守免遺跡３区遺構外出土土器
山守免遺跡３区遺構外出土須恵器
図版76　山守免遺跡１区ＳＩ０３・２区遺構外・３区遺構外出土石器
山守免遺跡１区ＳＤ０３・３区ＳＢ０３出土鉄器
図版77　山守免遺跡３区ＳＢ０９出土土器
山守免遺跡３区ＳＢ０９出土土器
図版78　山守免遺跡ＳＢ０９出土土器
山守免遺跡ＳＢ０９出土土器
図版79　山守免遺跡３区ＳＢ０８・ＳＢ０９・ＳＢ１０・ＳＢ１２出土土器
山守免遺跡３区ＳＢ０９・ＳＢ１１出土土器
図版80　石地蔵遺跡調査前全景（東から）
石地蔵遺跡石造地蔵菩薩像据え付け痕跡（東から）
図版81　石地蔵遺跡頂部完掘状況（西から）
石地蔵遺跡石造地蔵菩薩像据え付け痕跡完掘状況（南から）
石地蔵遺跡調査後全景（東から）
図版82　石造地蔵菩薩座像全景
石造地蔵菩薩座像部分
図版83　石地蔵遺跡出土遺物

第１章　調査に至る経過

中国横断自動車道尾道・松江線は、松江都市圏と山陽地方を結び、ネットワークを形成することにより、沿線地域の産業振興や観光開発を促進するとともに、地域経済の発展と活性化を図ることを目的に事業の計画がなされた。

この計画にともなう埋蔵文化財の発掘調査については、平成４年１月に建設省道路建設局から日本道路公団に対して松江・三刀屋間について調査開始の指示があり、その一環として同年４月１７日付けで島根県教育委員会に埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。そして、平成４年１１月には日本道路公団に対して施行命令があり、平成５年９月には工事実施計画が認可された。その間、調査体制が整わないため分布調査が実施できない状態が続いていたが、平成６年３月になってやっと分布調査を実施し、全体の９割あまりを踏査した。

この調査結果をふまえ同年の６月と８月に道路公団と調査の打ち合わせを行った。この打ち合わせでは、今回の分布調査が５００m幅を対象に踏査しているので、ルート確定後再度調査対象地を把握する必要があることや、調査事業の円滑化を図るために、用地買収、立木伐採等環境整備の充実を要望した。残りの分布調査は平成７年４月に完了し、４月２８日付けで公団へ回答した。

同年４月には日本道路公団、県教育委員会、県土木部からなる埋蔵文化財調査連絡会が発足し、８月３日に第１回の連絡会を開催した。この会議では平成８年度から発掘調査に入ることを前提に用地買収や立木伐採、進入路、排土排水処理等の調査環境整備について協議を行った。この問題については、その後二回連絡会を行って調整し、宍道町下倉～弘長寺間の４.６kmに存在する遺跡について平成８年度から調査を実施することが決定した。

これを受けて調査を円滑に進めるため、作業員の確保、発掘現場における物件の確保、測量、掘削工事等の調査補助業務を社団法人中国建設弘済会島根県支部に委託するため、日本道路公団、社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者による埋蔵文化財発掘調査覚書を平成８年３月２６日に交わし、本格的に調査の準備に入ることとなった。

その後、玉湯町～宍道インター間について再踏査を数回行い、この区間に４８の遺跡が存在していることが分かった。これらの遺跡の調査は平成８年度～１０年度にかけて行ったが、平成８年度は３パーティで宍道下倉～弘長寺間の２０余りの遺跡、平成９年度は玉湯町湯町～林村にかけての８遺跡と宍道町内の残り１１遺跡を５.５パーティで行った。なお、この調査と並行して宍道インターから国道につなぐ連絡道、及び松江道路から中国横断自動車道につながる連結部についても調査を行った。

今回報告する遺跡は、中世の城跡と古墳が出土した宍道町西来待の勝負廻Ⅰ遺跡、６世紀前半の古墳が見つかった宍道町白石のシトギ免遺跡、弥生時代後期の竪穴住居跡を検出した宍道町白石の野津原Ⅱ遺跡東区（以上平成８年度調査）をはじめ、弥生時代後期の竪穴住居跡が見つかった宍道町白石の山守免遺跡（平成９・１０年度調査）、そして、平成１０年度に調査を行った宍道町白石大谷Ⅱ遺跡、宍道町佐々布の石地蔵遺跡である。

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡・シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡（東区）・山守免遺跡・石地蔵遺跡は、島根県八束郡宍道町に所在する。宍道町は、島根県の県庁所在地である松江市から西へ約１７kmにあり、宍道湖の西南端沿岸部に位置する。人口はおよそ９,５００人である。北には宍道湖があり、東は八束郡玉湯町、西は簸川郡斐川町、南は大原郡大東町と加茂町に接している。『出雲風土記』に見える意宇郡拝志郷の一部と宍道郷、出雲郡健部郷の一部とが現在の宍道町を構成しているものと考えられている。また、宍道町字佐々布付近には宍道駅が置かれ古代山陰道が存在していたと推察されており、古来より交通の要として栄えていたことがうかがえる。現在でも町内にはＪＲ山陰線、木次線が通っている。そして、山陰の主幹道である国道９号線が東西に、山陰と山陽を結ぶ国道５４号線が南北に通っている。宍道町が島根県の交通の要衝の一つであることは今も変わりがない。

調査した遺跡は、宍道湖南岸から南に約１.５kmの来待川の西から佐々布の丘陵にかけて点在する。この辺り一帯の主な特徴として、才地区から白石地区の谷にかけての丘陵では弥生時代の高地性集落が集中している。また、佐々布地区では中期古墳が多く造られている。そして中世になると、同じく佐々布地区に山城が数多く造られるようになる。

ここでは、宍道町の遺跡を整理し、地理的、歴史的背景を述べる。

宍道町においては、宍道湖に向かって北流する川によってつくられた谷平野が幾筋も認められる。その中心的なものに、佐々布川、同道川、来待川の３つの川による谷平野がある。その間には小さな川を中心とした谷が存在する。古代から形成されたと思われる広大な平野はみられない。そのため、古くから谷平野などが耕地や居住地として利用されている。また、来待地区では、凝灰質砂岩である来待石が産出され古墳の石棺や石室の石材として使われている。現在でも来待石は地場産業にもなっており、庭石などに利用されている。

旧石器時代の遺跡には、宍道町東来待の久戸地区で発見された大型の石核がある。宍道湖周辺地域は、後期には大きな谷状地形に面した環境と考えられ、当時その周辺の低丘陵は居住に最適であったと推測される。

縄文時代の遺跡は少ないが、弘長寺遺跡から石斧をはじめとする石器が出土し、近在の三成遺跡からは後晩期の甕形土器が出土している。また、西来待の伊野谷遺跡から土器が出土し、白石の野津原Ⅱ遺跡から尖頭器や石鏃が出土している。特に、弘長寺遺跡より出土している多量の石錘から湖岸では漁労が行われていたことがわかる。

弥生時代になると、先の三成遺跡、佐々布の平田遺跡、才の矢頭遺跡などが確認されており、縄文時代の遺跡に比べるとやや広がりをみせてくる。平田遺跡からは弥生土器が出土し、矢頭遺跡からは建物跡が検出されている。

後期になると、野津原Ⅱ遺跡や上野遺跡にみられるような高地性集落が形成されるようになる。宍道町の場合、広大な平野はみられないので、谷水田を中心とした小規模な集落が各地に点在し、生活を営んでいたと思われる。

古墳時代にはいると、遺跡数、遺物量ともに格段に増加する。現在までにおよそ１００近くの古

墳、横穴墓が確認されており、その多くは、来待川、同道川を中心とする河川域、宍道湖沿岸に集中する。今後の調査によってますます増加することになるであろう。

前期には、来待地区で知原１号墳、佐々布地区で上野１号墳と佐々布下１号墳が築かれる。このうち、大型の円墳である上野１号墳からは、仿製鏡や槍、豊富な玉類等が出土している。

中期からは、宍道地区で足頭古墳群、水溜古墳群が、来待地区では横田古墳、松石古墳群が築かれるようになる。これらの古墳は小さな谷を見おろす低丘陵上に立地し、３０基より形成される水溜古墳群を除いては、数基から１０基前後で構成される。全て規模は小さく、墳丘は大部分が方墳である。また、このころから古墳の石材として来待石が使われるようになる。中でも「白粉石」と呼ばれる良質の石材が横田古墳の舟形石棺として利用されている。

後期には、横穴式石室をもつ古墳と横穴墓が築かれるようになる。同道川流域では、前方後円墳の椎山１号墳や、前方後方墳と推定され石棺式石室をもつ伊賀見１号墳、同じく石棺式石室をもつ下の空古墳が造られている。石室の石材としては、この地域特有の来待石が使われている。また、横穴式石室としては、来待川流域の知原２号墳と同４号墳および鏡川流域の鏡北廻古墳などがある。鏡北廻古墳の石室も来待石の加工によるもので、閉塞石の閂状の浮き彫りは当時の加工技術の高さを物語っている。

横穴墓は、主に河川を臨む中流域及び宍道湖に面した低丘陵に広く分布している。宍道町において横穴墓の玄室形態をみてみると、隣接する簸川郡や大原郡のものとは構造上タイプを別にしている。簸川郡には三角断面妻入りやアーチ形が多くみられ、大原郡には三角断面妻入りを呈するものが多い。それに対し、宍道町では小地域ごとに平面プラン、天井形態などまとまりがみられるものの、形態的に混在した地域となっている。さらに、石材として、この地域特有の来待石を横穴式石室に利用したり、来待石の岩盤に横穴墓を掘ったりしている。このようなことから系譜の異なる二人の首長が存在し、それぞれが工人集団を掌握していたことをうかがい知ることができる。

律令時代になると『出雲国風土記』にその様相を知り得ることができる。特に宍道に関する記載の部分には、宍道の地名伝承や「犬岩、猪岩」の記述があるが、現在もそのことを示すと思われるいくつかの石が存在する。女夫岩遺跡や石宮神社にある巨石がその石とされている。また、前述したように、古代山陰道が存在し宍道駅が置かれていたことが知られており、当時の社会構造の一部を垣間みることができる。

中世になると、佐々布地区と来待地区の山間を中心として山城が築かれるようになる。
応仁年間の頃よりこの地方で勢力を誇ったのが宍道氏である。その宍道氏が本拠地として築いた金山要害山城は標高が１４８m、比高は１３０mという雄大な山塊であり、四十八成といわれるくらい曲輪の数が多い。また、交通路から考えても南部の大原郡方面への通路を扼しており、湖岸と湖上を利用しての東西方面への進出にも便利なところに位置している。そして、支城として宍道要害山城、佐々布要害山城などが築かれており、有力な国人として活躍した宍道氏の勢力を知ることができる。

中世から近世にかけては、来待石が貴重な石造物の石材として用いられるようになる。中でも、室町時代の終わりころから、信長・秀吉の時代にかけて、その利用が急増しており、五輪塔や宝篋印塔などの石塔や石仏像が中心に残っている。また、このような石材を切り出していた石切場の遺跡が点在している。

以上のように宍道町一帯は、弥生時代以降の遺跡を中心に数多くの遺跡が残されている。これまでの調査で明らかになった遺跡の実像と地理的な要因から、この地域は、古くから東部出雲と西部出雲、そして奥出雲の緩衝地帯としての性格をもちながら文化が発展し、また交通の要としての役割をもっていたといえよう。

参考文献

卜部吉博　1983「小松古窯跡群範囲確認調査報告書」宍道町教育委員会

稲田　誠　1988「水溜古墳群」宍道町教育委員会

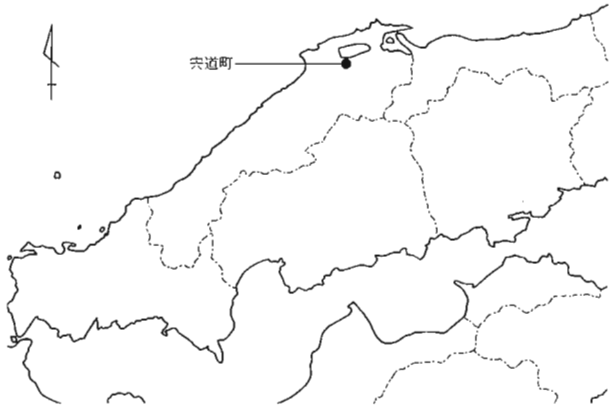
山根正明　1992「宍道町の山城」宍道町教育委員会

西尾克己ほか　1993「宍道町歴史資料集（古墳時代編Ⅰ）」宍道町教育委員会

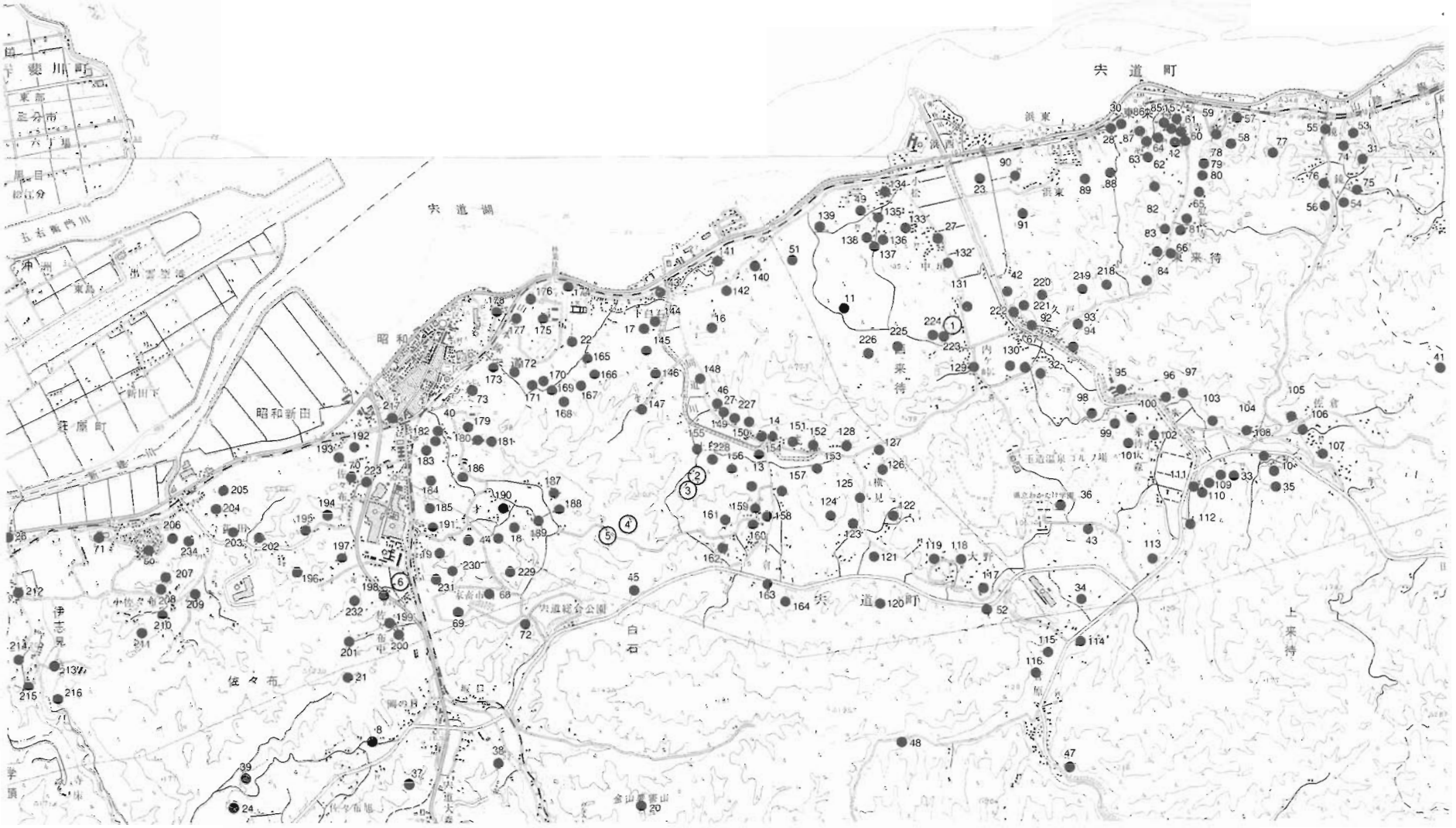
島根県埋蔵文化財調査センター　1997「上野遺跡現地説明会資料」島根県教育委員会

丹羽野　裕ほか　1998「宍道町歴史叢書３」宍道町教育委員会

川原和人ほか　1998「来待石石切場遺跡群」島根県教育委員会



第1図　調査地の位置



第2図　各調査地の位置と周辺の遺跡（S=1/35,000）

第1表　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	勝負廻Ⅰ遺跡	城跡、古墳	69	矢頭遺跡	横穴・散布地
2	白石大谷Ⅱ遺跡	住居跡	70	観音寺横穴	横穴
3	シトギ免遺跡	古墳	71	足頭古墳群	古墳
4	野津原Ⅱ遺跡（東区）	住居跡	72	水溜古墳群	古墳
5	山守免遺跡	住居跡	73	随音寺横穴群	横穴
6	石地蔵遺跡	石造仏	74	大門遺跡	散布地
7	弘長寺遺跡	散布地	75	庄廻遺跡	散布地
8	平田遺跡	散布地	76	岩穴遺跡	散布地
9	栗屋山横穴群	横穴	77	荒神谷遺跡	散布地
10	佐倉横穴群	横穴	78	水行遺跡	散布地
11	西来待横穴群	横穴	79	高狭遺跡	散布地
12	弘長寺横穴群	横穴	80	家の下遺跡	散布地
13	椎山古墳群	古墳	81	下多井遺跡	散布地
14	下の空古墳	古墳	82	立平遺跡	散布地
15	弘長寺古墳	古墳	83	前田遺跡	散布地
16	伊賀見古墳群	古墳	84	苅山遺跡	散布地
17	萩古墳	古墳	85	明寿廻東遺跡	散布地
18	才古墳	古墳	86	竹の下遺跡	散布地
19	ＯＭ公園横穴	横穴	87	寺谷西遺跡	散布地
20	金山要害山城跡	城跡	88	三成上遺跡	散布地
21	佐々布要害山城跡	城跡	89	坂広遺跡	散布地
22	伝塩冶高貞首塚	古墓	90	日吉遺跡	散布地
23	伝土御門親王墓	古墓	91	舟山遺跡	散布地
24	佐々布Ⅰ遺跡	散布地	92	水頭遺跡	散布地
25	佐々布Ⅱ遺跡	散布地(所在不明)	93	高平遺跡	散布地
26	伊志見一里塚	一里塚	94	山根遺跡	散布地
27	犬石、猪石	祭祀遺跡	95	鍛冶屋遺跡	散布地
28	三成遺跡	散布地	96	蔵敷遺跡	散布地
29	中垣遺跡	散布地	97	西廻遺跡	散布地
30	三成古墳群	古墳	98	蔵の前遺跡	散布地
31	鏡北廻古墳	古墳	99	織部古墳群	古墳
32	高松古墳群	古墳	100	平治割遺跡	散布地
33	佐久多神社裏古墳群	古墳	101	大森城跡	城跡
34	菅原横穴群	横穴	102	大畑遺跡	散布地
35	佐倉未の廻横穴群	横穴	103	大坊遺跡	散布地
36	伝大野次郎左衛門の墓	古墓	104	清水尻遺跡	散布地
37	大森経塚	経塚	105	常命壽遺跡	散布地
38	金山五輪塔群	古墓	106	柴木田遺跡	散布地
39	普門院跡	寺跡	107	岩屋遺跡	散布地
40	宍道要害山城跡	城跡	108	戸構遺跡	散布地
41	穂束城跡	城跡	109	角田古墳群	古墳
42	久戸千体地蔵	磨崖仏	110	角田横穴群	横穴
43	大野原古墳	古墳	111	紺屋田遺跡	散布地
44	才横穴群	横穴	112	金子遺跡	散布地
45	女ノ峠横穴	横穴	113	半ノ田遺跡	散布地
46	坪の内古墳	古墳	114	沢田尻遺跡	散布地
47	菅原金屋子鉾跡	製鉄遺跡	115	ハゲの前遺跡	散布地
48	上来待カナクソ谷鉾跡	製鉄遺跡	116	上本郷遺跡	散布地
49	小松古窯跡群	窯跡	117	四斗尻遺跡	散布地
50	萩田遺跡	住居跡	118	木実田遺跡	散布地
51	伊野谷遺跡	散布地	119	中村遺跡	散布地
52	大野鉾跡	製鉄遺跡	120	反田遺跡	散布地
53	大紋古墳	古墳	121	鹿掘遺跡	散布地
54	草の上東遺跡	散布地	122	土井遺跡	散布地
55	塚畑遺跡	散布地	123	堂床遺跡	散布地
56	草の上遺跡	散布地	124	横見古墳群	古墳
57	松石横穴	横穴	125	椿堀遺跡	散布地
58	松石遺跡	散布地	126	御崎廻古墳	古墳
59	松石古墳群	古墳	127	的場遺跡	散布地
60	明寿廻古墳群	古墳	128	宮の前遺跡	散布地
61	明寿廻遺跡	散布地	129	横田古墳	古墳
62	多井古墳群	古墳	130	大前遺跡	散布地
63	寺谷遺跡	散布地	131	槙綴遺跡	散布地
64	寺谷北遺跡	散布地	132	八ツ面遺跡	散布地
65	多井北遺跡	散布地	133	船分遺跡	散布地
66	多井遺跡	散布地	134	段原遺跡	散布地
67	知原古墳群	古墳	135	伊ノ坂遺跡	散布地
68	清水谷古墳群	古墳	136	東カナヘ廻遺跡	散布地

番号	遺　跡　名	種　別	番号	遺　跡　名	種　別
137	カナヘ廻遺跡	散布地	208	鹿田遺跡	散布地
138	宇由比神社古墳	古墳	209	北ノ廻遺跡	散布地
139	四つ口古墳	古墳	210	ソラ田遺跡	散布地
140	イヅレ遺跡	散布地	211	小佐々布横穴群	横穴
141	下白石遺跡	散布地	212	原添遺跡	散布地
142	平井廻遺跡	散布地	213	寺ノ前遺跡	散布地
143	後原遺跡	散布地	214	廻田遺跡	散布地
144	奥遺跡	散布地	215	上ソリ田遺跡	散布地
145	萩遺跡	散布地	216	上遺跡	散布地
146	熊江遺跡	散布地	217	加茂分遺跡	散布地
147	空遺跡	散布地	218	イヤ谷遺跡	石切場
148	長畑遺跡	散布地	219	大畑遺跡	石切場
149	坪の内遺跡	散布地	220	小三才谷遺跡	石切場
150	平屋敷遺跡	散布地	221	川岡遺跡	石切場
151	上西遺跡	散布地	222	地蔵院遺跡	石造仏
152	ホウジ遺跡	散布地	223	勝負廻Ⅱ遺跡	石切場
153	ホウジ向遺跡	古墓	224	堀田ヶ谷遺跡	散布地
154	五反田遺跡	散布地	225	長廻遺跡	石切場
155	イナエソ遺跡	散布地	226	三反田遺跡	石切場
156	椎山遺跡	散布地	227	ゴンワ遺跡	石切場
157	鴬遺跡	散布地	228	白石大谷Ⅰ遺跡	古墳、炭窯、住居跡
158	北垣尻遺跡	散布地	229	堤平遺跡	寺院跡
159	北垣遺跡	散布地	230	女夫岩遺跡	祭祀跡
160	掛木遺跡	散布地	231	女夫岩西遺跡	古墳
161	上後ヶ市遺跡	散布地	232	上野遺跡	古墳、住居跡
162	鴨田遺跡	散布地	233	海部城跡	城跡
163	宮原遺跡	散布地	234	長廻古墳群	古墳、横穴
164	荒田遺跡	散布地			
165	カシャク古墳	古墳			
166	小昭廻遺跡	散布地			
167	後谷横穴	横穴			
168	元薬師遺跡	散布地			
169	山の神谷横穴	横穴			
170	岩穴口横穴	横穴			
171	打越遺跡	散布地			
172	能登堀遺跡	散布地			
173	上野原遺跡	散布地			
174	香の木遺跡	散布地			
175	深坪遺跡	散布地			
176	小宮田遺跡	散布地			
177	向野原遺跡	散布地			
178	下野原遺跡	散布地			
179	八斗久保遺跡	散布地			
180	横町横穴群	横穴			
181	横町遺跡	散布地			
182	宍道要害山古墳	古墳			
183	榎廻遺跡	散布地			
184	西代遺跡	散布地			
185	長廻古墳	古墳			
186	六反田遺跡	散布地			
187	外垣内遺跡	散布地			
188	原田遺跡	散布地			
189	佐賀利遺跡	散布地			
190	向原遺跡	散布地			
191	篠原遺跡	散布地			
192	掛屋山城跡	城跡			
193	佐々布下古墳群	古墳			
194	中屋敷遺跡	散布地			
195	大畑ヶ遺跡	散布地			
196	城山城跡	城跡			
197	西屋敷遺跡	散布地			
198	竹ノ崎遺跡	散布地			
199	矢谷下遺跡	散布地			
200	敷手遺跡	散布地			
201	矢谷上遺跡	散布地			
202	岩穴畑遺跡	散布地			
203	鋤崎古墳群	横穴			
204	屋敷古墳群	古墳、横穴			
205	椎ノ木廻古墳群	古墳			
206	小界古墳	古墳			
207	小佐々布古墳群	古墳			

第３章　勝負廻Ｉ遺跡

第１節　調査の経過と概要

勝負廻Ｉ遺跡は、八束郡宍道町西来待２１６０番地外に所在し、来待川の西、標高５２ｍの尾根の頂きを中心に展開している。遺跡東側に面する谷平野（以下来待の谷と称する）は、来待川に沿って南北に細長く、宍道湖をのぞめる本遺跡の頂部からは、この谷の入り口を見通すことができる。また、遺跡から来待川の上流へ直線距離で約１．２km地点に来待神社があり、その裏手には曲輪とみられる平坦面を持つ丘陵があって[註1]、「大森城跡」と呼ばれている[註2]（第３図）。

勝負廻Ｉ遺跡では、調査前の地形観察の際、尾根頂部を加工したと思われる広い平坦面が確認されており、ここに山城跡があることが予測されていた。この付近に城が存在したことを示す文献はみられないものの、遺跡名となった「勝負廻」という字名、あるいは近辺の「城ノ越」という字名もその予測を補強していた（第２表・第４図－２２・３５）。

遺跡の調査は、平成８年（１９９６）１２月までの予定で、同年１０月８日より開始した。当遺跡は発掘調査が極めて困難な急斜面を多く持つ上、立木の伐採・搬出のために削られた重機道が遺跡を分断していたので、まず調査区を３区に分けることとした（第５図）。そして、調査区内の頂部付近の平坦面を中心にトレンチ調査を行い、人為的に加工された層と遺構面を確認しながら、順次遺構上の堆積土を取り除いていった。

以上の手順によって、全調査区から山城にかかわると思われる人工的に加工された平場が確認され、調査も順調に推移すると思われた。しかし、調査終了予定日の迫った１２月３日、予測していなかった地点より石棺が検出されてからは現場もあわただしくなり、石棺の上に手作りの透明テントを張るなどして悪天候の中でも調査を続行し、ようやく１２月２７日に無事調査を終了できた。その結果、当遺跡からは、中世の山城遺構や２基の古墳時代の石棺、その他比較的新しい時代のものと思われる石切り場や石敷遺構など、幅広い時期の遺構が検出された。

本報告書では、検出された山城跡を遺跡名により勝負廻城と呼ぶこととする。さらに、勝負廻城には複数の郭の存在が認められるが、これらを地形の観察によって、便宜的に、丘陵頂部の平坦部は主郭、それをとりまく最も広い平坦部は第２郭、その北側の平坦部は第３・４郭、それを階段状に囲む小規模な平坦部は外郭１～５、そこから来待の谷へ北東へ降りていく平坦部は東１～８郭、第４郭からさらに北西に下った尾根上の平坦部は西１・２郭とする。また、第２郭北側斜面の２基の箱式石棺は、南側のものを１号石棺、北側のものを２号石棺と呼ぶことにする（第５図・６図）。

なお、調査開始時期が遅く、調査期間が短かったこともあって、現地説明会は出来なかったが、石棺検出時には現地において池田満雄氏と渡辺貞幸氏の調査指導を受け、調査終了後は、主に町民を対象としたスライド中心の遺跡説明会を宍道町の蒐古館において開催した。また、調査に際して、宍道町教育委員会の多大な協力を得た。

註１　山根正明『宍道町の山城』宍道町教育委員会　１９９１

註２　『宍道町遺跡地図』宍道町教育委員会　１９９３

第3図　勝負廻Ⅰ遺跡の位置（S=1／15000）

第２節　調査の結果

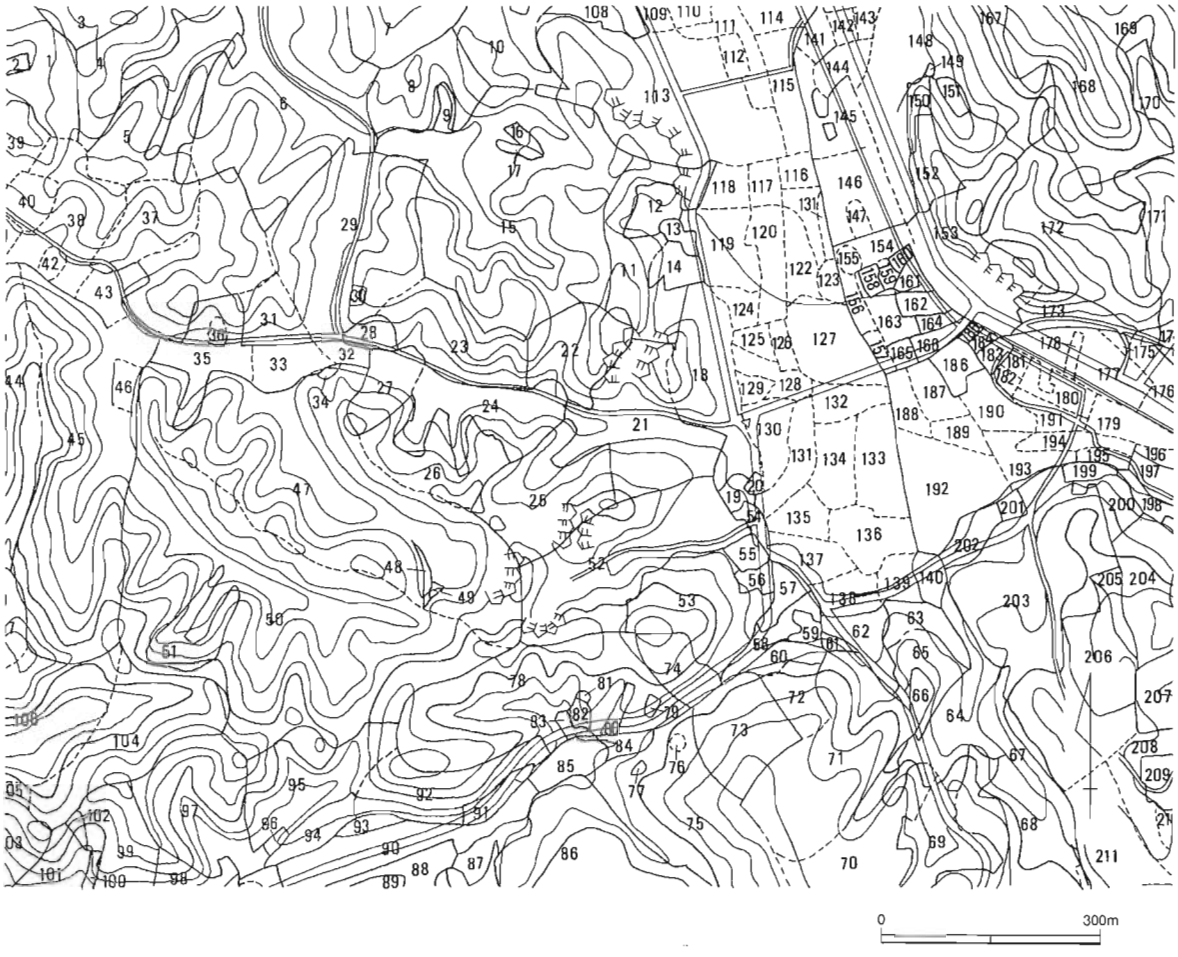
第１項　Ｉ区の調査（第６図）

Ｉ区は標高５２ｍの尾根頂部を中心とする調査区で、調査対象地の中では最も高い地点に位置する。調査区の東西は急激に落ち込む斜面によって、北は立木伐採・搬出のための重機道によって区切られ、南は調査区外がそのまま中国横断自動車道建設予定地外となる。ここからは、山城遺構のうち第２～４郭、外郭１～５、東１郭と、石切場、２基の石棺が検出された。

なお、調査区内のいたる所に近年に掘られたと思われる穴が確認されているが、その底には根を切り取った後に残されたと考えられる松根の一部が遺存していた。この付近は戦時中、松根油を採るために松の根掘りが頻繁におこなわれていたらしいので、おそらくそれにあたるものと考えられる。根掘り穴と思われるものの堆積土層は、いずれも赤色砂質土や黄色砂質土といった地山の土の混じる分層できない土層が多く（第７・８図２～４層）、根掘り作業後に穴を意図的に埋めたようである。

１．山城遺構の調査（第６図・10図）

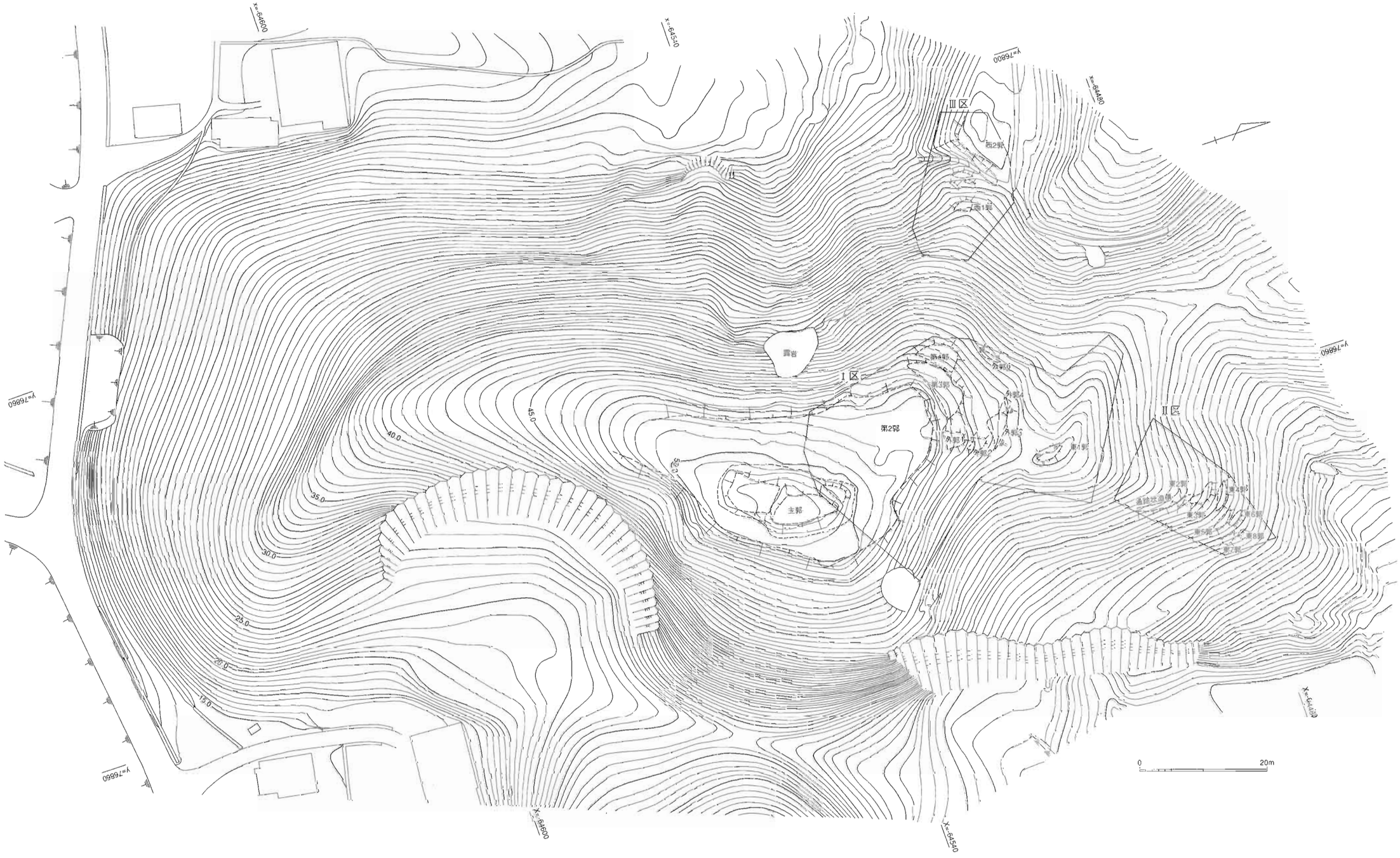
主郭　主郭にあたる尾根の最も高い部分の平坦面は、そのほとんどが中国横断自動車道建設予定地外で、調査対象外である。主郭にかかわる遺構として調査を行ったのは、Ｉ区内の南端にあたる、



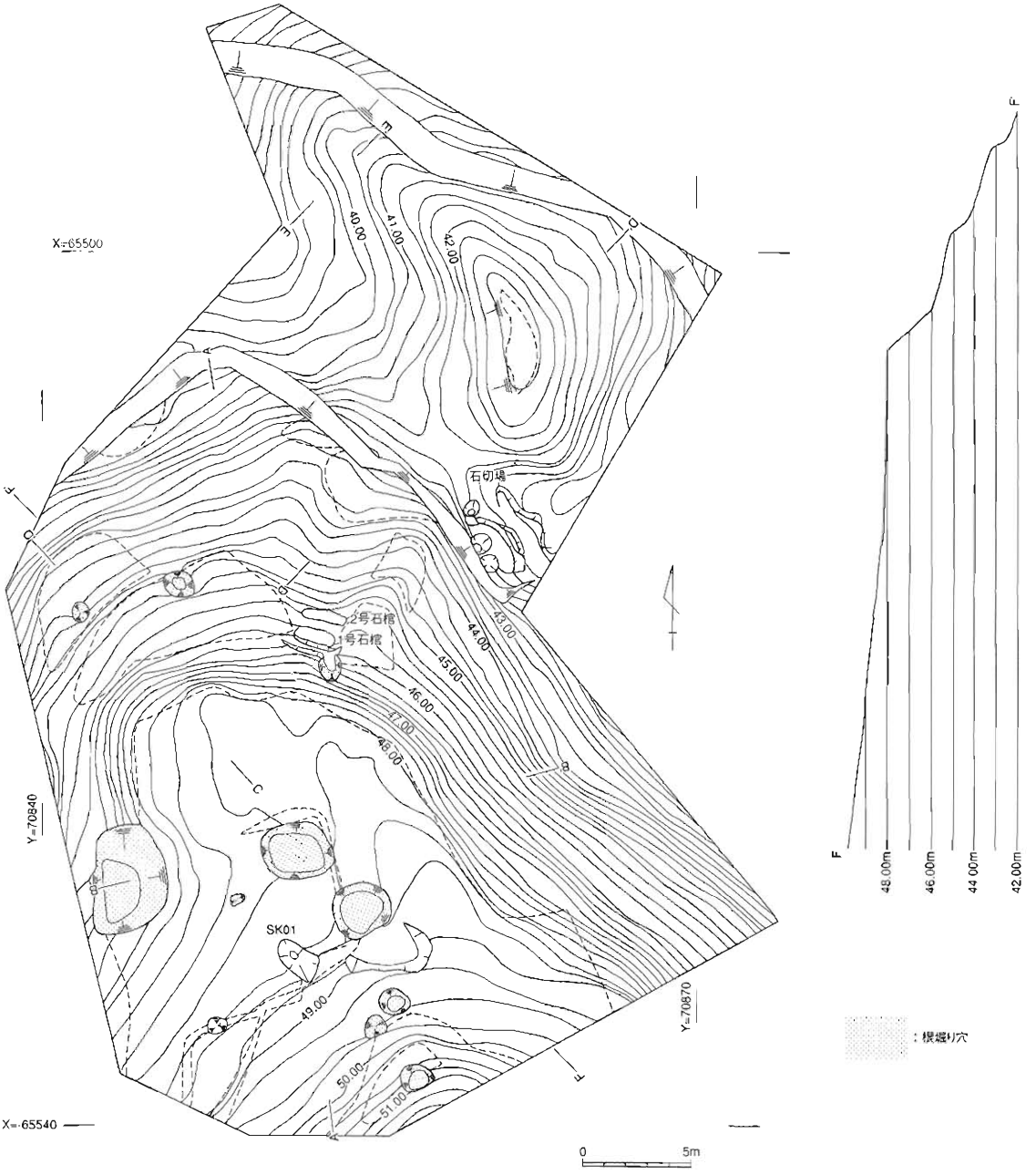
第4図　勝負廻Ｉ遺跡周辺切図（S=1／10000）

第２表　勝負廻Ⅰ遺跡周辺小字名一覧

No.	小字名	No.	小字名	No.	小字名	No.	小字名	No.	小字名
1	七反田	48	鈩谷屋敷続	95	長廻	142	細田	189	才免懸
2	大谷	49	長廻	96	屋敷余	143	岩崎前	190	代官所
3	竹ノ内	50	津々ボ谷	97	榎廻	144	下川原	191	川淵
4	カヘナ廻	51	屋敷続き	98	宮ノ上	145	墓田	192	深田
5	今林	52	寺廻	99	廻	146	下川原	193	トヲト
6	深坪	53	立平	100	宮ノ前	147	墓田	194	棚田
7	御崎廻	54	前田	101	紺屋畑	148	岩崎	195	下り松
8	時塚	55	屋敷	102	宮前廻	149	岩崎谷	196	川原田
9	長廻小谷	56	大前	103	ホウジ	150	地蔵院下	197	三反田
10	中垣廻	57	カンチ	104	後谷奥	151	岩崎谷	198	松ノ前
11	山屋	58	サコ	105	後谷外山続	152	地蔵院	199	御崎松
12	山屋屋敷	59	サコ田	106	後谷坂下向	153	川岡	200	高松
13	前田	60	宮ノ前	107	間ノ谷	154	下川原	201	高畔
14	山屋屋敷	61	神田	108	八ツ面	155	深田	202	室田
15	長廻	62	宮ノ廻	109	中垣前	156	小屋脇	203	知原
16	大畑	63	高見	110	産田	157	小屋ノ前	204	向山根
17	長廻外畑	64	西高見	111	岡田前	158	畑原	205	知原後山
18	ハント	65	的場	112	大草田	159	奥屋敷	206	知原前山
19	持田	66	宮ノ廻	113	岡田	160	後屋敷	207	後織部
20	四斗尻	67	東高見	114	五反田	161	屋敷	208	大ノ原
21	後ハント	68	奥高見	115	番目	162	小屋ノ前	209	織部
22	勝負廻	69	水喰谷	116	カケ田	163	下タ川原	210	織部
23	堀リ田ケ谷	70	大野原	117	槇縄手	164	屋敷	211	大野
24	御座ノ木	71	真谷	118	槇畷	165	五斗尻		
25	石山	72	宮ノ廻	119	山屋前	166	深田		
26	下モ御座ノ木	73	才ノ神	120	井手端	167	三才谷		
27	入料面	74	惣花寺	121	屋敷余り	168	小三才谷		
28	伊料面	75	小黒谷	122	イクヘ田	169	大三才谷		
29	三反田	76	才ノ神	123	四久保田	170	三才谷		
30	伊料面	77	高平	124	枚ノ前	171	小畑		
31	ハヘコ田	78	高平	125	塚田	172	藪呂		
32	明福寺田	79	才ノ神	126	小松田	173	水頭		
33	兵五田	80	地蔵廻	127	唐干田	174	小畑尻		
34	入料面	81	廻	128	閼ナシ	175	藪呂尻		
35	城ノ越	82	上高平	129	本田	176	前田		
36	ハヘコ田	83	上高平	130	サコ	177	屋敷		
37	案内	84	高平前田	131	中嶋	178	久戸屋敷		
38	下観世寺	85	中高平	132	溝添	179	砂田		
39	折坂	86	堂田	133	横田	180	ソリ田		
40	岩樋	87	下堂田	134	深田	181	川淵		
41	間渡	88	御崎廻	135	橋詰	182	谷川		
42	観世寺	89	向山	136	亀尻	183	屋敷		
43	上観世寺	90	下高平	137	内ノ前	184	谷川		
44	若目岩	91	高平	138	御供田	185	大ノ田		
45	平石	92	烏帽子山	139	宮田	186	門屋敷		
46	芋細田	93	道ノ上	140	高見	187	門前		
47	鈩谷	94	小丸山	141	兼付免	188	中島		



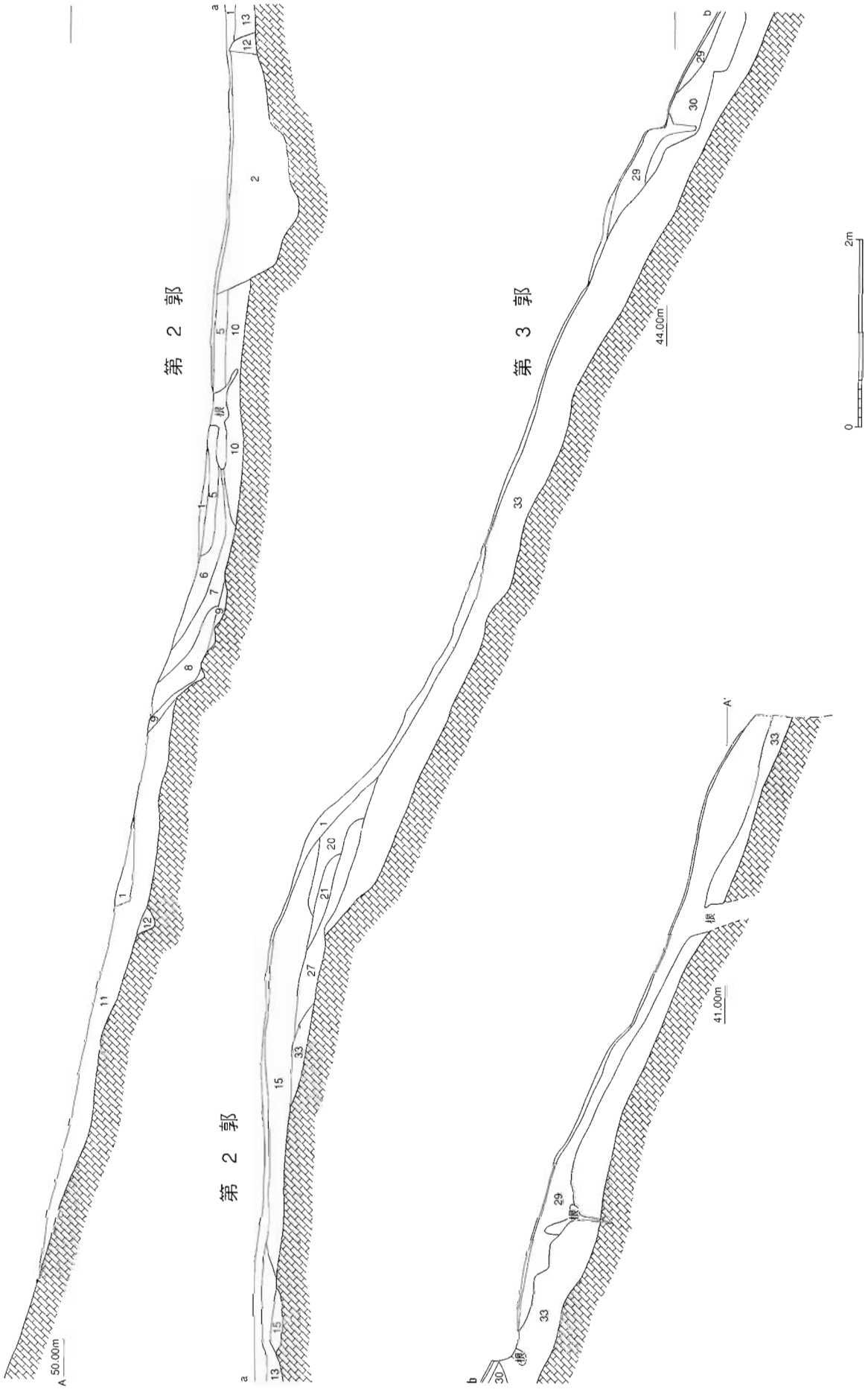
第5図　勝負廻。遺跡調査前地形測量図（S=1／600）



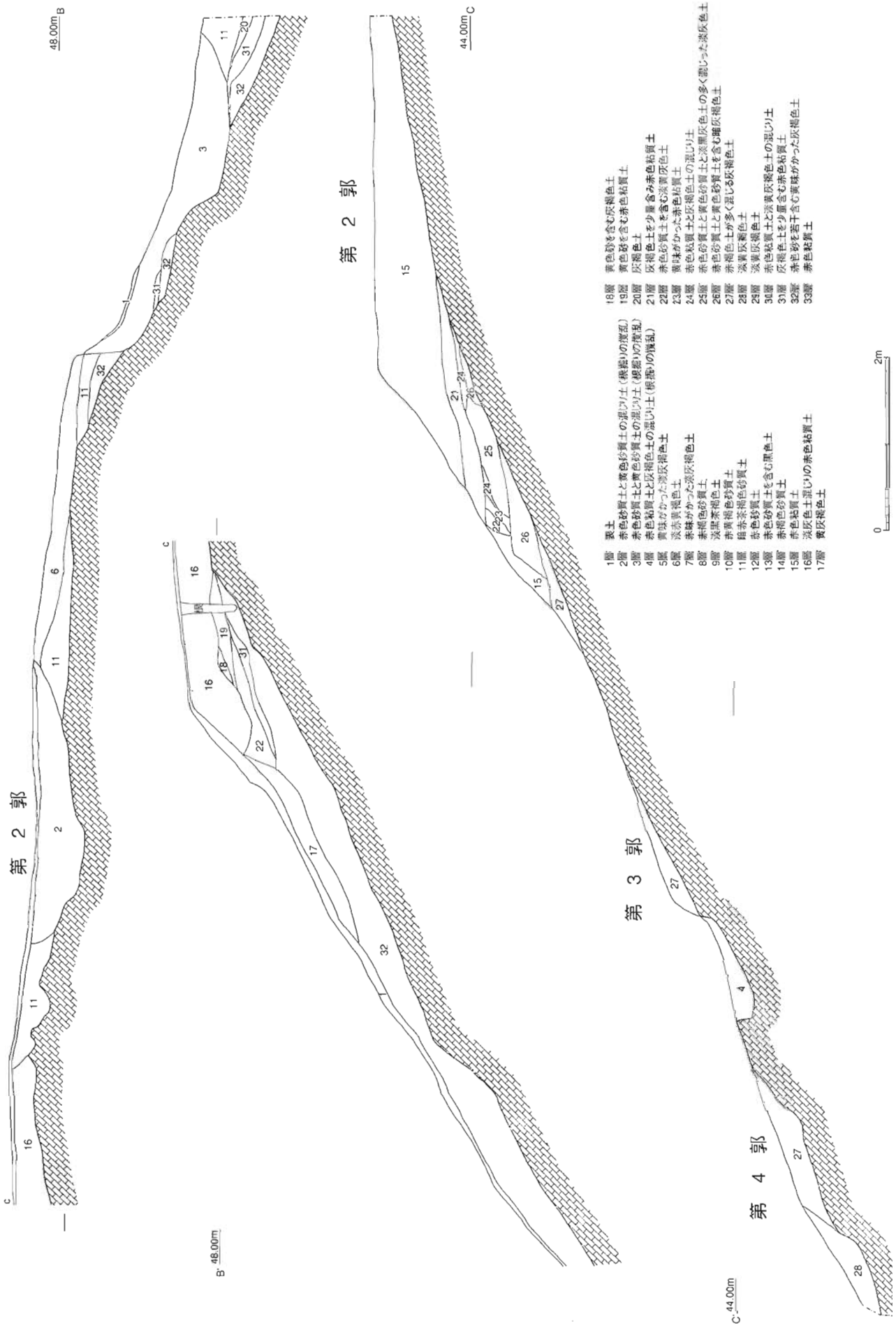
第6図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区地形測量図（調査後）及び遺構配置図（S=1／300）

主郭北側の小さな平坦面である。この平坦面は標高が５０.７ｍで、その１ｍ高い位置に主郭頂部平坦面が展開し、その下１ｍから第２郭平坦面がはじまるので、主郭と第２郭の間に位置するステップとしての機能を持っていたと考えられる。なお平坦部中央には、前述の、松根油を採るためと考えられる根掘り穴が掘られていた。

第２郭　主郭を取り巻くように配されている第２郭は、当山城跡の中でも最も広い平坦面を持ち、ここが山城の実際上の中核となる遺構であると考えられる。その平坦面は南北に長く、南側平坦部は最終的に痩せ尾根となって谷に落ちてゆき、現状では自然地形と郭との境が明瞭でない（第５図）。第２郭は、北側半分が調査対象となった。

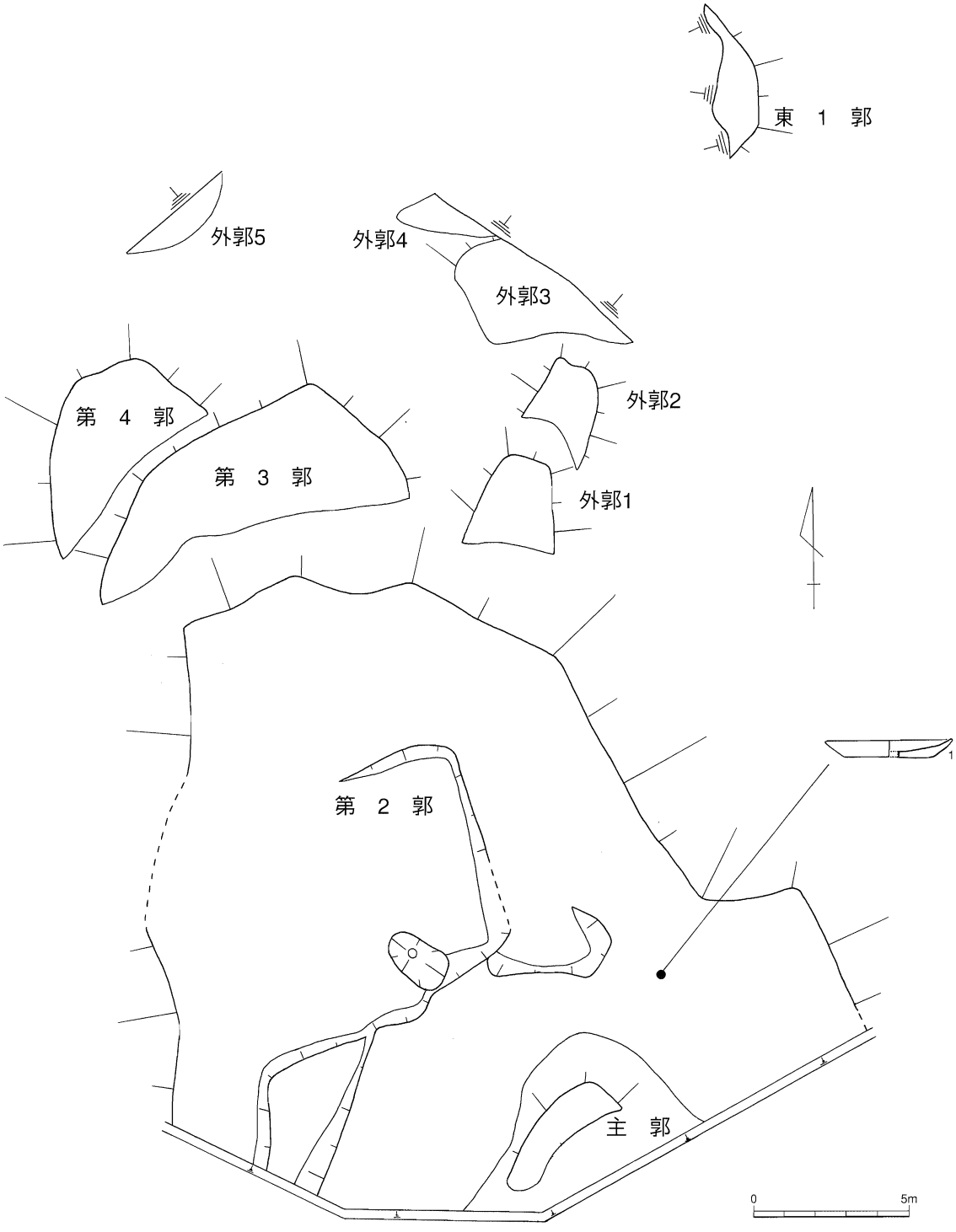


第7図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区土層断面図（A-A'）（S=1／60）



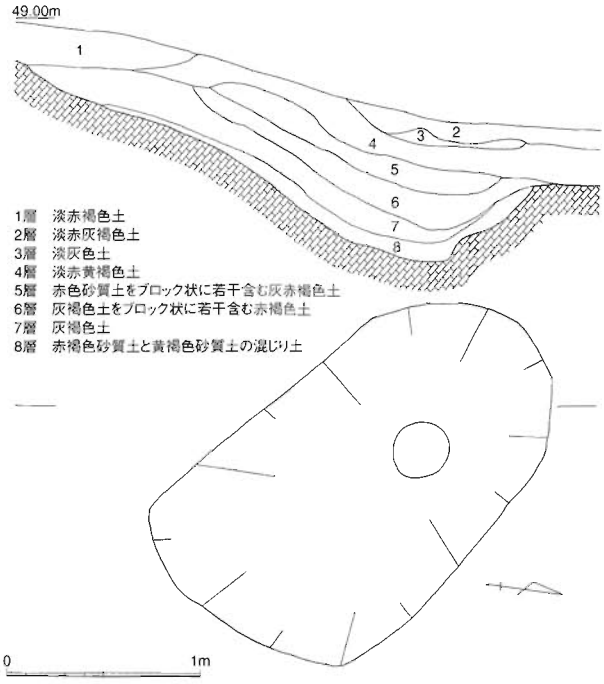
第8図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区土層断面図（B-B', C-C'）（S=1／60）

第9図　勝負廻I遺跡Ⅰ区土層断面図（D-D'，E-E'）（S=1／60）



第10図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区山城遺構実測図（S=1／200）

第２郭の北側は、主郭から宍道湖側へ真北に約２０ｍ程伸び、その幅は８～１８ｍと、不正形の長方形を呈す。平坦面の標高は４８ｍ～４９.８ｍで、主郭に向かって徐々に高くなっていく。その傾斜角度は、主郭に近い所は約１０度あるが、北へ向かうにしたがって水平となる。また、第２郭東辺中央部は来待の谷側へ長さ４ｍ、幅１５ｍ程の張り出し部分を持つが、その南側半分は調査区外となった。



第11図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区SK01実測図（S=1／40）

さらに、第２郭北辺から東辺にかけては、上面を平坦に加工した、現状で高さ約２０㎝、幅約５ｍの土塁状の高まりが認められ、一段高い帯状の平坦面が、第２郭北東部外縁を巡る様相を呈している。この帯状の平坦面は、主郭付近で主郭を取り込むように設置され、その西側は谷方向に段状に下っていく。

トレンチ調査によって、第２郭は尾根頂部を地山まで平坦に削り、さらにその削り出した土などを斜面に盛り上げることによって平坦面を広げていたことがわかった（第７図・第８図）。この加工によって、平坦部下方斜面は、平坦部に近づくにつれて傾斜も急となる。すなわち、斜面の傾斜角度は本来２０～３０度程度のものであるが、盛土によって４０～５０度の傾斜が造られている。この盛土の断面からは、土を階段状に盛りながら高めていった様子も確認され（第８図Ｃ－Ｃ'２２～２６層）、一部には、盛土の地滑りを防ぎ、また盛土を高く築く工夫もなされていたようである。

また、平坦部には前述の根掘り穴が多数あけられていたが、中央部に根掘り穴とは異なる、楕円形の土坑ＳＫ０１が確認された。第７図５～１０層は、このＳＫ０１の東端部付近の堆積土であるが、根掘りの穴の堆積土（第７図２層）はこれらの層を切っているので、ＳＫ０１は根掘り穴よりも明らかに古いものである。直径は１.２～２.２ｍ、深さは５０㎝程度で、すり鉢状に掘り込まれており、底には細かい砂泥の堆積が確認された（第１１図）。山城の溜井戸の可能性も考えられるが、小規模でやはり用途不明とせざるをえない。

第３郭・４郭　第３・４郭は第２郭の北側斜面に位置し、第３郭は第２郭平坦面より２ｍ低い位置から、第４郭はそれよりさらに１ｍ低い位置から、いずれも３.５ｍ程北側へ張り出す。その幅は第３郭が６ｍ～１０ｍ、第４郭が４ｍ～６ｍで、平坦面は張り出し部に向かって狭くなる。

第６図Ｃ－Ｃ'では、第３・４郭部分の地山の上にのる２７層が確認されるが、この層は第２郭盛土の最下層にも認められ、第３・４郭にみられる２７層も郭を形成していた層とすべきであろう。また、現状では第３・４郭の平坦面が張り出し部に向かって緩やかに下るが、これはこの２７層が流れ落ちたためとも考えられる。第４郭より下方は重機により斜面が大きく削り取られていたため、調査による確認はできなかったが、さらに郭が存在していた可能性は否定できない。なお第４郭下方の２８層は軟らかく、流土の堆積層と思われる。

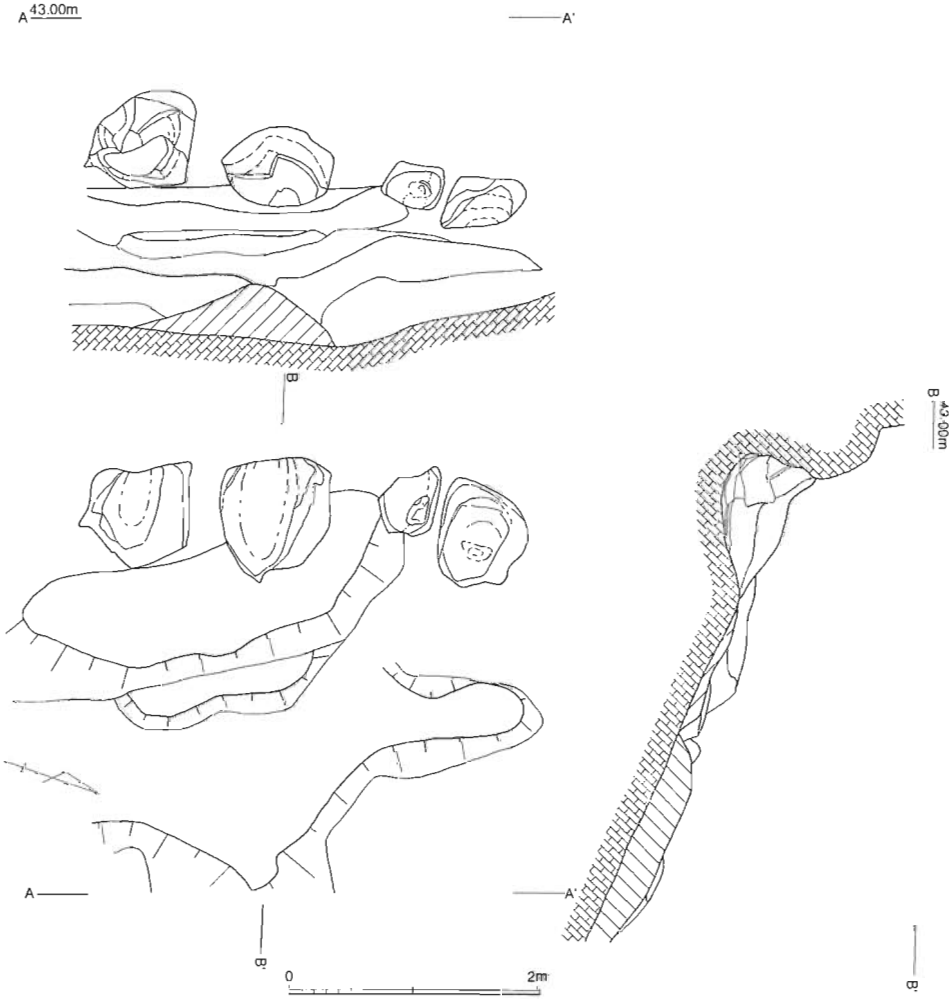
外郭　外郭１～５は、第３・４郭を取り巻くように配置され、外郭１は幅２ｍ前後の平坦面が北へ３ｍ、外郭２も幅２ｍ前後の平坦面が北へ２ｍ張り出す。外郭３～５は後世の削平を大きく受けており、郭の規模は明確でない。外郭の標高は、外郭１が４５.５ｍ～４６ｍ、外郭２が４４.２ｍ～４４.８ｍ、外郭３が現状で４３～４３.４ｍ、外郭４が現状で４２.５ｍ～４２.８ｍ、外郭５が現状で４０.８ｍ～４１ｍと、平坦面相互の高低差は１ｍ前後である。平坦面間の行き来はそれほど困

難なものではなく、また削平されずに残った外郭１・２の平坦面が極めて狭いことを考えると、これらは城に登る機能を主とするものであったと考えられる。ただし外郭３のみは、後述するように、十分な広さを持った郭であった可能性もある。

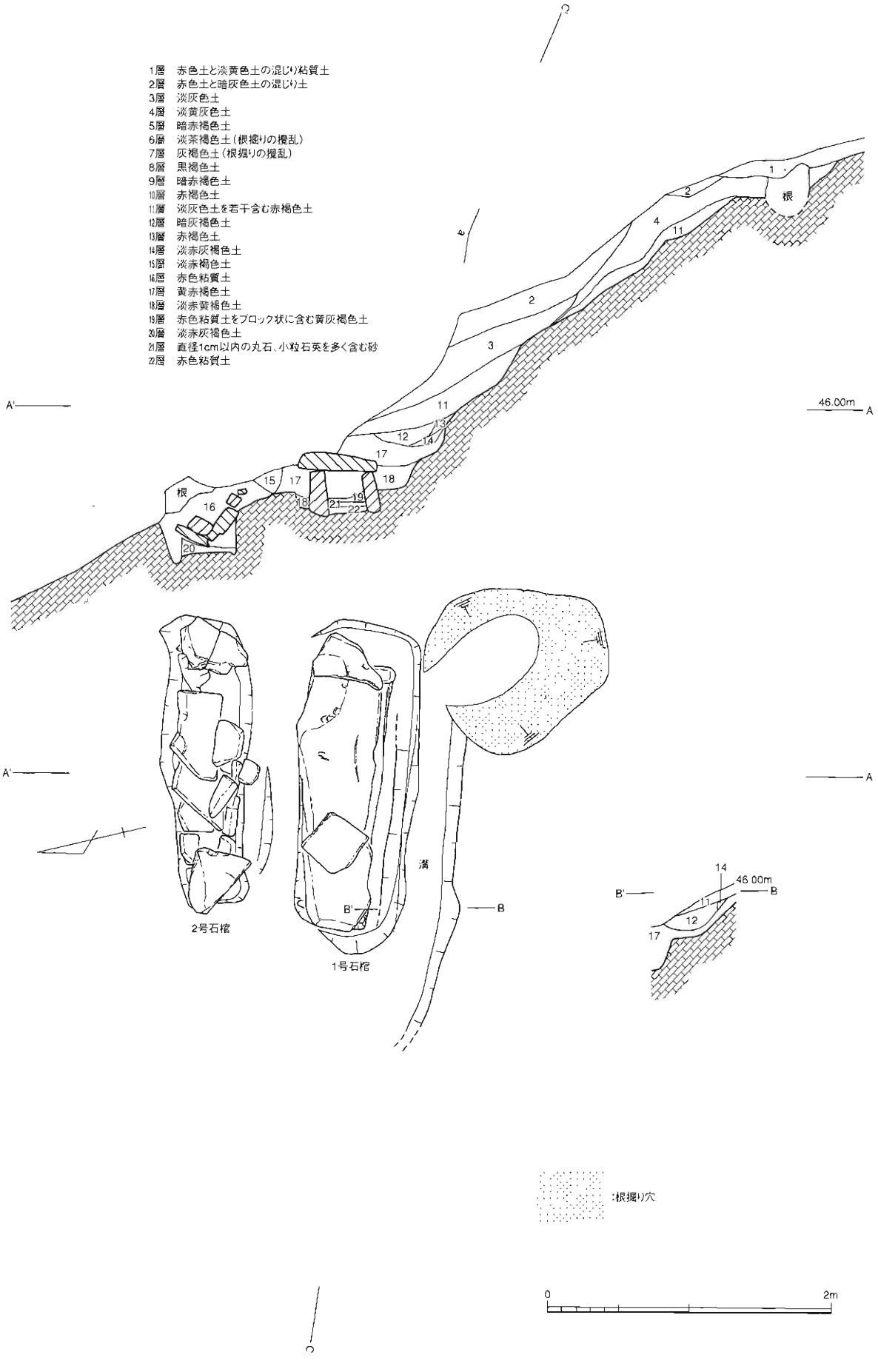
東１郭　東１郭は外郭のさらに北東側に位置している。第９図Ｄ－Ｄ'によって、この東１郭と外郭３の間の地山が溝状に掘りくぼめられており、その上と外郭３上に５層の明赤褐色粘質土が堆積していることが確認された。トレンチを掘る際、６層上から現在も周辺に立っている凝灰質砂岩（来待石）製の境界石と同様のものが検出されたので、その上の５層は比較的新しい時期に急激に堆積した層であると考えられる。従って、東１郭と外郭３の間の地山の溝状のくぼみは近年まで表出していた可能性が高く、これを城が機能していた時代まで遡らせるべきではなかろう。

この場合、東１郭の標高が４２.７ｍ～４２.９ｍで、外郭３・４の標高と極めて近いことは問題となる。以上のように外郭３・４と東１郭の間が後世の削平によって分断されていることを考えると、東１郭は外郭３・４のいずれかと同一の郭とみるべきかもしれない。この場合、郭が全体的に張り出し部に向かって若干低くなっている傾向を考えると、外郭３が東１郭と同一のものであった可能性が高いであろう。

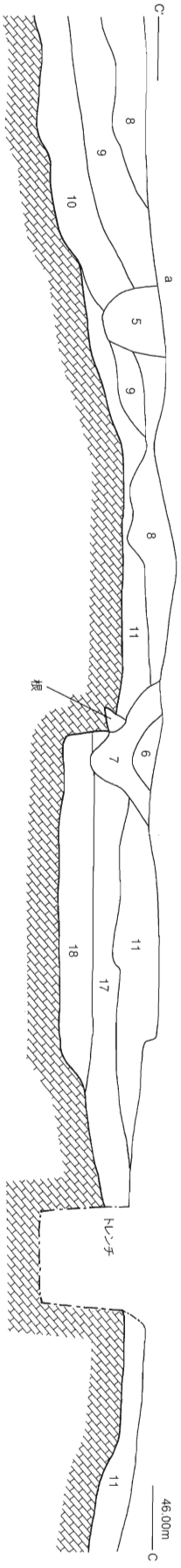
また、東１郭の北東側も傾斜角度約１５度の緩斜面が続き（第９図Ｄ－Ｄ'）、郭が存在した可能性はあるが、途中で重機が斜面を大きく削り取っていたこともあって、明瞭な平坦面を確認するこ



第12図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区石切り場実測図（S=1／60）



第13図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区1号・2号石棺実測図・土層断面図（S=1／40）



第14図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区1号石棺
南側土層断面図（S=1／40）

とはできなかった。

2．石切り場の調査（第１２図）

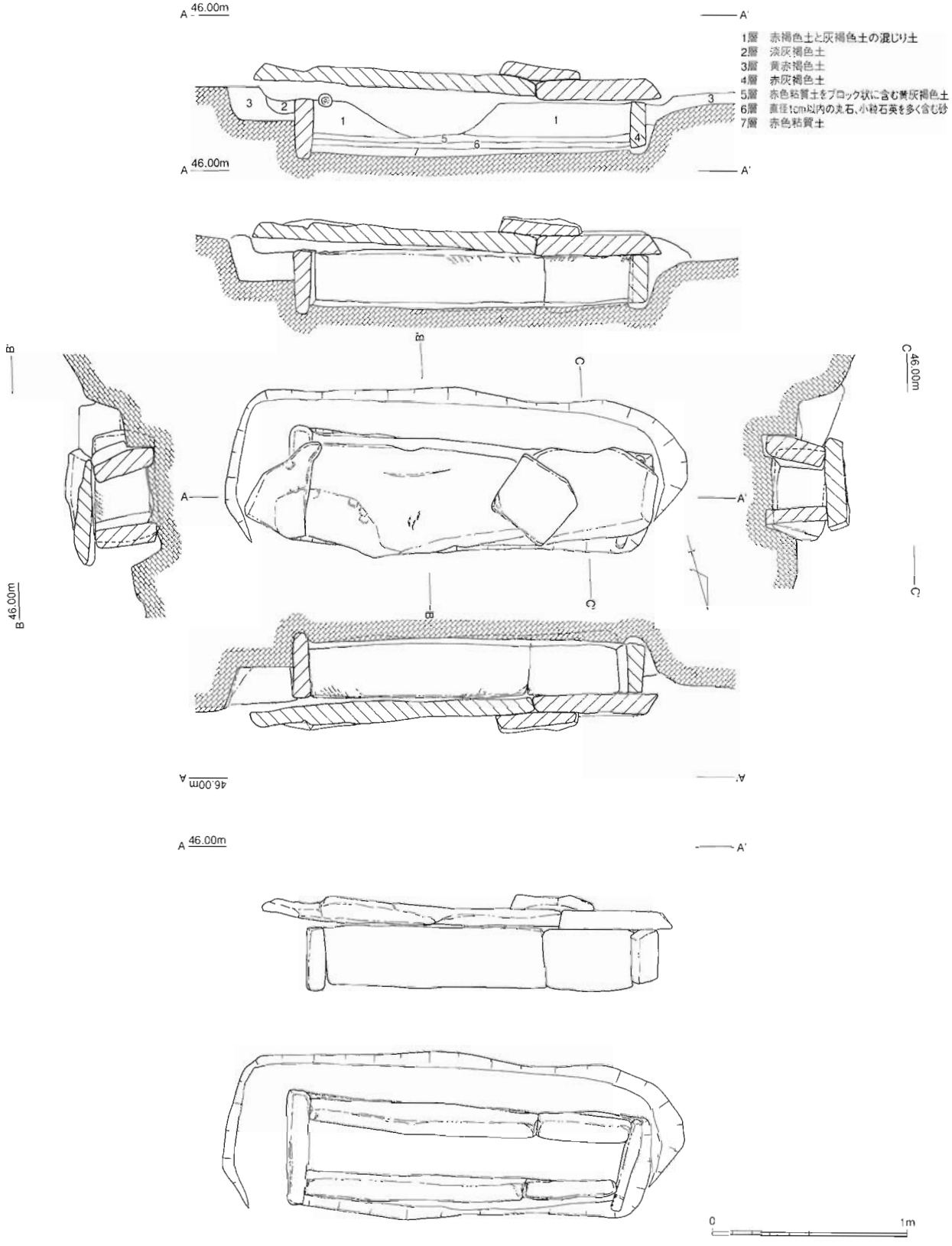
外郭東側斜面に、直径５０㎝前後の４つの横穴が南北に並んで検出された。斜面に向かって左側の２つは完全に球形の穴が空いており、凝灰質砂岩が穴の壁面に沿って薄板の層となっていた。向かって右側の２つは、丸い凝灰質砂岩がそのまま露出しており、その周りを鉄器などで打ち欠いたとみられる筋状の加工痕が囲んでいた。横穴の掘られた斜面はやわらかい砂質の地山であるのに、横穴はその中にある比較的硬質な凝灰質砂岩を意図的に狙って掘られており、横穴はこの凝灰岩の丸石を採ることが目的であったと考えられる。右側の２つは丸石の採掘が何らかの理由で途中で止められたものであろう。

また横穴前面には、凝灰岩のブロックが混じる地山の土を斜面に盛って、小規模な平坦面を３段のステップ状に設置していた。これは石の採掘を斜面で行うための作業場あるいは作業足場と考えられる。なおこれらは先述の第９図５層の下から検出されたので、石切り場もそれほど古くない時期に埋没したと推定される。地山を溝状に掘り込んだ山城外郭部分の後世の削平も、あるいはこうした石の採掘などの作業と関連するのかもしれない。

3．石棺の調査（第１３図・１５図）

Ⅰ区外郭１の西側、第２郭北側斜面の急傾斜が緩斜面に変わる地点に、南北方向に隣り合う、水平に並んだ２基の箱式石棺を検出した。いずれも凝灰質砂岩（来待石）製のもので、南側の１号石棺は完形、北側の２号石棺は破壊された状態であった。石棺付近が山城築城時に削平、あるいは加工を受けていたためか、検出前は墳丘らしき地形の高まりや変化を認めることができなかったが、土層断面では、石棺上のわずかな盛土（１７層）と、その上の溝の堆積土（１２～１４層）を確認できる。

また、１号石棺南側の地山は、東西約８ｍにわたって周辺の地山より若干高くなっていて（C－C'）、１号石棺掘り方はその高まりのほぼ中心に位置している。この高まりを墳丘築成時の地山の加工によるものと見れば、墳丘の大きさもこの８ｍを前後する程度のものと推測できるが、断定はできない。１号石棺南側の盛土上の溝は、１号石棺から西へ約０.８ｍ離れた地点で北側に曲がる痕跡があるが、東側は根掘り穴の



第15図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区1号石棺実測図（S=1／30）

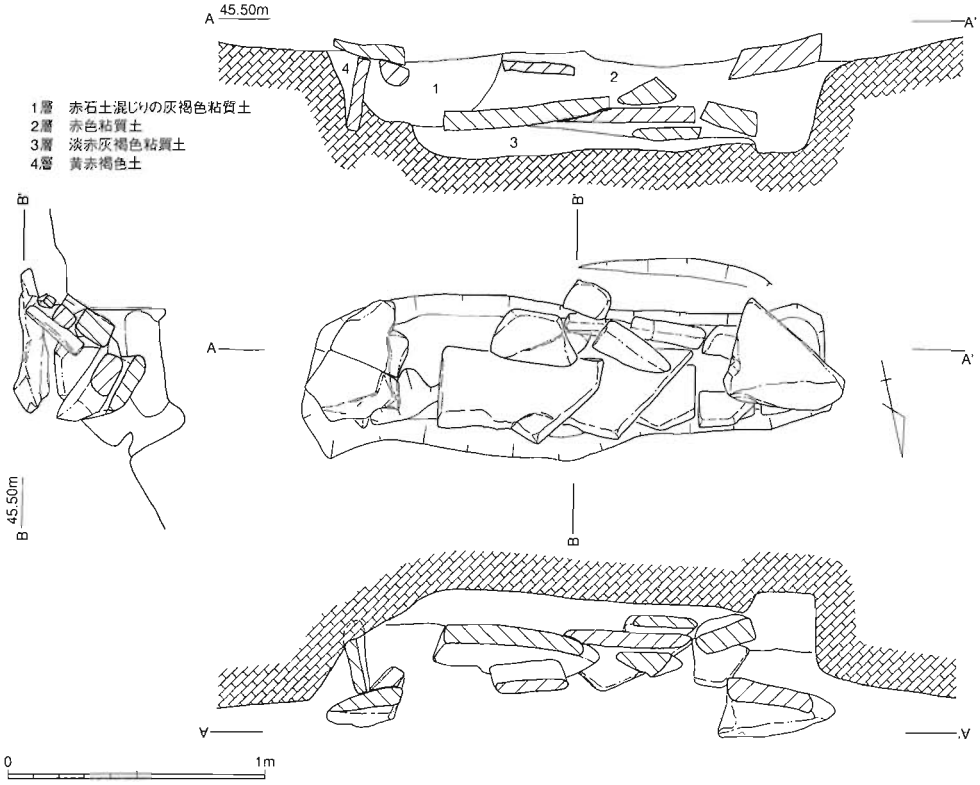
攪乱を受け、その続きを検出できなかった。

１号石棺（第１５図）　完形で検出された１号石棺は、片面ずつそれぞれ２枚の側石を、片面各１枚の小口の板石が挟んだ長方形の棺身に、３枚の蓋石が載った箱式石棺である。石材は来待石で、切り石であった。棺身は長辺が１８０cm、短辺が５０cm程で、棺蓋は長さ２０５cm、幅４０cm～５５cmを測る。棺蓋は長さが１４０cmと６５cmの大小２枚の板石を使用して棺身を完全に塞いでおり、２枚の板石の接合部は真っ直ぐに加工された辺で隙間無く合わせられていた。しかし接合部以外の蓋石の加工は、打ち欠き・割放しのままの状態が目立つ雑な作りである。２枚の板石の接合部上にはさらに１辺３０cmのほぼ正方形の板石が置かれ、その対角ラインを利用して蓋石接合部ラインを覆っている。

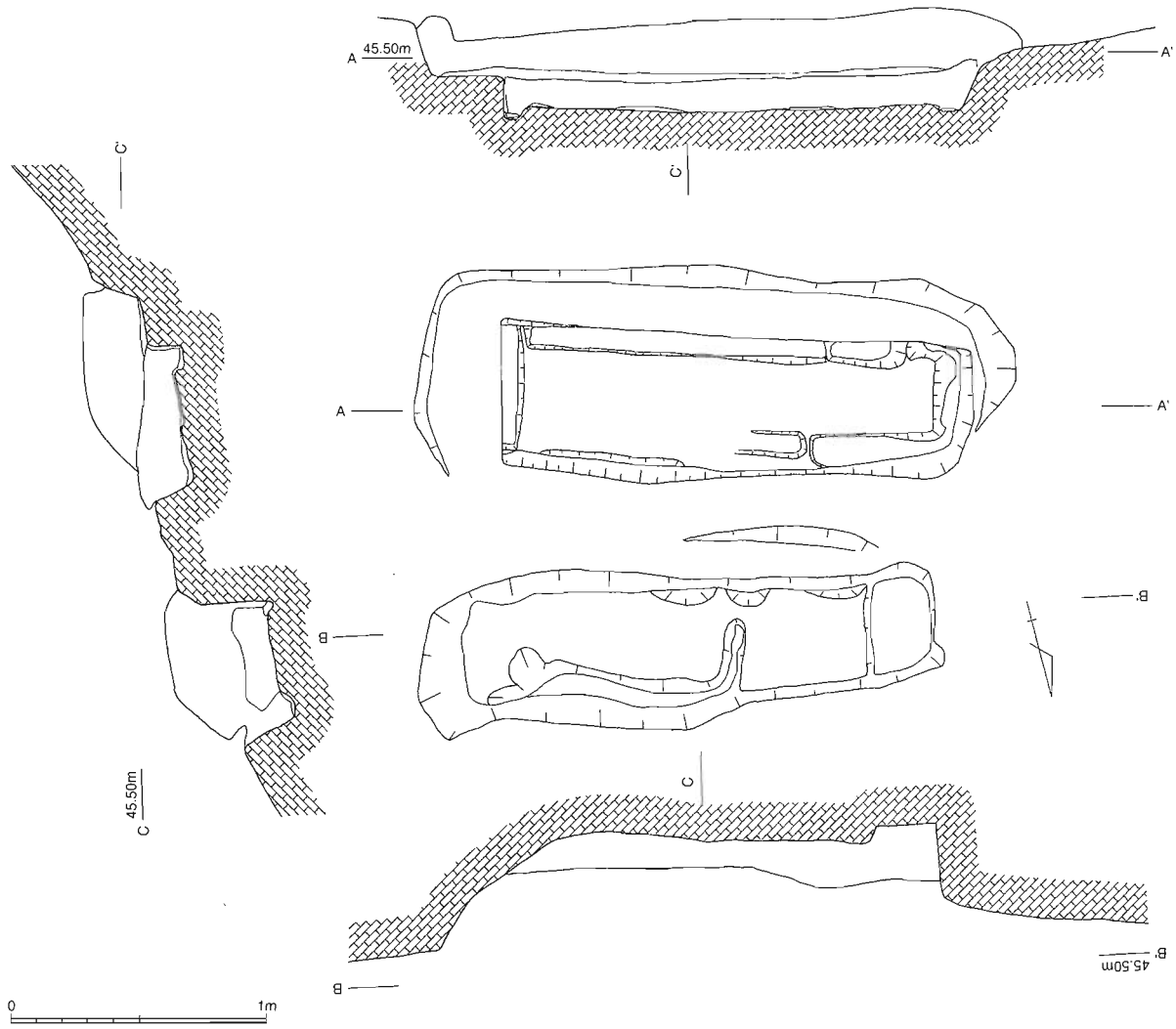
石棺内の床面は地山の上に赤色粘質土を貼り（７層）、その上に直径１cm程度の非常に小さい丸石や小粒石英を多く含む砂（６層）を敷いていた。この石棺床面に敷かれていた丸石や砂は、基本的に地山や遺構堆積土からは検出されないものなので、周辺の川砂など、外部から持ち込んだものであると考えられるが、第２郭の土壙ＳＫ０１内の包含層ではこれと同様の丸石が若干検出されており（第１１図１層・４層）、城築造時に他の古墳で破壊されたものがあったことも窺われる。石棺内から遺物は検出されなかった。

石棺埋設用の掘り方は、石棺全体のサイズを考慮した大きめの掘り方の内側に、さらに棺身を据えるための掘り方を設ける２段構造となっている（第１７図）。棺身を据えるための掘り方と棺身との間はほぼ密着した状態であったが、北東隅付近に若干隙間が見られ、棺身の石材は掘り方北東方向から押し込むようにして設置されたものと推察される。掘り方床面の標高は４５.３ｍである。

２号石棺（第１６図）　２号石棺は大きく攪乱を受け、東側の小口の板石が立っている以外は、石棺石材のほとんどが割られたまま石棺の掘り方の中に埋められていた。石材は来待石の切石を使用



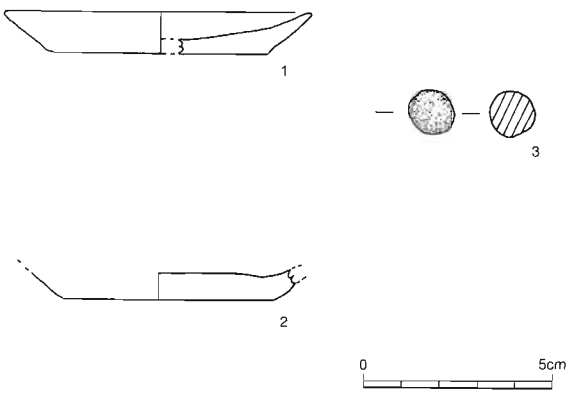
第16図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区2号石棺実測図（S=1／30）



第17図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区1号・2号石棺除去後掘り方実測図（S=1／30）

しているが、非常にもろく、取り上げ途中にバラバラになるような状態で、石棺を復元することはできなかった。

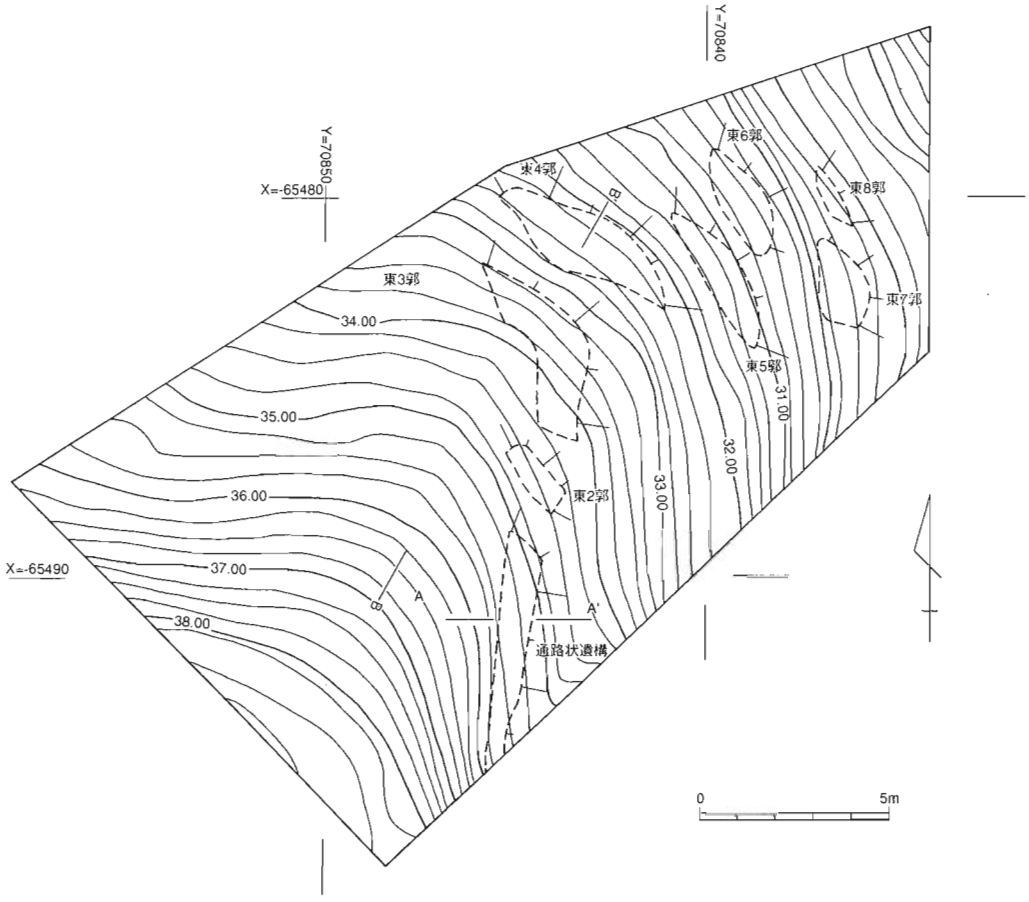
撹乱は最低２回受けているようで、土層からは、１号石棺上の盛土（第１３図１８層）を２号石棺内の方向に切る層（第１３図１５・１６層、第１６図２層）と、石棺内でその層をさらに切る層（第１６図１層）が確認できる。１号石棺と２号石棺の先後関係は、この撹乱によって明確でない。しかし石棺設置のための掘り方から（第１７図）、２号石棺は１号石棺とほぼ同じサイズで、しかも隣接して平行に設置されていたことは確実で、両者に大きな時期差はないと考えられる。ただし、掘り方の床面は４５ｍと１号石棺のものより３０㎝程低く、２号石棺は１号石棺より低い位置に設置されている。



第18図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区出土遺物実測図(S=1／2)

４．Ⅰ区出土遺物（第１８図）

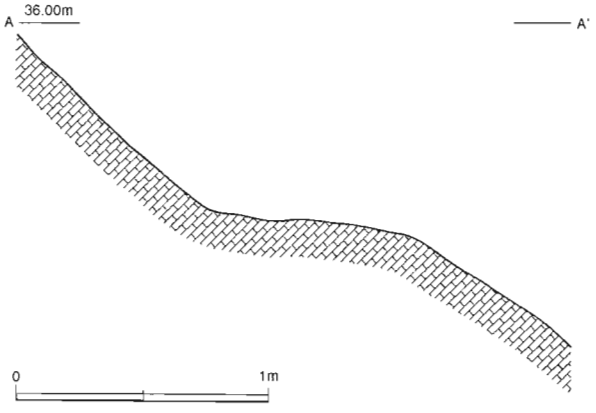
当遺跡からは遺物がほとんど検出されず、Ⅰ区



第19図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅱ区地形測量図（調査後）及び遺構配置図（S=1／200）

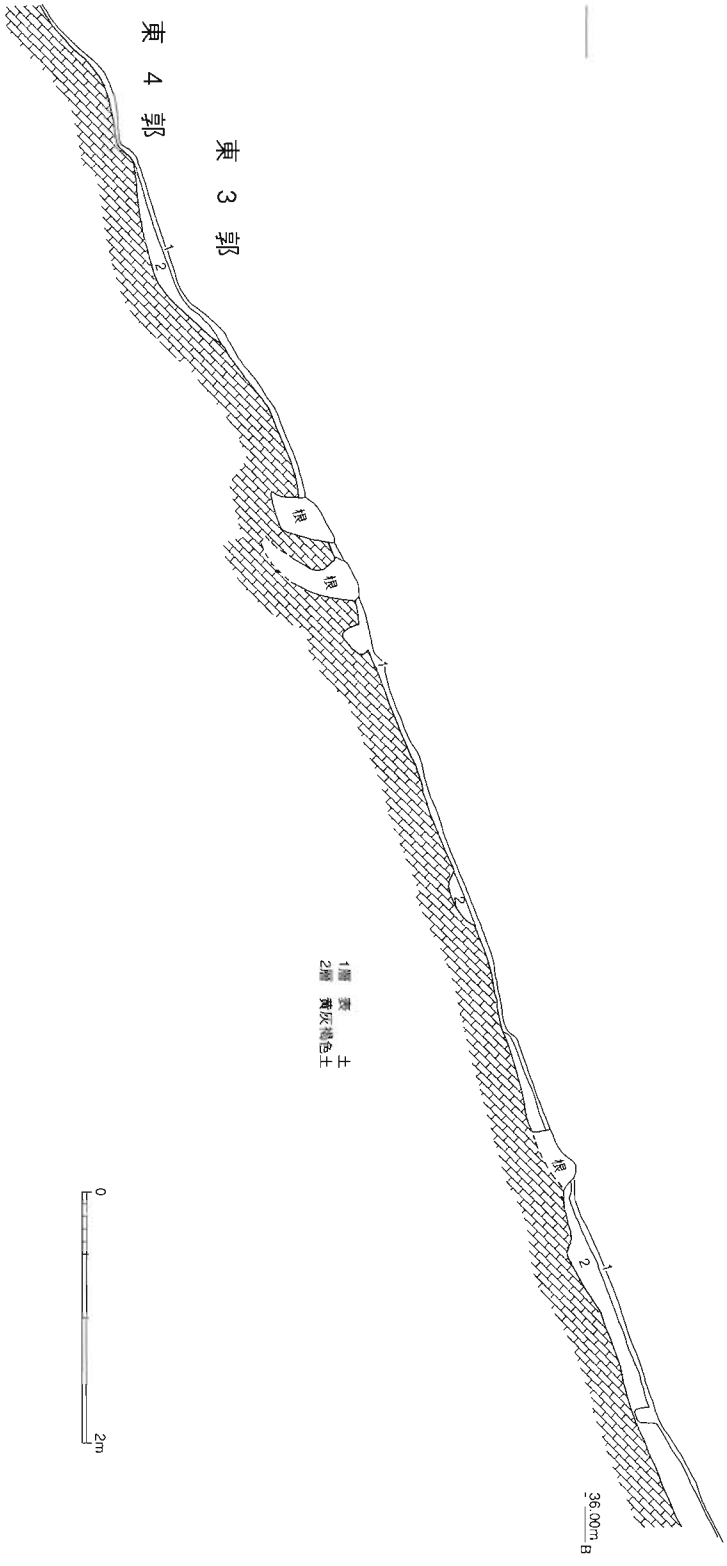
第２郭からの出土がわずかに確認されるのみである。また、出土した土器で完形に近いものはなく、図示し得たのは２点にとどまった。

１は土師質土器の小皿の小片で、口径、底部径は推定でそれぞれ８.２㎝と５.６㎝、器高は１.１㎝を測る。胎土は赤黄褐色で２㎜以下の砂粒を含む。風化が著しいが、底部外面に微かに糸切り痕を認めることができる。出土地点は第２郭東側の表土下、赤色粘質土層の上面で（第１０図）、この赤色粘質土は、第２郭の平場を広げるために斜面に盛り上げた第６図Ｃ－Ｃ'１６層と対応していると思われる。従って、その上面から出土した１は、山城の時期を考える上で目安の一つとはなりうるものである。しかし残念ながら、現段階では小片で１４～１６世紀程度の幅をもってしか理解できない。



第20図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅱ区通路状遺構断面図（S=1/60）

２も土師質土器の小片で、皿の底部と思われる。底部径は５.５㎝で１の底部径とほぼ同じであるが、口径、器高などは不明である。胎土は黄褐色で３㎜以下の砂粒を含む。やはり風化が著しいが、底部外面に



第21図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅱ区土層断面図（S=1／60）

糸切り痕を認めることができる。1に比べて底部断面は厚い。第2郭東側張り出し部の廃土から取り上げたものである。

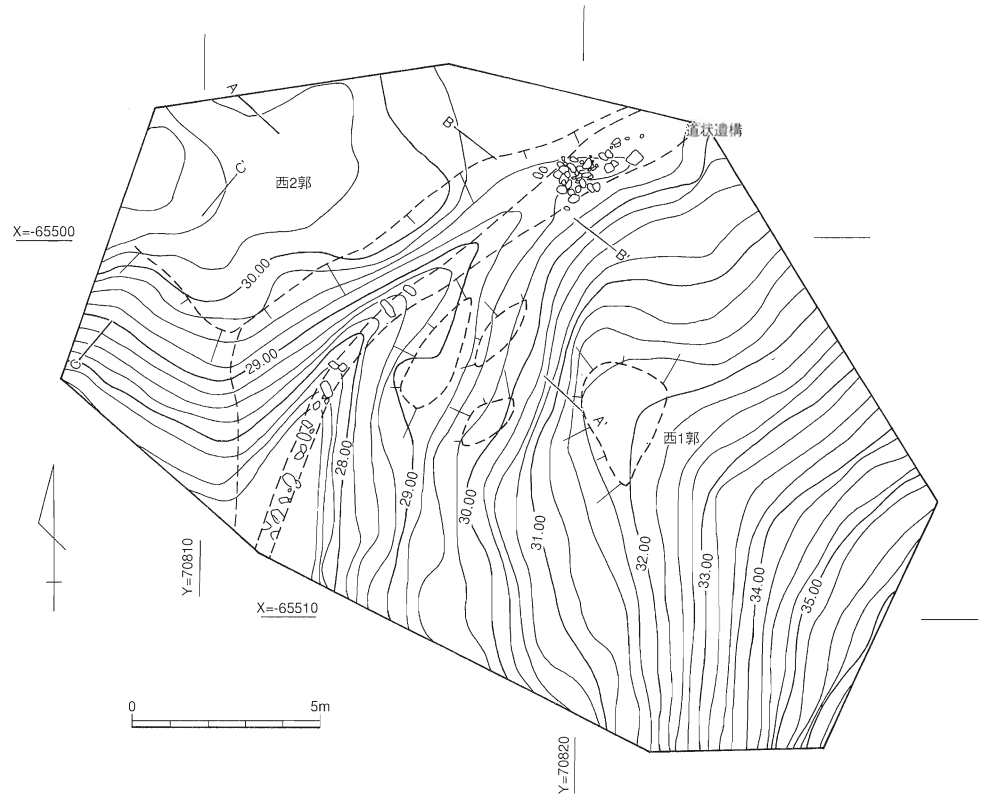
3は直径1.2㎝の金属製の玉で、重く、白錆で薄く覆われている。X線を全く透さず、鉛製と考えられるので、鉄砲玉と推定される。SK01内の堆積土（第11図3層）から出土した。

第2項　Ⅱ区の調査(第19図)

Ⅱ区はⅠ区の北東に位置し、来待の谷へ降りていく標高27～58.5m間の斜面を中心とする調査区である。調査区より北側は中国横断自動車道建設予定地外となり、南側は重機道によって区切られる。この調査区からは、東2～8郭と通路状遺構を検出した。

東2～8郭　東2～8郭は、東1郭から来待の谷へ北東方向へ降りていく斜度約20度の斜面にジグザグに配された、小規模な平坦面である。それぞれの比高差は50㎝以内で、平坦面間の移動は容易であった。これらは通路状遺構と一体となって、山城へ登る施設となっていたと考えられる。平坦面は、斜面の地山を加工段状に削って成形している（第21図）。

通路状遺構　調査区南側から南北方向に通路状にのびる平坦面（通路状遺構）を検出した。平坦面は、約35度の急斜面を削ることによって作り出しており、その幅は南側に向かって徐々に狭く、0.5～1mを測る。北側で隣接する東2郭との比高差は60㎝程度で、この通路状遺構は東2郭から連なる登城施設であったと考えられる。ただし、平坦面は十分な硬化面を持たず、頻繁に利用されたとは考え難い。重機道により、通路状遺構北側の続きは調査できなかった。



第22図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅲ区地形測量図（調査後）及び遺構配置図（S=1／200）

第３項　Ⅲ区の調査（第２２図）

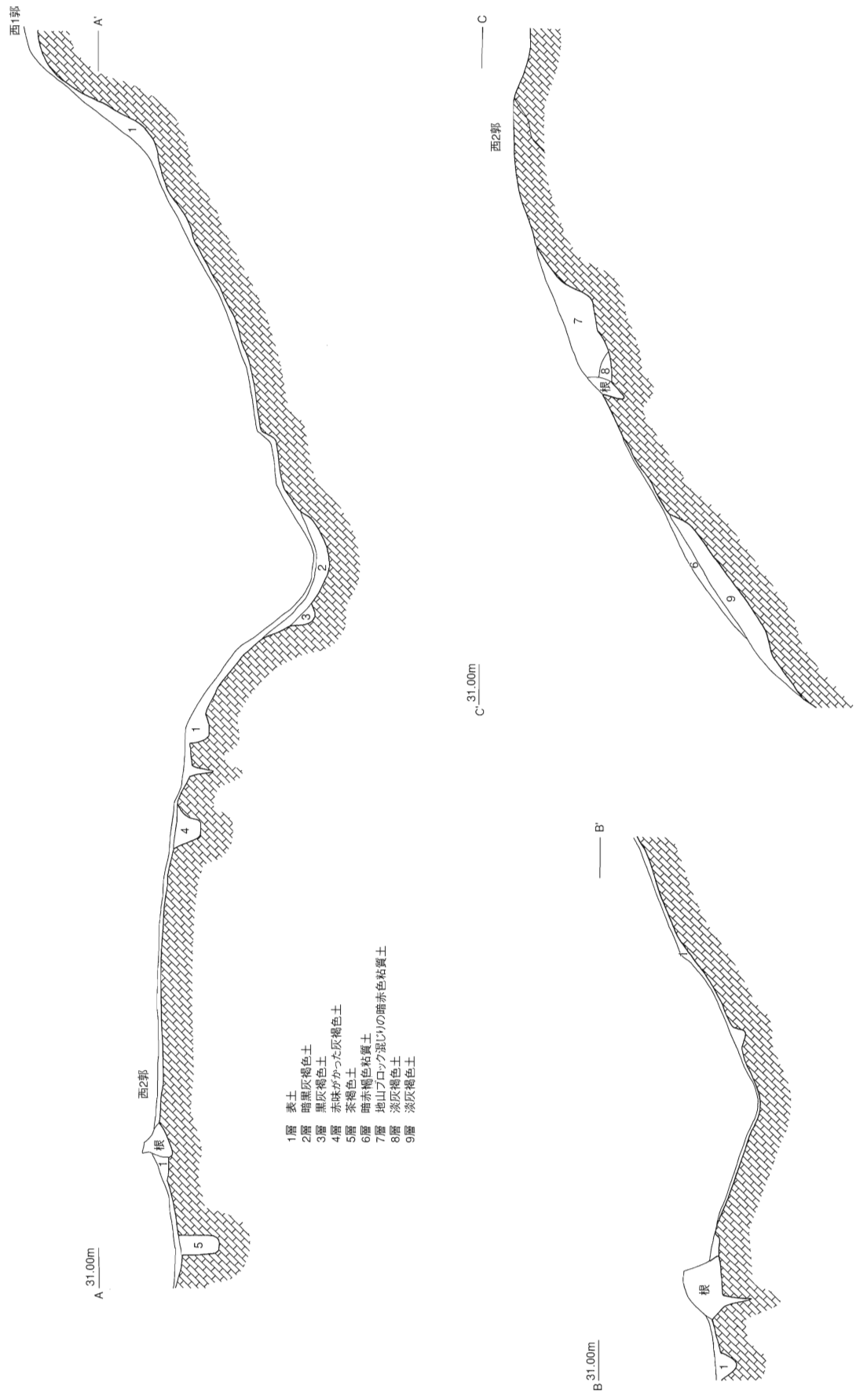
Ⅲ区は、Ⅰ区西側斜面より北西にのびる尾根上に位置する。この調査区からは、道状遺構と５つの平坦面が確認された。

道状遺構は、尾根をＶ字にカットした底に石が階段状に配置されたもので、尾根のラインに対して直交するように走る。ここは、山城の堀切が後世に道として利用されたものではないかと予測したが、発掘調査の結果、尾根頂部のカットは深さ７０㎝程度と浅く（第２３図Ｂ－Ｂ'）、堀切があった可能性は薄い。また、道状遺構は、両側のカットされた尾根から流土が流れ込みやすい地形となっているにもかかわらず、土砂の堆積はほとんどなく（第２３図Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'）、比較的新しい時代のものと考えられよう。すなわち、Ⅲ区の尾根は、おそらく山城遺構よりも新しい時代の道によってカットされた可能性が高い。

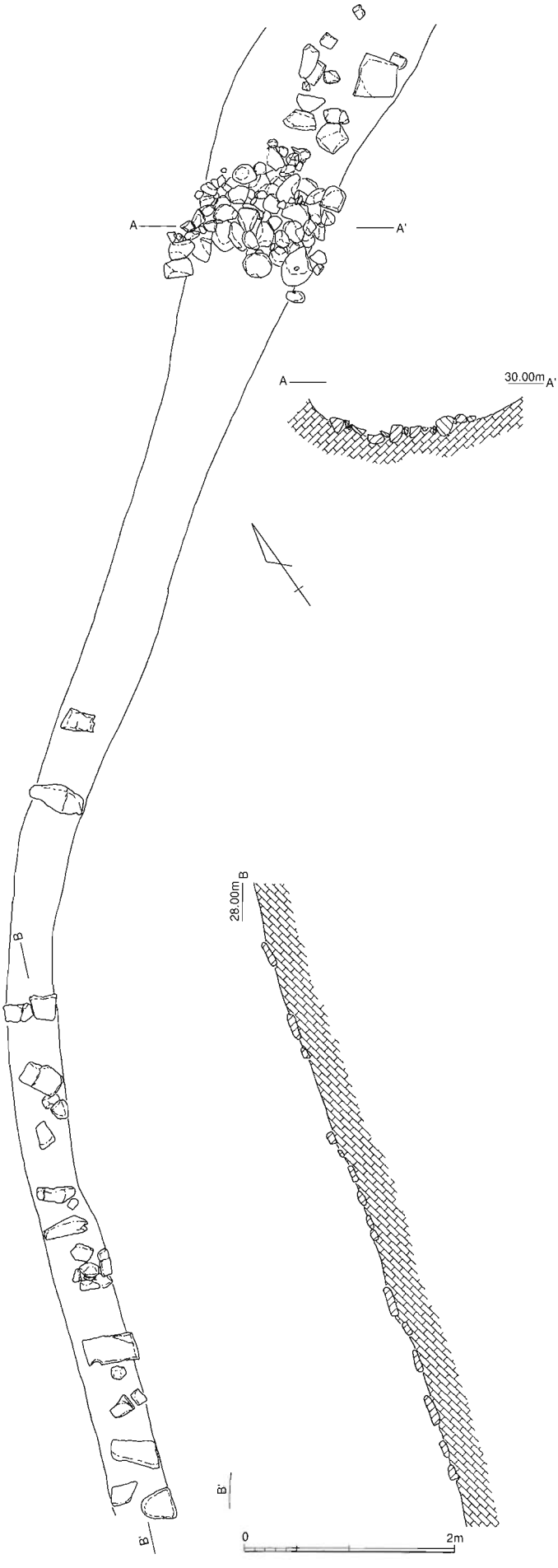
この道状遺構の両側には５つの平坦面を確認したが、そのうち、道状遺構南東部の３つの平坦面は、道状遺構に近い位置にあって、尾根のカットされた斜面上に設けられた加工段である。上述のように、尾根のカットが山城遺構よりも新しいものと考えられるので、そこにある加工段も山城遺構とは無関係のものと考えられる。堆積土が薄く、切り合い関係を確認することはできなかったが、おそらく現状で検出されている道状遺構以前の道にかかわるものであろう。道は何度か手を加えられ、尾根を切りながら徐々に北西方向に移動していったのではなかろうか。

従って、ここでは、確認された５つの平坦面のうち、後世の道にかかわると思われる３つを除いた２つを郭とし、南東部のものを西１郭、北西部のものを西２郭と称す。以下、道状遺構と西１・２郭に分けて説明を行う。

道状遺構（第２４図）　尾根をカットして設けられた道状遺構は、路面幅０.５～１.３ｍで、勝負



第23図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅲ区土層断面図（S=1／60）



第24図　勝負廻Ⅰ遺跡Ⅲ区道状遺構実測図（S=1／60）

廻Ⅰ遺跡西側にある小規模な谷部へ降りていく。道状遺構のうち、最も高い位置となる尾根頂部付近には、人頭大ほどの石が敷き詰められていたが、その用途は不明である。そこから谷部へ５ｍ下った地点からは、大小様々な大きさの来待石が１０～４０㎝程度の間隔で配置され、そのまま谷へ向かう。

谷部へ向かう路面の傾斜は、石の敷き詰められた尾根頂部付近が５度と緩やかだが、徐々にその傾斜も強くなり、来待石の配置されている付近では２０度を測る。狭い間隔で配列された大小の来待石は、おそらくこうした傾斜に対応して、ステップの役割を果たすものであったと考えられる。

西１・２郭　西１郭は尾根上の標高３１.６ｍ付近、西２郭は標高３０.４ｍ付近に位置する平坦面である。西１郭と西２郭の間は前述の後世の道で切られており、比高差も１.２ｍ程度なので、本来は１つの郭を成していた可能性もあるが、幅は西１郭が３ｍ以内、西２郭が１０ｍ以内と、大きく異なり、そのまま連続していたことを想定しづらい。

平坦部はいずれも地山を削って成形している。西２郭南西斜面は、一部、階段状に削りとられような地山の上に土砂がのる状況が確認できるが（第２３図６～９層）、先述のように、Ⅰ区第２郭では土を階段状に盛り上げて平坦部を広げているので（第８図Ｃ－Ｃ'）、あるいはこれらも郭の成形とかかわる加工の痕跡かもしれない。

西１・２郭のある尾根は、そのまま勝負廻の西側に谷を囲んで存在する尾根上の高まり（掘田ヶ谷）に向かう。

第３節　まとめ　－勝負廻城と来待の谷－

勝負廻Ⅰ遺跡で検出された山城遺構（勝負廻城）は、１４～１６世紀のものとした第２郭出土の土師質土器（第１８図－１）以外、時期の目安となる遺物がない。従って、中世のどの時期に当山城が機能していたかを明らかにすることはできず、山城の性格を限定された時代背景から導き出すことは困難である。そこで、ここでは、勝負廻城の構造と、勝負廻城の面する来待川流域の谷平野の歴史的環境から、勝負廻城の性格について考察してみたい。

勝負廻城の構造（第２５図）

標高５２ｍの尾根の頂を中心に展開する勝負廻城は、比較的広い面積を持つ第２郭以外は、小規模な郭によって構成されている。

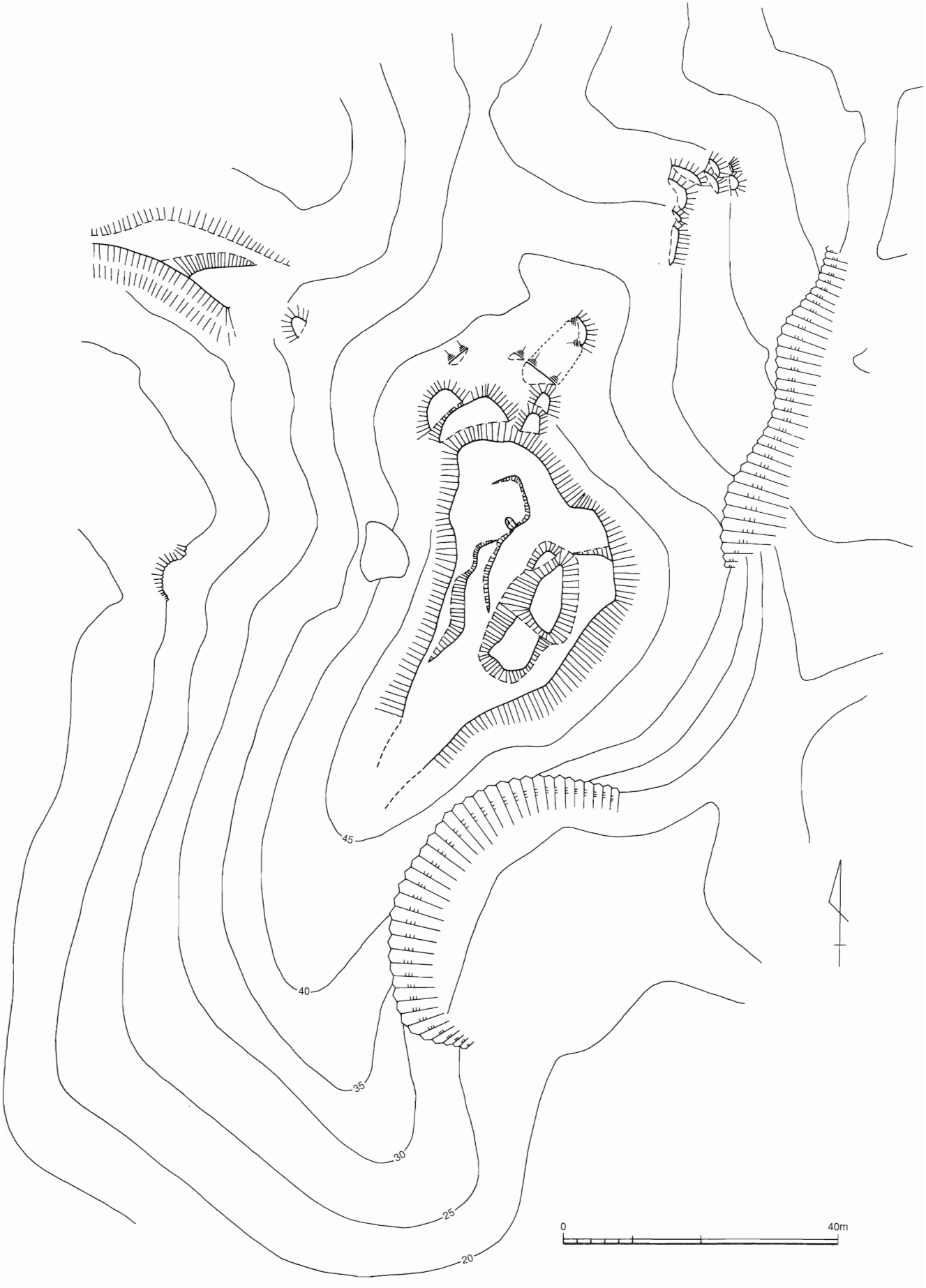
第２郭上の中央部やや東よりに位置する主郭は、ステップとして使用されたと思われる平坦面（第２節１項１参照）も含めると、３段構造となっている。主郭は第２郭の平坦面上に乗ったような状態のため、勝負廻城の裾部への見通しが第２郭平坦面により遮られる。従って、麓付近への直接的な防御施設とはなり得ない。また、主郭の平坦面は小規模で、しかも２郭との比高差は２ｍ程度で、第２郭に侵入してきた敵を防御するにも適さない。しかし、ここからは宍道湖や谷への眺望が極めて良く、見張り台としてなら十分機能し得るであろう。

勝負廻城で最も広い平坦面を有する第２郭は、南北に長く、山城裾部や全ての郭を見渡すことができ、防衛上の中心的な施設であったと考えられる。また、その北東部には一段高い帯状の平坦面を巡らせ、東辺中央部には張り出部を設けている。山城の中核的な郭である第２郭が、このように東側を意識した構造を持つことは、勝負廻城がその東側に展開する来待の谷との関連性を強く持つ城であったことを示している。

城へ登る施設には、小規模な加工段群である外郭１～５と東１～８郭、通路状遺構などがあり、これらは主にステップとして利用されていたものと考えられる。ただし、先に指摘したように外郭３と東１郭は本来同一の曲輪であった可能性が高く、その場合、ここは来待の谷から第２郭までの登り道の中間に位置する防衛施設としての機能を想定できる。また、第３・４郭も外郭を横から狙うように設置されており、城の登り道を利用して侵入してくる敵に対応した構えを持つ。狭い登城施設を利用して敵が進入してくる場合、隊は細長くならざるを得ず、これらを狙った一定の広さを持つ曲輪が配置されていたようである。

西１・２郭は、勝負廻の西側の谷を意識した防衛上の曲輪として機能したことも想定されるが、曲輪の配置されている尾根は、谷を囲むように、そのまま西側へ向かって尾根状の高まり（掘田ヶ谷）となっていくので、この尾根そのものが勝負廻城と掘田ヶ谷をつなぐ連絡通路としての役割を果たしていた可能性もある。現在、その尾根沿いに山道が走る。

以上に述べた勝負廻城の構造は、１５世紀後半～１６世紀前半の山城の特徴として指摘される小規模な曲輪・土塁・掘切から構成され、丘陵突端部の平野に面した所（里山）に立地するものが多く、城の奥まった部分に一段高い見張り台のような小区画が見られる場合もあるとされる[註1]点と一致する面が多い。少なくとも、南北朝期の山城が一般的に高く深い山の天険に依存したものであったとされることと比較すれば、谷に面した標高の低い勝負廻城の場合は南北朝期のものとは様相が異



第25図勝負廻城縄張り図（S=1／800）

なるといわざるを得ない。

なお、勝負廻城には中世の山城の特徴として挙げられる掘切や竪掘は見られないが、これは宍道町の宍道要害山城も同様で、宍道要害山城の場合、尾根の遮断よりも、尾根続きに本城との連絡道を残そうとしたためではないかとされている[註2]。この点、勝負廻城も掘田ヶ谷との尾根伝いの連絡を重視していた可能性が高い。

中世の来待の谷

勝負廻城では建物などを検出できず、遺物も少ない。また、通路状遺構が十分な硬化面を持っていないことも、勝負廻城が臨時的に使用される性格の山城であったことを窺わせる。また山城そのものは極めて小規模であり、本来は周辺の山城との連携のもとに機能するものであったと考えられるが、来待の谷奥の大森城跡などとの関連は不明である。しかし、勝負廻城が来待の谷を強く意識した構造を持っている以上、来待の谷の歴史的環境に規定されて当山城が出現したことは疑いない。

来待の谷には「来海荘」と呼ばれる荘園が展開していたことが知られているが、その初見は安元二年（１１７６）二月の「八条女院領目録案」（内閣文庫所蔵山科家古文書）に遡る。来海荘は、在地の有力者が開発して、１２世紀前半頃に天皇家に寄進した荘園で、建武新政の失敗後、天皇家の手を離れたとされる。また、来待荘の地頭は各時代の状況の変化に応じて変遷しており、１２２１年の承久の乱を契機として武蔵国成田荘の地頭であった成田氏が来海荘の地頭となるが、暦応三年（１３４０）に一時的にあるいはその一部が吉見氏の手にわたり、１５世紀初頭前後には室町幕府直轄領に組み込まれて、塩冶氏が来海荘の代官となる。そして、１６世紀中頃までに将軍家とかかわりの深い日野家の所領となり、戦国期の後半には宍道氏などによって押領され、実体を失う[註3]。このように中世の来待の谷は、来海荘の経営をめぐって、政治的介入を繰り返し受けてきたのである。

また、宍道地域は宍道湖における水運の一重要拠点であり、尼子攻めの際の毛利軍の兵站基地となるなど軍事的にも重要な意味を持っていたが、中世の来待の谷について考える際も、宍道湖を利用した水上交通の問題には留意しておく必要があろう。永享三年（１４３１）九月廿二日の「室町幕府奉行人奉書写」（御前落居奉書）には、出雲・来待地域の土一揆のことが記されていて、これが正長元年（１４２８）の正長の土一揆と連動した、水運を含む多数の運送業者によるものであったことが既に指摘されており[註4]、宍道湖に面する来待の谷は、中世における水運・交通の拠点ともなっていたのである。先の来海荘の経営は、こうした交通環境とも密接に結びついていたはずである。

勝負廻城は、宍道湖と来待の谷を見渡せる場所に立地しており、上記の来海荘と水運に関連して出現した軍事施設であったことは間違いなかろう。

註１　山上雅弘「戦国時代の山城－西日本を中心とする１５世紀後半～１６世紀前半の山城について－」『中世城郭研究論集』新人物往来社　１９９０

註２　山根正明『宍道町の山城』宍道町教育委員会　１９９１

註３　以上、井上寛司編『宍道町歴史史料集（中世編）』宍道町教育委員会　１９９２、『島根県の地名』（日本歴史地名大系３３巻）平凡社　１９９５　参照

註４　註３に同じ

第４章　白石大谷Ⅱ遺跡

第１節　遺跡の位置と調査の経過

白石大谷Ⅱ遺跡は、八束郡宍道町白石の谷奥に位置する北向きの斜面にあたる（第２６図）。遺跡の標高は約３５ｍである。小さな谷地形を挟んだ東隣の丘陵には、多数の弥生土器や炭窯を検出した白石大谷Ⅰ遺跡が、また、遺跡南西側の丘陵上には次章で報告するシトギ免遺跡がある。遺跡が位置する白石の谷の東側には、「出雲国風土記」記載の犬石伝承の比定地の一つとなっている石宮神社がある。

調査地は、シトギ免遺跡から北に向かって落ちる急傾斜地が一段緩やかになった部分を中心に、北から東へ回り込む尾根の先端にあたる。場所によっては大きな岩が露出しているが、地山は、礫を含まない灰褐色粘質土で、岩盤ではない。遺跡下方の大半は、調査前までは畑地に利用されていたようで、場所によっては畝が残っている。

平成８年度に４本のトレンチを設定し、内３本のトレンチから弥生土器を中心とする遺物が出土した。東側を中心とする遺跡下方の平坦面は後世の削平が著しく、遺構の残存は望めないようであった。トレンチ調査を開始した当初は、西側谷部からの遺物に出土は期待していなかったが、結果的にはここに設定した第１トレンチからの遺物の出土が最も多く、遺跡中程の平坦面からの遺物の出土は少なかった。

平成１０年１１月４日より、斜面下方東側から掘削を開始し、１１月３０日には建物跡と考えられる加工段を検出。１２月２日には、西側谷部でほぼ完形を呈した鼓形器台を検出。１２月７日に地形測量を行って現地調査を終了した。掘削面積は1,500㎡に及んだ。

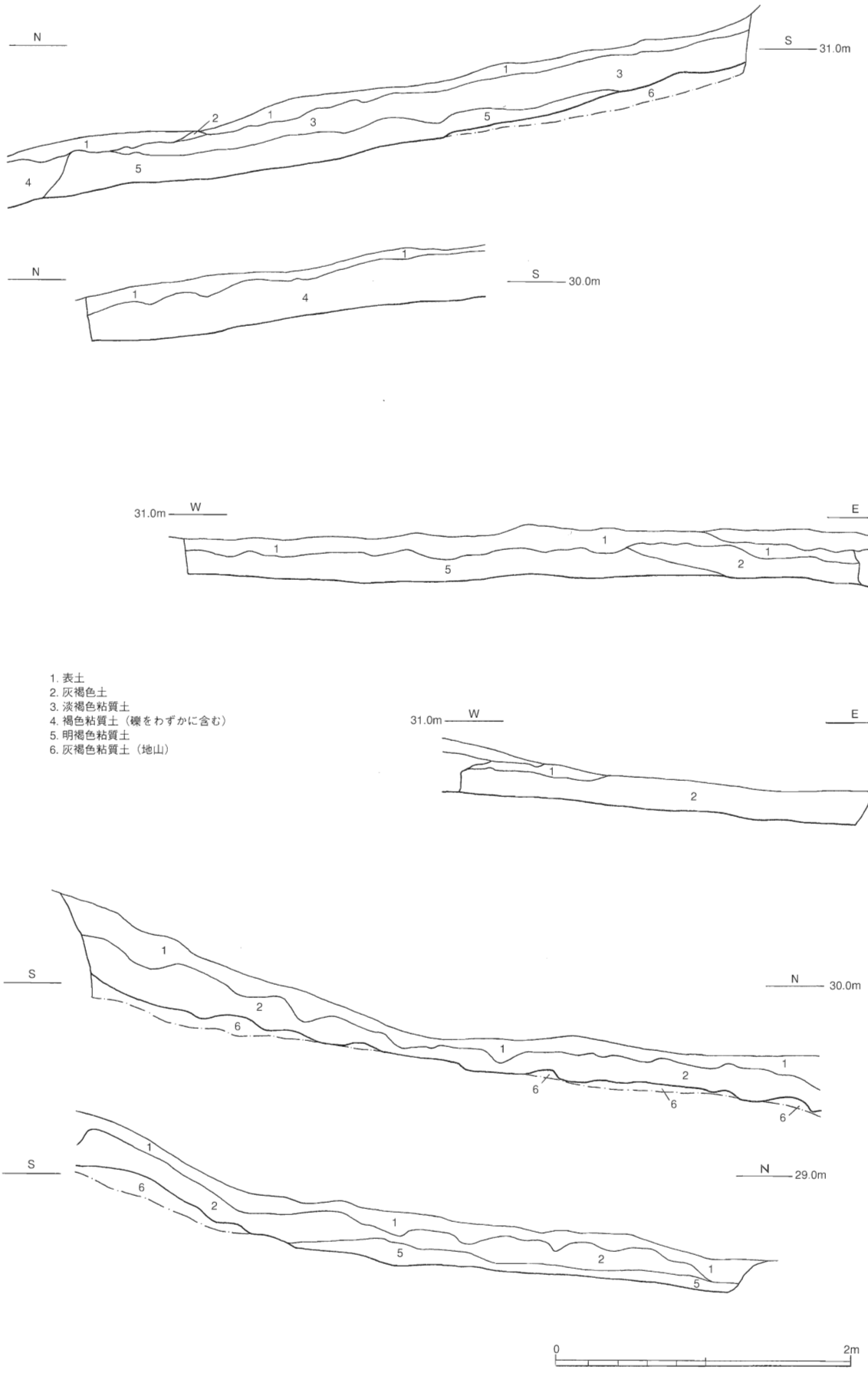
第２節　調査の概要と土層堆積状況

遺跡は、北向きの斜面で、標高３５ｍ付近、３１ｍ付近に傾斜の緩やかになった部分が見られる。この部分は、調査の結果上方のものが弥生時代後期の、下方のものが中世の加工段であることが解った。また、遺跡下方の標高２７～３０ｍ付近は、崖状の急斜面になっている。崖面下方からは、中世の建物跡を検出し、この崖面の造成が中世であったことが解った。標高２７ｍより下方は、畑や墓地による造成が著しく、遺物もほとんど見られない。遺跡西側は北向きの深い谷地形を呈しているが、標高３０～２８ｍ付記には、傾斜の緩やかな部分が見られ、この部分からは、弥生時代後期の遺物包含層を検出した。

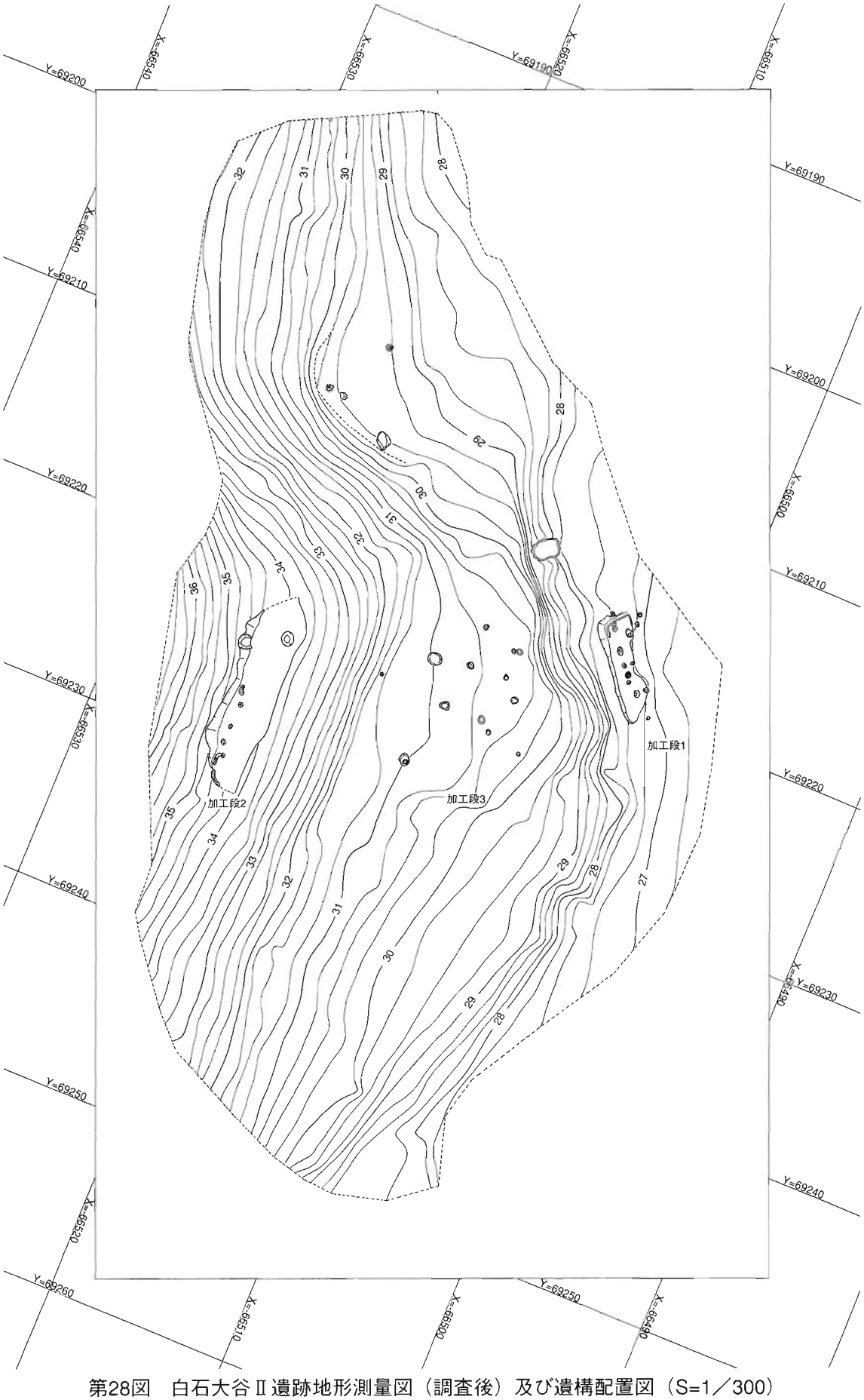
平成１０年度の全面調査では、調査開始早々から、須恵器片などの古墳時代の遺物が表面採取されたが、古墳時代の遺物は、掘削中にはほとんど出土しなかった。これらの須恵器片については、遺跡上方にシトギ免遺跡があり、平成８年度に完掘していることから、その関係で転落してきた土器と思われる。また、表面採取遺物の中には、青磁片も見られた。

平成８年度に設定した各トレンチ（第２７図）とも、土層の状況は似ており、薄い表土・耕作土の下方に若干の流入土が見られ、その下方に灰褐色粘質土の地山が見られる。遺跡西側谷部に設定した第１トレンチでは上方からの流入土である２灰褐色土が厚く、遺跡中程に設定した第２・３トレンチでは耕作による移動と思われる礫を含んだ４橙色粘質土が見られる。２灰褐色土は主に弥生

第26図　白石大谷Ⅱ遺跡地形測量図（調査前）及びトレンチ配置図（S=1／1000）



第27図　白石大谷Ⅱ遺跡土層断面図（S=1／40）



第28図　白石大谷Ⅱ遺跡地形測量図（調査後）及び遺構配置図（S=1／300）

土器を中心とする遺物包含層で、４橙色粘質土からは中世土器の破片の出土が目立った。白石大谷Ⅱ遺跡では、畑による開墾に伴い遺跡のあちこちにゴミを埋めた穴が見られ、第２トレンチ中程の攪乱は、それによるものである。

第３節　遺構・遺物

白石大谷Ⅱ遺跡では３カ所で建物跡と考えられる遺構を検出し、発見順に加工段１～３と呼んだ。また、西側谷部には柱穴状の小さな落ち込みが４基（Ｐ１～４）見られる他、小炭窯と思われる焼土坑が遺跡全面に点々と見られた。ただ、傾斜地も含めて畑地として利用されていたことから、ゴミを埋めた穴が数多く掘られている。特に遺跡最高所の遺構である加工段２から加工段３の西側にかけての部分には、１０カ所近くに及ぶ穴が掘られており、遺構の残存状況は良くない。

遺物の出土は、西側谷部を除きまばらで、遺構に伴うもの以外は、小片の出土に止まった。西側谷部からの遺物の出土はきわめて多く、完形に近いものまで出土している。

１．加工段２（第２９・３０図）

加工段２は、遺跡最高所である標高３４～３５ｍで検出した平坦面である。

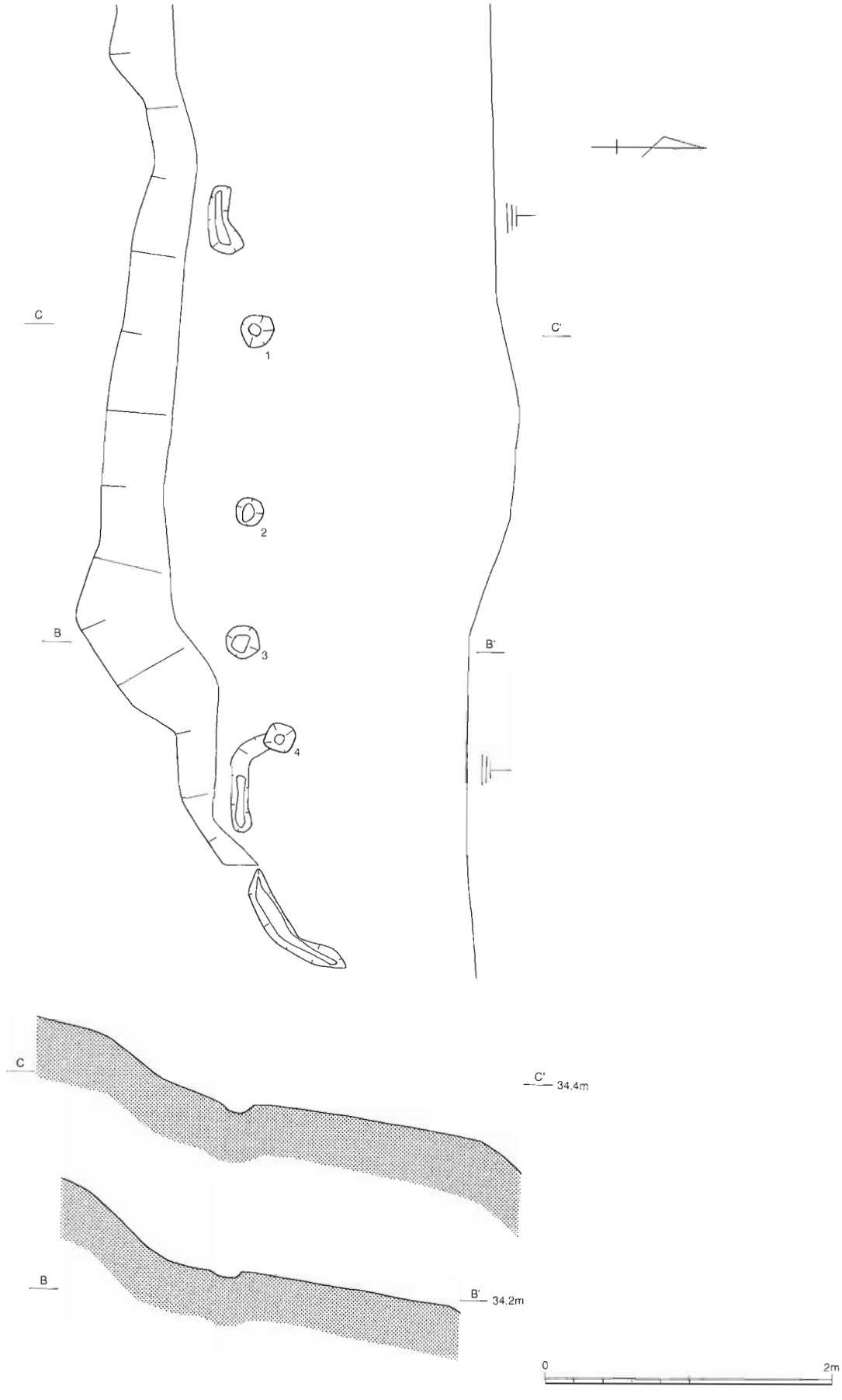
平坦面は幅約１０.２ｍ、奥行き約２.１ｍを測る、北に開いた三日月形で、南側が壁となる。南側の壁は、約４０㎝程の高さを持っているが、傾斜は緩やかである。加工段２は、後世の削平が及んでいるものの、南東隅でわずかに溝を確認できたことから、南側の壁際には壁帯溝が廻っていたものと考えられる。検出した溝は幅約２０㎝を測るが、深さはほとんど無く、わずかに窪む程度である。いずれも不整形で、５０～７０㎝程の長さで３カ所に分かれて検出しており、それぞれが連続するようには見えない。南側の壁から離れているものもあるので、１回以上の造り替えによる別々の溝である可能性も考えられる。

加工段東側の壁際から柱穴と思われる落ち込み４基を検出した。いずれも直径２２～２８㎝、深さ４～８㎝程の小さなもので、柱根は確認できない。内３基（Ｐ１～３）は南側の壁と平行に一直線上に並ぶもので、その間隔はそれぞれ約０.９ｍ、１.３ｍを測る。これらの柱穴列以外の部分は、第２９・３０図の断面図の通り、北及び西へ向けて傾斜している。柱穴がきわめて浅いことから柱穴列も更に延びていた可能性が高いが、既に削平されており、残存していない。よって、掘建柱建物が建っていた可能性があるが、断定できないため、可能性に留める。

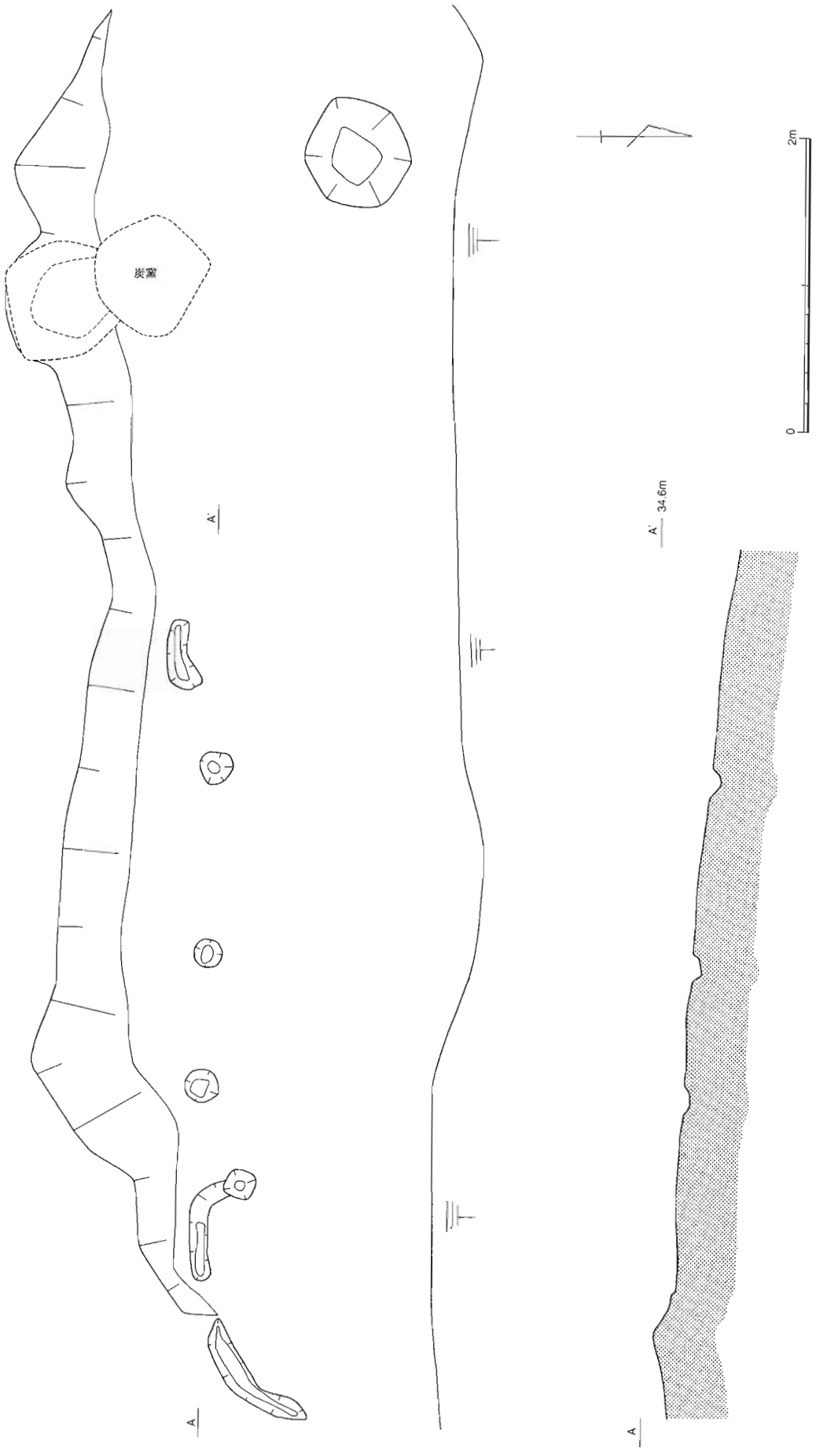
なお、平坦面西側に見られる土坑状の落ち込みは近代のゴミ捨て穴であり遺構とは関係ない。また、南側の壁を利用した炭窯が掘られているが、埋土が非常に軟らかく近代のものと思われる。炭窯は、直径８０㎝程の窪み（焚き口か）と、直径約８０㎝、深さ約３０㎝の焼成室からなり、焼成室の壁は火を受け、赤変している。これらの後世の利用によって、削平が進んでいるものと思われる平坦面西側部分には、溝・柱穴とも見られない。また、平坦面から北側の斜面に向かっては、盛り土が存在した可能性も考えられるが、検出できなかった。

加工段２の南側壁際からは少量の土器片が出土している。出土位置は、いずれも床面直上であり、加工段２に伴うものと思われる。出土した土器は、いずれも小片で、図示できるものは１点のみであった。図示した１点は弥生土器器台であるが、図示できなかった土器片も、胎土や焼成から弥生土器と思われる。このことから、加工段２は弥生時代後期に造られたものと思われる。

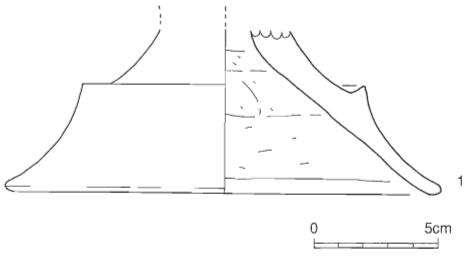
第３１図は、加工段２から出土した弥生土器器台である。脚部の破片で、筒部より上方は残存し



第29図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段２実測図（東側）（S=1／40）



第30図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段２実測図（S=1／40）



第31図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段２
出土遺物実測図（S=1／3）

ていない。脚部の外面調整は平行線文をナデ消している。筒部はヨコナデを施す。脚部内面は横方向のケズリが、筒部内面はナデが施される。胎土中には白色の砂粒をやや多く含み、明黄灰色を呈す。

２．加工段３（第３２・３３図）

標高３１ｍ付近に展開する、白石大谷Ⅱ遺跡で最も広い平坦面である。斜面から北に飛び出す小さな尾根を削平して造られたものと思われ、平面台形に近い形状を呈し、幅約１２ｍ、奥行き約８ｍを測る。わずかに西に傾斜しているものの、ほぼ水平な平坦面となっている。近年まで畑に利用されていたようで、削平が及んでいる可能性が高く、表土掘削中の遺物の出土は少なかった。平坦面先端から大きく落ちる北東側は、削られた痕跡が明瞭にあり、当初は更に広い平坦面であったものと考えられる。

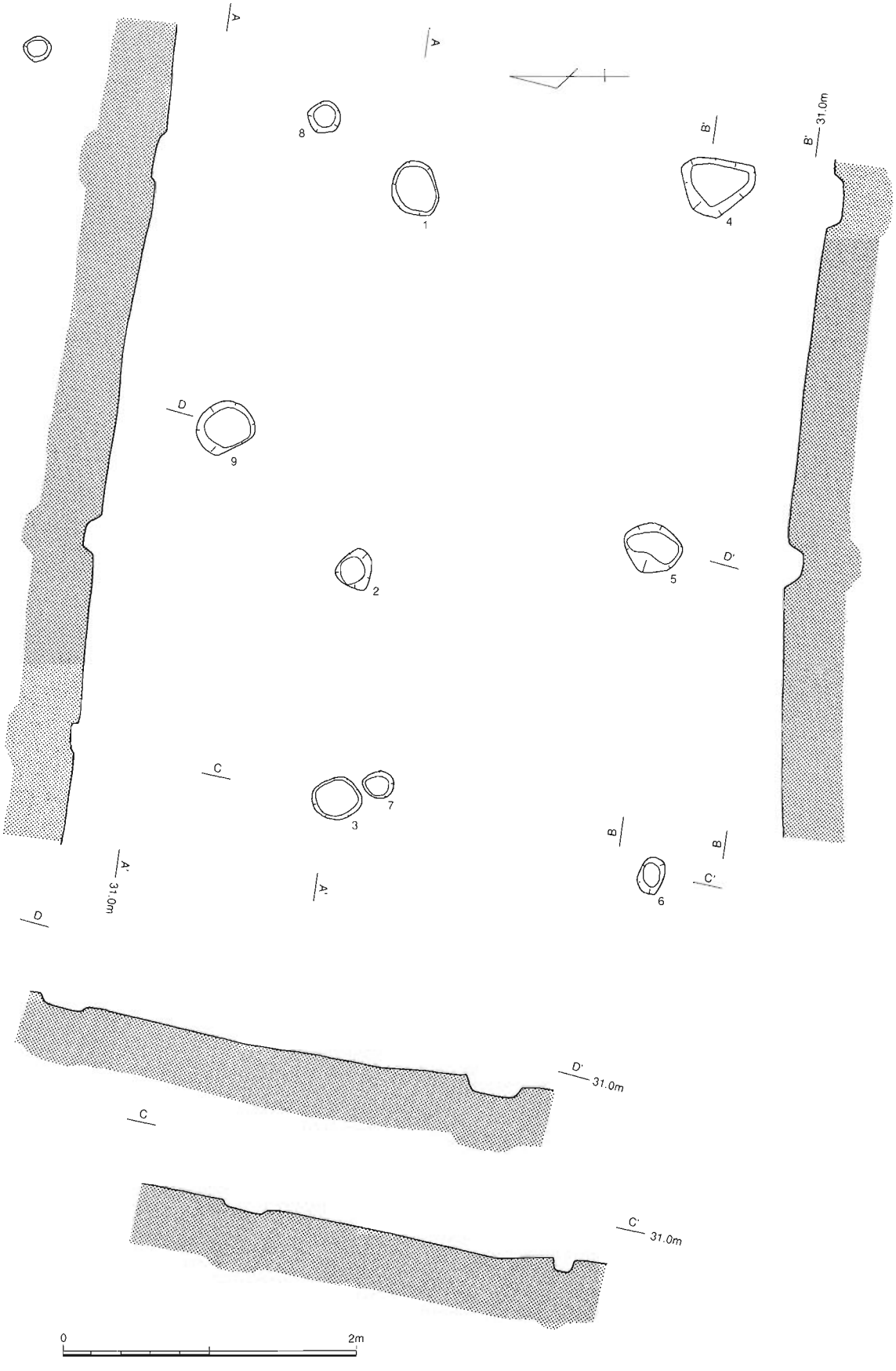
加工段２からは、柱穴を１１基検出した。検出した柱穴は、いずれもきわめて浅く、深さ２０㎝に満たないものばかりであるが、この内Ｐ２からは、第３４図に示した土師器が重ねて伏せられた状態で検出できた。Ｐ２は直径２５㎝、深さ１２㎝の浅いピットで、検出した土師器を取り除くとすぐに底に達した。また、出土した土師器は一応の形状を保っており、重量物によってつぶれたような痕跡は見られない。このような状況から、Ｐ２出土土師器は、柱穴に転落したのではなく、柱を抜き取った後に人為的に埋置されたものと思われる。

Ｐ１～６のピットの並びは、やや歪むものの、建物として認識できそうで、ほぼ東西方向に延びる２間１間以上の掘建柱建物跡の存在が考えられる。柱間は、東西方向で約１.６～２.８ｍ、南北方向は約２ｍである。また、Ｐ７については、Ｐ３との位置関係から束柱の可能性も考えられ、床張りを持つ建物も想像される。Ｐ１・４は黄灰色粘質土で、Ｐ２・５は褐色土で、Ｐ３・６・７は黄褐色土で埋まっており、柱根は見られなかった。Ｐ２から出土した土師器より、Ｐ１～７は１２～１３世紀に使用されたものと思われる。

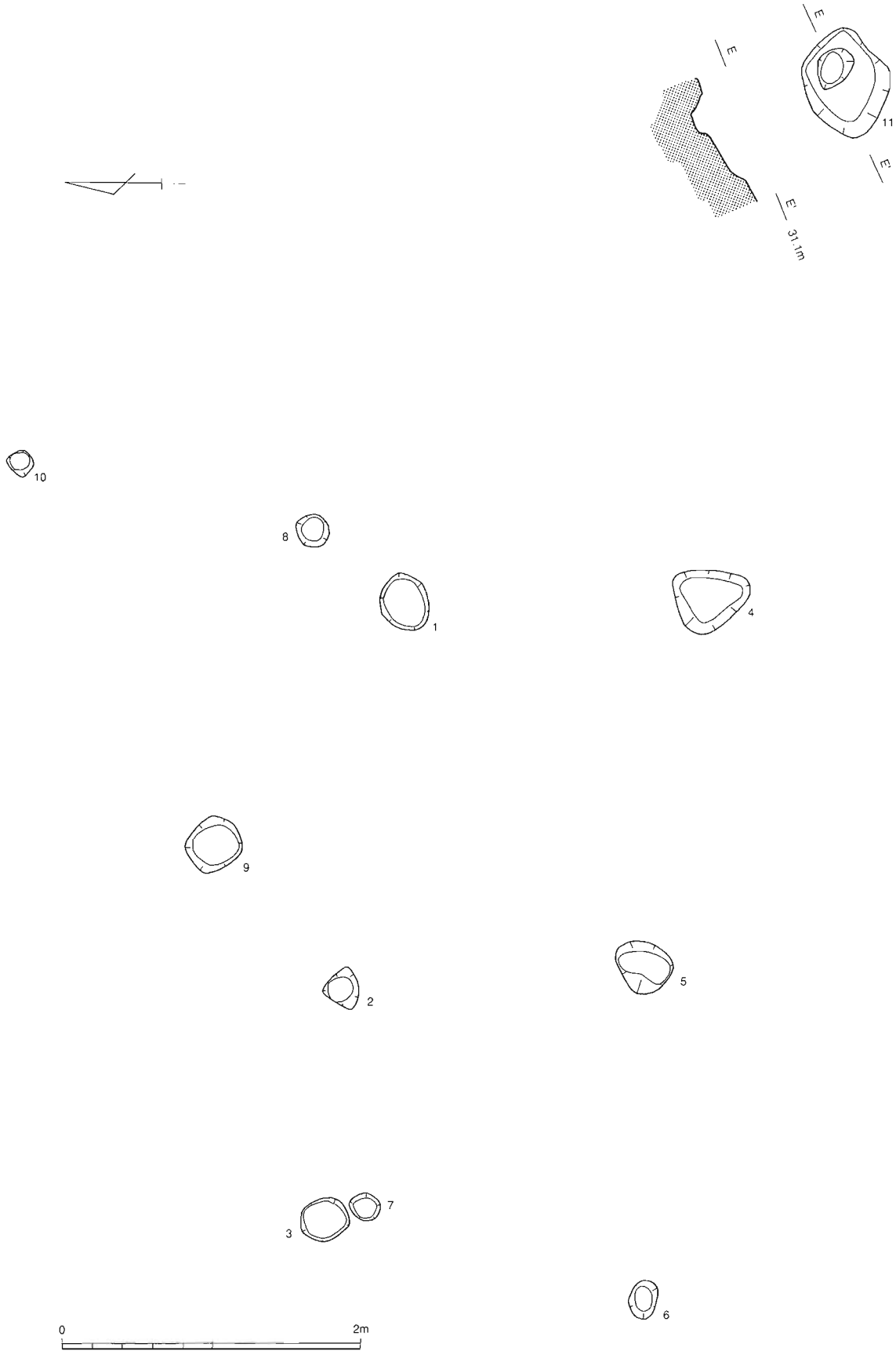
Ｐ８～１０も、位置関係から、Ｐ１～７とは別の建物跡であった可能性があるが、加工段先端に位置するため、非常に残りが悪く、他のピットを検出することができなかった。Ｐ９は、直径約４０㎝を測るが、Ｐ８・１０は直径２０㎝程の小さいもので、いずれも深さは約５㎝である。Ｐ８の埋土には炭が含まれていた他、Ｐ１０からは土師器の小片２点を検出した。Ｐ８・１０は暗褐色土で、Ｐ９は黄灰色粘質土で埋められており、Ｐ１～７と同様に柱根は見られない。柱間は、東西方向で約２.２m、南北方向で約２ｍである。Ｐ１０から出土した土師器は小片のため図示できなかったが、胎土や焼成の状況からＰ２出土土師器に近いものと思われ、Ｐ８～１０が使用された年代はＰ１～７と同様に１２～１３世紀頃と思われる。

Ｐ１１は、１基だけ離れて位置するピットで、長径６５㎝、短径５５㎝、深さ１４㎝を測るやや大きなものである。底は明確に２段になっている。Ｐ２などとほぼ同様の褐色土で埋まっていた。２段ピットになっていることから柱穴であった可能性が高いが、周辺に並ぶ柱穴は見られない。周辺からの出土遺物は見られないが、他のピットに近い時期のものであろう。

第３４図は加工段３のＰ２とその周辺から出土した土師器である。いずれも大きく破損しており、完形品とは言い難いが、Ｐ２周辺には、接合できない多くの破片があり、図示した３点以外にも土器が入っていた可能性がある。２は高い高台の付く土師器坏である。わずかに丸みのある体部には、

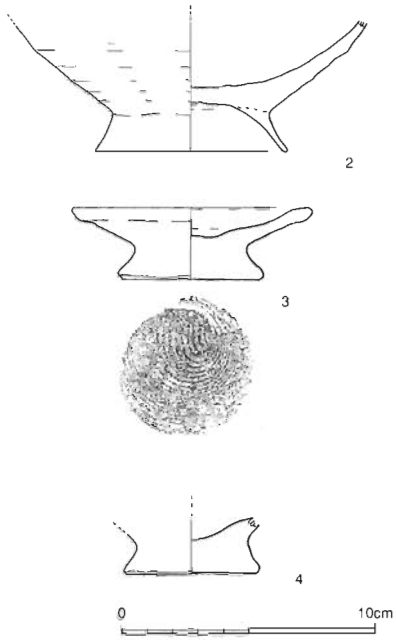


第32図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段３実測図（西側）（S=1／40）



33図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段３実測図（S=1／40）

ロクロ目状に強いナデが施され、薄く高い高台は外側に強く張り出す。淡褐色を呈し、胎土中に小砂粒を含む。３は、柱状高台の皿である。体部は直線的で、口縁部は丸くおさめる。底部には回転糸切りの痕跡を明瞭に留める。４は、平成８年度に設定したトレンチ５から出土したものである。トレンチ５は、加工段３の中程に設定されており、４は、加工段３に伴うものと断定した。４も柱状高台の皿と考えられるが、体部以上の大半を欠いている。全体に磨滅しているが、底部に回転糸切りの痕跡を見ることができる。



第34図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段３出土遺物実測図(S=1／3)

３．加工段１（第３５図）

標高２７ｍ付近で検出した、溝を伴う加工段である。周辺はかなり広い平坦面となっているが、既に畑により開墾されており、地形の改変が著しい。

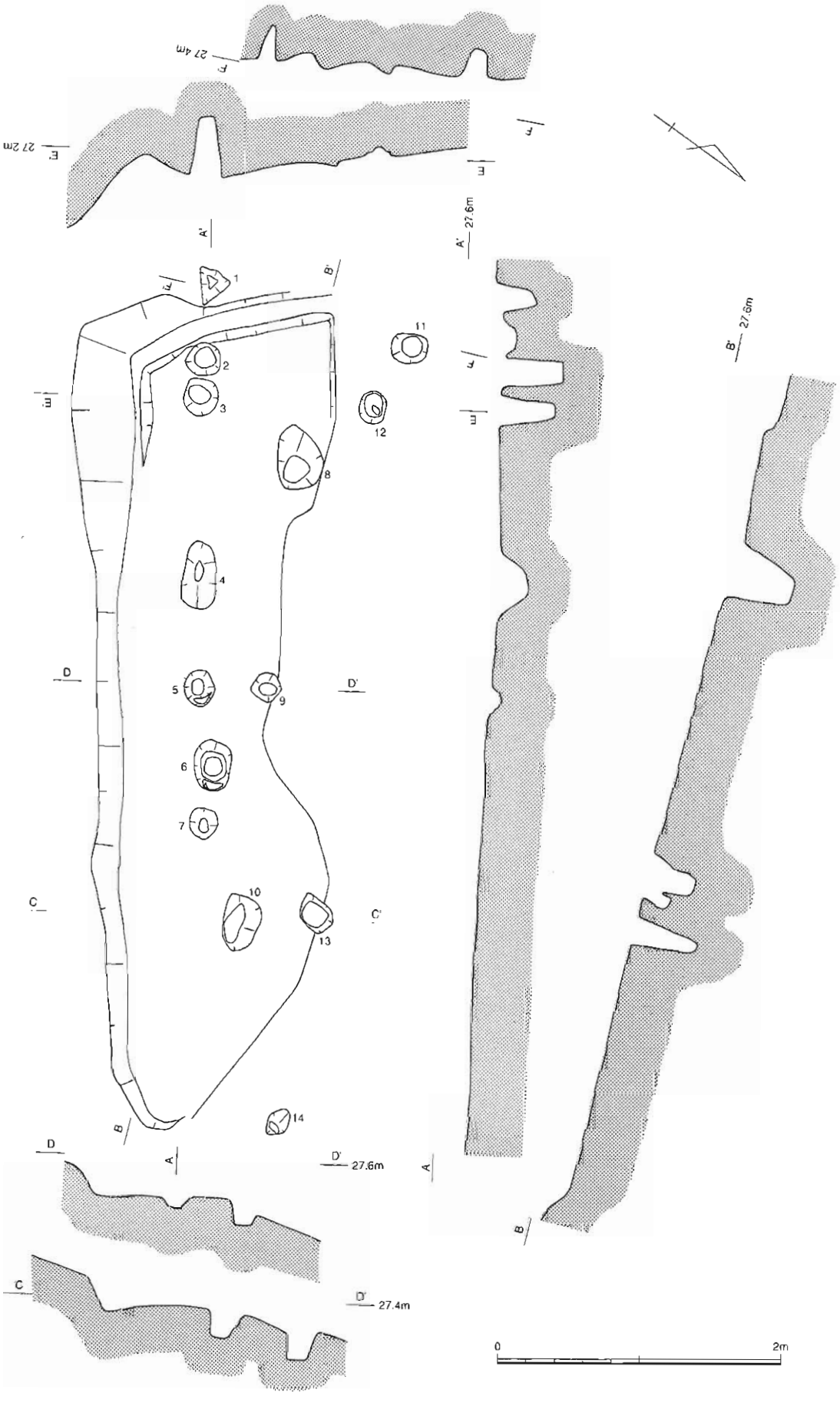
加工段１は、「Ｌ」字形に残る壁体溝に囲まれた平坦面で、幅約２.８ｍ、奥行き約１.９ｍの長方形を呈す。南側は高さ２ｍ程の崖面となっており、その上に加工段３が位置する。北側は一段下がって平坦面が続くものの、畑による耕作と道によって大きく削平されており、遺構の広がりは確認できない。

壁体溝として検出した部分は、加工段１西側部分の一部で、南北方向に約１.４ｍ続き、南西隅で東に折れ、約０.８ｍ続いたところで消滅している。加工段１の東側は床面が削平されていると考えられることから、壁体溝は南壁に沿って延び、「コ」字形に一周していたものと思われる。北側は、南壁から１.５ｍの位置で段になっている。その間の幅が狭いことから、建て替えによる別の建物跡の壁か壁帯溝であった可能性が高い。段として検出できた長さは約０.７ｍである。

加工段１では、１４基の柱穴を検出したが、検出位置は乱れており、建物跡としての明瞭な並びは確認しがたい。比較的並んでいるのは、断面図Ａライン上のもので、南壁と平行して５～７基の柱穴がほぼ一線に並んでいる。中程より東側は残りが悪いものの、西側の３基（Ｐ１～３）は７０cm程の深さを持っている。ただ、西端のＰ１は壁帯溝よりも外側に位置しており、壁帯溝に伴わない別の建物跡と思われる。Ｐ１には、拳大よりも大きな石２個が詰まっており、埋土は明褐色土である。同様の埋土はＰ１２にも見られる。Ｐ２・３・６～１１・１４は褐色土で埋まっていた。Ｐ４の埋土は黄色ブロックを含んだ暗褐色土で、土師器片を含んでいた。Ｐ５・１３の埋土はＰ４と同様のもので、Ｐ１３には石が入っていた。

埋土の状況から並び方を検討すると、Ｐ１１－Ｐ２かＰ３－Ｐ６－Ｐ１４と、Ｐ８－Ｐ９－Ｐ１０が一連のものと考えら、主軸の異なる２棟以上の掘建柱建物跡の存在がうかがわれる。両者の並び方は、いずれも壁帯溝の枠内に収まるものであり、また、壁帯溝の枠内に収まらないＰ１には、連続する他の柱穴が考えにくい。Ｐ１１～１４の場合は桁行き約２.６ｍ、梁行き１.６ｍの２間１間以上の建物跡が、Ｐ８～１０では柱間約１.６ｍの建物跡か柵列が考えられる。

加工段１とその周辺から出土した土器は第３６図に示した。この内５などは、壁帯溝で区画された範囲より外側で出土したものであり、直上の加工段３からの流入品である可能性も考えられるが、次の点から加工段１に伴うものと判断した。加工段１出土遺物は、土師器の坏・皿と考えられるも



第35図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段１実測図（S=1／40）

のであるが、大きく時期を異にしないと考えられる加工段３から出土した坏・皿とは、特に高台の形状が大きく異なっている。例えば壁帯溝より外側で出土した５の形状は、６・７など壁帯溝の内側で出土したものの器形に近い。

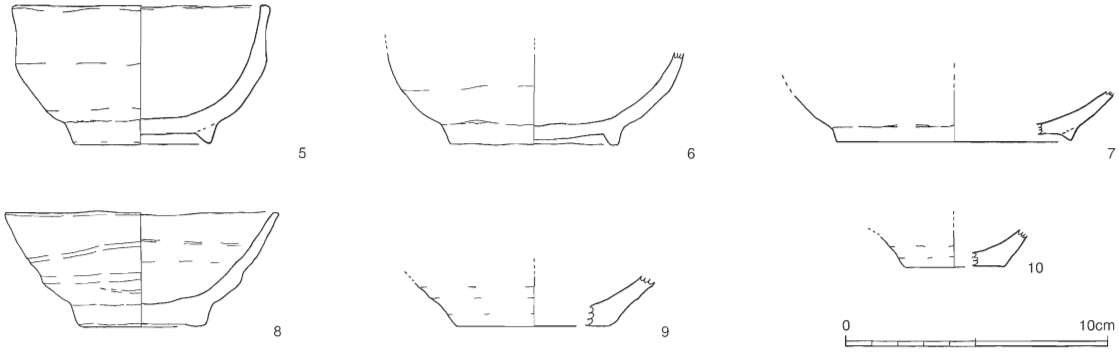
５は、土師器の坏である。加工段１の南西で表土掘削中に検出しており、加工段３に伴う可能性も否定できない。丸みを持つ体部は、比較的厚く作られており、口縁部直下で薄く窪む。口縁端部は外面側に傾斜してわずかに面を持ち、内面側に稜を持つ。底部はほぼ平らに作られており、その外側に張り付けられた高台は、断面三角形を呈す。口縁部から体部を大きく欠くが、口径９５㎜、器高５３㎜に復元できる。橙褐色を呈し、胎土中に赤色の砂粒を含んでいる。６も土師器の坏である。口縁部と体部の大半を欠くが、５とほぼ同様の器形と思われ、丸みを持つ体部が直立気味に立ち上がる。高台は断面台形に近く、復元すると５よりやや大きい底径６４㎜となる。明橙褐色を呈し、軟質に焼成され、胎土中に白色・赤色の砂粒を含んでいる。７も坏と考えられる土師器の小片であるが、復元すると底径９０㎜となりやや大きい。断面三角形を呈す高台を持つ。非常に軟質で残りが悪く、桃色を呈している。

８・９は、土師器の坏である。いずれも底部に回転糸切り痕を残し、体部は直線的に立ち上がる。体部外面に強いロクロ目状のナデを施し、内面は全面ナデである。９は口縁部を欠くが、８の口縁部は、比較的厚く作られ、口縁端部に明瞭な面を持つ。底部には、切り離しの後に付いたと思われる縄目状の圧痕が見られる。円盤高台状を呈する８の底部は、体部との間に段を持つのに対し、９の体部は、底部から直線的に立ち上がっている。８は明橙褐色を呈し、軟質に焼成され、胎土中に白色の砂粒を少量含む。内面に黒褐色の付着物が見られる。９は、橙色を呈し、胎土中に透明な微砂粒を含んでいる。

１０は、土師器の皿と考えられるものである。底径は３９㎜に復元され、底部には回転糸切り痕を明瞭に残している。口縁部を欠くが、厚手に作られた体部は直立気味に立ち上がり、深い器形になることがうかがわれる。淡褐色を呈し、胎土中に白色の砂粒を多く含んでいる。内面が黒色に変色しており、灯明皿として使用されていたものと思われる。

４．谷部の状況

遺跡西側は、深い谷地形となっていた。埋土を除去すると最下部には平坦面が見られたが、人工的な造成とは思えない。谷部の平坦面からは、土坑状の落ち込み４基を検出したが、いずれも遺物を伴っておらず、性格は不明である。落ち込み４基以外には明瞭な遺構は見られない。平坦面付近は、非常に厚い埋土が見られ、埋土中に多量の遺物を含んでいた。遺物の大半は弥生土器で、一部にはほとんど完形品に近いもの（第４０図５２～５４など）も見られた。



第36図　白石大谷Ⅱ遺跡加工段１出土遺物実測図（S=1／3）

谷部で出土した弥生土器には、壺・器台が多く見られ、完形品に近いものまで含まれていることから、付近に弥生時代の墳墓が存在した可能性が考えられる。

5．遺構に伴わない遺物

１１は、黒曜石製のスクレーパーである。刃部の一部を欠いているが、ほぼ完形に近いものと思われる。平面三角形に近い形状で、刃部は直線的である。刃部以外の面には、自然面を多く残しており、剥離の順番は一定しない。縄文時代のものと思われるが、白石大谷Ⅱ遺跡からは、他に縄文時代の遺物は出土していない。

１２～８３は、弥生土器と思われるものである。

１２～１６は壺である。１２は二重口縁の壺と考えられるが、拡張部の破片が無く、解らない。頸部から口縁部の内面はヘラミガキが施される。１３は竹管文を施す壺である。１４は壺の胴部の小片である。胎土や焼成から１２と同一個体と思われる。２条毎の沈線と二枚貝殻腹縁による羽状文を施す。１５は、口縁部の拡張部にコンパス文を施すものである。内面はヨコナデである。１６は短い複合口縁を持ち、口縁部内面に強いアクセントを持つものである。

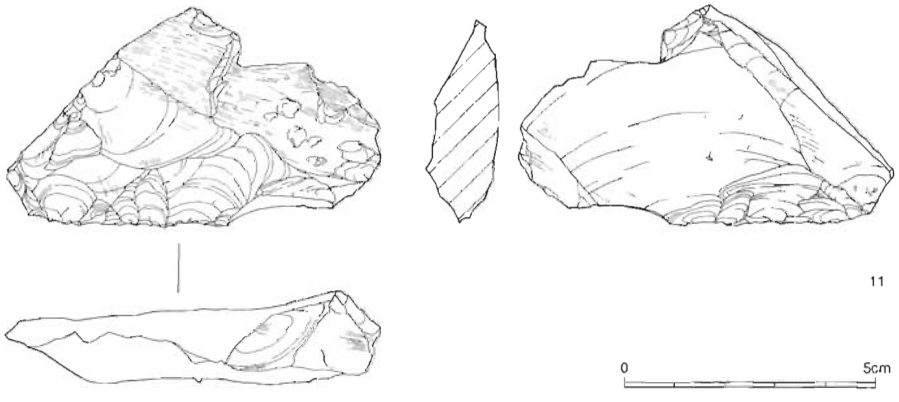
１７・１８は口縁部外面に擬凹線を施すもので、壺であろうか。１７の口縁部内面は、丁寧にヘラミガキされる。

１９～４９は甕である。二重口縁にした口縁部外面に二枚貝による平行線文を施すものが多い。口縁部内面はヨコナデされるものが多いが、２４・２７・３０・３４・３５など頸部を中心にヘラミガキを施すものも見られる。

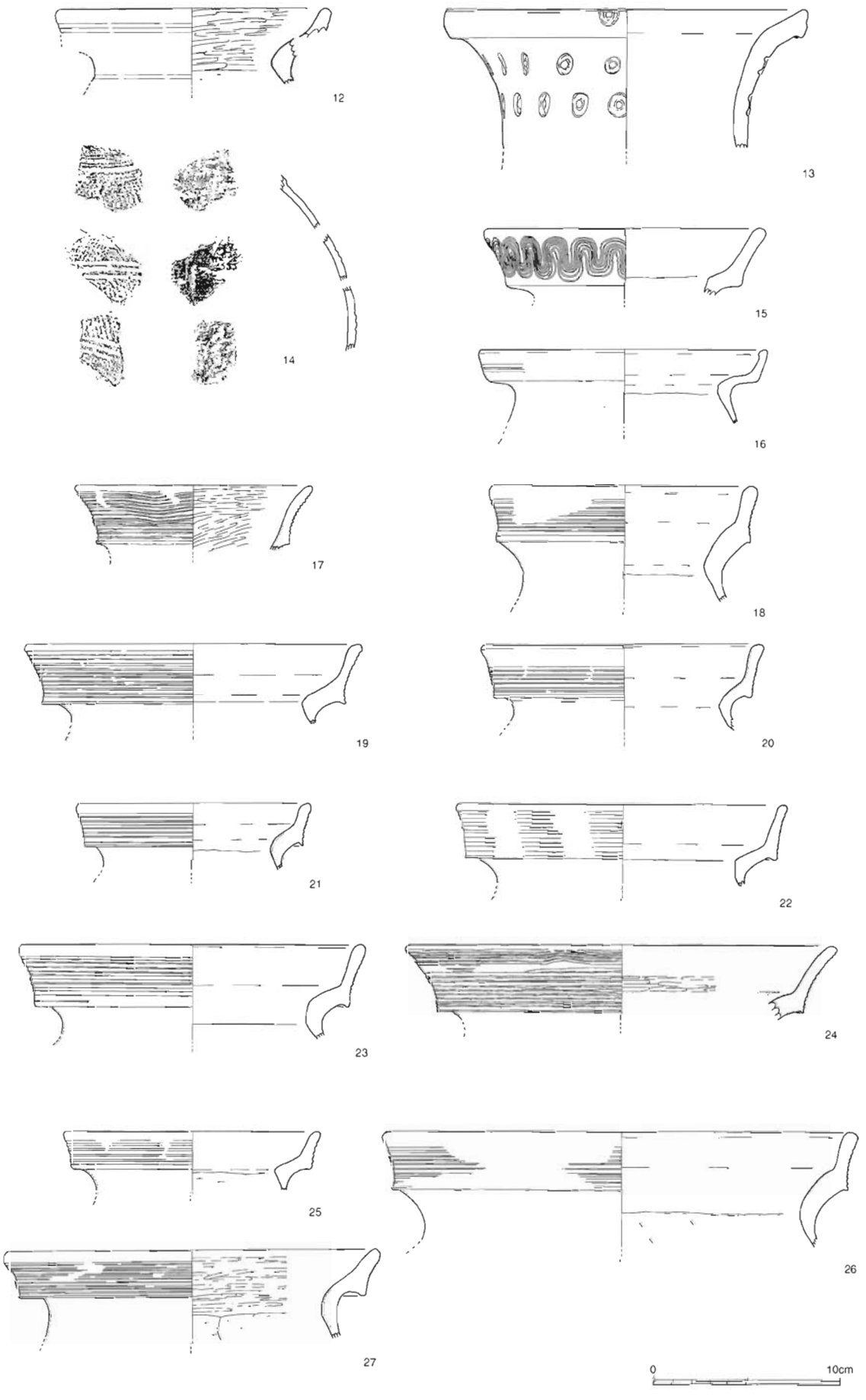
５０は、高坏と考えられるものである。筒部外面に縦方向のヘラミガキを施す。内面は磨滅のため調整が見えない。

５１は、高坏形の器台であろうか。口縁部を欠くが、口縁部に向かって極端に薄くなるものである。全面的に磨滅が進んでおり調整は不明である。

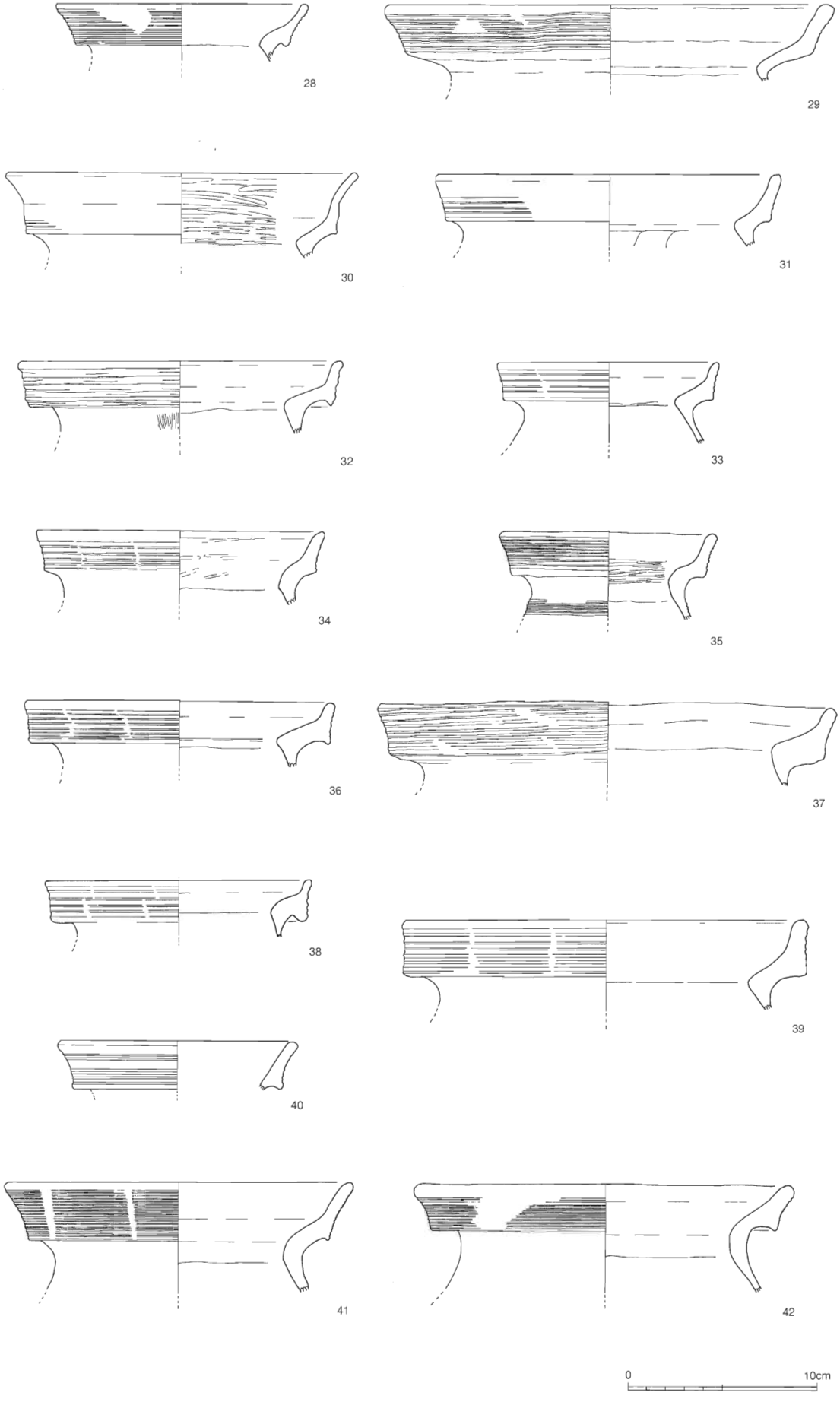
５２～５６は鼓形器台である。この内５２～５４は、谷部においてほとんど完形を保った状態で出土した。５２は小型のもので、口縁部外面と脚端部外面に貝による平行線文を施す。坏部内面はヘラミガキ、脚部内面はヘラケズリである。脚部の円形のスカシは、２方向に施されるものと思われる。５３は、高坏形を呈す大型のものである。口縁部外面と脚端部外面に貝による平行線文を施し、坏部内面はヘラミガキである。脚部内面は磨滅しているが、ナデであろうか。５４の鼓形器台は口縁部外面と脚端部外面の調整の原体が異なる点が特徴的なものである。口縁部外面は櫛による平行線文であるが、脚端部外面の平行線文は貝によるものである。外面調整は、坏部から筒部にかけては、縦方向のヘラミガキしか見えないが、脚端部の拡張部近くには縦方向のハケメが残っており、ハケメの後ヘラミガキが施されたものであろう。坏部内面はヘラミガキと思われるが、磨滅が進



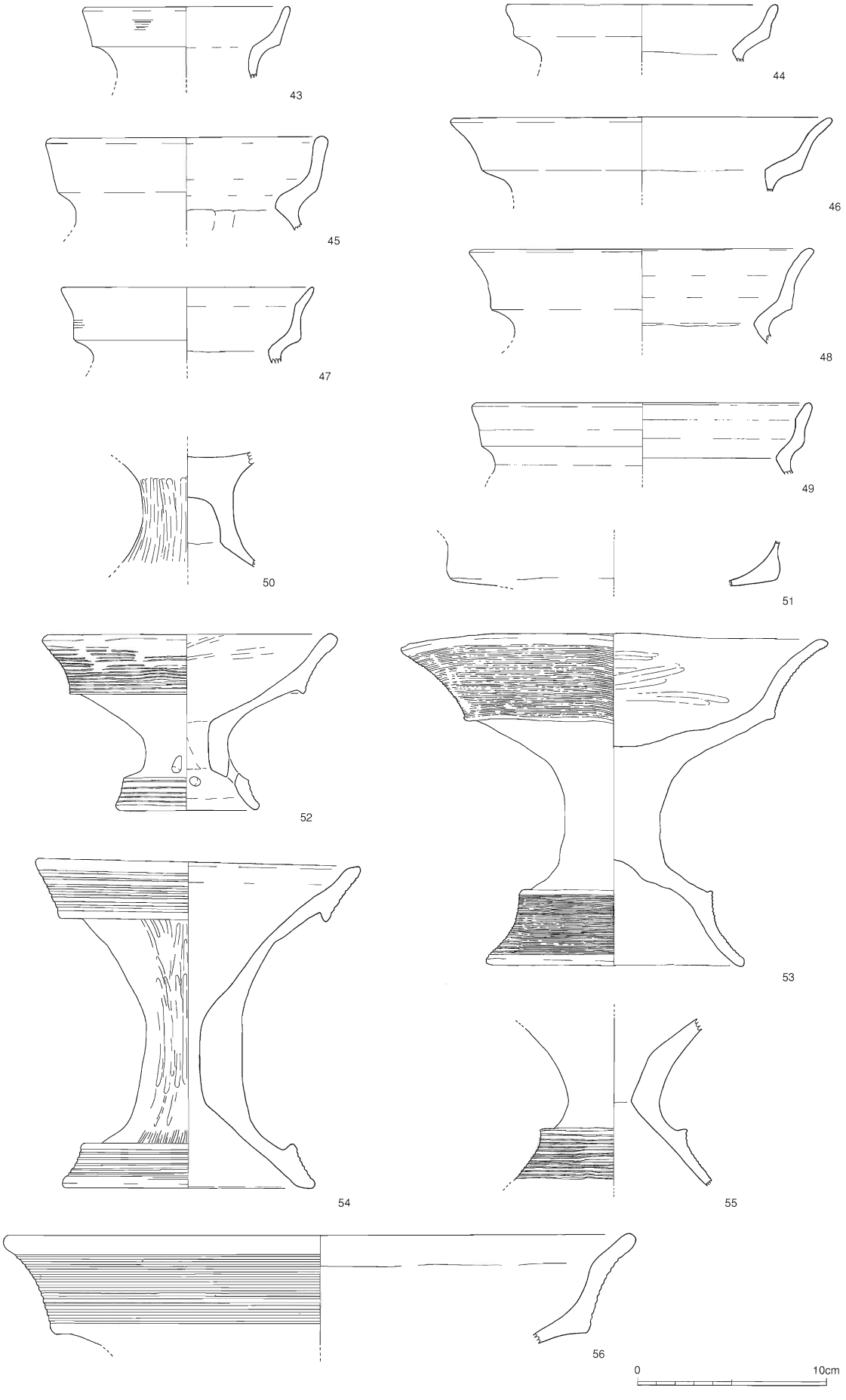
第37図　白石大谷Ⅱ遺跡出土石器実測図（S=2／3）



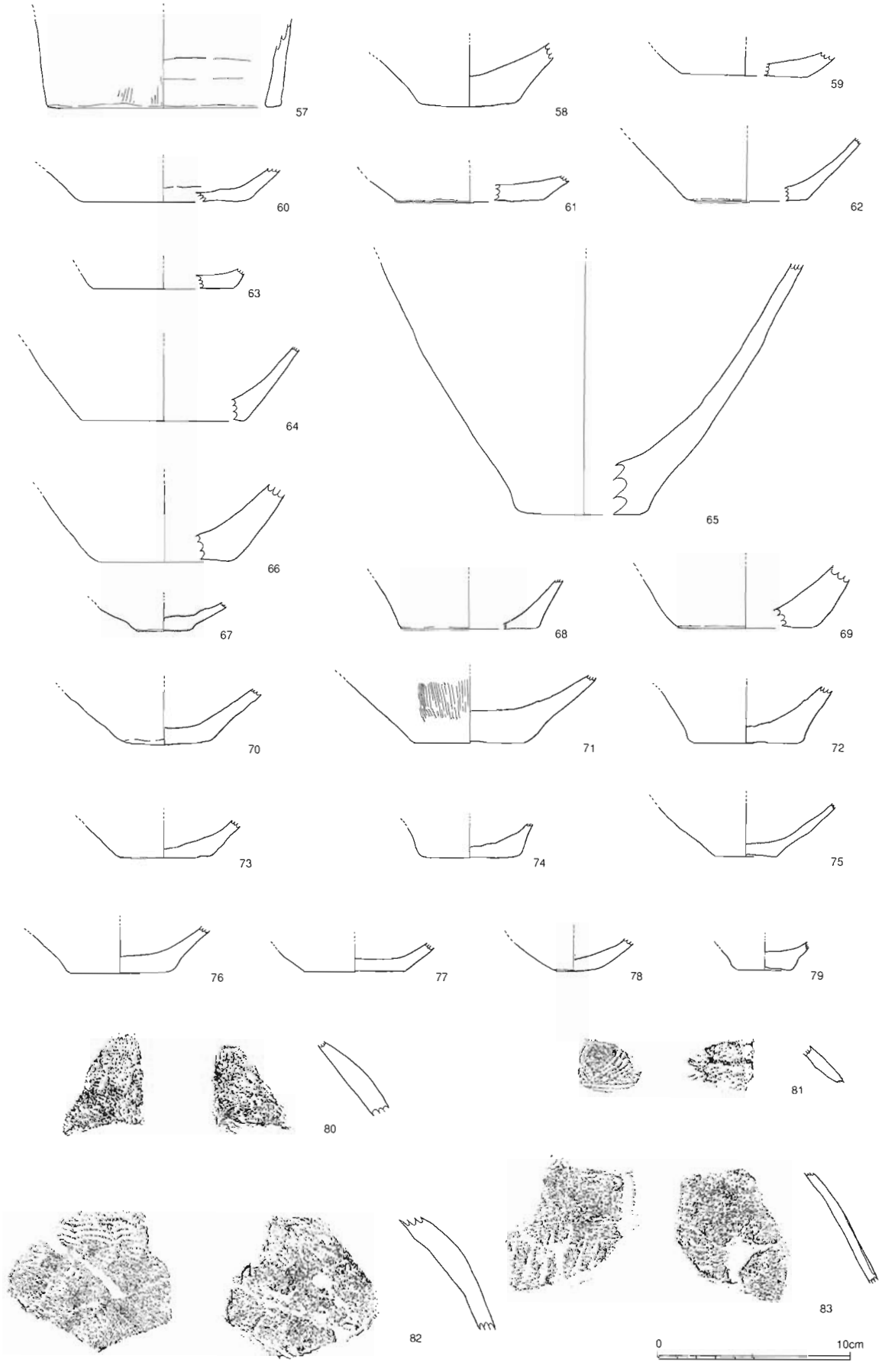
第38図　白石大谷Ⅱ遺跡出土土器実測図（1）（S=1／3）



第39図　白石大谷Ⅱ遺跡出土土器実測図（2）（S=1／3）



第40図　白石大谷Ⅱ遺跡出土土器実測図（3）（S=1／3）



第41図　白石大谷Ⅱ遺跡出土土器実測図（4）（S=1／3）

んでおり、不明である。５５は、筒部の破片である。脚端部外面の平行線文は貝によるものと思われる。５６は、大型の鼓形器台口縁部の破片である。口縁部外面には貝による平行線文が施される。内面は磨滅しているが、わずかにヘラミガキの痕跡を残す。

５７は、器種不明の小片であるが、山陰系甑形土器の狭端部であろうか。端部に明確な面を持ち、直線的な体部が続く。端部内面側がわずかに突出する。外面には縦方向のハケメを残し、内面はヘラケズリである。胎土中に白色の砂粒を多く含んでおり、明褐色を呈している。

５８～７９は底部の破片である。器台の数との関係を考え、小片であっても底部と認識できる２２点全てを図示している。基本的に底面はナデか未調整、外面はナデ、内面はヘラケズリであるが、磨滅が進んでいるものが多く、確認できない個体もある。６５は、底部が極端に厚く造られるものである。５７・５８・６５・７１は、外面に縦方向のハケメが見られる。７５は、外面に指押さえの痕跡が明瞭に残る。

８０～８３は壺の胴部と考えられるものである。８０は胴部外面に櫛状工具による押し引き文を施している。内面調整は横方向のヘラケズリである。８１はヘラによる沈線２条以上を引き、その上方に２枚貝腹縁による刺突を施したものである。内面には横方向の強いケズリが見られる。外面にわずかに黒変が見られる。８２は櫛状工具による波状文を施すものである。内面調整はヘラケズリである。外面が一部黒変しており、甕の可能性もある。８３は板木口による刺突文を施すものである。内面調整はヘラケズリである。

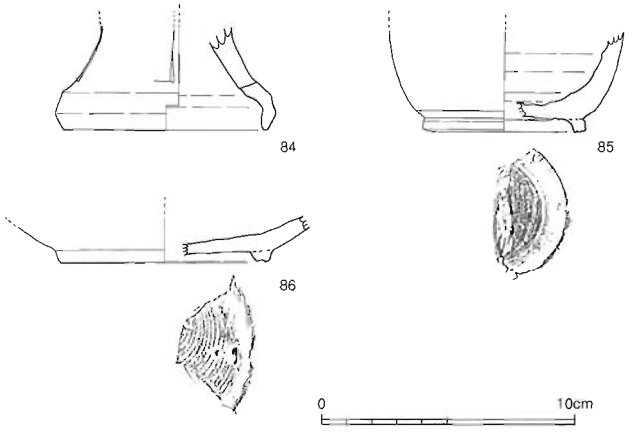
８４～８６は須恵器である。８４は調査開始以前に地元住民よって採取されていたもので出土位置は不明である。高坏の脚部の小片で、スカシが確認できる。シトギ免遺跡出土須恵器（第４７図１）と同一個体と思われるが、接触部分が無く接合できなかった。灰色を呈しており、胎土中に白色の砂粒を含んでいる。

８５は高台付きの壺の底部である。小さな高台が底部と体部の境目に付き、体部は丸みをもって立ち上がる。底部には回転糸切り痕を残し、高台を張り付ける。高台部分には繊維状の圧痕が見られる。体部外面はケズリの後ナデ、内面は回転ナデの非常に強い痕跡を残している。黄灰色を呈し、胎土中に白色の小砂粒を含んでいる。

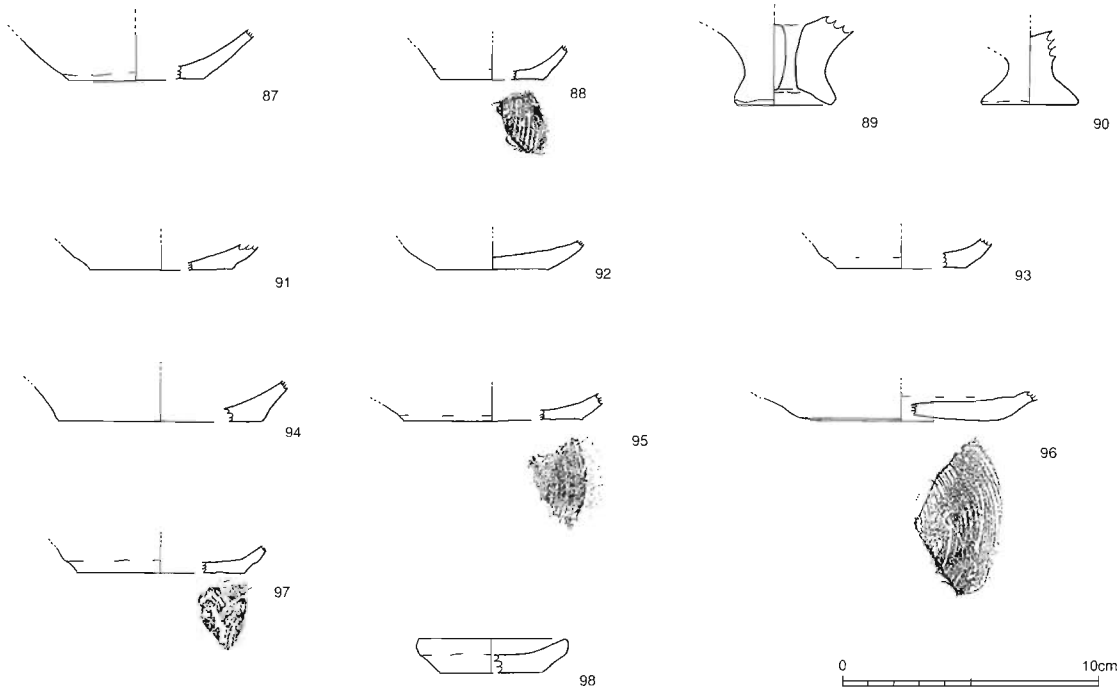
８６は高台付きの皿である。高台は底部と体部の境目に付き、体部は直線的に開く。底部に回転糸切り痕を残し、外面調整は回転ナデ、内面はナデである。灰色を呈し、胎土中に白色の砂粒を含んでいる。

８７～９８は土師器である。ここに示した土師器は、全て中世のものであり、白石大谷Ⅱ遺跡からは古墳時代の土師器は出土していない。

８７・８８は、坏である。８７はトレンチ２から出土しており、加工段３に伴う可能性が高い。底部外面にわずかにアクセントを持ち、体部はわずかに内湾する。全面磨滅しており調整は不明である。８８は小型の坏で、体部が強く立つものである。底



第42図　白石大谷Ⅱ遺跡出土土器実測図(5)(S=1/3)



第43図　白石大谷Ⅱ遺跡出土土器実測図（6）（S=1／3）

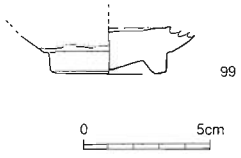
部に回転糸切り痕を残し、体部外面は強い回転ナデである。いずれも胎土中に白色の微砂粒を含んでおり、淡橙色を呈している。

８９・９０は、柱状高台を持つ皿である。８９は、底部中央に焼成前穿孔されるものである。穿孔方向は両面である。底部は指押さえによりわずかに窪む。全面磨滅しており、調整は不明である。９０は、底部に回転糸切り痕を残している。いずれも胎土中に白色の砂粒を含んでおり、８９は淡褐色を、９０は褐色を呈している。

９１～９７は、高台を持たない皿である。口縁部まで残している個体は無い。磨滅しているもの以外全ての個体で、底部に回転糸切り痕が確認できる。底部と体部の境目にわずかにアクセントを持つもの（９１・９３・９４・９５・９７）が多く、アクセントを持たない９２・９６は、底部がわずかに窪むようである。９７は、指ナデによる非常に強いアクセントを持ち、回転糸切り痕の上に繊維状の圧痕が残っている。いずれも胎土中に白色の砂粒を含んでおり、明褐色から桃褐色を呈している。

９８は、小型の皿で、復元口径は５７㎜にしかならない。９１～９７とは明らかに異なる形態を呈しており、底部は厚く作られ、体部は極端に短く、口縁部外面にわずかに面を持つ。胎土や焼成も異なっており、胎土中に赤色の砂粒を含み、明橙色を呈している。

９９は、青磁の底部である。断面台形の高台を削り出す。底部と高台の部分には、釉がかかっていない。体部の釉は、比較的薄く、深い緑灰色で、貫入が見られる。胎土は明灰色を呈しており、黒色の微砂粒がわずかに含まれる。文様は見られない。調査区東側の表土掘削中に出土したもので、原位置は不明である。高台の形状や底部のケズリから、同安窯系の碗であろうか。１２～１３世紀頃のものとすると、加工段１・３や、他の土師器類の年代に矛盾しない。



第44図　白石大谷Ⅱ遺跡
出土磁器実測図（S=1／3）

第４節　小結

第１項　弥生時代後期の白石大谷Ⅱ遺跡について

白石大谷Ⅱ遺跡で出土する遺物の大半が弥生土器であり、その出土は調査区西側の谷部に集中している。調査区西側谷部から出土する遺物の年代は、おおむね草田編年[註1]の２～３期に該当し、大きく外れるものは見られない。

加工段２から出土した鼓形器台は、拡張部が比較的短く、筒部が長いことから、草田２期と思われるが、拡張部の平行線文が全く見られないことから草田３期に含まれる特徴も有している。加工段２からは、他に時期判断可能な遺物が出土していないことから、その時期は、およそ草田２～３期としておく。

西側谷部から出土する鼓形器台には、筒部が長く、拡張部が短く、拡張部に平行線文を施す特徴が共通してみられる。また、高坏形の器台が含まれていることからも草田２期のものと言うことができる。ただ、５４には、口縁側の拡張部と脚部側の拡張部で平行線文の原体が異なると言う過渡期的現象が見られる他、甕には、２４・３０など拡張部が比較的長いものや、４４～４９など拡張部が無文のものも見られ、草田３期に含まれる特徴を持つものも多く見られる。

西側谷部出土遺物には、ほぼ完形を呈する鼓形器台の出土が目立った。谷部には明確な遺構が見られないことから、その上方から転落してきたことが考えられるが、付近は急斜面となっており、その更に上方の尾根上はシトギ免遺跡[註2]として発掘調査が行われている。シトギ免遺跡は、古墳時代の方墳であり、また、シトギ免遺跡での他の出土遺物にも古墳時代を遡るものは見られなかった。こうしたことから、尾根上か斜面に弥生墳墓か集落が存在し、シトギ免古墳の構築か、周辺の地滑りによって白石大谷Ⅱ遺跡に転落してきたものと思われる。

第２項　中世の白石大谷Ⅱ遺跡について

加工段１・３は床面や柱穴出土遺物から中世の遺構と断定した。また、白石大谷Ⅱ遺跡では、少量ではあるが、遺構に伴わない中世の遺物を検出している。

加工段３から出土した土器には、高さの低い柱状高台の皿３・４が含まれている。脚端部外面にわずかに面を持つ特徴から中竹矢遺跡Ⅳ区出土土器[註3]などに近い時期と思われる。また、高台付き坏２は、高く開いた高台に緩やかに内湾する体部を持っており、同様の時期のものであろう。中竹矢遺跡Ⅳ区は１２世紀代[註4]と考えられている。

加工段１から出土した土器には、口径に対し底径がやや大きくなる杯５・８が見られ、口縁部の形態など黒田畝遺跡[註5]や天満谷遺跡遺構外出土[註6]のものに近い。よって、１３世紀代の年代が考えられる。

遺構に伴わない土師器の内、皿９１～９７には、体部の極端に短いものはなく、中竹矢遺跡Ⅳ区・天満谷遺跡出土のものに近い。坏の器形にも矛盾が見られないことから、１２世紀代のものと考えられる。なお、皿９８については、焼成や形態が大きく異なり、近世のものと思われる。

加工段３のＰ２は、３点の土師器が伏せた状態で埋め込まれたようになっていた。同様のものは江津市古八幡付近遺跡[註7]で見られ、中世前半の家屋の撤去に関係する風習の存在が考えられる。

以上のことから、白石大谷Ⅱ遺跡で検出された中世の建物跡と考えられる加工段は、１２～１３世紀のものと思われ、遺構に伴わない土師器・青磁についても、その時期幅に収まると思われる。

近年、中世の遺跡の調査が急増しており、土器編年が公表されるまでに資料が増加している。ただ、それらの遺跡の多くは、墓か居館と考えられるもので、多数の貿易陶磁を伴っているのが一般的であった。白石大谷Ⅱ遺跡の中世の建物跡は、貿易陶磁を伴っておらず、遺跡全体でもわずか１点の青磁片しか採取できなかった。遺構も傾斜地の小規模な建物跡であり、少なくとも居館とは思えない。同時期の遺跡で貿易陶磁をほとんど持たない遺跡としては、漁村と推定されている出雲市の上長浜貝塚が知られているが、白石大谷Ⅱ遺跡と合わせ、中世の一般集落の様相を明らかにすることによって、中世社会全体の様相を復元できる一助になると思われる。

註１　赤澤秀則　『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５』 鹿島町教育委員会　１９９２年

註２　本報告書５７ページ。

註３　『一般国道９号松江道路建設予定地内発掘調査報告書Ⅹ』　島根県教育委員会　１９９２年

註４　広江耕史　「島根県における中世土器について」
『松江考古第８号』　松江考古学談話会　１９９２年

註５　『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　島根県教育委員会　１９８４年

註６　『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
島根県教育委員会　１９８７年

註７　『嘉久志遺跡・飯田Ｃ遺跡・古八幡付近遺跡』　島根県教育委員会　１９９７年
古八幡付近遺跡では、土器を伏せた状態ではなく、上向きに据え置かれた状態で検出されている。

註８　八峠興　「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究ⅩⅢ』

註９　加工段３に見られるような建物の貧弱さや、火の使用の痕跡が見られないことなどから居館に伴う倉庫のようなものであった可能性は否定できない。

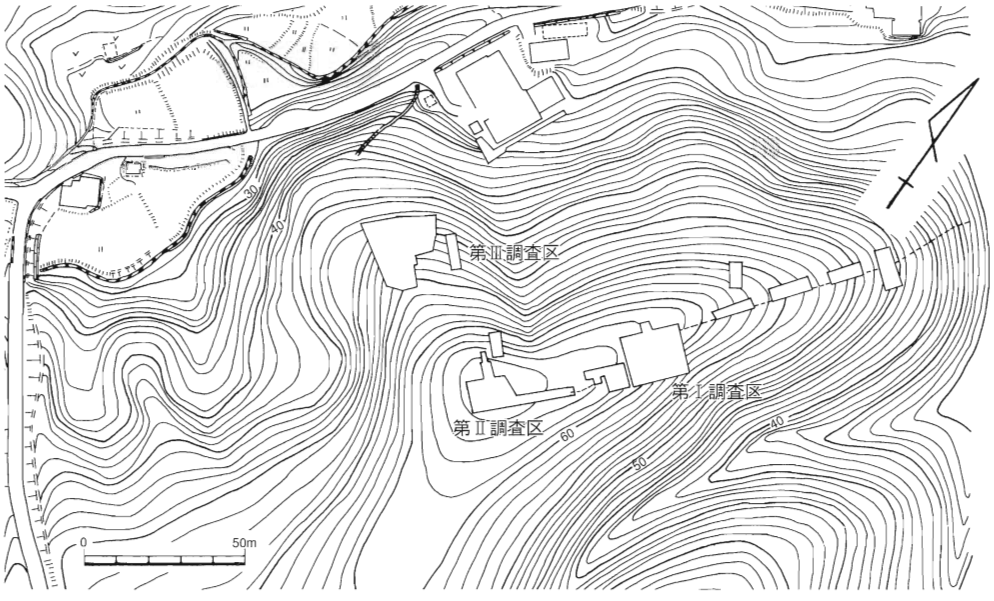
第５章　シトギ免遺跡

第１節　調査の概要と経過

シトギ免遺跡は宍道町白石３５２３－８番地他に所在する。ここは同道川によって形成された南北に伸びる狭長な谷の西側に突き出た標高６０ｍあまりの尾根及びその斜面に当たるところである。尾根先端の対岸には『出雲風土記』意宇郡宍道郷の条に記載されている猪岩、犬岩の伝承に係る石宮神社をはじめ、石棺石室を内部主体に持ち玄門に閂状の陽刻を有する伊賀見１号古墳、下の空古墳がある。一方、シトギ免遺跡が存在している谷の西側には全長３６ｍを計る前方後円墳を中心とした椎山古墳群や、横見古墳群、石棺石室を有する萩古墳などが知られている。これらの古墳はいずれも古墳時代中期～後期のもので、この地域は、平地が少ないにも関わらず多数の古墳が存在しており、注目される。

当遺跡は、平成６年３月の分布調査でその存在が確認され、古墳及び住居跡の存在が推測されていたところで、平成８年６月１０日～３０日にかけて試掘調査を実施した。この調査は、おおよそ２ｍ×１０ｍのトレンチを１０本あまり設置して行った。その結果、尾根上のトレンチから尾根と直行するかたちで溝状遺構を検出したが、当初住居跡があると思われていた尾根先端部では遺構、遺物とも発見できなかった。本調査は、古墳等の遺構が存在している可能性が高くなった尾根の高い部分に２つの調査区を設けて行うこととした。なお本調査実施中に、北側斜面を貫いていた材木運搬用の重機道から、平安時代の壺の破片を２個体分採集したため、発見場所の上方斜面に新たに調査区を設置した。

本調査は８月１８日～９月２４日にかけて実施したが、第Ⅰ調査区の尾根上から一辺８ｍあまりの小規模な古墳１基を検出したに留まった。この古墳は、墳丘及び主体部が削り取られて周溝の一部しか残っていなかったもので、遺物は古式須恵器の有蓋高坏１点が散乱した状態で見つかった。なお、古墳の存在を推定していた第Ⅱ調査区と、中世の遺構の存在を想定していた第Ⅲ調査区からは、何も検出できなかった。



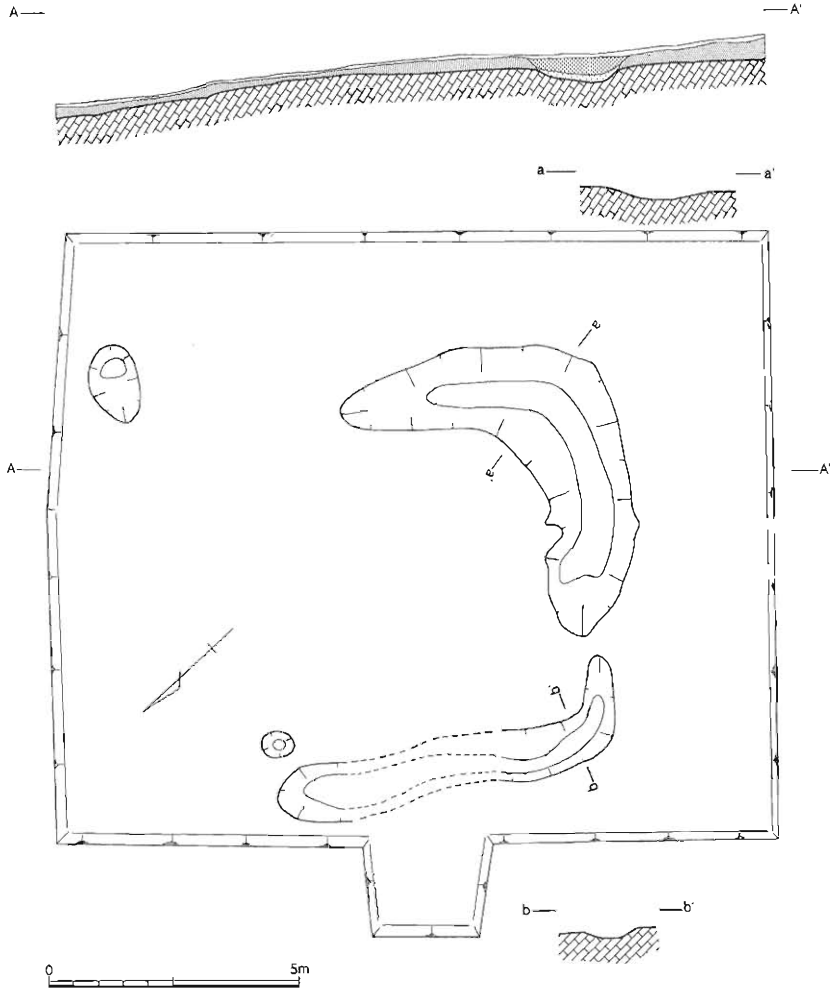
第45図　シトギ免遺跡地形測量図（調査前）及び調査区配置図

第２節　検出した古墳

第Ⅰ調査区で検出した古墳は、墳丘及び主体部がすでに削平されて消滅していたが、周溝の一部が残存していたことから、辛じて古墳と断定したものである。溝は、尾根の高い位置にあたる南側を起点にして、東西方向に分かれて２箇所残存していた。東側の溝は外法で東西方向５.５ｍ、南北方向４.８ｍあまりを測る「L」字状の平面形を持ち、コーナーのあたりが最も幅が広く、深さも深い。この部分は幅２.２ｍ、深さ０.５ｍを測り、溝の先端に行くに従って、細くなるとともに浅くなっていく。また、溝は地山である赤褐色礫混入層を掘り込んでおり、底は「U」字状を呈した浅い丸底で、溝の中には濃茶褐色土が詰まっていた。西側の溝は長さ６.７ｍ、幅１.２ｍあまりの細長いもので、南端は屈折して東側に約１.７ｍ伸び、東側の溝と接している。二つの溝に挟まれた墳丘部分は、約６度の勾配で北方向に傾斜しており、完全に削りとられていた。

出土遺物は、周溝内及び墳丘が存在してたと思われる場所から、須恵器片３点を散乱した状態で検出した。これらの土器片は、後の整理段階で一つの有蓋高坏であることが分かった。この古墳は、残存していた溝から推測して、一辺８ｍあまりのマウンドの低い小規模な方墳であったものと思われ、埋葬施設は不明である。

なお、このような小規模な方墳は単独で築かれることが少ないため、尾根の南側に第Ⅱ調査区を設けて精査したが、古墳らしい遺構は検出できなかった。

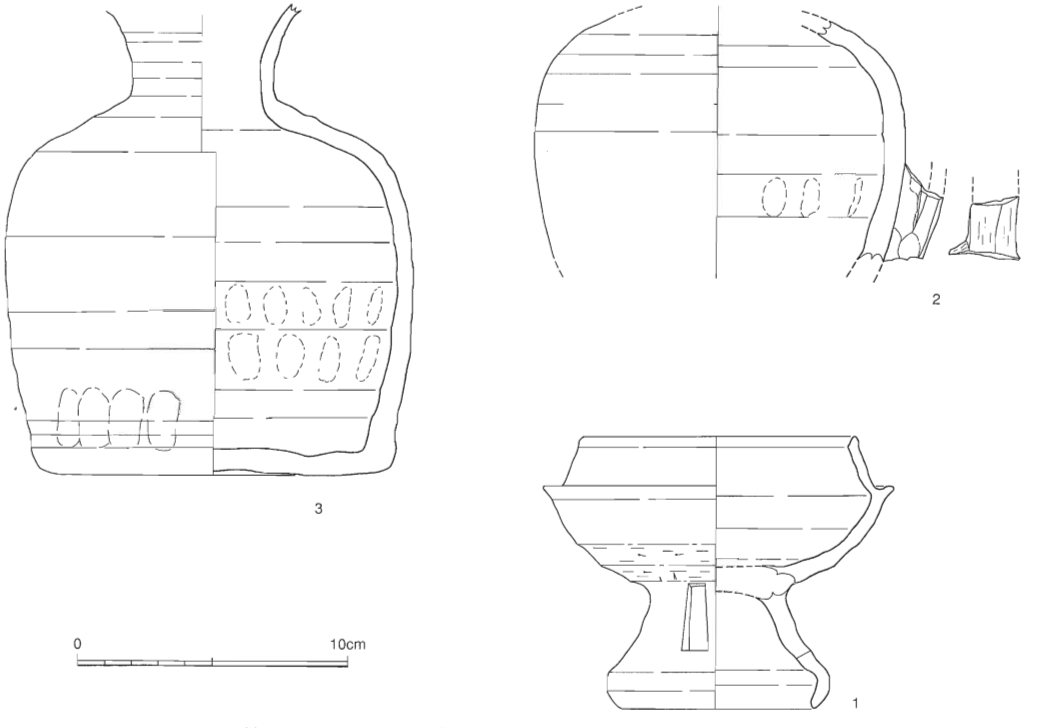


第46図　シトギ免古墳実測図

第３節　出土遺物

古墳から出土した有蓋高坏は、器高１０.１㎝、口径１０.０㎝を測る低脚付高坏で、色調はやや濃い灰色をした外面と淡い灰色を呈した内面を持つ。胎土は石英、長石を含むが良好で、全体的に焼上がりのいい須恵器である。立上りは、高さ１.９㎝を計り、内側に約２１°傾いて上方に伸び、口唇部付近でやや外反して端部にいたっている。口縁部内側には幅０.４㎝にわたって外傾した段があるが、この段は古式須恵器の定形化した段階ものと比べ、やや退化した形態である。立上りの断面を見てみると、段の部分まではやや丸みを持った三角形を呈し、段部分の厚みを保ちながら下方に下がり、受け部あたりで厚みがもっとも薄くなる。受け部は幅０.７㎝あまりで、立上りに接して幅０.３㎝、深さ０.１㎝の凹みが廻り、端部はほぼ水平に伸びて体部にいたっている。体部はやや内湾した器形を持つが、受部近くで軽く外反して端部に接し、下半部には幅広の回転ケズリが施されている。この回転削りは砂の動きから逆時計まわりの回転によって削られていることが分かった。脚部は高さ４.５㎝、底部径７.０㎝、脚基部径５.０㎝を計り、長台形と思われる透しが三方に開けられていたものと推測される。脚端部は高さ１.５㎝にわたって内湾しているもので、段は存在していないが、軽い稜線が通ったやや退化した形態を持っているものである。

第Ⅲ調査区付近で表採した須恵質の壺２点は、いずれも破片を接合して壺と分かったものである。２の土器は肩部以上及び胴部下方の形態が不明な壺で、胴部最大径１３.６㎝あまりを測り、胴部に耳が付くものである。この耳は下半部の一部しか残っていないため大きさは不明であるが、幅１.７㎝、厚み０.６㎝あまりを測り、もとは胴部から肩部にかけて存在していたものと思われる。耳の表面はヘラ状の工具によって「へ」の字形に形成されており、下半部で胴部から１㎝あまり隔てて耳が付いている。調整は外内面とも横ナデが施されており、内面下半部には指圧痕が残っている。また、この土器はやや白っぽい灰色を呈し，胎土には石英、長石を含み、全体的にやや粗雑な造りとなっている。



第47図　シトギ免遺跡出土遺物実測図

３の壺は口縁部の形態が不明であるが、残存高１７.４㎝を測るやや白っぽい灰色を呈した底広の土器である。頚部の上方は、やや外反して口縁部にいたっており、頚基部の径は５.４㎝あまりで、胴部と比べ細い。頚部の下方は、大きく肩が張出し、胴部はほぼ真っ直ぐ下方におりて底部にいたっている。底部は径１３㎝あまりのべた底となっており厚みを持っている。調整は外内面とも横ナデが施され、下半部には指圧痕が残っている。

第４節　まとめ

シトギ免古墳は、調査の結果周溝の一部しか残っていなかったが、ここでは、出土した土器や周辺の古墳の状況から築造時期及び性格等の位置付けを行ってみたい。

今回の調査で出土した須恵器は、周溝内やかって墳丘が存在していたところから散乱した状態で見つかった低脚付高坏１点である。この高坏は坏部の立上りや口縁部端部の形態それに脚部が低いこと等古式の様相を呈しているが、一方では脚端部に新しい要素である内湾した形態を持っていることから簡単に時期を断定することが難しい状況にある。そのため、ここでは出雲地方における古式須恵器を再検討し、時期を考えてみたい。

出雲地方における須恵器編年は、おおよそ半世紀前に発表された山本編年が最近まで使用されていたが、近年、大谷晃二氏が主に古墳から出土した資料をもとに詳細な検討を加え細分化を行ったことにより新しい研究段階を迎えることとなった。この論文では古式須恵器の編年について充分な検討が行われていないが、山本編年Ⅱ期について新しい見解が発表されているのは注目される。それは、口径が大きくなるめんぐろタイプの須恵器を蓋坏身の口縁部内部に段を持つもの（Ａ２ａ型）と持たないもの（Ａ２ｂ型）に分け、それぞれの型が単独に存在する時期（２Ａ期・２Ｃ期）と共存する時期（２Ｂ期）から三つの時期を設定し、もっとも新しい２Ｃ期を山本編年Ⅲ期の初期に当てている。ところがこの編年は、Ⅰ期とⅡ期との間の器形の変遷にまだ大きな隔たりがあることや、タイプの違う土器が同一場所から出土していること等問題点は多々ある。そこで、新ためてⅡ期の須恵器を見直してみると、大谷編年のＡ２ａ型とＡ２ｂ型が古墳の主体部等から一括資料として出土していることから両形式の間には時間的な差があまりないこと、横穴式石室等の後期古墳から出土した須恵器にはＡ２ｂ型はあるがＡ２ａ型の蓋坏の身が出てきていないこと等から考えて、Ⅱ期の古い段階のものが抜けているものと思われ、古式の形態が６世紀前半まで残る可能性が高いものと推測される。そこで、ここでは一応、山本編年Ⅱ期の須恵器は、蓋坏の身の口縁部内部に段を持つ段階までの後期古墳出現以前に位置付け、この段階までを古式須恵器として取り扱うこととする。

これらのことを踏まえ出雲の古式須恵器の編年を見てみると、松江市の石台遺跡や天敷遺跡から出土している定形化以前の器形と、珍崎遺跡等から出ている朝鮮半島からもたらされた陶質土器がもっとも古く位置付けられ、それに続く定形化した時期として薬師山古墳、金崎古墳のものがある。この時期になると安来市門生山根窯跡のように地方窯が出現し、出雲全体に須恵器が普及しはじめるようなる。そして、定形化した器形がやや退化しはじめると窯跡が拡散し、安来市門生大畑や松江市大井で須恵器の生産が開始されるようになる。この時期の古墳である古曽志大谷１号墳から出土した須恵器は器形から二つの時期に分けられているが、新しい段階のものは高坏の脚端部に凸線や凹線が見られなくなり、甕は口径が体部最大径より大きくなり、頚部も伸びる傾向が出てくる。このような形態の変化は、定形化した古式須恵器のきまりの枠を越えた形態の変遷と考えられるので、この段階をもってⅡ期にすることが妥当である。この時期の須恵器をⅡ期の古い段階とし、大

谷編年のⅡA期である荒神谷7号墳出土等のものを新しい段階のものと位置付けたい。

シトギ免古墳から出土した高坏は、脚端部に凸線や凹線が見られず古曽志大谷1号墳の新しい段階のものと似た形態を持っていることから、Ⅱ期の古い時期に該当するものと思われ、6世紀前半の古い方に位置付けられる。この土器はあまり明らかになっていない5世紀～6世紀の須恵器変遷を考える上で重要な資料といえる。

次にシトギ免古墳の主体部等について検討してみたい。主体部は破壊されて痕跡を残していなかったが、石棺や石室の材料となる石材が見つかっていないことや、墳丘の高さが低く小規模であったことから推察して、土壙になる可能性が高い。また、墳形及び規模については、残存していた溝がほぼ「コ」の字形を呈していいることから、一辺8m前後、高さ1.5mあまりの、いわゆる座布団古墳とよばれるマウンドの低い小規模な方墳であったものと思われる。なお、この古墳から須恵器が1点しか検出されなかったのは、破壊を受けていることに起因しているとも考えられるが、古墳から出土する6世紀前半代の須恵器は、造り出し部を除いて個体数が少ないのが一般的であるので、もともと副葬品は少なかったものと推測される。

最後に宍道町内における古墳の変遷を通してシトギ免古墳の位置や性格について触れておきたい。宍道町内で最も早く古墳が築かれるのは現在国道54号線が通っている宍道川流域である。宍道川西側の丘陵に築かれている上野1号墳は径36mあまりの円墳で、県内最大の粘土槨や埴輪棺を主体部に持つ前期古墳である。そして古墳時代中期になると、宍道川流域の水溜古墳群の他、同道川流域の横見古墳群、来待川流域の横田古墳、来待川東方の松石古墳群が現れるなど、宍道町全体に古墳が造られるようになる。また、比較的大きな規模の古墳と小規模の古墳から構成された水溜古墳群、横見古墳群等の群集墳が築かれるようになり、横見1号墳のように全長20mあまりの規模を持つ前方後方墳が現れる。次の後期になると、横穴墓や石棺式石室を持つ古墳が各地で盛んに築造されるようなり、特に横穴墓は宍道川周辺を中心に多数造られる。そして、この時期になるとシトギ免古墳が存在している同道川流域は、玄門の閉塞石に門状の陽刻を有する伊賀見古墳や下の空古墳など特色のある古墳が造られる他、全景36mの前方後円墳を含む椎山古墳群が現れ、宍道町内の中心的役割を果たす地域になっていく。

このようにシトギ免古墳が存在している同道川流域は、さほど広い平野を持たないにも関わらず主要な後期古墳が集中して存在することは注目される。ともあれ、同道川流域は宍道町の古墳文化を知る上で欠かすことのできない主要なところであり、この地域で横見古墳群とならんで最も古いシトギ免古墳は、規模は小さいながら軽視することのできない重要なもので、宍道町内の古墳文化の変遷を考える上で貴重なものであるといえる。

註1　山本　清　「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』　1960年

註2　大谷晃二　「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』　第11集　1994年

註3　丹羽野裕他　「古曽志遺跡群発掘調査報告」　1989年

註4　宍道町内の古墳については「宍道町埋蔵文化財調査報告」2　1980年を参照した。

第６章　野津原Ⅱ遺跡（東区）

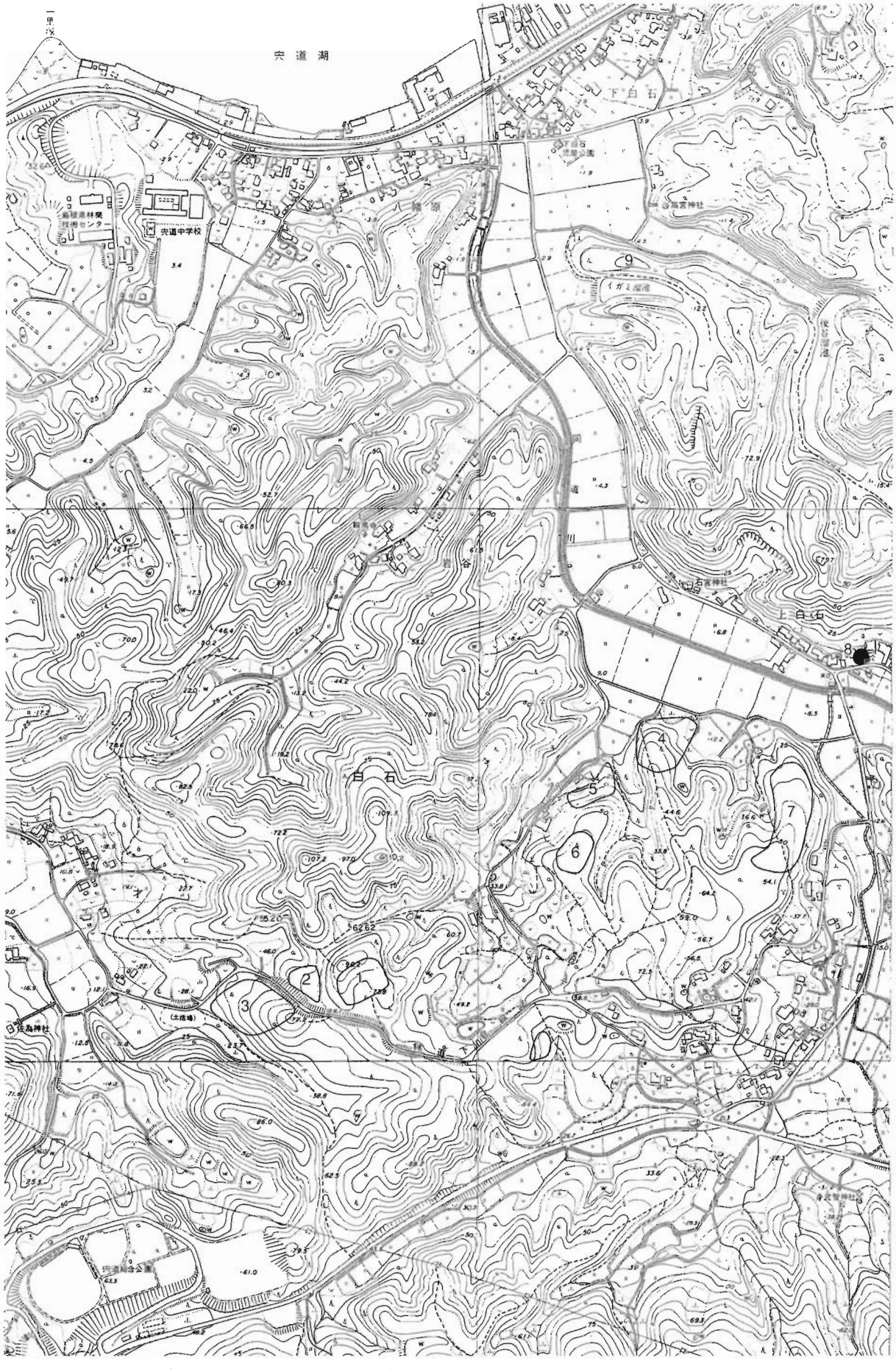
第１節　野津原Ⅱ遺跡の位置と立地

野津原Ⅱ遺跡は島根県八束郡宍道町白石に存する。宍道湖から南側に入る白石の谷と才の谷に挟まれた丘陵上にあり、地区名で言うと下倉地区と才地区の境界付近にあたる。宍道湖からの距離は直線距離でおよそ１.５㎞を測り、遺跡の存する丘陵頂上の標高は約９０ｍと湖岸から近い割には高い丘陵である。丘陵のすぐ北側の谷には白石と才を結ぶ古くからの道が通っている。

野津原Ⅱ遺跡はこの丘陵の頂上からわずかに南に下った緩斜面から西側の斜面にかけて広がっている。さらに西側の丘陵には林道下倉線を隔てて山守免遺跡があるが、本来はこれも含めて一連の遺跡と見るべきだろう。丘陵上からの眺望は良く、東西両側の集落はもちろん、東側は松江市街を、西側は出雲市内までを望むことができる。また近い時期（弥生時代後期後半）の高地性集落が検出された佐々布地区の上野遺跡からも、この野津原Ⅱ遺跡を望むことができる。ちなみに３９個の銅鐸が発見された加茂岩倉遺跡に程近い大黒山も西側の眼前に望まれる。

周辺の遺跡等の詳細は第２章を参照されたいが、近辺の主立った遺跡だけを簡単に紹介したい。野津原Ⅱ遺跡と同じ弥生時代の遺跡は、先に述べた隣接の山守免遺跡の他、東側の谷に面した丘陵上の白石大谷Ⅰ遺跡、白石大谷Ⅱ遺跡で検出されている。弥生時代中期後半から後期にかけての土器が出土しており、丘陵に集落が造られていたことがうかがえる。また白石大谷Ⅰ遺跡には同時期の墓も存在していた可能性が高い。古墳時代前半期の遺跡はすぐ近辺では明瞭ではないが、古墳時代後期になると白石周辺の丘陵は宍道町で最も有力な古墳築造地域となる。横穴式石室を持つ前方後円墳である椎山１号墳、古式の石棺式石室を持つ伊賀見１号墳、切石の精美な石室だったと考えられる下の空古墳がその代表である。また白石大谷Ⅰ遺跡で、製鉄に伴うと考えられる横口式製炭窯が検出されていることも注目される。近辺には須恵器片等が採集される遺跡は数多く知られており、この地域が弥生時代以降、宍道町周辺の中心地域の一つであったことは間違いない。

第48図　野津原Ⅱ遺跡周辺地形測量図（S=1/3000）



第49図　野津原Ⅱ遺跡の位置と周辺の主要な遺跡（S=1/10000）

1…野津原Ⅱ遺跡東区、2…野津原Ⅱ遺跡西区、3…山守免遺跡、4…白石大谷Ⅰ遺跡、
5…白石大谷Ⅱ遺跡、6…シトギ免遺跡、7…椎山古墳群、8…下ノ空古墳、9…伊賀見古墳群

第２節　調査の概要と経過

１．地区割りと調査前の状況

地区割りと調査前の状況　野津原Ⅱ遺跡は、前節で述べたように標高９０ｍの丘陵頂部から南側及び西側に広がる緩斜面にわたる遺跡である。頂上部はわずかながら平坦面が認められ、そこから１０～１５ｍ南側に下がった部分に緩斜面が認められる。また頂上から西側に約２５ｍばかり下がった部分にも緩斜面が認められていた。頂上部から南側斜面にかけては一連の地形と判断されたため、この部分を「東区」とし、西側緩斜面部分を「西区」と称することとした。東区は平成８年度に調査を行い、西区は工事区間と用地上の問題で平成１０年度に調査を行っている。以下、本章で取り扱う東区について記述を進める。

２．調査の経過

分布調査　野津原Ⅱ遺跡は、平成４年度に行った中国横断自動車道尾道－松江線ルート内の分布調査で発見された遺跡である。発見時点では、頂上部に若干の平坦面があり古墳等が存在している可能性が想定されると同時に、頂上の南側と西側に緩やかな斜面が認められ、集落の存在も予想されていた。また西側に続く尾根上にも平坦面が見られたため、同様に古墳や集落跡の存在を想定し、野津原Ⅰ遺跡とした。

トレンチ調査　平成８年には中国横断自動車道尾道－松江線建設予定地内の発掘調査が本格的に始まり、野津原Ⅰ遺跡、野津原Ⅱ遺跡東区は６月から７月にかけてトレンチによる確認調査が行われた。野津原Ⅱ遺跡東区では３１カ所のトレンチが設定され、斜面中腹から須恵器片と弥生土器片が出土したため、集落跡として本調査を行うこととなった。一方、野津原Ⅰ遺跡は遺構等が検出されなかったため、トレンチ調査のみで終了した。

本調査　野津原Ⅱ遺跡東区の本調査は、トレンチ調査に引き続いて平成８年７月２９日から開始した。調査当初は頂上から５ｍばかり下った急斜面中腹から緩斜面にかけての約１４００㎡を調査対象としていた。しかし調査が進むと、南西端付近からは竪穴住居跡（ＳＩ０１）が、北東端付近では加工段（第３加工段）が検出されさらに未調査区に続いていたため、調査区は拡大を続け、最終的な面積は３０００㎡を超えた。また、比較的頂上部に近い南東斜面に竪穴住居跡が検出された（ＳＩ０１）ため、その直上の尾根上にも関連遺構が検出される可能性が考えられ、頂上から南西に下った尾根上も調査を行った。

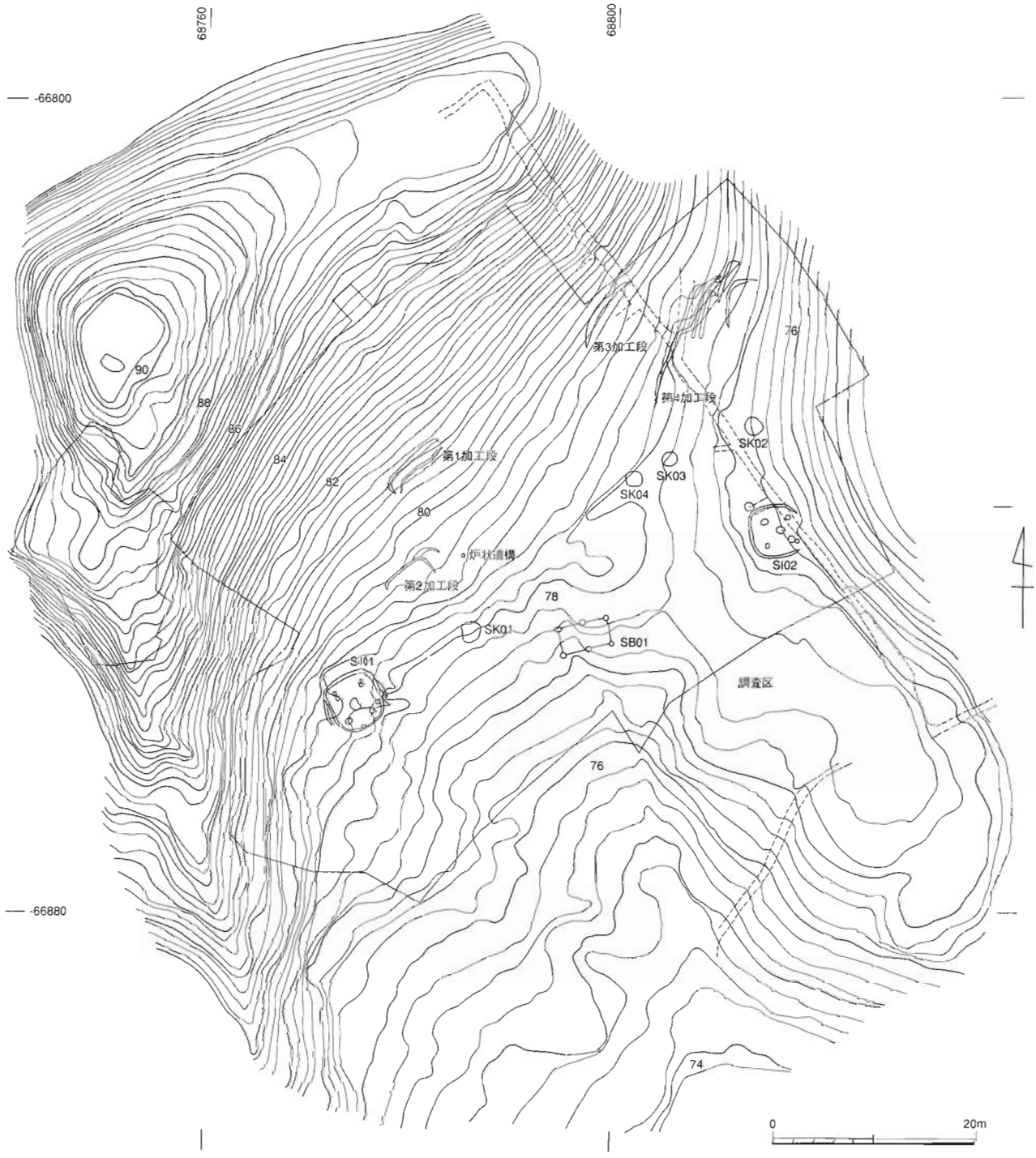
調査は基本的に表土を重機で取り除いた後、人力で掘削・清掃を行って遺構を検出した。遺物の取り上げ、遺構の実測には遺跡調査システム「ＳＩＴＥ」を使用し、打ち出した図面は現地において調査員が校正を行った。調査前、調査後の測量はリモコンヘリコプターによって空中撮影を行い、それをもとに図化を行った。

野津原Ⅱ遺跡　東区と西区の調査年度　なお、野津原Ⅱ遺跡の東区と西区の間で用地取得計画年度の境界線が引かれたため、野津原Ⅱ遺跡は東区と西区で調査年度が異なることとなり、西区は３年後の平成１１年度に発掘調査が行われた。よって西区の報告は、後出の報告書で掲載することとなった。

3．調査の概要と遺構の配置

丘陵の頂上から南東向き斜面にかけて、およそ３０００㎡の調査を行い、弥生時代後期の遺構と縄文時代と推測される落とし穴状遺構を含む土坑群を検出した。

弥生時代後期の遺構は、竪穴住居跡２、掘立柱建物跡１、加工段状遺構６である。竪穴住居跡は調査区西端の急斜面から緩斜面に移行する斜面辺りに１（ＳＩ０１）、緩斜面から南東に伸びる尾根のわずかに東側に下った部分に１（ＳＩ０２）検出された。両者はおよそ４０ｍの距離をおいて



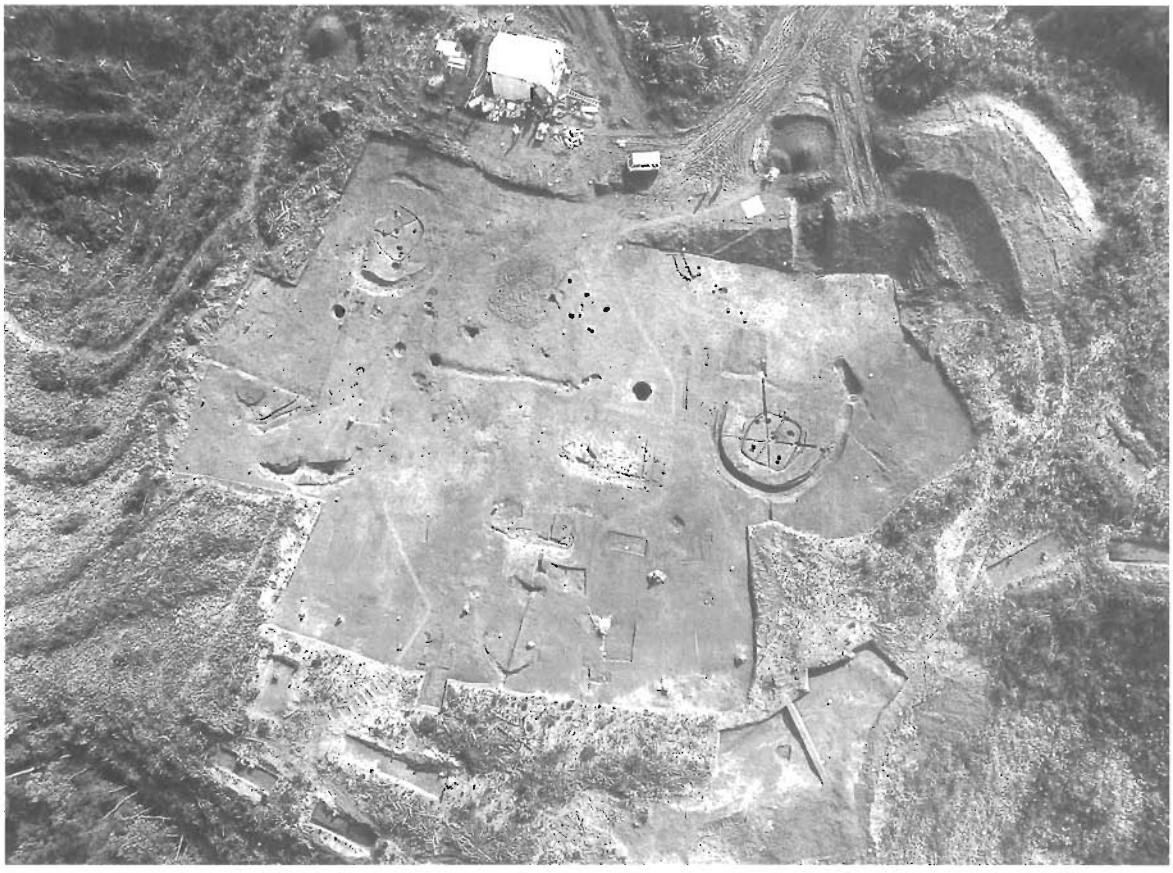
第50図　野津原Ⅱ遺跡東区調査前測量図（S=1/600）

おり、ともに建て替えが認められ、周囲に溝を巡らせている。掘立柱建物跡は、２つの竪穴住居跡のほぼ中間地点にあたる緩斜面で検出され、やはり建て替えが行われているようである。加工段状遺構は、竪穴住居よりも高い位置で検出されており、ＳＩ０１の北側上方に第１，第２加工段、

第51図　野津原Ⅱ遺跡東区調査後測量図、遺構配置図（S=1/400）

ＳＩ０２の北西側上方に第３～第６加工段が検出された。いずれも明瞭な柱穴が検出されず、掘立柱建物のようなしっかりした構造の建物は建っていなかったものと推測される。第２加工段の北東側に隣接して、炉状の遺構が検出されており注目されるが、鉄系の遺物は出土しておらず、何を生産していたものかは不明である。また第４～第６加工段は同時に存在したのではなく、作り替えの結果であろう。第１加工段と第３加工段の間に若干の空閑地があるが、遺物が集中して出土した部分があることから、流出等で検出できなかった何らかの遺構が存在した可能性がある。竪穴住居跡を中心に多くの遺物が出土しており、時期は弥生時代後期後半～後期末頃と考えられえる。

土坑は急斜面から緩斜面に移行した辺りに、４基がほぼ直線上に並んで検出されている。底に小穴が認められるものと認められないものがあり、落とし穴と考えられるものもある。遺構から遺物が出土していないため、時期は不明だが、類例から判断して縄文時代のものだろう。なお縄文時代と考えられる遺物は、草創期の有茎尖頭器や石鏃が出土している。



上空から見た野津原Ⅱ遺跡東区

第３節　調査の結果

野津原Ⅱ遺跡東区では、前節で述べたように弥生時代後期の集落跡、縄文時代と推定される土坑等が検出された。本節では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、加工段状遺構、土坑の順で個別の検出された遺構、遺物について述べていきたい。

１．竪穴住居跡

ＳＩ０１（第５２図・第５３図）

調査区の南西側、標高約７７ｍ～７８ｍの頂上部から約１２ｍほど下った斜面で検出された竪穴住居跡である。尾根から南側に下る急斜面が比較的緩やかになる部分に位置し、地勢的には南北に伸びる二つの尾根に挟まれた谷頭部分にあたる。

斜面に選地していることから、竪穴の少なくとも３方のおよそ1.５～２ｍ外側にかなり規模の規模の大きな溝を巡らせている（外周溝と呼ぶ。）のが特徴である。竪穴は少なくとも１回建て替えを行っている。建て替えは、元の住居の外周を掘削して拡張し、竪穴部分は埋めて床面を形成している。外周溝も竪穴の拡張に対応して掘り替えられている。以下、当初の竪穴住居をＳＩ０１古、建て替えられた竪穴住居をＳＩ０１新、外周溝もそれに対応して古、新と呼び分けて記載する。

ＳＩ０１古（第５２図・第５３図）　主柱穴４本、平面隅丸方形の竪穴住居跡で、規模は床面の壁体溝内側で、４.６ｍ～４.７ｍを測る。竪穴の深さは、少なくとも斜面の上方側（北側）は１ｍ前後は掘り込んだものと考えられるが、斜面下方側（南側）は流出のため掘り込みはほとんど検出できず、わずかに壁体溝を検出できただけである。しかも、斜面下方側（南側）の壁は山の基質となる「地山」ではなく、地山の風化土もしくは流出土と推測される黒灰色斑混じりの淡褐色土を掘り込んでいる（第５３図Ｇ－Ｈ 断面１７層）ことから、本来的にもさほど深い掘り込みとは考えにくく、盛土等で壁が形成されていた可能性もある。

柱穴は直径４０～５５㎝で、柱間は柱穴の中心で測って２.４～２.７ｍ、深さは４５～５５㎝を測る。柱穴内の土層を観察すると、柱痕もしくは柱の抜き取り痕と考えられる土層が見られ、それから見て柱の太さは１５～２０㎝程度と推測される。

中央ピットは床面中心から若干南側にずれた位置で検出された。上端の直径４０㎝前後、下端の直径２０㎝前後、深さは床面から４８㎝で、周囲に直径８０㎝前後の浅い段が巡る。中央ピット内の土層を見ると、底に厚さ２５㎝にわたり多量の炭が混ざった黒褐色土が堆積し、それは南側上方に向かって伸びて、床面に広がる炭が散布する面に続いている。中央ピット内に堆積した炭が掻き出されて、それが床面に広がった状況が推測される。また中央ピットに連接して、幅２０～２５㎝前後の浅い溝が南北２方向に伸びている。溝の底はわずかながら中央から周囲に向かって上がっており、北側（斜面上方側）の溝は壁体溝につながって収束するが、南側（斜面下方側）に向かう溝は壁を切って竪穴の外に出ている。

ＳＩ０１新（第５３図）　ＳＩ０１古を拡張した竪穴住居跡である。北側（斜面上方側）の壁はＳＩ０１古の壁面をそのまま利用しながら、斜面下方側の３方を掘削して拡張している。床面はＳＩ０１古よりも２０～２５㎝高い位置に設けているため、ＳＩ０１古の部分には盛土を行い（第５３図Ｅ－Ｆ断面８層、Ｇ－Ｈ断面１４層）、表面には灰白色や赤褐色の粘土を薄く貼り付けて床面としている（第５３図Ｅ－Ｆ断面６層、Ｇ－Ｈ断面１３層）。

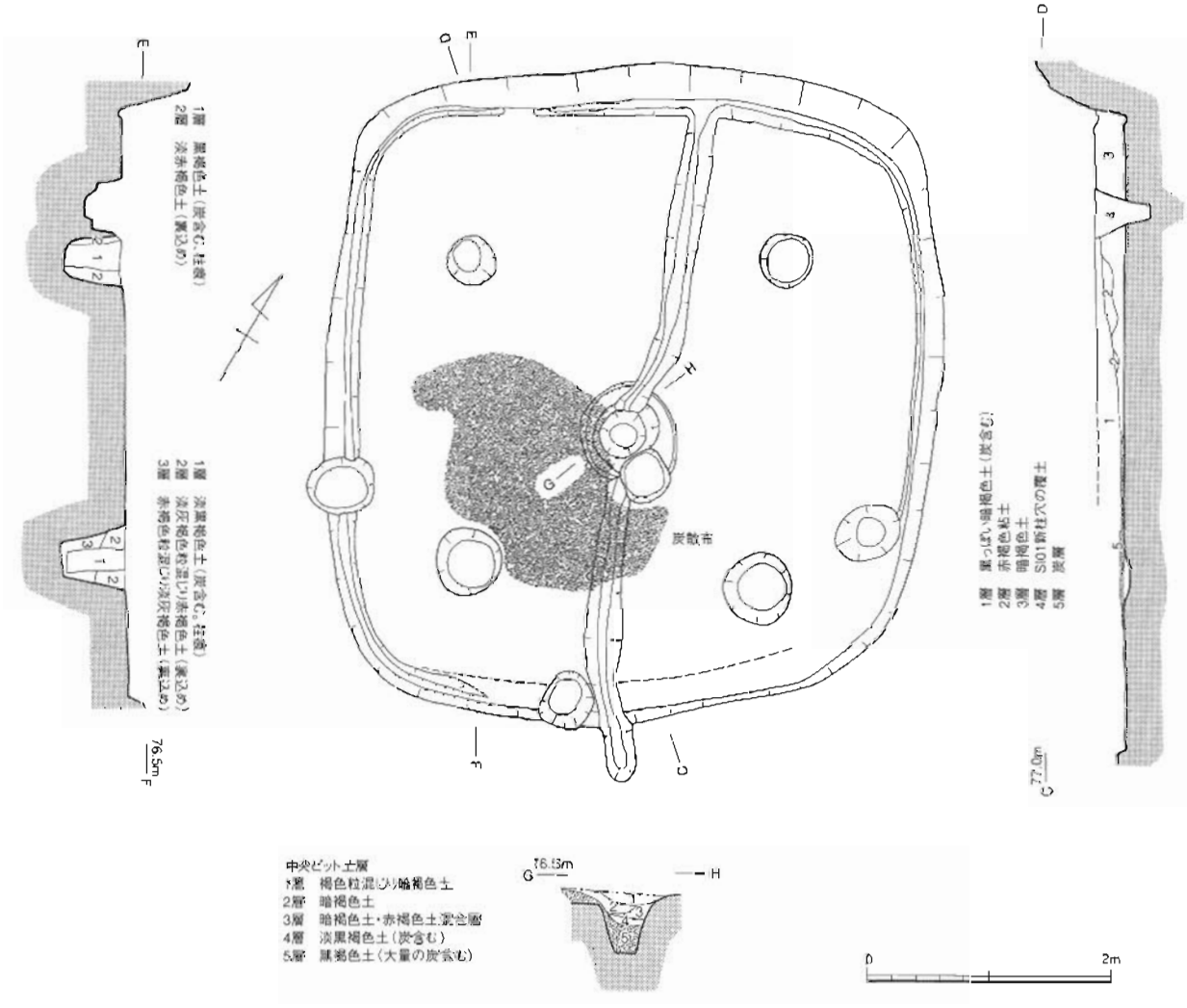
床面が高くなっている分、南側（斜面下方側）は流出しており、全形を知ることはできない。し

かしながら、残存部でかろうじて４カ所の隅の丸いコーナーを確認でき、流出した部分の状況も考え合わせると隅丸五角形の竪穴住居であったと考えられる。壁際には幅１０～１５cm前後の壁体溝が巡り、規模は、床面の最大部分で見積もって５.７m程度と考えられる。

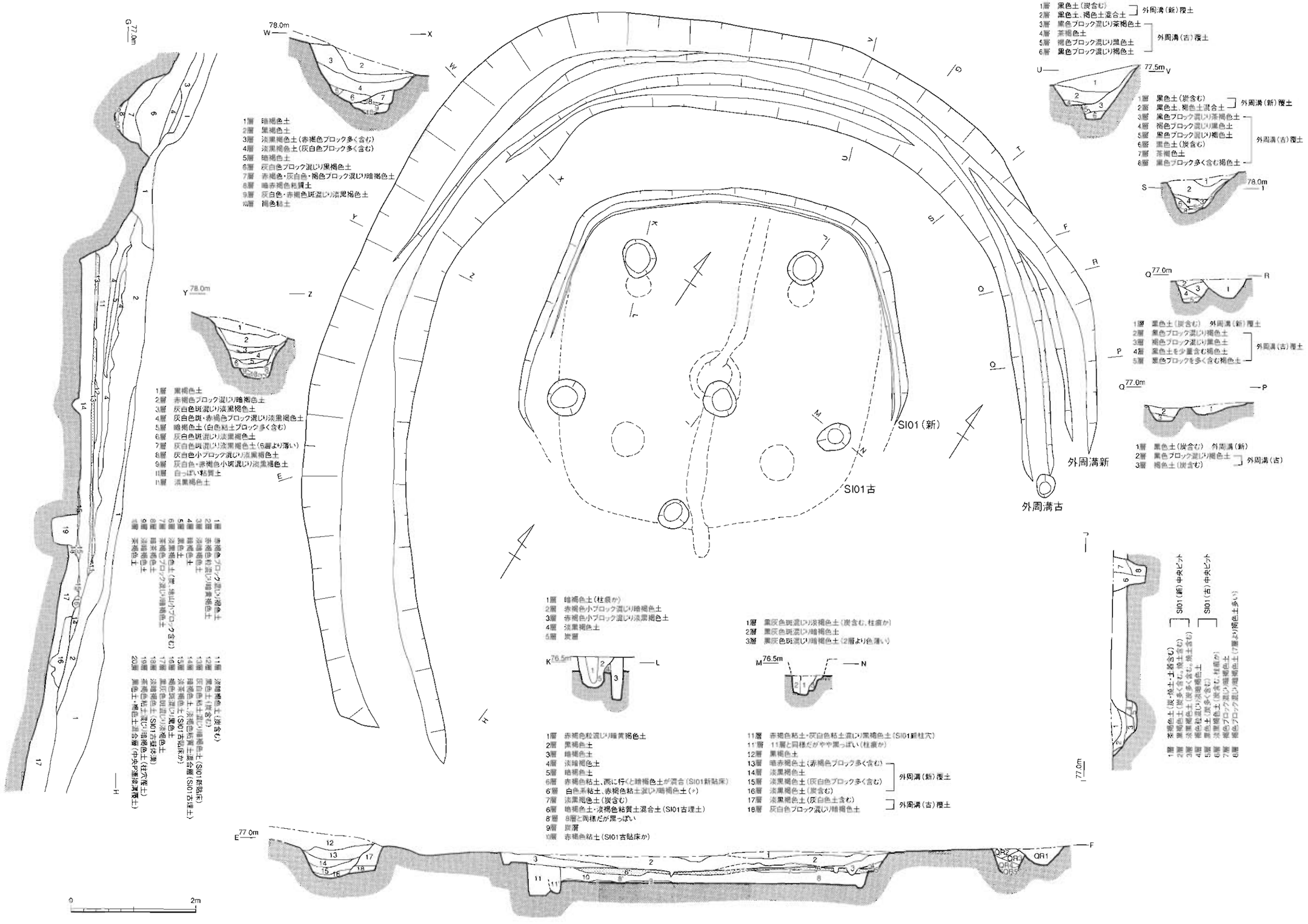
柱穴は各コーナーに対応して５穴検出されている。柱間は２.５～３m、柱穴の直径は上場で４５～６０cmを測る。柱穴の深さはいずれも５０cm前後で、柱痕もしくは柱抜き取り痕が観察でき、柱の直径は１５～２０cm前後と考えられる。中央ピットは中心からやや南寄り辺りで検出された。上端の径５０～６０cm、下端の径３０cm前後、深さは３５cmで、覆土内には炭や焼土が含まれていた。

外周溝（第５３図）　竪穴の北・東・西の三方に、排水用と考えられる溝（外周溝）が巡っている。南側は斜面下方に当たるため、流出してしまった可能性もあるが、西側の溝がかなり南側に伸びて竪穴の南側に折れていく形跡が認められないことから、本来的に三方にのみ溝が掘られたものと考えられる。竪穴住居の建て替えに対応して外周溝も掘り替えられており、竪穴の古新に対応して当初のものを外周溝古、新たに掘り替えられたものを外周溝新と呼ぶ。

外周溝古は、ＳＩ０１古を円弧状に取り巻いており、東西の差し渡し幅が１１m前後となる（西



第52図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ01古実測図（S=1/60）

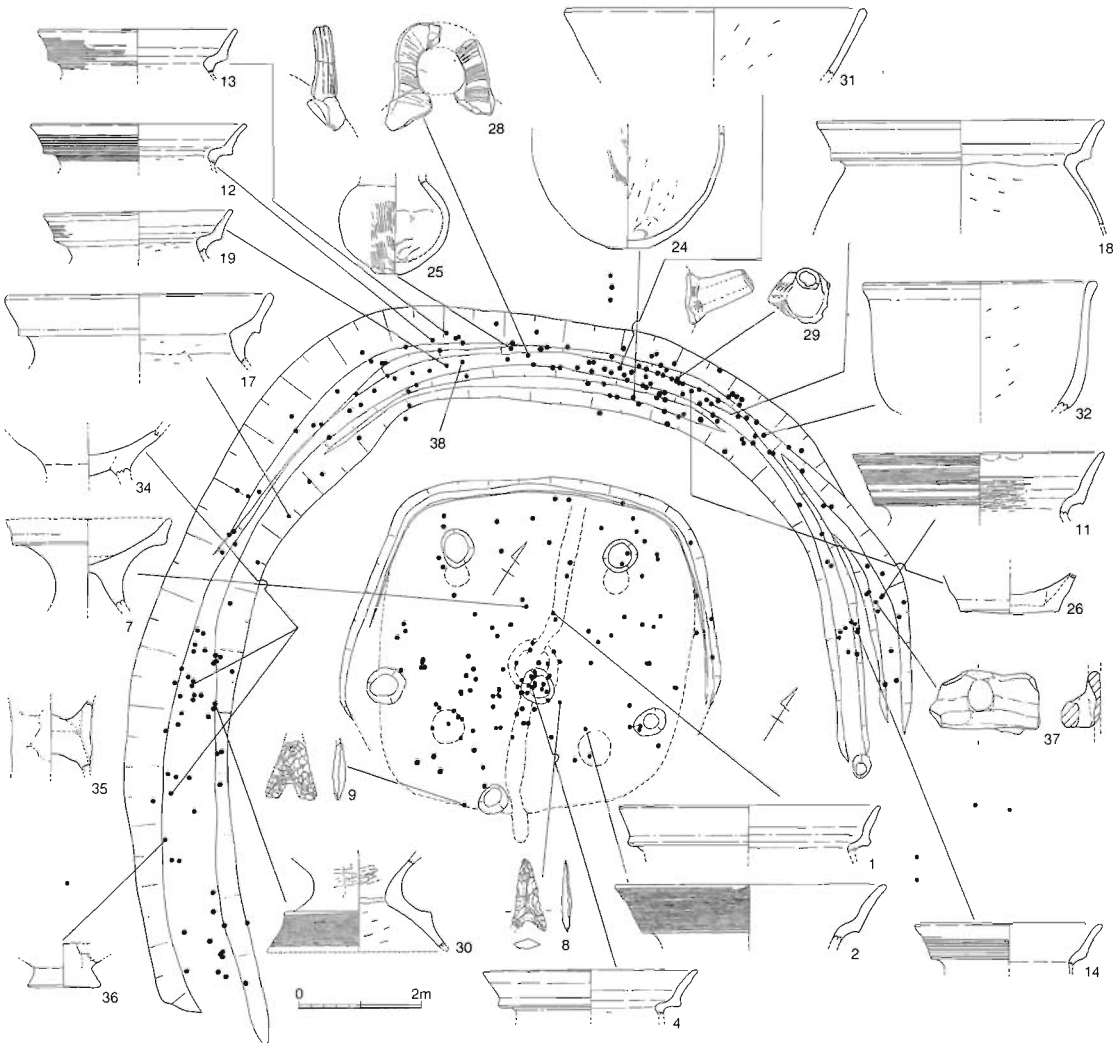


第53図　野津原Ⅱ遺跡東区ＳＩ01実測図①（S=1/60）

側の溝上端を外周溝新が切っているため、正確な数字は不明。)。溝の底は平坦で断面逆台形を呈している。深さは斜面上方側（北側）で１.１ｍとなる部分もあり、同種の溝としてはかなり深くてしっかりとしたものと感じられる。覆土を観察すると、底面からある程度上方にほぼ水平な面が認められることから、少なくとも一回、掘り直しが行われた可能性がある。

外周溝新は、竪穴の拡張に対応して、外周溝古より外側に掘り替えられている。竪穴の拡張と手法は同じで、斜面上方側（北側）の壁はほぼそのまま生かして、東西側を外側に広げており（西側は一条の溝の形でしか検出できていないが、外周溝古・新が一部重なっているのを平面的に検出することができなかったためで、本来は外側に外周溝新が巡る。第５３図Ｅ－Ｆ断面)、差し渡しの幅は１３ｍ近い。また竪穴の床面の上昇に伴い深さも若干浅くなっており、斜面上方側の最も深い部分で０.９５ｍを測る。溝の形状は外周溝古と全く変わらない。

ＳＩ０１遺物出土状況（第５４図）竪穴内及び外周溝の覆土を中心にかなりの遺物が出土している。竪穴内からは小片の形で多く出土し、明確に床面と認識できる遺物で図化できたものはない。ただ第５５図４，５がＳＩ０１古の中央ピットの覆土内から出土しており、竪穴に直接伴う形に近い。石鏃が２点出土しているがいずれも覆土内の出土で、形態を見ても縄文時代のもの可能性が高い。



第54図　野津原Ⅱ遺跡東区SI01遺物出土状況（S=1/120遺物は1/6（石器は1/3））

外周溝からはかなり多くの土器片が出土しているが、概して外周溝新の覆土からの出土が多い。特に外周溝新の底面から頸以上を欠いた小型壺（第５６図２５）や鉢形土器（３３）、コシキ形土器（３７，３８）などが出土し、底面近くから加飾された注口土器（２８，２９）も出土している。これらは概して出土量が多くない類だけに、意図的に置かれたり投棄されたものの可能性があろう。

ＳＩ０１出土遺物（第５５図・５６図）　１～９が竪穴内から出土した遺物である。１～６は甕の口縁部分である。いずれも複合口縁で外湾気味に開き、１，２は外面に擬凹線を施している。１は復元口径２５cmとなるが、小片のため不正確な復元である。口縁端部までほぼ同じ厚みで、外面の擬凹線は浅い。２は複合口縁部が長い個体で、稜はわずかに下方に突出している。擬凹線は細く浅くて、直線的でない。厚みは端部に向かってわずかながら減じている。

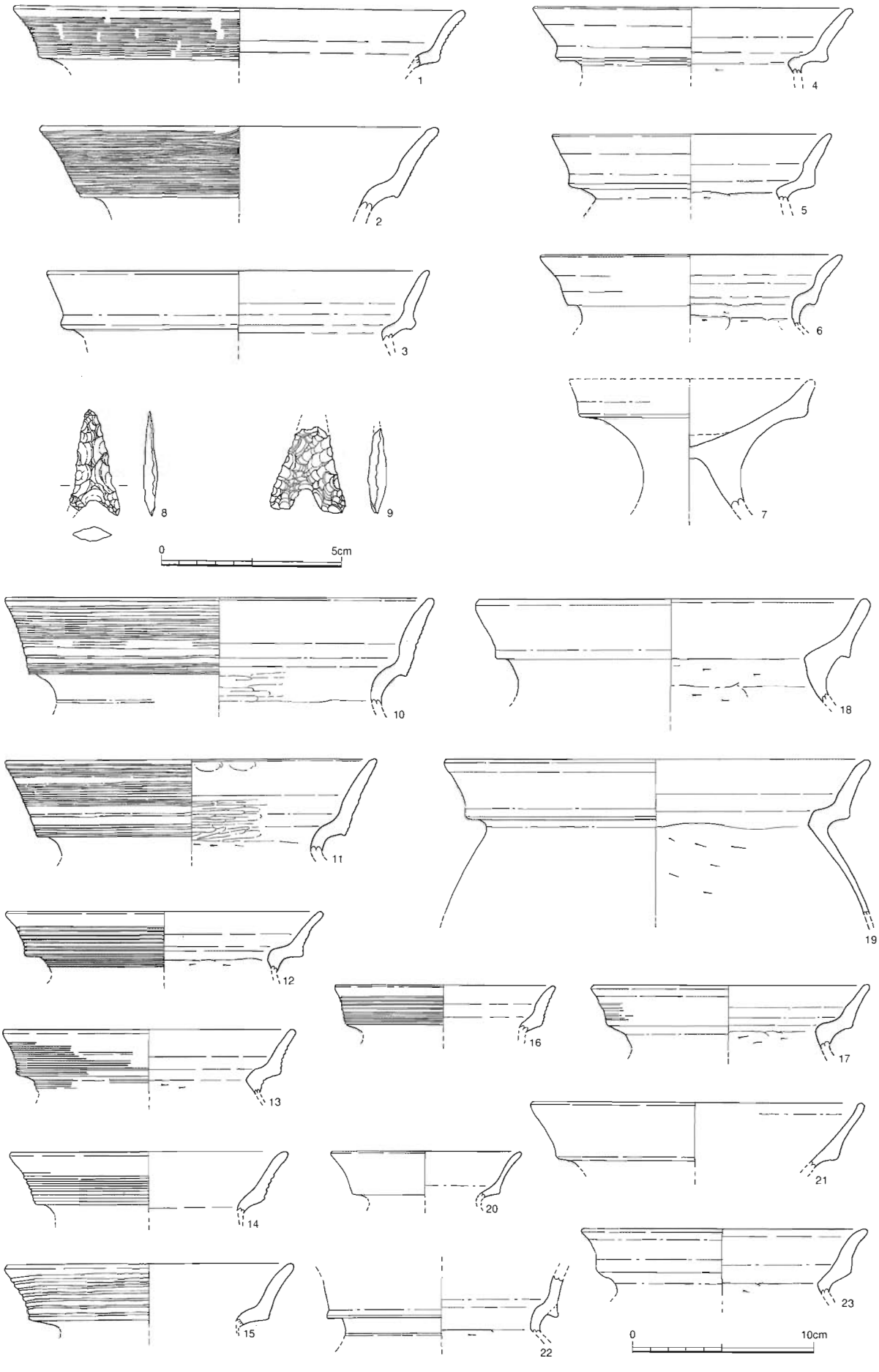
３～６はいずれも擬凹線はなく、口縁端がやや先細りになり口縁部が中途から折れるように外反する特徴を持つ。３は復元口径２１.２cmとなるが、小破片で不正確な復元である。複合口縁部の稜は厚めで外方に突出し、端部はわずかながら外に摘み出すような処理をしている。４は中央ピット内出土だが、３とよく似た特徴を持つ個体で、復元口径１７.６cmを測る。５も中央ピット出土だが、３，４に比べて複合口縁部の稜の突出が不明瞭で、端部に向かっての先細りの感が強い。復元口径１４.５cmでやや小型の個体である。６は複合口縁部の稜が下方につきだし、口縁の折れ曲がりが強い。径の復元は不正確である。

８は安山岩製の石鏃である。凹基で長さ３.０cm、幅１.３cm前後と全体に細身である。９は黒曜石製の石鏃である。深く抉り込んだ凹基で、先端は欠損している。前述したように、直接竪穴住居跡に伴う遺物ではないと考えられる。

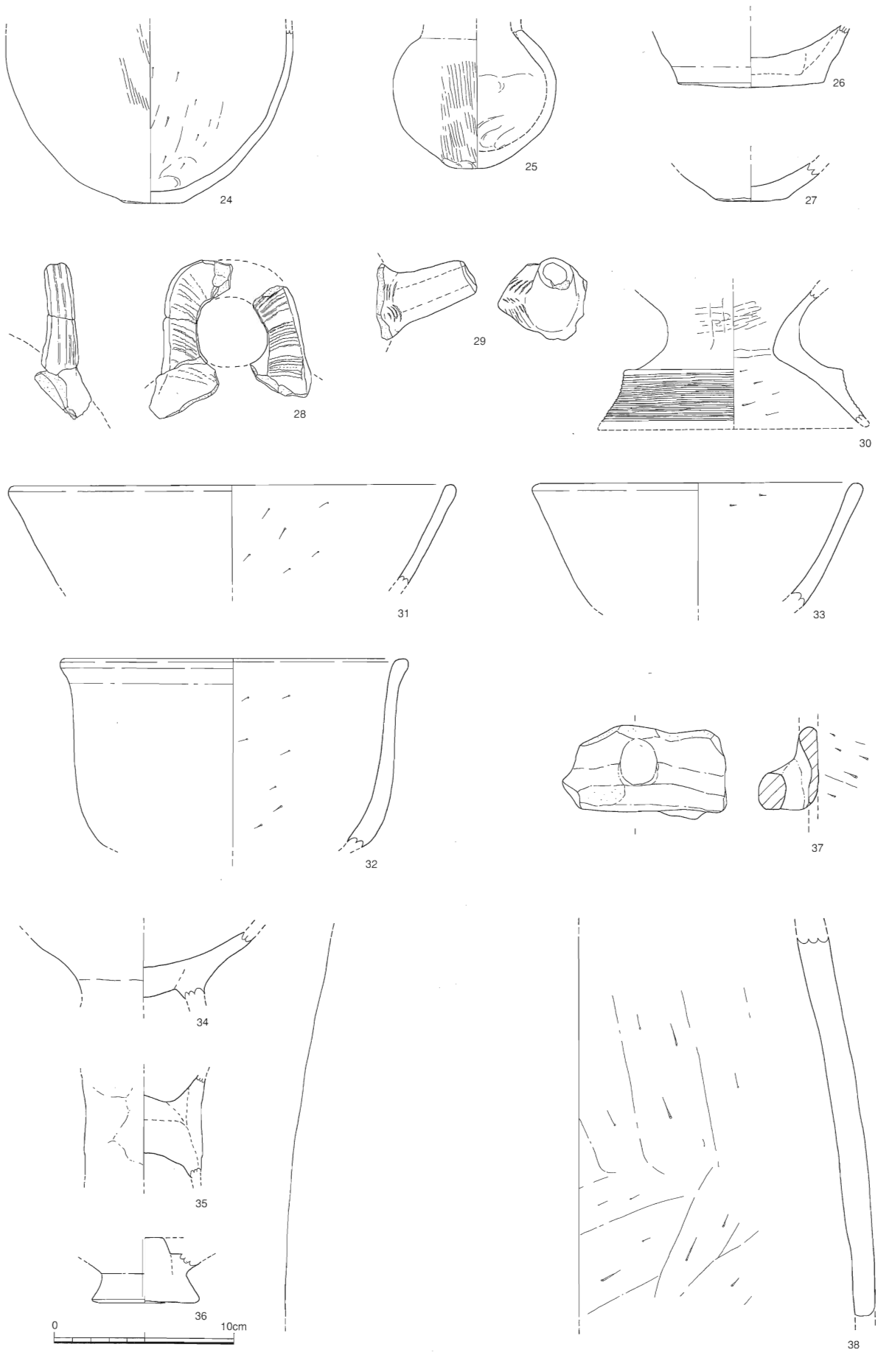
１０～３８は外周溝から出土した遺物である。外周溝古と新の出土遺物の峻別は、平面的に重なっている部分が多くて厳密には難しく、古から出た遺物と判断できるのは１１と３０、新から出た遺物と判断できるのは１０，１６，１７，１８，２０，２１，２３，２４，２５，２６，２７，２８，２９，３３，３４，３５，３７，３８である。傾向的に外周溝古から古手の遺物、新から新し目の遺物が出土していることはうかがえる。

１０～１７は口縁外面に擬凹線を施した甕である。１０，１１は複合口縁部の立ち上がりが長く、余り外湾しない個体である。ともに擬凹線は浅く細くて直線とならず、端部は先細り気味で内面にヘラミガキを施す。複合口縁部の稜はわずかに下方に突き出し気味である。１２～１５は復元口径が１６～１８cmほどの中型の甕で、複合口縁部が外湾気味に立ち上がるものである。いずれも口縁部の厚みは余り変わらず、複合口縁部の稜の突出は明瞭でない。１０，１１と比べて擬凹線がやや太めの印象で、１２，１３は頸部にも擬凹線が見られる。１６は口径１２.２cmの小型の甕で口縁部は中途で折れて先細りとなる。１７は風化で不明瞭ながらかすかに擬凹線が認められるもので、内面にわずかに稜を作り、先端に向かって細くなる個体である。

１８～２３は口縁部に擬凹線を施さない甕である。１８は口径２１.８cmとやや大型の甕の口縁部である。概して分厚いつくりで口縁部はやや外湾して開き、端部はわずかに膨らむ。複合口縁部の稜は下方に突き出している。１９は口径２３.２cmとやや大型の甕である。口縁部は外湾しながら開き、端部に向かって次第に厚みを減ずる。複合口縁部の稜の突出は余り明瞭ではない。２０は復元口径１０.６cmと小型の甕である。全体に薄いつくりで、口縁部は外湾しながら開き、複合口縁部の稜部分の突出は不明瞭である。２１は小片で不正確であるが、口径１８.４cmに復元される甕である。内



第55図　野津原Ⅱ遺跡東区SI01（1～9）.SI01外周溝（10～23）出土遺物実測図（S=1/3.8.9は2/3）



第56図　野津原Ⅱ遺跡東区SI01外周溝出土遺物実測図（S=1/3）

面にほとんど偏曲点がなく、口縁の受け部分にあたる平坦面を持たないのが特徴である。２２は口縁端部を欠いているが、複合口縁部の稜部分が斜め下方に突出する個体で、この部分の復元径１２.８cmを測る。２３は復元口径１５.８cmの甕である。口縁部を大きく外湾させており、端部は特にその傾向が著しい。厚さも端部に向かって次第に薄くなっており、複合口縁部の稜の突出は不明瞭である。

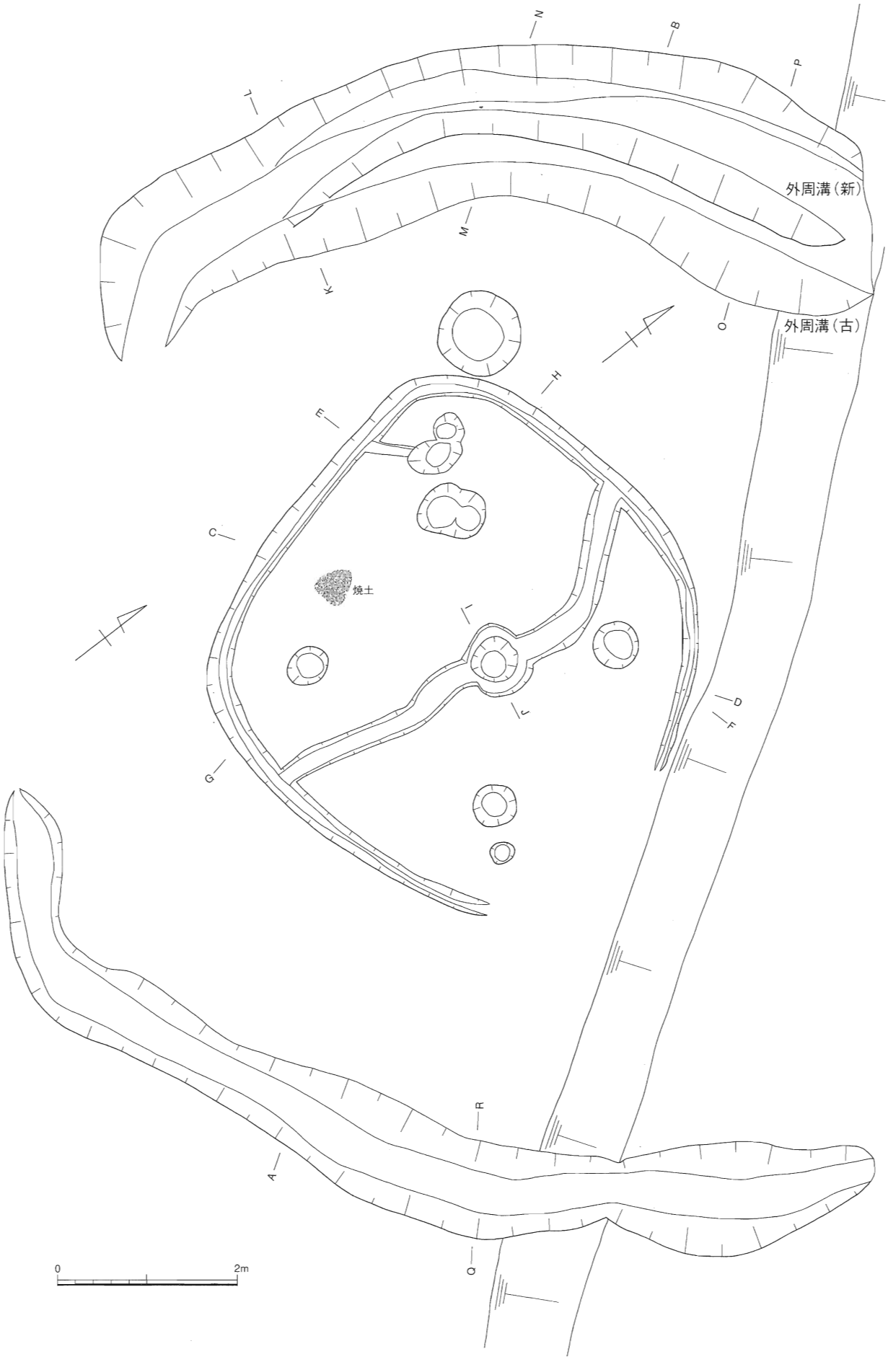
２４は外周溝新の底から出土した甕の胴下半部である。全体形は長楕円形を呈し、底部は径３cm強の不安定な平底を持つ。外面には煤が付着している。２５は外周溝新の底から出土した胴径８.９cmの小型の甕の胴部で、頸部以上は欠いている。全体形は不整な球形に近いプロポーションであるが、底は５円玉大の不安定な底がある。外面は粗めのハケメを施し、内面は指頭圧痕状のくぼみが観察される。２６は底径８.０cmの安定感のある平底の底部、２７は底径４.０cmの不安定な平底の底部である。

２８、２９はいずれも外周溝新の底から出土した把手付注口土器の破片で、同様の装飾が見られることから同一個体と考えられる。２８は把手部分で、甕または壺状の土器の肩付近に垂直に近い角度で取り付いていたものと推測される。表面（外向きの面）には二枚貝の腹縁と思われる工具で刺突文を施文している。この刺突文は８条前後を１単位として施文しているようで、１単位ごとに若干の無文部分が認められる。側面には少なくとも４条の沈線が施されている。２９は注口部分である。長さ４.５cmほどの注口の付け根部分に貝殻腹縁状の工具による刺突が２段にわたって見られることから、胴部の肩付近から最大径部付近には２段の刺突文が巡っていたものと考えられる。注口部の内径は１.２cm前後である。

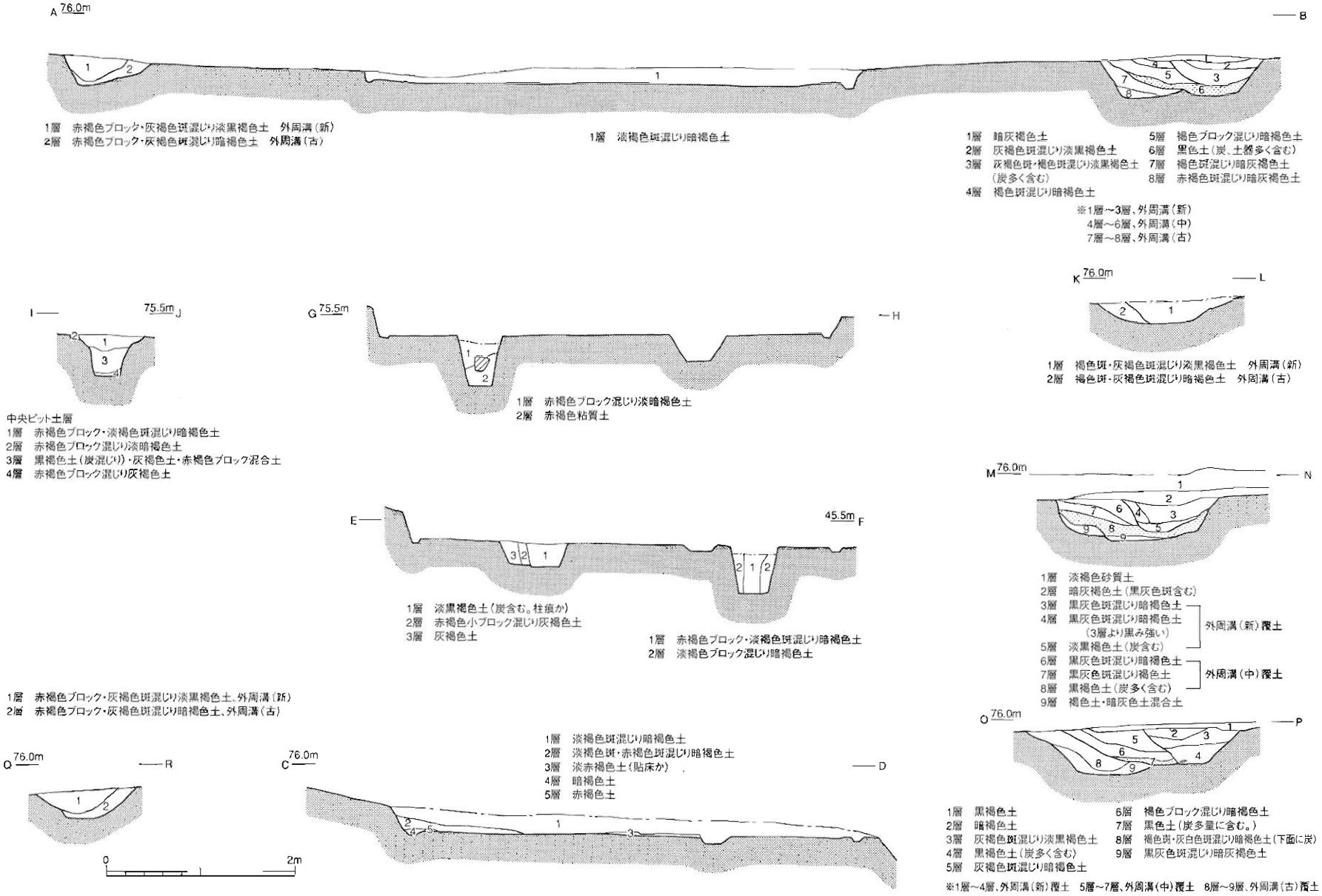
３０は鼓形器台の筒部から脚台部にかけてにあたる。脚台部の外面には擬凹線を施すが、全体的には幅の割に背が低い感のある個体である。筒部の上半は内外面ともヘラミガキが見られる。３１～３３は口縁端部を単純に丸くおさめた鉢形の土器で、あまり類例を見ない器種である。３１は小片で不正確な復元だが、口径２４.６cmを測るやや大型の個体である。対部全体が外方に開いて立ち上がり、口縁端はわずかに膨らんで丸くおさめている。内面はヘラケズリの後ナデを施している。３２は丸底様の底部からほぼまっすぐに立ち上がる体部で、口縁部は若干外方に折れ曲がり気味になって膨らんでいる。復元口径は１９.２cmで、底付近は赤く変色し、その上方には煤が付着していることから、火を受けているものと推測される。３３は３１と同様の特徴を持つが、復元口径１８.２cmとやや小型である。３２と同様に体部の下半は熱を受けてか、赤く変色している。

３４は高坏もしくは器台であろう。坏部または受け部と脚部との接合部付近で、かなり分厚く大型の個体である。底には円盤を充填しており、外面には丹を塗っている可能性がある。３５は器種不明だが、何らかの脚となる部分であろう。図は天地逆の可能性もある。底は２度以上粘土塊を充填して厚く、器表はでこぼこして粗い仕上がりである。３６も器種は不明だが、何らかの器種の脚台部となる部分である。分厚い底に「ハ」字状に開く低い脚台が付いており、脚台の内部は粘土が詰まっている。

３７，３８はコシキ形土器の破片と考えられる。３７は上部側（径の小さい側）の口縁部に近い部分と考えられる。一般的には把手を器壁に取り付けるのであるが、本例はコシキ形土器の上部の横方向の把手下方に時に取り付くタガ状の突帯を厚めにして、そこに直接孔を穿って横方向の把手の機能を代替したものであろう。高さ２.５cm、幅３cm弱の突帯を巡らし、その突帯に径１.２cm前後の断面円形の孔を貫通させている。内面は横方向のヘラケズリが見られる。天地は不明瞭で、径も計測できない。３８は体部で器壁の厚さが１～１.７cmとかなり分厚い。内面は縦方向と横方向のヘラケズリが見られる。



第57図　野津原Ⅱ遺跡東区SI02平面図（S=1/60）



第58図　野津原Ⅱ遺跡東区　SI02断面図（S=1/60）

ＳＩ０２（第５７図・第５８図）

調査区の南東側、頂上から南側に下る急斜面が緩やかな傾斜に変わり、尾根が南東側に派生する付け根の部分で検出された竪穴住居跡である。尾根の頂部からわずかに東に下りた部分にあたり、標高は約７６.５ｍ付近である。ＳＩ０１からは約４０ｍ東側にあたる。

竪穴の南北両側にそれぞれ弧状の溝が検出されている。別途の溝にも見えるが、本来は地形が高い西側にも連なって一続きの溝であったものと考えられ、北側は削平されて検出できなかった可能性が高い。このことは竪穴の壁の高さがわずかしか残っていないことや、北側の溝の続き部分から少量ながら遺物が出土している（第５９図）ことからもうかがうことができる。おそらくＳＩ０１と同様に地形の高い三方を弧状に囲んでいたものだろう（外周溝）。

竪穴住居部部分は、地形の低い東側の一部が流出しているが、やや不整な隅丸方形を呈する。壁の高さは残りの良い西側でも検出面から２５㎝ほどしか残存しておらず、周辺がかなり削平を受けていることは間違いないと思われる。平面の規模は壁体溝の内側で測っておよそ４.８ｍで、主柱穴は四本である。柱間の距離は２.３ｍ～２.６ｍ、柱穴の規模は直径４０～５０㎝前後、深さは３０～５５㎝を測る。覆土を見ると柱痕もしくは柱抜き取り痕と考えられる土層が見られるものもあり、復元できる柱径は１５～２０㎝程度である。北西側と南東側の柱穴の外側にはそれぞれ小穴が認められ、副柱状の柱の存在もあり得る。建て替え等の痕跡は認められないが、北西側の柱穴は２穴が重なっており、小規模な改修が行われた可能性はある。

中央ピットは床面の中心から若干東にずれた位置で検出された。上端の直径約５０㎝、深さは４５㎝で、周囲に浅く掘り込んで平坦面が巡っている。覆土内には炭が混ざった土砂が堆積している。中央ピットから南北二方向に、幅３０㎝前後、深さ１０㎝弱の浅い溝が設けられており、それぞれ壁体溝につながっている。床面西寄りには、床が焼けて赤変した部分も認められた。

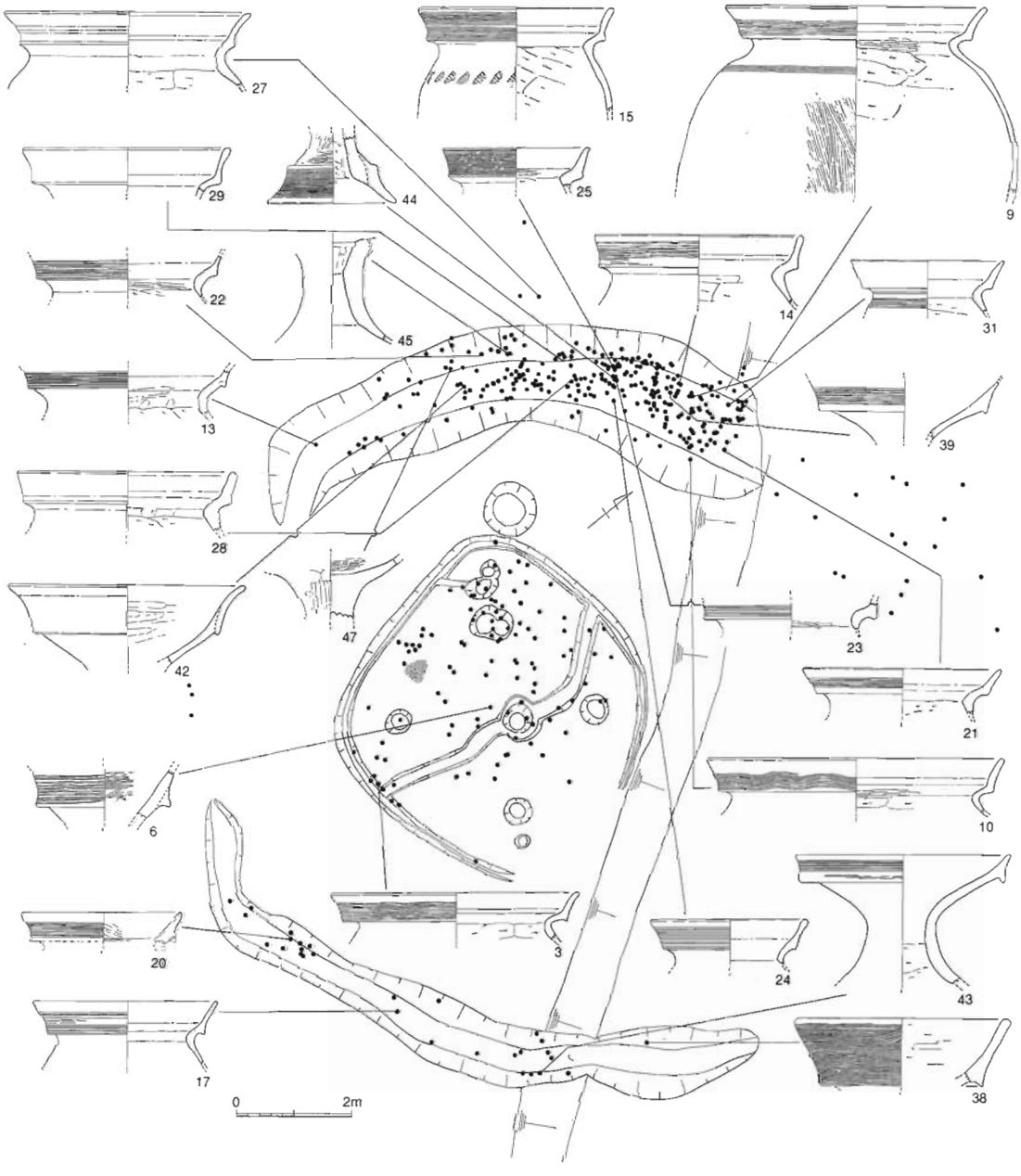
外周溝は、前述のように南北に両断されているが、本来は一続きであったことは前述の通りである。溝の東側の先端がどこまで続いていたかは明らかにできないが、北側の溝は後世の耕作による削平で切られているもののさらに東側に延びていたことは遺物の出土状況（第５９図）から明らかである。この外周溝は、覆土の堆積状況から少なくとも二度掘り直されていることが判る。ここでは古い順に外周溝古・中・新と呼ぶ。

この溝は新しくなるにつれて若干ずつながら浅くなっていく傾向が認められる。南側の溝では掘り直しの痕跡が一回しか認められないのは、残存の深さの問題かもしれない。溝の形状は、基本的に断面逆台形を呈している。溝の幅は三者が切り合っているとともに、上部が削平されていることから明確にはつかみがたいが、上端幅がつかみやすい外周溝中は１.７～１.８ｍを測る。底の幅は古が６０㎝前後、中が９０㎝前後、新は３０～４０㎝前後である。平面的には、新が若干竪穴よりも外側に寄っているが、これは単に幅が狭くなった結果かもしれない。深さは検出面から４０㎝前後しか残っていないが、ＳＩ０１の例を見ればもっと深かったことは想像に難くない。なお、北側の中外周溝の底には有機質の黒色土が堆積しており、この段階で溝が機能していた時間が長かったことを思わせる。

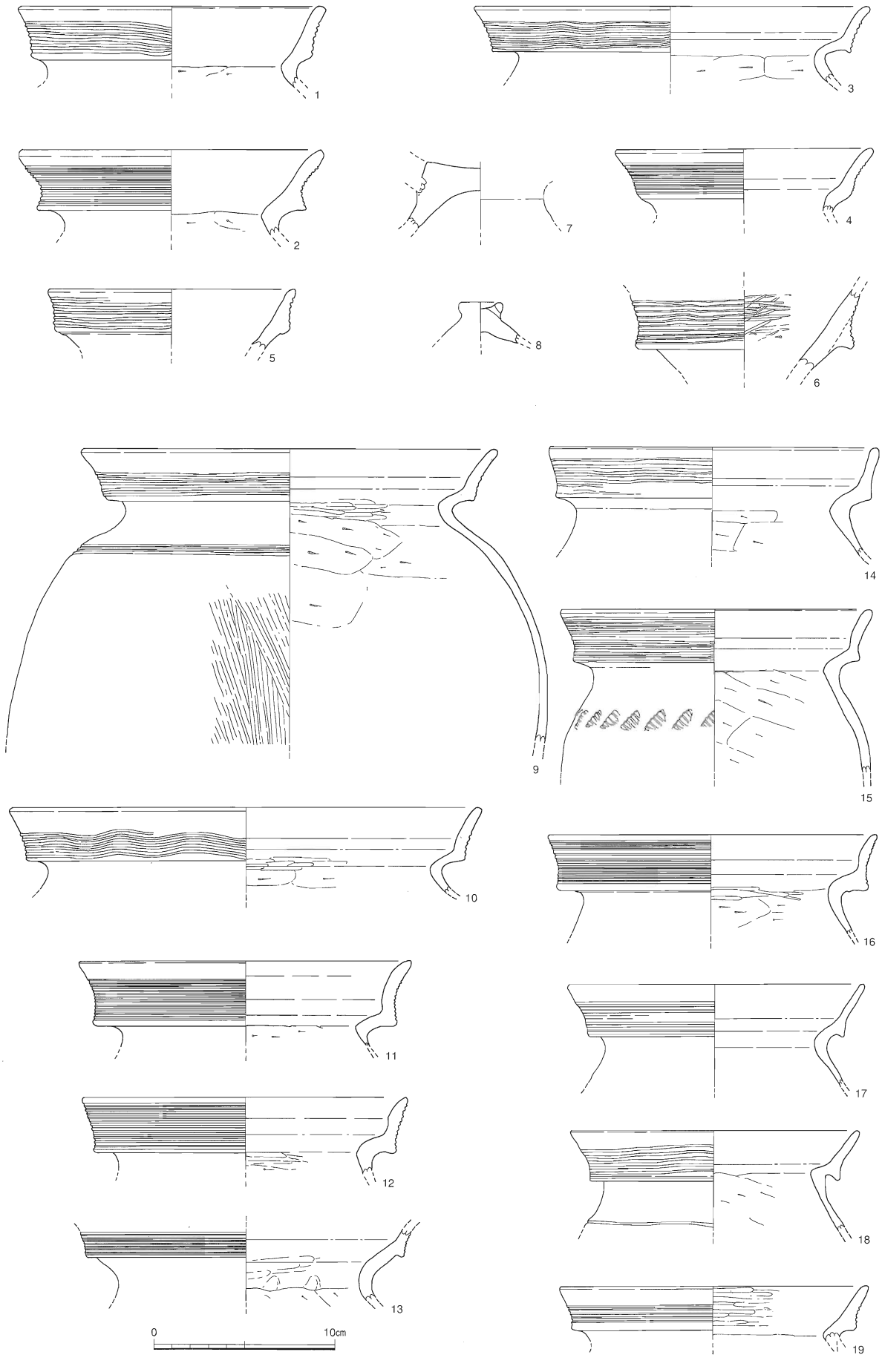
ＳＩ０２遺物出土状況（第５９図）　竪穴住居内及び外周溝内からかなりの遺物が出土している。竪穴住居内からは、まとまった形での土器等の出土はなく、概して覆土内からの散漫な出土状況といえる。床面からは、３が南側の壁体溝付近から、６が中央ピット付近から出土している。

外周溝内からは、比較的残存状況の良い北側の溝を中心に多くの土器が出土した。後世の加工で切られた溝の東側にも、散漫ながら遺物が相当量出土していることから、本来は溝が東側に続いていたと考えられることは前述の通りである。外周溝古・中・新のいずれから出土したかは、覆土内の切り合いのため識別が困難で、全て遺物を区別することはできなかった。識別できたものは外周溝中出土が１０，２１，２４，２５，２８，４４、外周溝新出土が９，１２，１４，１５，２２，２３，２６，３１，３６，３９，４５である。

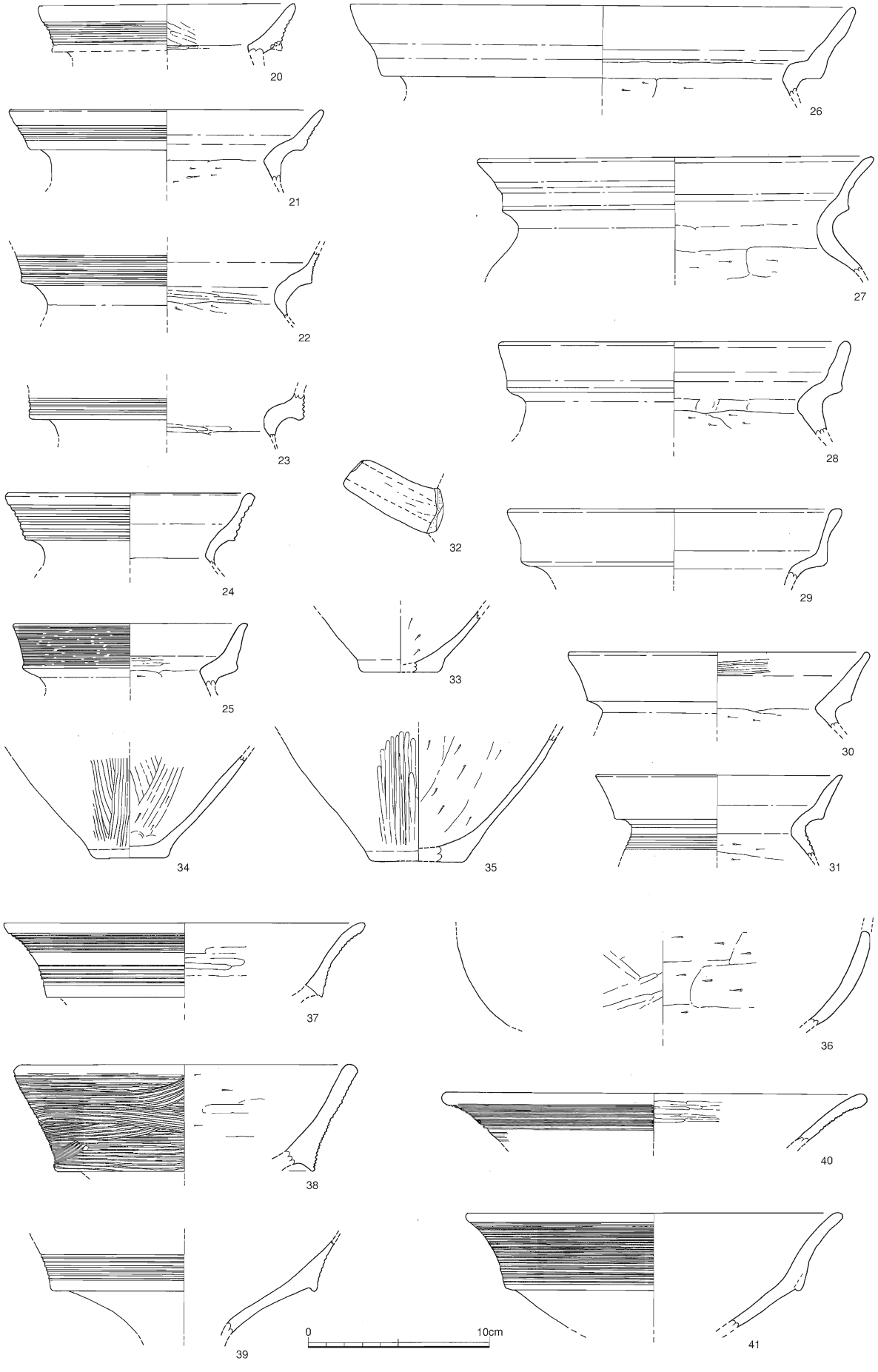
ＳＩ０２出土遺物（第６０図～第６２図）　１～８が竪穴住居内出土の遺物である。１～５は甕の口縁部で、いずれも外面に擬凹線を施している。１は復元口径１７.０㎝のやや厚手の甕である。口縁部は外湾して開き、外面には原体の凹凸の幅が広い擬凹線を施している。端部に向かって厚みの変化はなく、内面は大きな扁曲点がないまま頸部に至っている。複合口縁部の稜の突出は不明瞭



第59図　野津原Ⅱ遺跡東区　SI02遺物出土状況（S=1/120　遺物は1/6）



第60図　野津原Ⅱ遺跡東区　SI02（1～8）.SI02外周溝（8～19）出土遺物実測図（S=1/3）

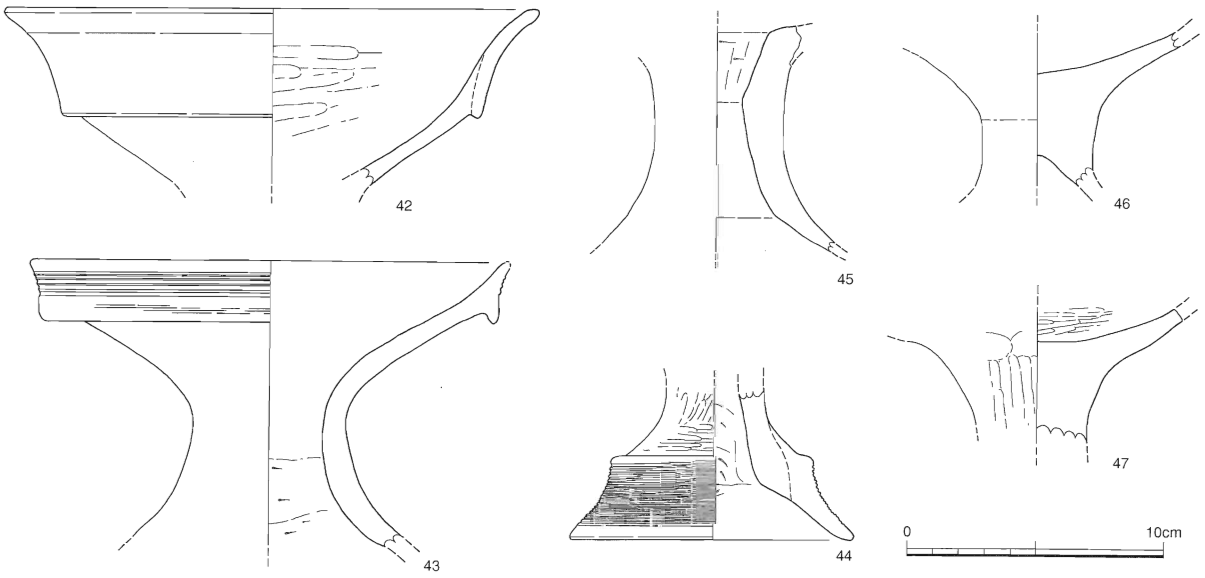


第61図　野津原Ⅱ遺跡　東区SI02外周溝出土遺物実測図（S=1/3）

である。２は復元口径１６.８㎝を測る甕である。口縁外面の擬凹線を施す部分は大きく外湾しており、その分複合口縁部の稜が斜め横方向によく突出している。口縁内面はあまり屈曲せずに頸部に至るため、受け部の平坦面はほとんど認められない。端部は膨らむことなく、そのまま丸くおさめている。３は床面出土で、復元口径２１.８㎝と比較的大型の甕である。器壁の厚さが５㎜前後と口径に比して薄いつくりで、口縁は若干外湾しながら外方に立ち上がる。口縁外面の下半には擬凹線が微妙にうねって施されている。複合口縁部の稜はわずかに下方に突き出している。４は小片で不正確な復元だが、口径１４㎝前後の小型の甕である。口縁はわずかに外湾して立ち上がり、口縁端はそのままの厚さで丸くおさめる。外面には擬凹線を施し、複合口縁部の稜は丸く不明瞭である。５は復元口径１３.６㎝の甕である。内面に屈曲点がなく、平坦面が認められないことから器台の可能性も捨てきれないが、外面に煤が付着していることから甕と判断した。口縁外面にはやや間隔が粗めの擬凹線を施している。

６は中央ピット周辺の床面から出土した器台である。受け部外面には擬凹線を施し、内面はヘラケズリの後ヘラミガキを施している。７は台付の鉢か壷の類であろうか。８は紐通しと推測される小孔が貫通していることから蓋と考えられる。つまみ部の径が２.４㎝を測る。

９以降は外周溝出土の遺物である。９は外周溝新の底面から出土した甕である。口径は２２.７㎝、口縁部は中途でわずかに折れ気味に立ち上がり、端部はそのままの厚さで丸くおさめる。口縁外面の下半には擬凹線を施し、内面の受け部平坦面から頸部にかけてはヘラミガキを施している。胴部の肩付近には３条の擬凹線を施し、その下方にはハケメが見られる。１０は外周溝新の底から出土した復元口径２６㎝とやや大型の甕である。口縁部は外湾しながら立ち上がり、同じ厚さで端部にいたって丸くおさめている。外面の下半には擬凹線を波状に施している。１１は復元口径１８.４㎝を測る甕である。口縁は外湾しながら立ち上がり、端部は先細り気味になって丸くおさめている。外面には擬凹線を施す。１２はやや不正確な復元だが、口径１８㎝前後の甕である。口縁の内面の中段辺りで屈曲点をもち、それより上方は端部に向かって先細りになっている。外面には擬凹線を施している。１３はやや頸部が長く、甕もしくは壷である。口縁部の上半を欠いているが、外湾気味に立ち上がるようで、複合口縁部の稜は下方に突き出している。１４は外周溝新の底付近



第62図　野津原Ⅱ遺跡東区　SI02外周溝出土遺物実測図（S=1/3）

から出土した甕で、復元口径１７.８㎝を測る。口縁は外湾気味に立ち上がり、端部はわずかながら膨らんで丸くおさめている。外面には擬凹線を施す。１５は外周溝新の底付近から出土した甕で、口径１６.９㎝を測る。口縁は中途で外方に折れ気味となり、厚さは変わらずに端部にいたって丸くおさめている。口縁外面には擬凹線を施し、肩部外面付近には櫛状の工具で刺突を巡らせている。

１７，１８は同様の特徴を持つ甕である。いずれも復元口径１６㎝前後、薄手の口縁で外面に擬凹線を施し、複合口縁部の稜は下方に突き出している。１８は肩部付近にも凹線を巡らせている。両者は同一個体の可能性もあるが、南北に分かれて出土しているため別に図化した。１９，２０とも小片で不確実な口径復元である。ともに口縁の下半には擬凹線を施し、内面には受け部の平坦面が不明瞭でヘラミガキを施している。２１は外周溝古出土、口縁部がほぼまっすぐ外方に開く甕である。端部に向かってやや薄めになっていき、外面の下半には擬凹線を施している。復元口径は１７.４㎝を測るが、小片で復元は不正確である。２２，２３は外周溝新出土、口縁端部が欠損した甕である。ともに口縁外面には擬凹線を施し、頚部内面にはヘラミガキが見られる。２２は薄手で複合口縁部の稜の突出は明瞭ではないが、２３は厚手で稜は下方に突出している。２４は外周溝古出土、復元口径１３.８㎝の甕である。口縁外面には幅１.５ミリ前後の粗い擬凹線を施し、端部は膨らませている。２５は外周溝古の底付近から出土した口径１２.７㎝の厚手の甕である。口縁部はほぼ真っ直ぐ外方に立ち上がり、先端に向かって厚み減じて端部はわずかに外方につまみ出している。外面には細かな擬凹線、内面にはヘラミガキを施している。

２６～３７は口縁の外面に擬凹線を施していない甕である。２６は外周溝新出土。小片で復元が不正確だが、口径２８㎝前後で立ち上がりの高さが４㎝の大型の甕である。口縁はほぼ真っ直ぐ外方に立ち上がり、端部に向かっては若干先細りになって丸くおさめる。２７は復元口径２１.８㎝を測る甕で、複合口縁ではあるが頚部との境のいわゆる受け部となる平坦面が不明瞭な個体である。口縁は外湾しながら立ち上がり、外面は強いナデで段を形成している。複合口縁部と頚部の境は外面の稜を横に突き出すことで表現している。２８は外周溝古出土の復元口径１９.４㎝を測る厚手の甕である。口縁部はわずかに外方に真っ直ぐ立ちあがり、端部は丸くおさめる。外面は不明瞭だが擬凹線を施している可能性も否定できない。２９は外周溝新出土の復元口径１８.４㎝の甕で、全体に風化が著しい。口縁部は外湾しながら立ち上がり、端部は膨らんでいる。３０は復元口径１６.６㎝の甕である。厚手で口縁部は端部に向かって先細りとなり、先端は丸くおさめる。複合口縁部の稜部分はわずかに横方向につまみ出しており、口縁内面には受け部の平坦面が見られず真っ直ぐ頚部に向かっている。３１は外周溝新出土の復元口径１３.６㎝を測る甕である。口縁は先端に向かって先細りになり、外面には擬凹線は見られない。頚部以下には擬凹線を施している。３２は注口土器の注口部分である。長さが６.２㎝と比較的短くて先も細くなっていない。３３～３５は壷もしくは甕の底部である。３３は外周溝新、３４，３５は外周溝古出土でいずれも平底である。３６は甕もしくは壷の胴部である。

３７～４５は器台である。３７は復元口径２０㎝の受部片で、外面には擬凹線が２単位施され、内面にはヘラミガキが見られる。３８は厚手の受部片で外方に立ちあがるものの、ほとんど外反しない個体である。外面には擬凹線を施すが、水平に施文されず交叉している。内面はヘラケズリの後ヘラミガキを施すようである。３９は外周溝新から出土した受部片である。口縁端部は欠損しているがさほど長くは伸びないようで、筒部はよくくびれて細くなる。口縁外面には擬凹線を施す。４０は小片で不正確な復元だが１９㎝前後の口径で、口縁端部が膨らんで外反しており、外面には擬凹線を施す。

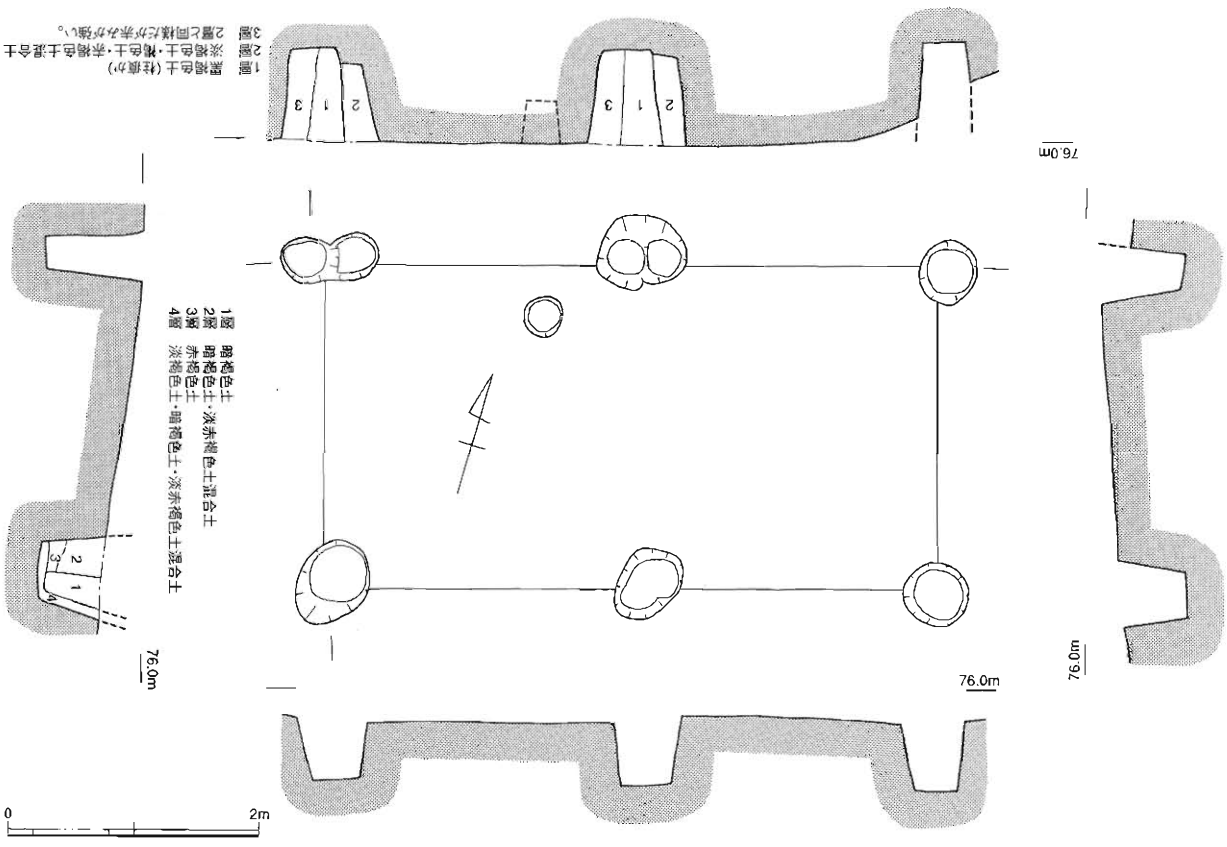
４１は口径２０.５cmの受部である。口縁部は外反して端部は丸くおさめ、外面には擬凹線を施す。４２は４１とよく似たプロポーションだが、外面に擬凹線は見られない。復元口径は２１.０cmである。４３は受部口縁部分の幅が短く、当地ではあまり見受けられない特徴の器台である。口縁部は下方によく垂下し、外面には擬凹線を施す。筒部はよくくびれるが最小径は６cmとさほど細くはない。外面には丹が塗られている。４４は鼓形器台の脚部である。底径１０.８cmで全体に厚いつくりである。脚部外面には細い擬凹線を施し、筒部外面にはヘラミガキが見られる。４５は外周溝古出土の細長い筒部である。最小径５cm前後で受部底には粘土が充填され、底があった可能性もある。

４６，４７は高坏であろう。ともに坏部と脚部の接合部付近が中厚で、４７はヘラミガキが見られる。

２．掘立柱建物跡・加工段

ＳＢ０１（第６３図）

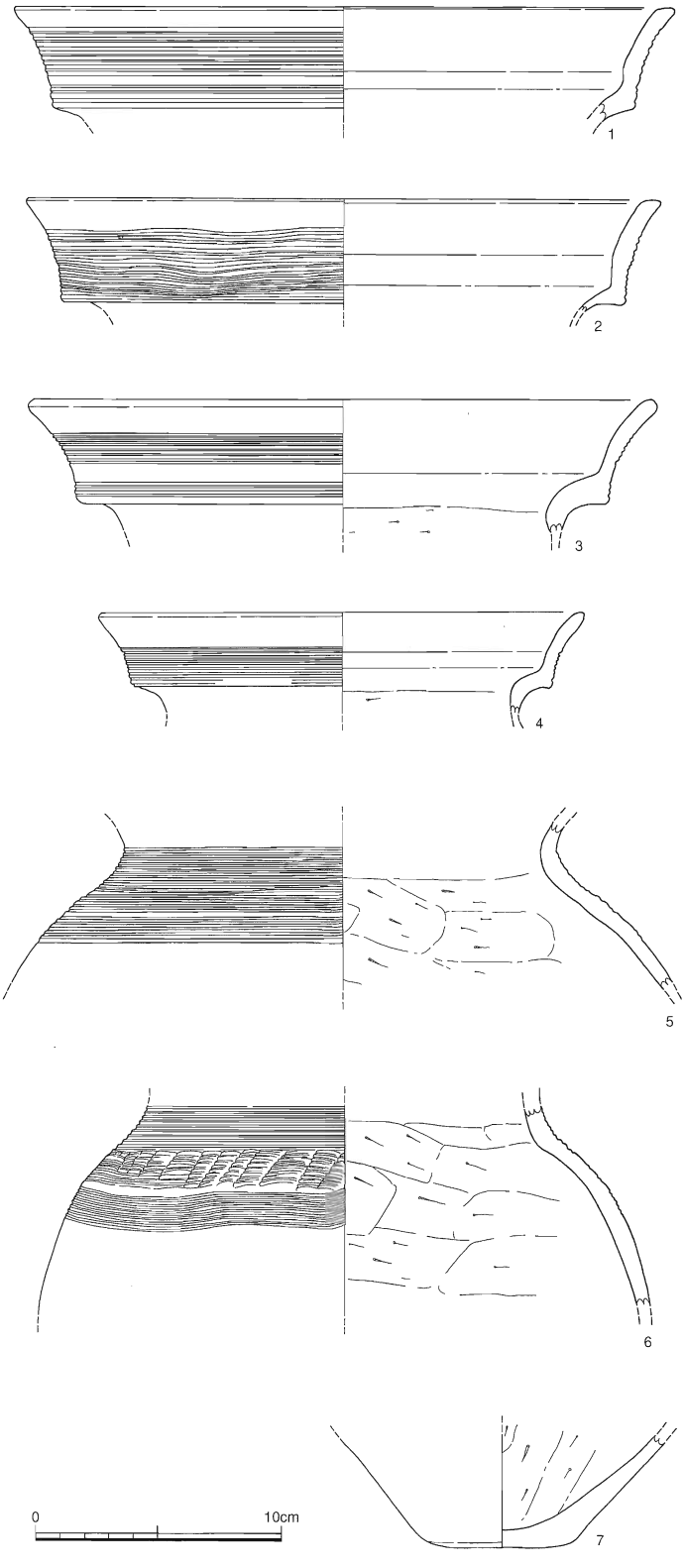
ＳＩ０１とＳＩ０２のほぼ中間、南に伸びる尾根の付け根付近に当たる緩斜面で検出された掘立柱建物跡である。１間×２間の建物で北側の２つの柱穴がわずかにずれて重なり、また平面で重なりが確認できない柱穴も土層で掘り直しが確認できるものがあることから、ほとんど位置や規模を変えずに少なくとも１回の建替えがあったことがわかる。建物の規模は建替え後で４.９ｍ×２.６ｍ程度、建替え前は若干桁行方向が短くなる程度で、長軸は東西方向に近い。柱穴の径は４０～６０cm前後の円形で、深さは検出面から８０cmに及ぶものもあり、かなりしっかりと掘り込んでいる。柱穴内の埋土を観察すると、柱痕らしき土層が認められ、そこから推測して柱の径は２０～２５cm



第63図　野津原Ⅱ遺跡東区　SB01実測図（S=1/60）

第１加工段出土遺物（第６６図）　第１加工段からは、壁際の溝内を中心に相当量の遺物が出土した（第６６図）。１～４は甕の口縁部である。１，２はよく似た特徴を持つ個体である。同一個体の可能性も捨て切れないが、擬凹線のあり方や厚みなどに違いがあり、別個体とした。口縁部外面は外湾しながら立ち上がり、内面は中途に扁曲点をもって、そこから外方に折れ曲がるように立ちあがる。口縁端の上面には水平な平坦面を設け、外面には突き出すように稜を持つ。複合口縁部の稜部分は突出しないが明確で、その上方には幅１㎜内外の比較的細かい擬凹線を施している。口径は１が２６.８㎝、２は小片で復元が不正確だが２６㎝前後となり、やや大型の部類である。３は復元口径２５.６㎝を測るやや大型の甕の口縁部である。口縁部は外湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。口縁外面には若干の空白部分を置いて２段擬凹線が施されている。４は小片で不正確な復元だが、口径２０㎝前後の口縁部は変である。口縁部は中途で外方に折れ気味に立ちあがり、ほぼ同様の厚さで端部端部に至って丸くおさめる。口縁外面下半には擬凹線を施している。

５，６は甕の頚部から胴部上半にかけての破片である。５は頚部の最もくびれたあたりから胴部の上部にかけて密な擬凹線が施されている。１か２と同一個体の可能性もある。６は頚部から胴部上半にかけての破片で、肩部付近から頚部にかけて３段にわたって櫛状工具で施文されている。最上段の頚部以下部分には擬凹線が施され、その直下には同様の工具で押し引き



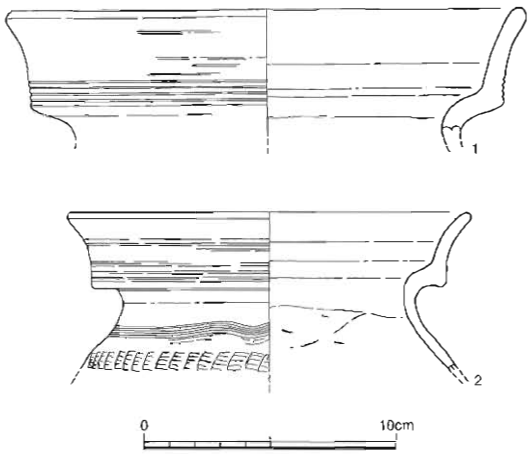
第66図　野津原Ⅱ遺跡東区　第１加工段出土遺物実測図（S=1/3）

前後と考えられる。

ＳＢ０１出土遺物（第６４図）　柱穴内の覆土から若干の土器が出土している。１は小片で径の復元が不正確だが、２５㎝前後の口径の甕である。口縁は外反して立ち上がり、端部は厚みを変えずに丸くおさめる。口縁外面には擬凹線を施すが、上半は風化もあって不明瞭である。２は復元口径１５.７㎝の甕である。口縁は外反して立ち上がり、厚みを変えずに端部にいたって丸くおさめる。複合口縁部の稜はわずかに下方に突き出し、口縁外面は風化で不明瞭だが擬凹線を施すようである。頸部以下には数条の櫛状の工具で波状の文様を施し、その下方には同様の工具で押引状に刺突を施している。

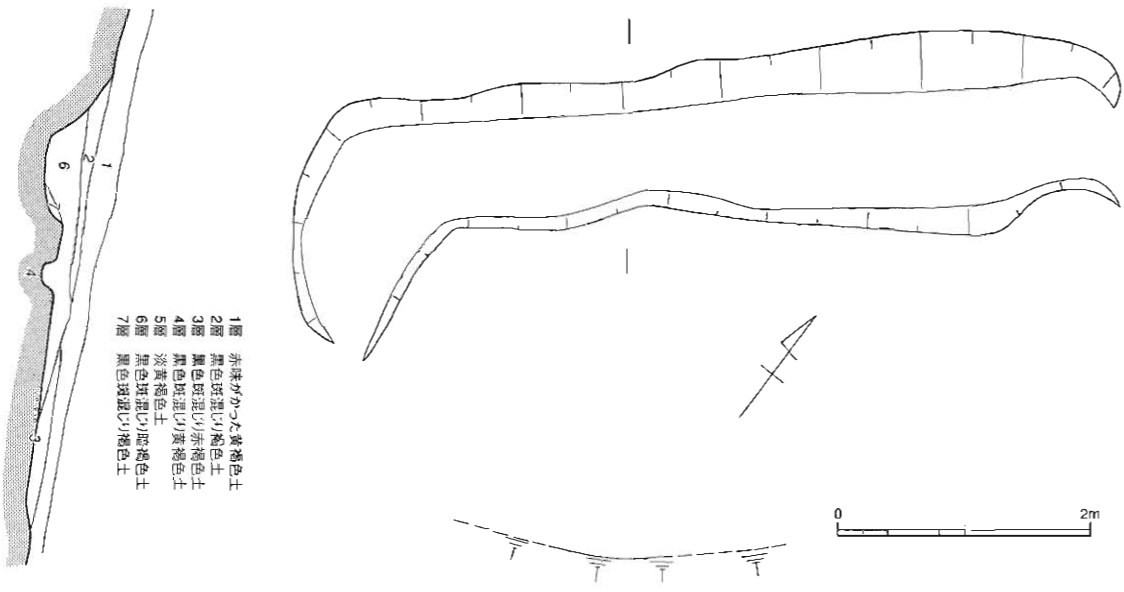
第１加工段（第６５図）

頂上部からおよそ２５m、高さで９mほど南に下ったやや斜面が緩やかになった部分から検出された。標高８１m前後で、最も高い位置で検出された遺構である。斜面の高い側を削って平坦面を作り出した遺構で、斜面側壁際には「コ」字形にやや幅の広い溝がめぐる。溝の幅は下端で６０～９０㎝ほどで、深さは１５㎝前後とさほど深くはない。柱穴等の遺構はまったく検出されておらず、構造的にしっかりとした建物は建っていなかったものと考えられる。



第64図　野津原Ⅱ遺跡東区　SB01出土遺物実測図（S=1/3）

加工段遺構全体の規模は東側の端が明瞭に検出できていないため明らかではないが、溝が下方に屈曲し始めていることからさほど広がらないと考えられ、およそ７m前後の長さになるものと推測される。平坦面の幅は検出時で３m前後だが、本来は下方に盛土され、さらに平坦部が続いていたものと推測される。



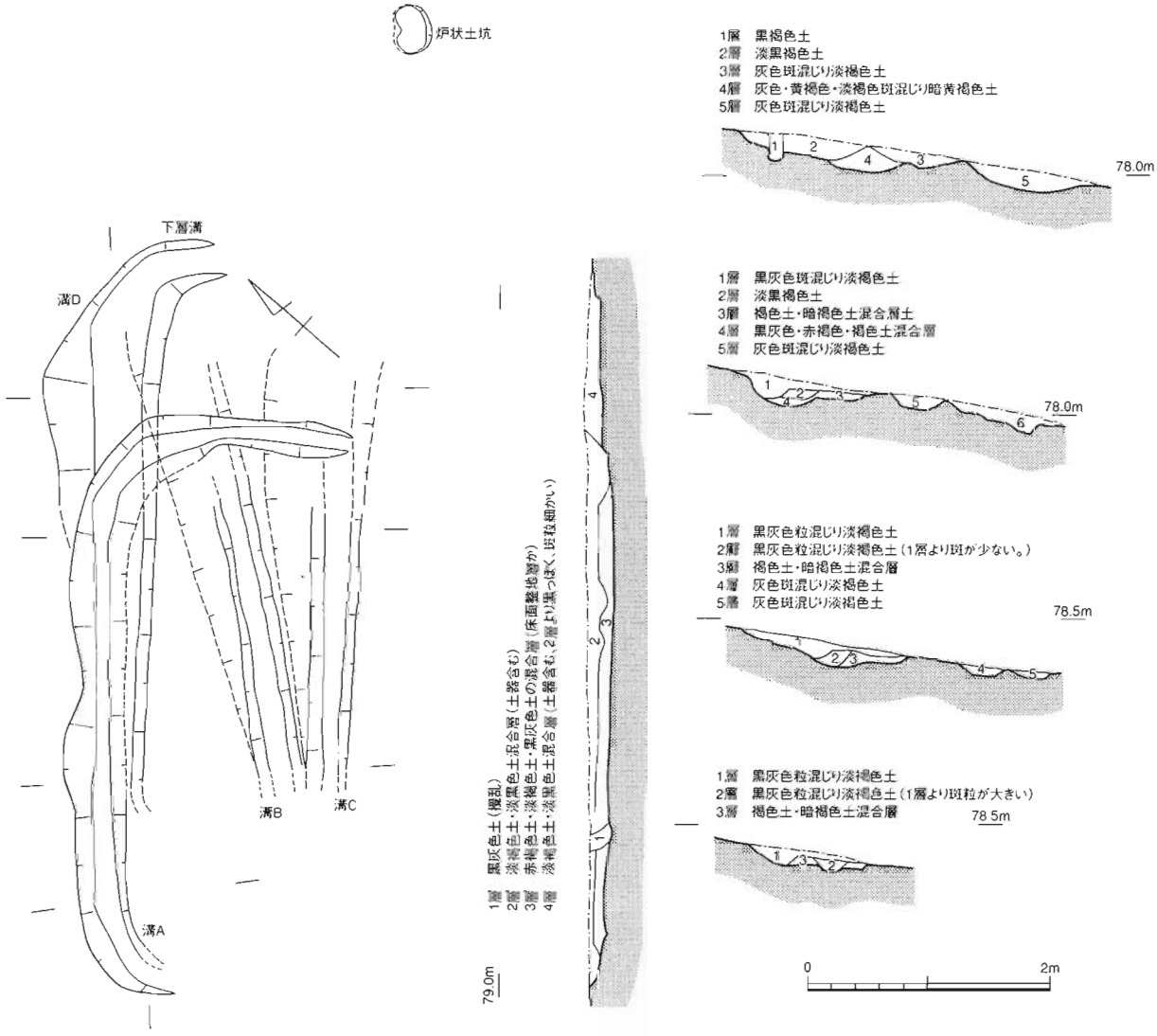
65図　野津原Ⅱ遺跡東区　第１加工段実測図（S=1/60）

状の刺突を巡らす。さらにその直下には振幅が非常に浅い波状文を巡らせている。内面はヘラケズリだが、板状の工具で施されたものと考えられる。

７は甕もしくは壷の底部である。底径６㎝前後の平底ではあるが、底が若干凸レンズ状に膨らんでおり、安定は悪い。

第２加工段（第６７図）

第１加工段の南側下方約８ｍ、ＳＩ０１の北上方約１０ｍの比較的緩やかな斜面で検出された。幅４０～８０㎝、深さが検出面から１０～２０㎝と、さほど深くない溝が４本、若干位置と高さをずらして検出されており、少なくとも３度の作り替えが行われたことがわかる。流出と新しい溝によるカットのため、全容が分からない溝もあるが、検出できた溝は斜面上方を「コ」字形にめぐっており、斜面の高い部分を加工して平坦面を作り出した加工段であったと考えられる。以下４本の溝を溝Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄと呼んで順に記述していきたい。なお３ｍほど東側に、小型の炉状の土坑が検出されているが、これは別途述べる。



第67図　野津原Ⅱ遺跡東区　第２加工段実測図（S=1/60）（濃茶は下層溝）

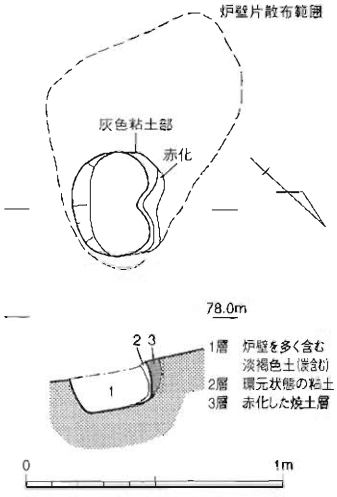
溝Ａは、溝Ｂ，Ｃ，Ｄを切っていることから最後に形成された溝で、他の３本の溝に比べてやや西側にずれた位置に形成されている。西側端の残りは悪いものの、唯一両端を検出することが出来た溝で、加工段の規模を知ることができる。溝の幅は上端で３０～５０cm、深さは検出面から２０cm前後、溝の内側の床面から１０cm前後である。溝の両側は、丸みを帯びながらほぼ９０°の角度で折れ曲がり、斜面下方に向かっている。残りのよい東側の辺は、約１.８ｍ南（下方）に伸びて途切れているが、本来はさらに下方に伸びていた可能性は高い。両側（東西）の溝の間の長さ（加工段床面の長さ）は４.２ｍ前後となる。

溝Ｂは溝Ａよりやや下方で検出されたもので、溝Ａに切られている。他の溝Ａ，Ｃ，Ｄがほぼ同じ方向（斜面と同一方向）に溝が走るが、この溝Ｂだけは若干ずれた方向に溝が形成されている。断面逆台形を呈し、検出された部分で幅（上端）３０～４０cm、深さは１０cm前後である。溝の両端を検出することができなかったため、この溝に囲まれて形成されていたと推測される加工段の規模は不明である。

溝Ｃは溝Ｂのすぐ下に検出された。溝Ａには切られているが溝Ｂとの前後関係は確認できなかった。溝Ａとほぼ同方向に伸びているが、溝の両端は確認できておらず、溝に囲まれていたと考えられる加工段の規模は不明である。現状で確認できる溝の長さは約３.８ｍ、幅は下端で２０cm前後を測るが、断面観察では上端の幅はかなり広かったことが分かる。

溝Ｄは溝Ａの下層から検出された。方向、位置はほぼ溝Ａと重なっているが、東端が約１.４ｍほど東にずれている。溝Ａ，Ｂとの前後関係は不明である。西端は平面的に検出できなかったため規模を正確につかむことはできないが、土層の状況から見て、溝Ａの西端付近まで延びていたものと考えられる。よって推測される長さは５ｍを超える。下端の幅は、確認できる部分では４０cm前後のところもあり、４本の溝中で最も幅が広い。なお、溝Ａとの間にさらに溝が存在することが断面によって確認できるが、地山と覆土の区別が困難な堆積状況と複雑な切り合いのため、平面的にはつかむことができなかった。

以上のように、第２加工段は４～５回、微妙に位置と高さをずらしながら溝を作り替えていることが分かる。加工段に設けられた何らかの施設の改築のたびに、地盤も均し直していたものと推測される。ただし、どの段階においても柱穴等が一切検出されておらず、少なくとも掘立柱建物のような構造のしっかりした建物は建っていなかったことは間違いない。もちろん建物が存在しなかった可能性もまったく否定できるものではない。



第68図　野津原Ⅱ遺跡東区　第２加工段東側炉状土坑実測図（S=1/30）

第２加工段東側炉状遺構（第６７図、６８図）

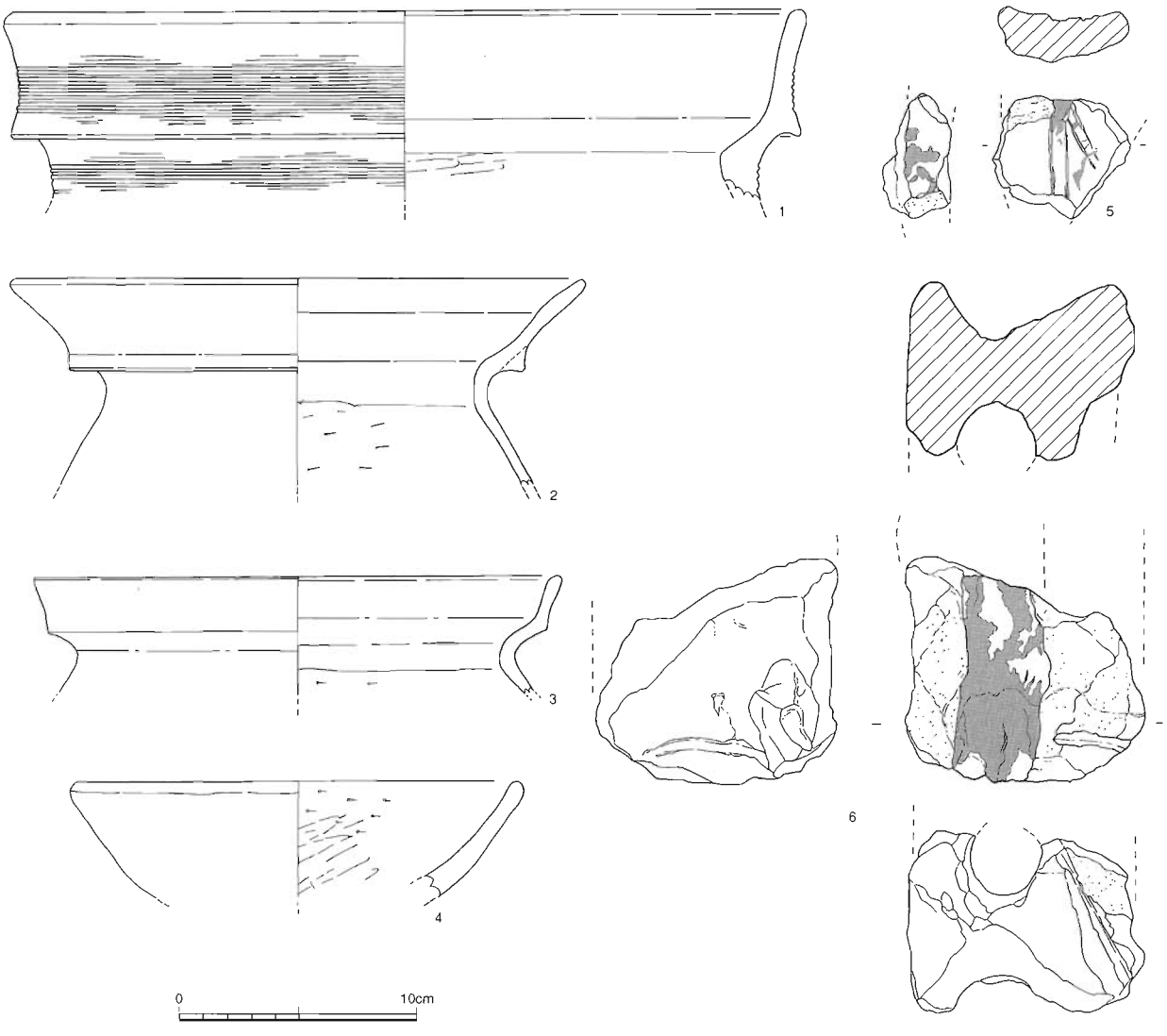
第２加工段の２ｍほど東側の緩やかな斜面で、小型の炉状の土坑が検出された。上端で約４０×３０cmの楕円形で、斜面上方側がハート形状にくびれている。深さは検出面から約１５cmで、斜面上方側（北西側）の壁がよく焼けている。表面には還元して灰色化した粘土が残り、その奥は幅５cmほど酸化して赤化している。土坑内には、焼けて固化した炉壁状の粘土塊と炭を多く含んでいる。

また土坑の周囲からは多くの炉壁状の粘土塊が検出された。

炉壁状の粘土塊の一部を図化した（第６９図５，６）。５は厚さ５cmほどのわずかに湾曲した粘土塊である。スサ等は認められない。若干内湾した面には幅６㎜と３㎜、深さが１～２㎜の浅い窪みが２条認められるが、これが何の痕跡かは不明である。側面の一部と浅い窪みの一部には、茶褐色の付着物が認められる（図網部分）。６は一側に通風孔状の円孔が認められる粘土塊である。円孔は直径約３cmで、内面には黒っぽいタール状のものが付着している。スサ等は認められず、約半分が酸化して赤っぽくなっている（図上半）。

この炉状土坑の性格は不明だが、炉壁状の粘土の一部に通風孔状の穴が認められることから、この土坑の上部に粘土で何らかの上部構造が設けられ、かなり高温にあげる炉が存在していた可能性が強い。壁は斜面上方側のみが焼けていることから、斜面下方側（南東側）から通風していたと推測される。

炉内や周辺の土砂を採取して、鉄系遺物がないかどうかを確認したが、まったく採取できなかっ

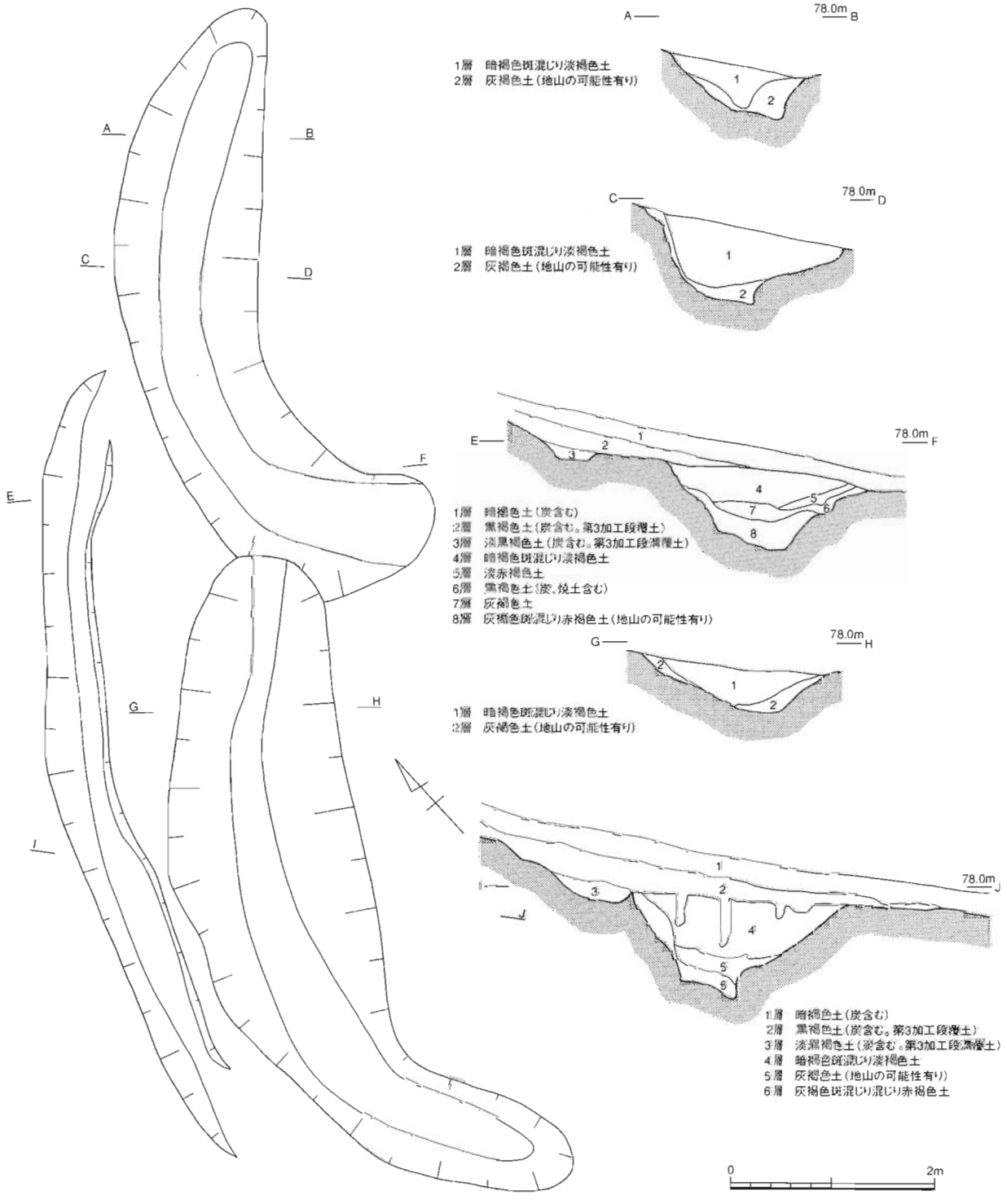


第69図　野津原Ⅱ遺跡東区　第２加工段出土遺物実測図（S=1/3）

た。よって鍛冶炉等でないことは明らかだが、滓等の出土もなく、何のための炉であるかはまったく不明である。

第２加工段出土遺物（第６９図）

１は復元口径３３㎝とかなり大型の甕である。口縁部はわずかに外方に内湾しながら立ち上がり、外面には擬凹線を施す。口縁部の稜は下方に突出し、口縁端部は丸くおさめる。頸部外面には口縁



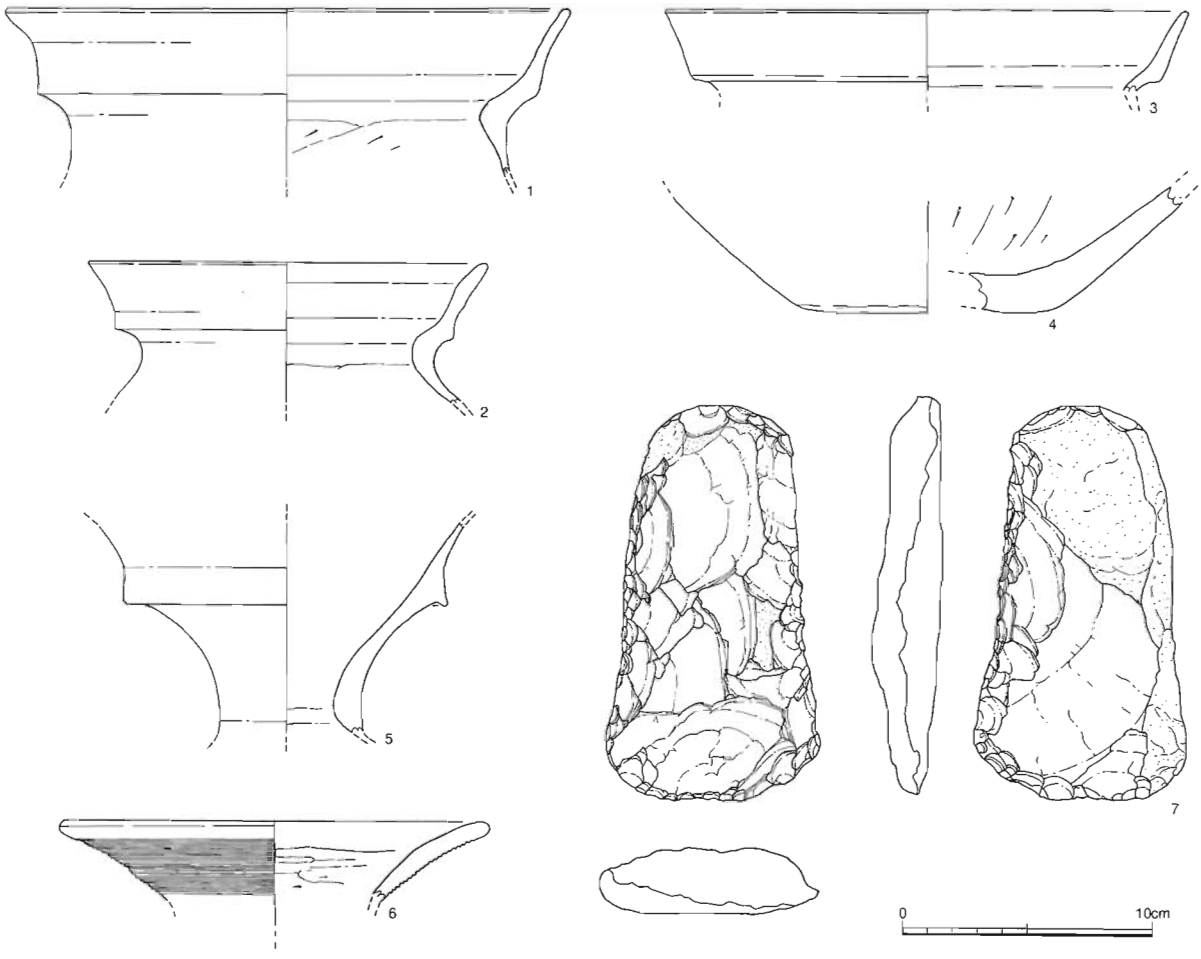
第70図　野津原Ⅱ遺跡東区　第３加工段実測図（S=1/60）

部と同様の擬凹線が見られ、内面にはヘラミガキを施している。２は復元口径２４㎝の甕である。口縁部はやや折れ曲がり気味に大きく外方に開いて立ちあがり、外面には擬凹線は見られない。口縁部の稜は横方向に突出し、口縁端部は丸くおさめている。３は復元口径２２㎝の甕である。口縁部の立ち上がりは２.４㎝と比較的低く、外面には擬凹線を施さない。複合口縁部の稜は突出せず、端部は丸くおさめている。４は復元口径１９㎝の鉢状の土器である。器壁は分厚く、内面はヘラケズリの後ヘラミガキを施している。外面には火を受けているらしく、赤く変色している部分が見られる。ＳＩ０１に同様の土器の例が認められる。

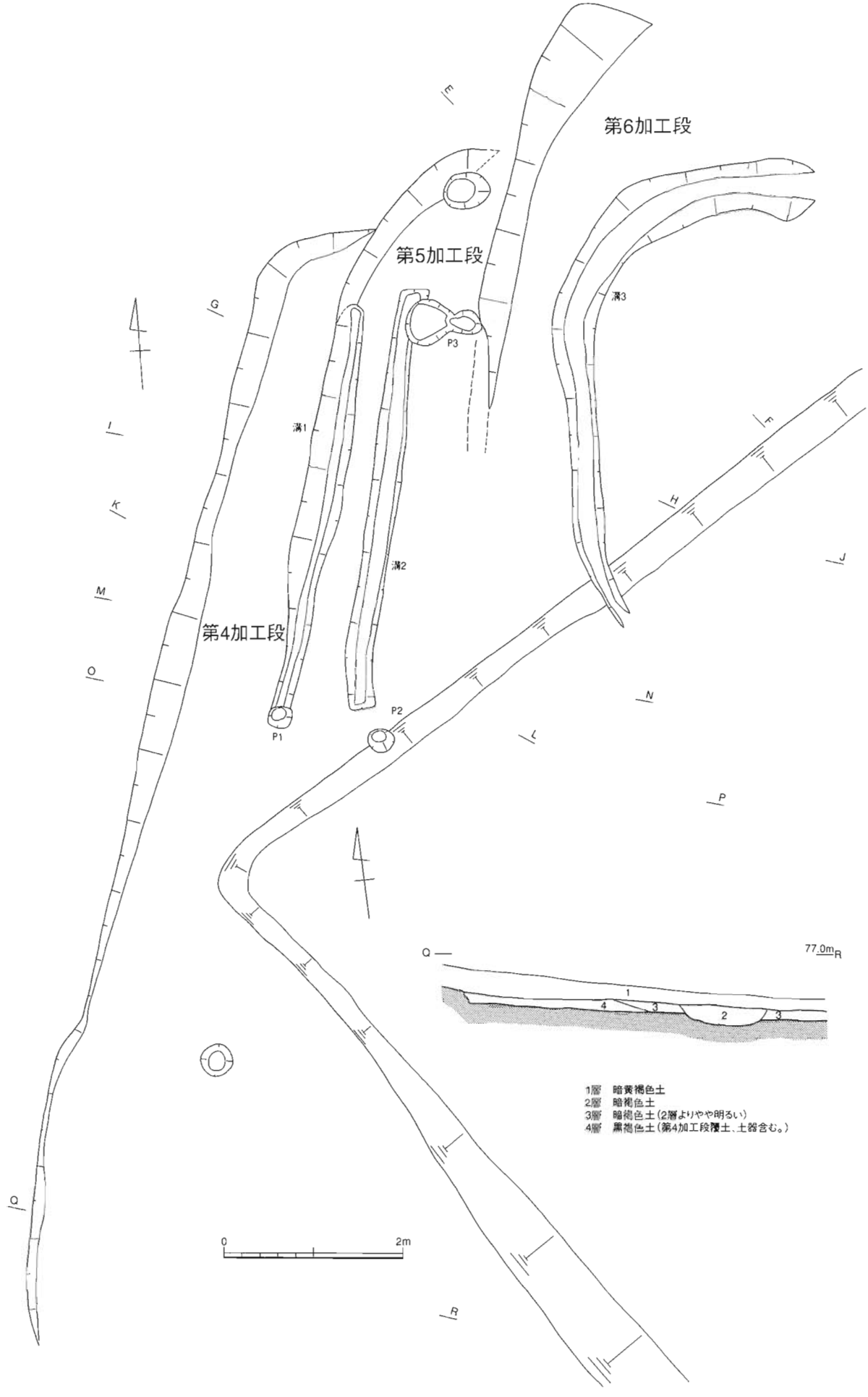
第３加工段（第７６図）

第２加工段とほぼ同一レベルの約３０m北側で検出された加工段である。斜面の背後を急角度で削り、前面に平坦面を設けたもので、検出部分で長さ８mにわたっており、平坦面の幅は広い部分で３mを超える。壁際には幅２０～３５㎝、深さ１５㎝程度の溝が設けられている。平坦面に明瞭な柱穴等は認められなかった。

この加工段の壁の内側には、弧状の溝状の落ち込みが２本検出された。加工段の床が弧状の落ち込みの覆土上に続くことから、加工段形成以前のものである。南側の落ち込みは長さ約７m、幅が１～２m、深さは深いところで約６０㎝を測る。北側の落ち込みは長さ約６m、幅１.５m前後で、深さ６０㎝を測る。ともに地山とよく似た覆土で、締まりもよいため、かなり古い段階で形成され



第71図　野津原Ⅱ遺跡東区第３加工段出土遺物実測図（S=1/3）



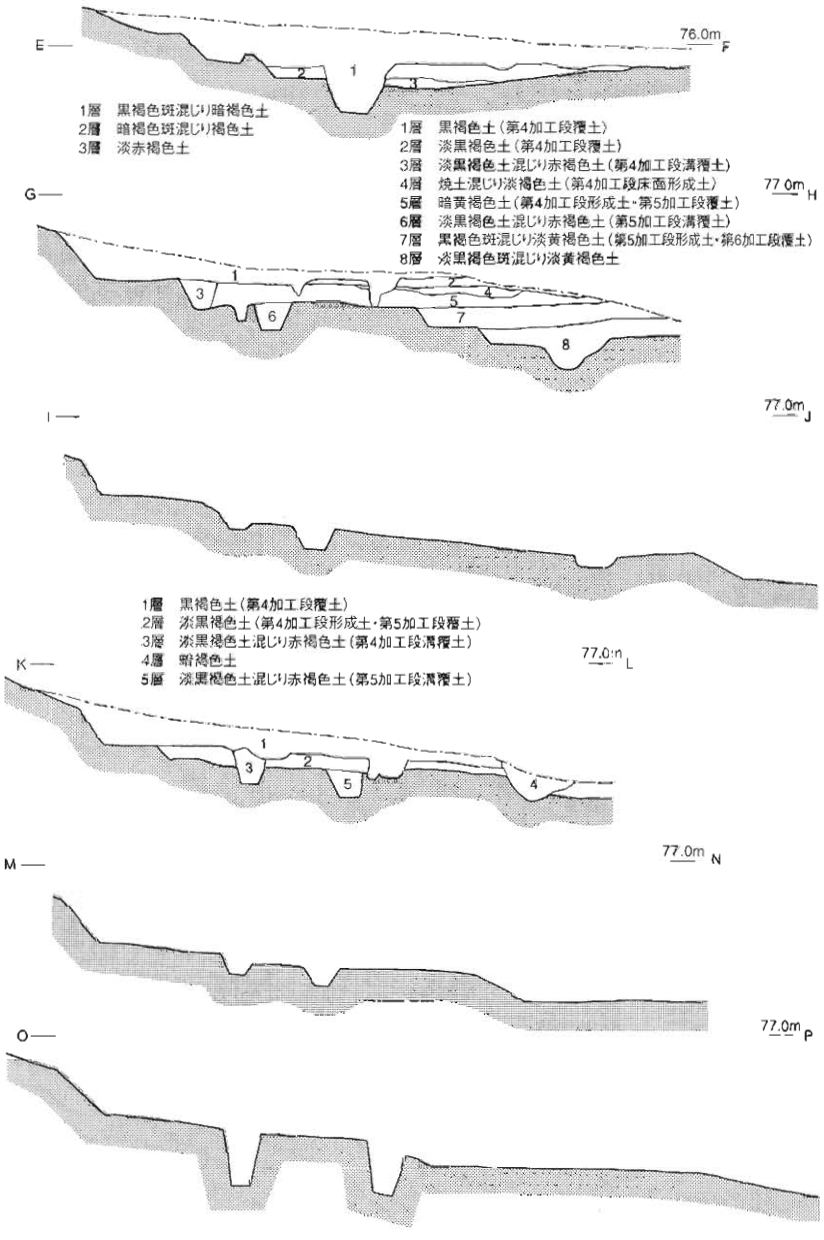
第72図　野津原Ⅱ遺跡東区第４加工段・第５加工段・第６加工段実測図（S=1/60）

た可能性が高い。遺物等は出土していないため、時期や性格等は不明である。

第３加工段出土遺物（第７１図）　１は口径２２.３cmを測る甕の口縁部である。口縁部の形態は個所によって若干異なっているが、中途で折れ曲がるように外方に開いており、端部に向かって細くなって丸くおさめている。複合口縁部の稜は突出していない。全体に風化が著しく、施文や調整は不明瞭だが、口縁外面に擬凹線は見られない。２は口径１５.９cmの甕の口縁部である。口縁部は外方に開いて立ちあがり、中途で折れ曲がり気味に端部に向かう。端部は若干先細りになり、丸くおさめる。調整等は風化のため不明瞭だが、口縁外面に擬凹線は見られない。３は床面出土で、小片のため不正確な復元だが、復元口径２０cm前後の甕口縁部である。口径の割に立ち上がり部の長さが３cm弱と比較的短い。口縁部は外方に開いて立ちあがり、端部に向かって先細りになっていく。４は大型の壷もしくは甕の底部である。平底で、底径は１０cm前後、底の厚さは１.５cmと厚い。

５は器台の受部と考えられるが、天地が逆で脚台部となる可能性もある。筒部の径が６cmと比較的小さく、受部、脚台部に比して筒部が長いタイプとなるだろう。筒部から受部にかけてはさほど屈曲点なしに移行しており、外面の稜は下方に突出させている。全体的に風化が著しく、受部外面の擬凹線の有無は不明である。６は復元口径１５cm前後の器台受部と考えられる。器壁が６～７mmと口径に比して分厚く、内面はヘラケズリの後ヘラミガキを行っているようである。外面には１条の単位の細かい擬凹線を施している。

７は暗灰色で緻密な石材を利用した打製石斧である。長さ１５.６cm、刃部幅が８.４cm、基部幅が５.５cm、厚さが２.４cmを測る。周縁全体に調



第73図　野津原Ⅱ遺跡東区　第４加工段・第５加工段・第６加工段土層断面実測図（S=1/60）

整加工を入れて、若干刃部が撥形に開く整った形態に仕上げている。背面と側面の一部には自然面を残している。

第４加工段（第７２図）

第３加工段の約１０m下方、南東側に伸びる尾根の付け根東側に当たる部分で検出された段平坦面である。後に述べる第５加工段の床面よりさらに上の面に、第４加工段の床面が続いていることから、第４加工段が新しいことが分かる。おそらくは第５加工段上方を削り込んで、その土砂を第５加工段に盛ることでこの第４加工段は形成されたものと考えられる。

検出時点で、長さ１３mに及ぶ長い平坦面で、南側は背後の壁が浅くなって消滅しており、さらに長く伸びていた可能性もある。柱穴等はあまり検出されていないが、平坦面の北半部分に、長さ４.７m、幅２０～３５cmの細長い溝（溝１）が検出されている。深さは２５～３０cmの断面台形を呈しており、南端にはピット（Ｐ１）が重なっている。溝の両端は明らかに立ち上がって終結しており、排水等の機能は考えられない。この溝の南北両端の約１.２m下方（東側）には、直径３０cm前後の柱穴が合い対応するように検出されており（Ｐ２，Ｐ３）、あるいは布掘建物状の建物の一辺を形成していた可能性もある。先行する第５加工段にもほぼ同規模、同形、同方向の溝が見られることからも建物が建て替えられたと考えるのが合理的であるが、対応する反対側の辺は検出されていないうえ、建物とするにはあまりにも幅が狭いという問題点がある。

第４加工段出土遺物（第７４図）　１は口径２８.１cmとやや大型の甕の口縁部である。口縁はわずかに外反しながら立ち上がり、端部に向かってわずかながら厚みを減じながら、先端は丸くおさめている。２は口径２２.８cmを測る甕口縁部である。口縁部はわずかながら外反気味に立ちあがり、外面には複合口縁部の稜部分ぎりぎりまで１４条程度の擬凹線を施している。端部に向かってはほぼ同じ厚みで、先端は丸くおさめている。

３は復元口径２０cmの甕口縁部である。口縁はわずかに外反しながら大きく外方に開いて立ち上がり、外面下半には４条程度の櫛状工具による比較的振幅の整った波状文を施している。複合口縁部の稜は、鋭くはないものの明らかに意識的に横方向へ突出させている。口縁端部に向かってはわずかながら厚みを減じていき、先端は丸くおさめている。外面には煤が付着している。４は壷または甕の底部である。底面は径２.６cmと小さいながらも明らかな平底である。底の厚さが１.１cmと厚く、内面はヘラケズリを施している。

第５加工段（第７２図）

第４加工段のすぐ下方に検出された平坦面である。第４加工段の項で述べたように、この加工段を埋めて第４加工段が形成されていることから、明らかに第５加工段が古い。また下方にある第６加工段との関係は、第５加工段が第６加工段の床面より上に堆積した土砂によって床面が作られていることから、第５加工段の方が新しいことが分かる。

第５加工段は、第４加工段よりも北端がやや北側にずれて始まっている。第４加工段との段差は１０～２０cmと浅いため、南側に向かっては段差を検出することができず、長さは不明である。床面では第４加工段と同様の細長い溝（溝２）が検出されている。この溝は長さ４.７５m、幅が２５～３５cm、深さが２０～２５cmの断面台形を呈す。南北両端は明瞭にコーナーを持って収束している。第４加工段のものとはわずかに北側にずれて始まっているが、ほぼ同規模、同形、同方向である。布掘建物の一辺と考えたいが、やはり対応する反対側の辺は検出されていない。

第５加工段出土遺物（第７４図）　５は復元口径１９㎝を測る甕である。口縁部は若干折れ気味に外反しながら、外方に開いて立ちあがる。口縁外面には、櫛状工具による振幅の小さい波状文が施されている。波状文は複合口縁部の稜から端部に至る全面に施されるが、中央付近はわずかに窪んでいるため施文が浅く、不明瞭となっている。口縁の立ち上がり部は４㎜前後と薄手で、端部は丸くおさめている。頚部下方の外面には、擬凹線が施されている。６は蓋と考えられる個体である。つまみ部分には、小孔の痕跡が見られる。

第６加工段（第７２図）

第５加工段の下方（東側）で検出された、斜面の背後をカットして形成された平坦面である。第５加工段の項で述べたように、第５加工段が第６加工段の上の土層上に床面を続けていることから、第６加工段が古いことが分かる。加工段の始まりは、第５加工段よりも約１.５ｍほど北にずれている。隣接して検出された第４，５，６加工段は、基本的に下から上に向かって、位置をわずかずつ南側にずらしながら形成されたことが分かる。

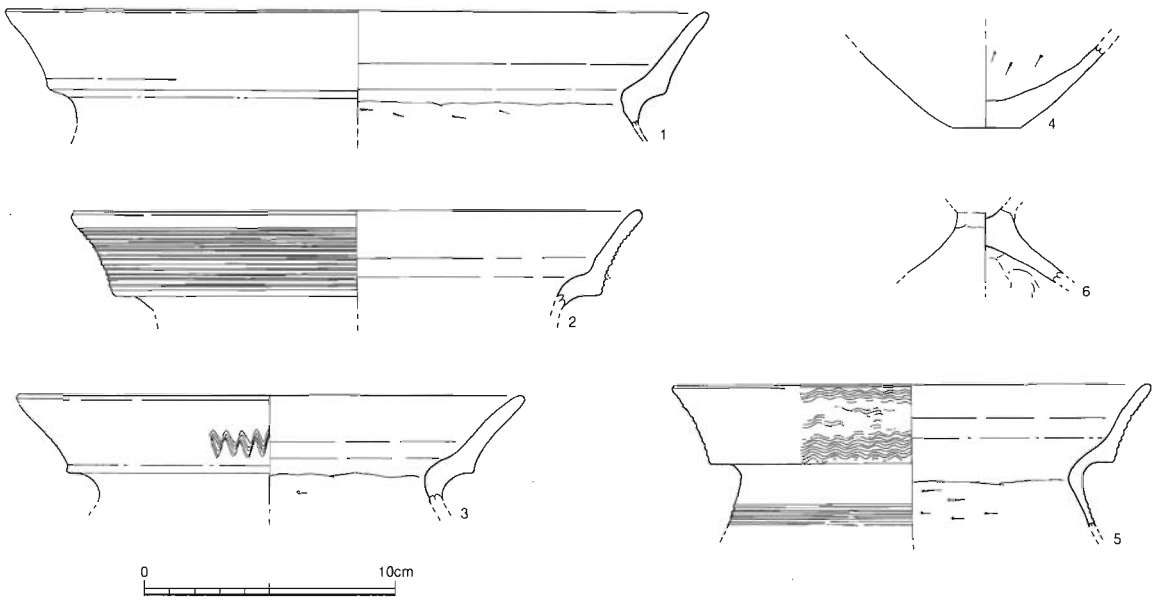
平坦面は、検出された部分で５ｍ弱であるが、さらに南に続いていた可能性はきわめて高い。床面から柱穴等は検出されていないが、東側にL字形の溝状の遺構（溝３）が検出されている。この溝は５ｍほど南に続いており、土層の関係からは第６加工段より新しいと考えられる。

３．土坑

南東に伸びる尾根の付け根にあたる緩斜面で、径１～２ｍほどの土坑が４基、並列するように検出された。いずれも覆土の色調や締まり具合が似通っており、互いに時期が遠くないものと推測された。うち２基は底面にピットを伴っており、落とし穴の可能性が高い。検出順にＳＫ０１～ＳＫ０４と名づけた。以下順に記述していきたい。

ＳＫ０１（第７５図）

南東に伸びる尾根の付け根にあたる西端付近、ＳＩ０１の東側で検出された土坑である。規模は上端で径２ｍ、下端で１.１×０.７５ｍ、深さは検出面から１.５ｍとかなり深い。覆土は竪穴住居跡や加工段などに比べ相対的によく締まり、淡褐色の斑が混ざるのが特徴で、炭も含まれている。



第74図　野津原Ⅱ遺跡東区　第４加工段（1～4）、第５加工段（5,6）出土遺物実測図（S=1/3）

底面には小ピットが２個所で検出された。そのうちの南側のピットは径２０㎝で深さが５０㎝と深い。縄文時代の落とし穴の可能性が高い。

ＳＫ０２（第７５図）

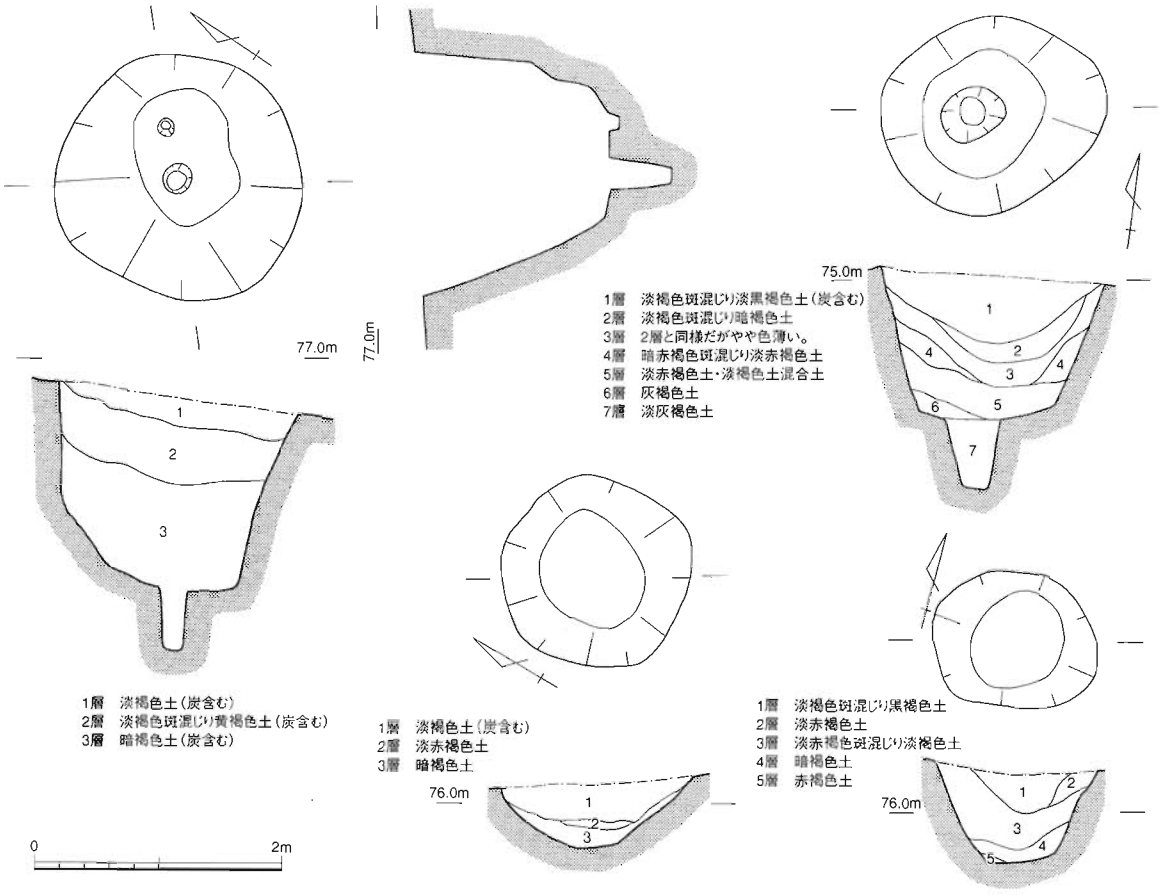
南東に伸びる尾根の付け根にあたる東端付近、ＳＩ０２の北側で検出された土坑である。規模は上端で１.８５×１.６ｍ、下端で径１ｍ、深さは検出面から１.２ｍを測る。覆土は中央が窪んだ堆積状況を示し、ＳＫ０１と同様によく締まり、淡褐色の斑が混ざるのが特徴で、炭も含まれている。底面には上端で５０×４０㎝、深さ５５㎝のピットが検出されている。縄文時代の落とし穴の可能性が高い。

ＳＫ０３（第７５図）

ＳＫ０２の西側約１２ｍの部分で検出された土坑である。径１.５ｍ前後、深さは５０㎝とＳＫ０１，０２に比べ浅い。底面は若干丸みを帯びている。尾根の付け根でも頂上筋にあたり、近辺のＳＩ０２の状況から見て、上面はかなり削平されていることも予想される。

ＳＫ０４（第７５図）

ＳＫ０３の西約６ｍの地点で検出された土坑である。規模は上端で１.３５×１.１ｍ、下端で０.８５×０.７ｍ、深さは検出面から０.８ｍを測る。ＳＫ０３と同様に尾根の頂上筋にあたることから、上面が削平されている可能性が高い。覆土はＳＫ０１，０２と同様によく締まり、淡褐色の斑が混ざるのが特徴で、炭も含まれている。



第75図　野津原Ⅱ遺跡東区　SK01・SK02・SK03・SK04実測図（S=1/60）

4．遺構に伴わない遺物

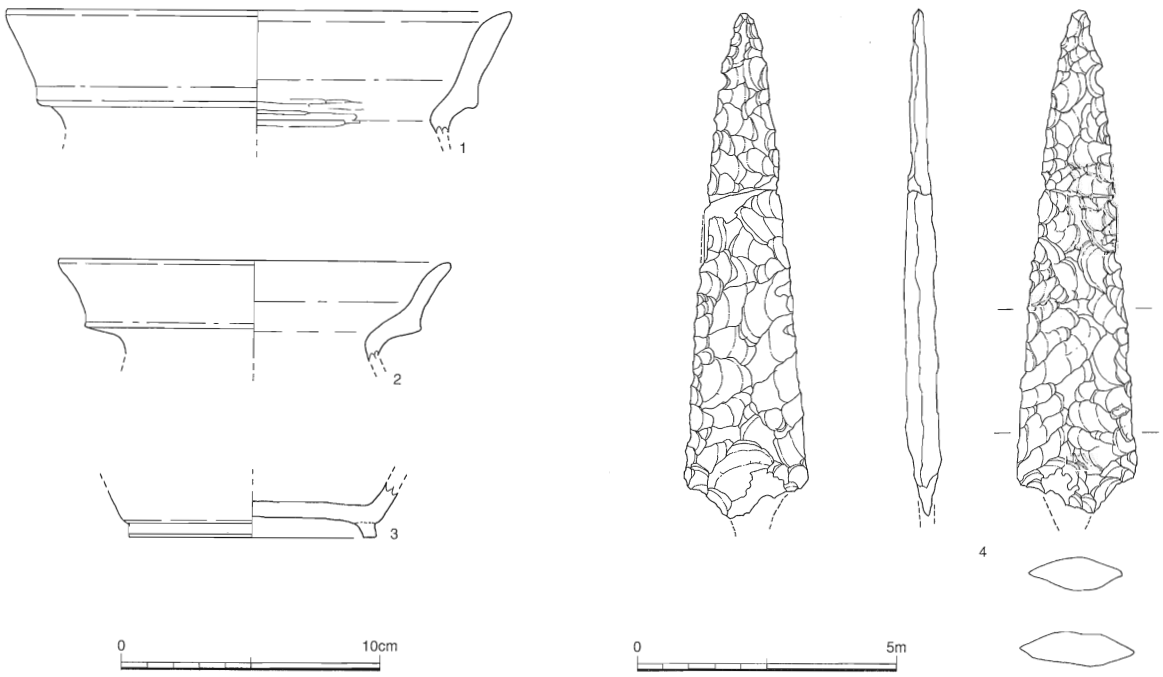
第７６図に野津原Ⅱ遺跡出土遺物の出土地点をドットで示している。これを見ると大多数は遺構内から出土し、遺構外からはまんべんなく出土するのではなく、一定の集中部をもって出土しているのが分かる。特に多く出土しているのは、調査区中央部付近の後世の撹乱溝の上方付近で、およそ５ｍの範囲内から集中して出土している。何らかの遺構が存在した可能性が高い。また第３加工

第76図　野津原Ⅱ遺跡東区　遺物出土状況（S=1/600）点線は遺構の存在が推測される部分

段の西側も、引き続いて遺構が存在していた可能性がある。

遺構に伴わない遺物の一部を掲載している（第７７図）。１、２が弥生土器の甕である。ともに外方に開いて立ちあがる複合口縁の甕で、外面に擬凹線は見られない。３はトレンチ調査時に出土した須恵器坏である。底部の外縁付近に高台がつくもので、奈良時代のものであろう。

４は安山岩製の有茎尖頭器である。中途と基部で折れているのは調査時の破損である。石材は表面が灰白色で強く風化しているが、新しい割れ面は黒色で緻密であり、サヌカイトの可能性が高い。長さは現状で９．８㎝、最大幅２．３５㎝、厚さが０．７㎝で、薄く均整の取れた形態である。茎部分には浅いながらも明瞭な返し部分が見られ、茎の形態は破損のため不明瞭だが三角形を呈していたものと考えられる。剥離面は不明瞭だが、斜め方向に深く剥離が進行しているようだ。縄文時代草創期のものであろう。



第77図　野津原Ⅱ遺跡東区　遺構に伴わない遺物実測図（1～3はS=1/3　4はS=2/3）

第４節　まとめ

１．縄文時代の遺構・遺物

縄文時代の可能性が高い遺構として、落とし穴と考えられる土坑が検出された。検出された土坑のうち２基には、底面に棒を挿したと推測される小孔が認められ、まず落とし穴と考えて間違いないだろう。これらの土坑は、南側斜面からさらに南に派生する尾根の付け根部分であり、同時に東西に降りる谷の谷頭部分にあたっている。獣を追い込んで落とし穴に陥落させる猟が行われたものかもしれない。

近年、出雲地方でも縄文時代の落とし穴と推測される遺構の検出例が増えてきている。東出雲町渋山池遺跡[註1]、四ツ廻Ⅱ遺跡[註2]、島田遺跡[註3]、松江市福富Ⅰ遺跡[註4]、八雲村折原上堤東遺跡[註5]などで、今後も類例は増えていくものと考えられる。縄文時代に一般的に落とし穴猟が行われていたのだろう。

遺物としては、有茎尖頭器が出土している。身部と茎部の間に返し状の段を持ち、茎部は欠損しているが逆三角形を呈すと考えられるもので、山陰地方では比較的よく見られる型式であろう[註6]。ただ本例は長さが幅の４倍程度と、従来知られている有茎尖頭器の中では身部が細長いのが特徴といえる。根鈴輝雄が指摘するように、山陰地方においてはこの地域が大山周辺と並んで尖頭器出土地が集中する地域である[註6]。有茎尖頭器は、近年の調査で宍道湖、中海周辺の低丘陵や段丘上で多くの類例が知られるようになった。この有茎尖頭器の出土地の傾向は、旧石器時代の遺跡の立地傾向と近いといえる。その一方で、後の縄文時代早期の遺跡は宍道湖・中海周辺ではほとんど知られていない。早期末から前期には数多くの遺跡が現れるが、その多くは低湿地に立地しており、有茎尖頭器の出土地とは異なる傾向を示している。縄文草創期の遺跡は、その立地上は旧石器時代の延長線上にあるといえるかもしれない。

２．弥生時代の遺構・遺物

①　検出された遺構の時期について

野津原Ⅱ遺跡東区からは、弥生時代後期の竪穴住居跡２棟、掘立柱建物跡１棟、斜面の背後をカットして平坦面を作り出した加工段が４ヶ所（加工段４～６は作り替えの可能性が高いため１ヶ所と数えた。）検出された。まずはこれらの遺構の時期について考えてみたい。各遺構から出土している土器は、大局的に見ればほぼ同じ時期の特徴を有している。土器の特徴の概略を記してみると、甕は口縁が外湾気味に外方へ立ち上がる複合口縁で、外面に擬凹線を施すものと施さないものの双方が認められる。鼓形器台は比較的筒部が細くて長く、受部、脚台部外面にはやはり擬凹線を施すものとそうでないものの双方が見られる。つまりプロポーションとしてはおおよそ同様の形態であるが、外面の擬凹線の有無で２者に分かれるということになる。

さて問題は、土器に見られる２者を時期差と見るかどうかである。それぞれの遺構を見ると、ほとんどが建替えや作り替えの痕跡が認められることから、一定程度の期間、これらの遺構が存続していた可能性が高い。その意味では、土器の２者に時期差を読み取ることも可能かもしれない。ただ、遺構出土の土器を見てみると、確実に伴うと考えられる土器は少ないものの、ＳＩ０１の古い時期の中央ピットから出土した甕には擬凹線は見られない。またＳＩ０２の建替えられた新しい床面や中央ピットから出土した甕、器台には擬凹線が認められる。こうしたあり方から見れば、単純に擬凹線の有無が時間の新古を表わしていないことは明らかである。よって、野津原Ⅱ遺跡東区の弥生時代の遺構は、甕や器台の口縁外面に擬凹線を持つものとそうでないものが共存する時期の内

に収まると考えられる。

それではこうした土器の特徴は、どの時期に比定されるのだろうか。複合口縁が外方に比較的長く延び、外面に擬凹線が施される時期といえば、従来の編年の九重式から的場式、草田遺跡編年[註7]で草田２期～３期の範囲であろうが、擬凹線の単位が小さく、器台も筒部の長さが草田２期ほど細長くはない。よってまず草田３期を上限と考えたい。

上限を草田３期として、下限も草田３期内に収まると考えてよいだろうか。口縁部外面に擬凹線を施す甕の形態を見てみると、草田３期併行の土器に特徴的な外面が湾曲して端部が膨らむ形態はほとんど見ることができない。大部分の甕が、厚みをほとんど変えずに端部に至るか、もしくは先端に向かって薄くなっているのである。こうした特徴は、次の草田４期に向かっての傾向といえる。筆者はかつて、安来市塩津丘陵遺跡群の報告を行った際、甕口縁のプロポーションは草田４期に近く、擬凹線が見られる個体と見られない個体が混在する土器群を、草田３期と４期の中間的な時期（塩津３期）として設定したことがある[註8]。もちろん小地域による変異もありうるので、確定的な評価は避けたいが、野津原Ⅱ遺跡東区の弥生時代遺構の中心的な時期は、おおよそは同様の時期（草田３期から４期への移行期）と考えておきたい。

②　弥生時代集落の性格について

野津原遺跡東区では、竪穴住居跡２棟、掘立柱建物跡１棟、加工段４ヶ所（加工段４～６は作り替えの結果、別の加工段となったと考えられるので、１ヶ所と換算している。）が検出されている。これらの遺構は第１加工段、第３加工段以外は２～３回の建て替え、作り替えを行っており、一定の期間存続していたものと考えられる。出土土器の型式は基本的に大きな違いは認められないことから、加工段の数に若干の変動があったとしても、検出された遺構がおよそ同時に併存していたと考えて大過ないと思われる。未調査区にまだ遺構が存在する可能性が高いので、さらにいくつかの遺構を加えて、一つの生活集団（いわゆる単位集団）を形成していたものと考えられる。隣接して野津原Ⅱ遺跡西区、山守免遺跡があり、両者と無関係ではないと思われるが、地形的に見て野津原遺跡東区は一定の独立した空間をなしている。現状で３遺跡の時期的な推移の検討を行っていないので、詳細は述べることはできないが、一定期間の併存があったとしても生活の基本的な単位としては異なる集団であった可能性が高い。

ところで、野津原Ⅱ遺跡東区は、頂上部が標高およそ９０ｍの丘陵部の斜面に存し、弥生時代の遺構が検出されたのがおよそ７５ｍ～８０ｍとかなり高所にあたる。現在水田となっている谷と集落跡との比高はおよそ６０ｍで、水田稲作を生業として生活していくにはかなり不便な立地といえるだろう。

この種の高所に立地する集落跡は、近年の発掘調査で数多く検出されてきている。安来市周辺では、典型的な高地性集落である陽徳遺跡[註9]を始め、かなりの遺跡例が知られ、弥生時代後期前半、後期末の２時期をピークに展開していることが分かってきている。宍道町でも中国横断自動車道建設に伴う調査で、本遺跡のほか、山守免遺跡、上野遺跡、上野Ⅱ遺跡、城山遺跡などで弥生時代後期の集落跡や土器などが出土している。

野津原Ⅱ遺跡東区は、草田３期～４期の集落跡であるが、この時期は安来平野での高所集落が展開する２番目のピークの時期に近いといえる。予測としては、野津原Ⅱ遺跡東区をはじめとする遺跡群は、安来平野など出雲全体の動向と密接に関わっていると考えている。すべてが何がしかの軍

事的な目的を持っているとは言い難いが、一定の社会的な緊張がその背景に存在した可能性は高いと思われる。ただ、近隣の他の遺跡群の動向もあわせて評価すべきであり、宍道町で検出されているこの種の集落の展開の意味について言及するのは、各遺跡の報告が出そろってからにしたい。

註７　赤沢秀則１９９２『南講武草田遺跡　講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５』鹿島町教育委員会

註８　梅木茂雄・丹羽野裕１９９８「塩津丘陵遺跡群出土の弥生時代後期後半の土器編年」『塩津丘陵遺跡群　－一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅱ』島根県教育委員会

註２　勝瀬利栄１９９６『四ツ廻遺跡・林廻り遺跡・受馬遺跡　－一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅲ』島根県教育委員会

註５　川上昭一１９９４『折原上堤東遺跡』八雲村教育委員会

註１　椿真治他１９９７『渋山池遺跡・原ノ前遺跡　－一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅶ』島根県教育委員会

註６　根鈴輝雄１９９８「山陰の尖頭器」『考古学ジャーナル』№４３５

註３　林健亮１９９７『岸尾遺跡・島田遺跡　－一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅴ』島根県教育委員会

註９　深田浩他１９９５『陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡　－一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１１』島根県教育委員会

註４　柳浦俊一１９９７『福富Ⅰ遺跡・屋形１号墳　－一般国道９号（松江道路西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２』島根県教育委員会

第７章　山守免遺跡

第１節　調査の経過と概要

(立地)

山守免遺跡は、八束郡宍道町白石に所在する。遺跡は、宍道湖から南側に約２㎞程はいった標高６７ｍの丘陵に立地している。遺跡の北側には、現在の町道による切り通しによって隔てられているが、本来は同一の丘陵尾根上と考えられる部分があり、野津原Ⅱ遺跡が存在している。

遺跡の存在する丘陵は、才地区の谷を良く見渡すことができる眺望の良い場所である。

(調査経過)

遺跡は平成７年度における分布調査によって発見され、平成９年の４月のトレンチ調査に基づき同年１０月から１２月及び平成１０年４月の二次にわたって本格的な調査をおこなった。なお調査対象面積は4,100㎡であり、調査区を３つに分かち実施した。トレンチ調査は、４月１４日～４月２３日に実施し、弥生土器、須恵器等の出土と加工段が検出されており、弥生時代から古墳時代後期の集落跡の可能性が想定されていた。

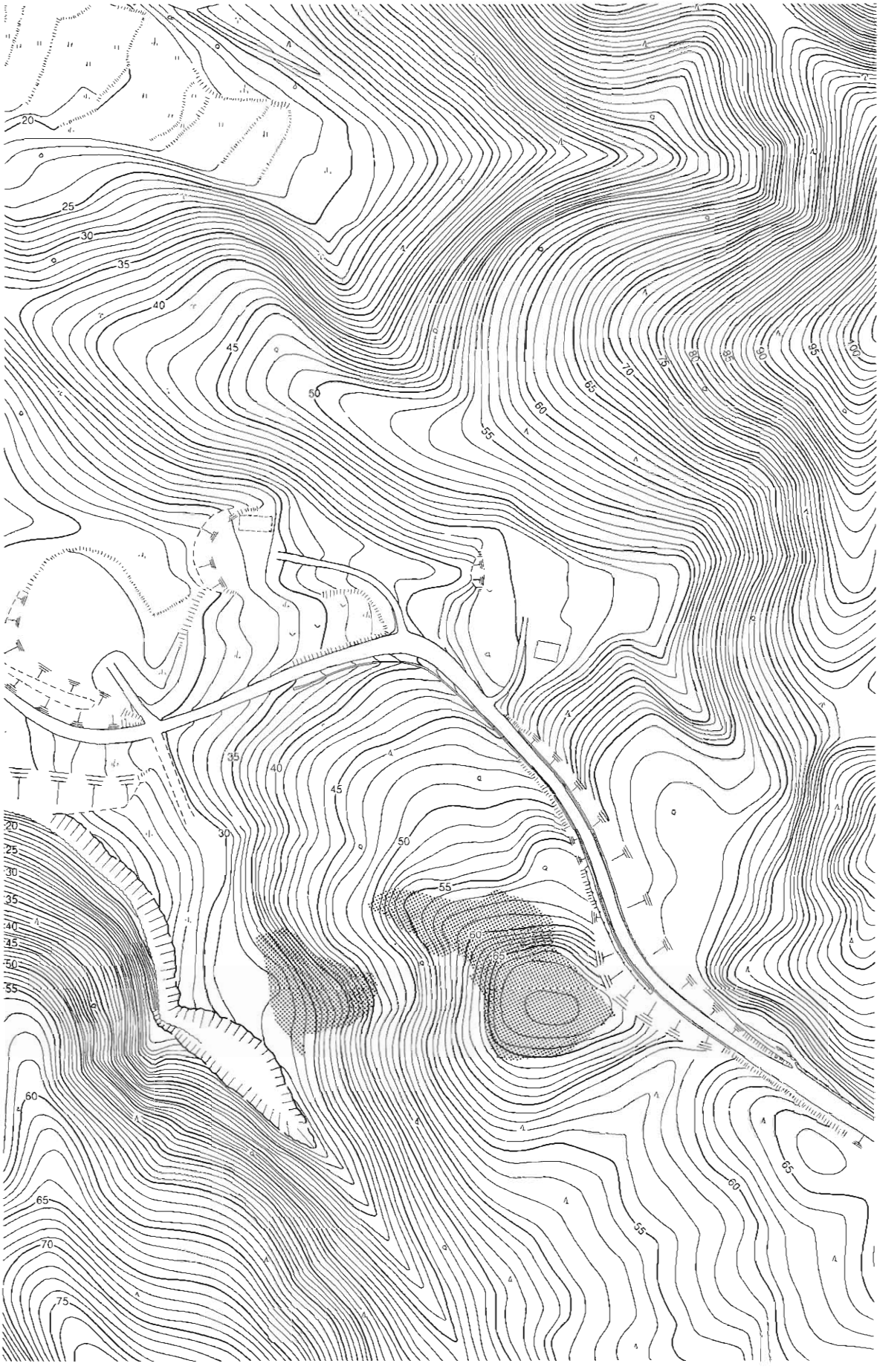
第一次本調査は、１０月１３日～１２月２２日まで実施した。まず重機による表土除去を１０月１３日から実施し、遺跡の最高所の尾根頂部から行い、地表面下２０㎝ほどを掘り下げた。重機掘削は調査区の１区と２区を終了した時点でいったん中止し、１０月１５日から人力による掘削を１区から開始した。１区では弥生時代の竪穴住居跡等の遺構を検出し、精査をおこなう一方で２区も並行して１１月５日より調査を開始した。また、この時点で作業員を増員して、５０人程で調査を行うことにし、３区も今年度調査を行うこととした。２区では竪穴住居跡１棟の外に土坑、ピット等を検出した。また、１、２区の調査と並行して、３区の表土掘削を１１月１４日から行った。表土掘削は、上方からの流入土が厚いところで６０㎝ほど堆積しており、それを除去することとした。３区の人力掘削は１１月１９日より開始し、古墳時代後期から奈良時代にかけての加工段を検出した。各区の人力掘削は１２月２４日に終了し、そして同日に空撮を行い調査は完了した。

第一次本調査において遺構が３区の下方に広がる可能性があったことから、平成１０年４月１日～４月１７日までに第二次本調査を実施した。調査は、３区の南西斜面下方についておこない、調査面積は、１６２㎡である。調査は、まず重機による表土除去を４月６日～１０日まで実施した。その際、斜面の下方２ｍの部分で大きく削平を受けていることが分かり、この部分まで本調査の範囲とした。そして、４月１３日から人力による掘削を開始し、古墳時代後期から奈良時代にかけての加工段を検出した。

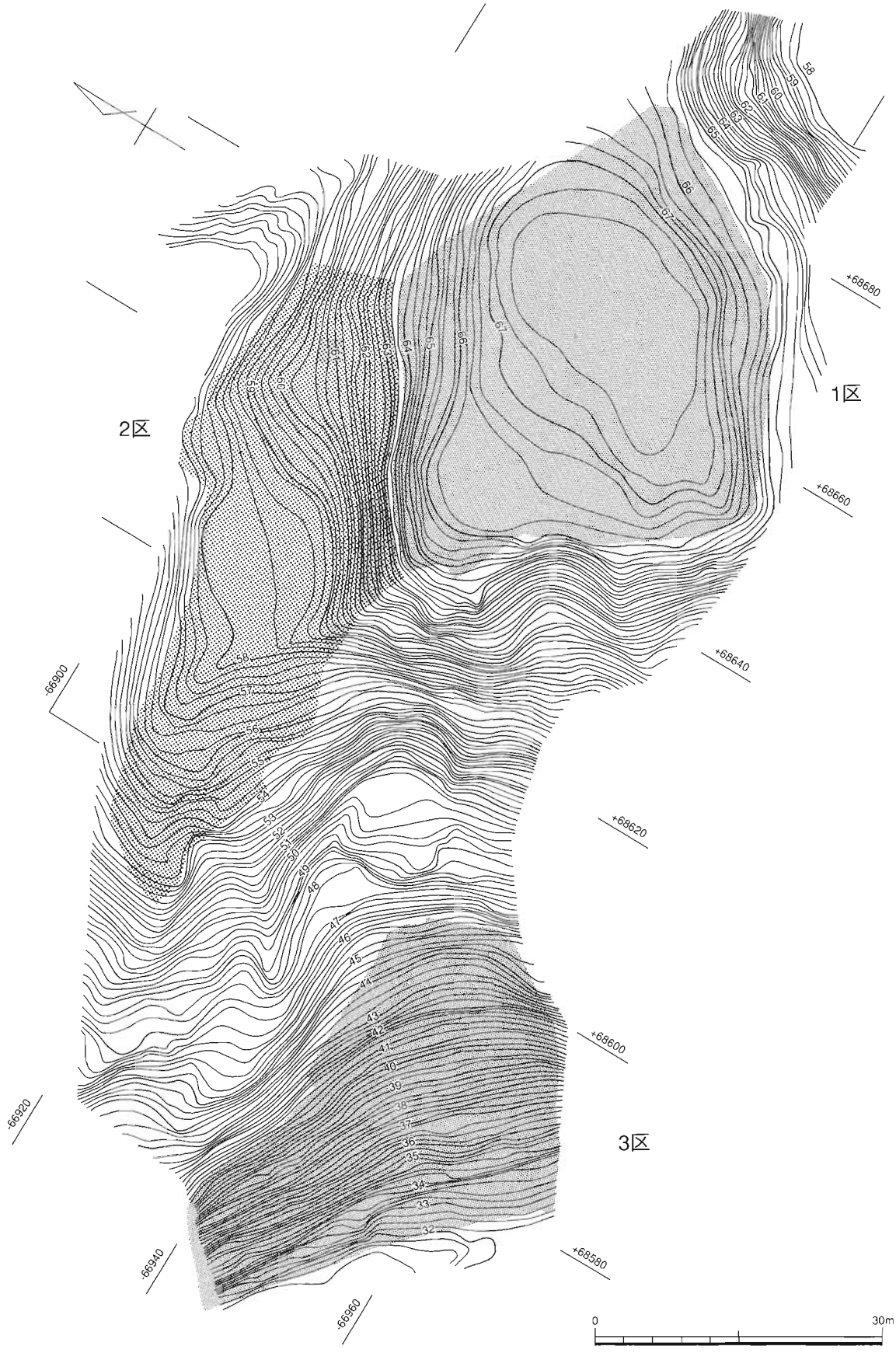
(検出遺構)

以下、調査で検出した遺構について概要を述べる。

１区は、標高６７m前後の尾根頂部にあたり、遺跡では最高所で、才地区の谷が見渡せる位置にあたる。調査前は山林で、尾根頂部は平坦面が広く認められるものだった。調査の結果、平坦面は弥生時代以降にいくらか削平されてできているものであることが判明した。また、西側斜面付近は



第78図　山守免遺跡周辺地形測量図（S=1/2,000）



第79図　山守免遺跡調査前地形測量図（S=1/600）

第80図　山守免遺跡調査後地形測量図（S=1/600）

地滑りにより、大きくコンターが乱れているものであった。検出遺構は、竪穴住居跡、溝状遺構、加工段等が存在した。なお、明確な根拠はないが、後世の削平によって竪穴住居跡が破壊された結果と考えられるものがいくつか存在している。

２区は、１区の北西側にあたり、急斜面部分から緩斜面にかけてを調査区としている。調査前から斜面の途中に平坦面が存在し、後世の改変の跡が見て取れたが、調査の結果からは、性格・時期等についての情報は得られなかった。検出遺構は、竪穴住居跡、土坑、ピット群がある。竪穴住居跡については、調査区外にのびる緩斜面にいくつかまだ存在している可能性が高いものと考えられる。

３区は、１，２区の南西の斜面、標高３０ｍ～４４ｍ付近にあたり、加工段、溝状遺構等を検出した。調査範囲の東側にも、遺構が広がっているものと考えられる。

１，２区と３区の間の未調査部分は、後世の改変や地滑り等が著しい場所であり、トレンチ調査でも遺構、遺物が検出できなかった。

（調査方法）

これまで述べてきたような過程を経て調査を実施してきたが、ここでは調査の方法について述べておきたい。調査は、まずコンター２５㎝で１／２００のスケールで地形測量図を作成することから開始した。そして掘削については、基本的にトレンチ調査の成果にのっとり、遺構面または遺物包含層までは重機を使用して表土や堆積土を除去している。重機掘削後には人力により掘削を行い、遺構の精査につとめた。１，２区については、包含層が存在していないことから、遺構面である地山付近まで重機により表土を除去している。また３区の包含層中の遺物については、調査区を４分割したものの中で取り上げを行った。

遺構検出後は、竪穴住居跡については土層観察用のベルトを十字に設定し、出土遺物は床面のものと覆土のものを分けた上で、出土位置をポイントとして記録した後に取り上げている。また、加工段の場合には２本以上のベルトを設けて掘り下げを行い、土層の図化は基本的に１本のみ実施し、出土遺物については竪穴住居跡と同様である。なお土坑、ピット等の遺構については、基本的に土層観察を１本のみ記録している。なお完掘後には、写真撮影を行った上で、スケール１／１０または１／２０で図化し記録している。

なお、出土遺物については、注記接合後、図化可能なものはすべて実測し、本報告書に掲載している。

第２節　遺構と遺物

１．１区の調査（第９７図）

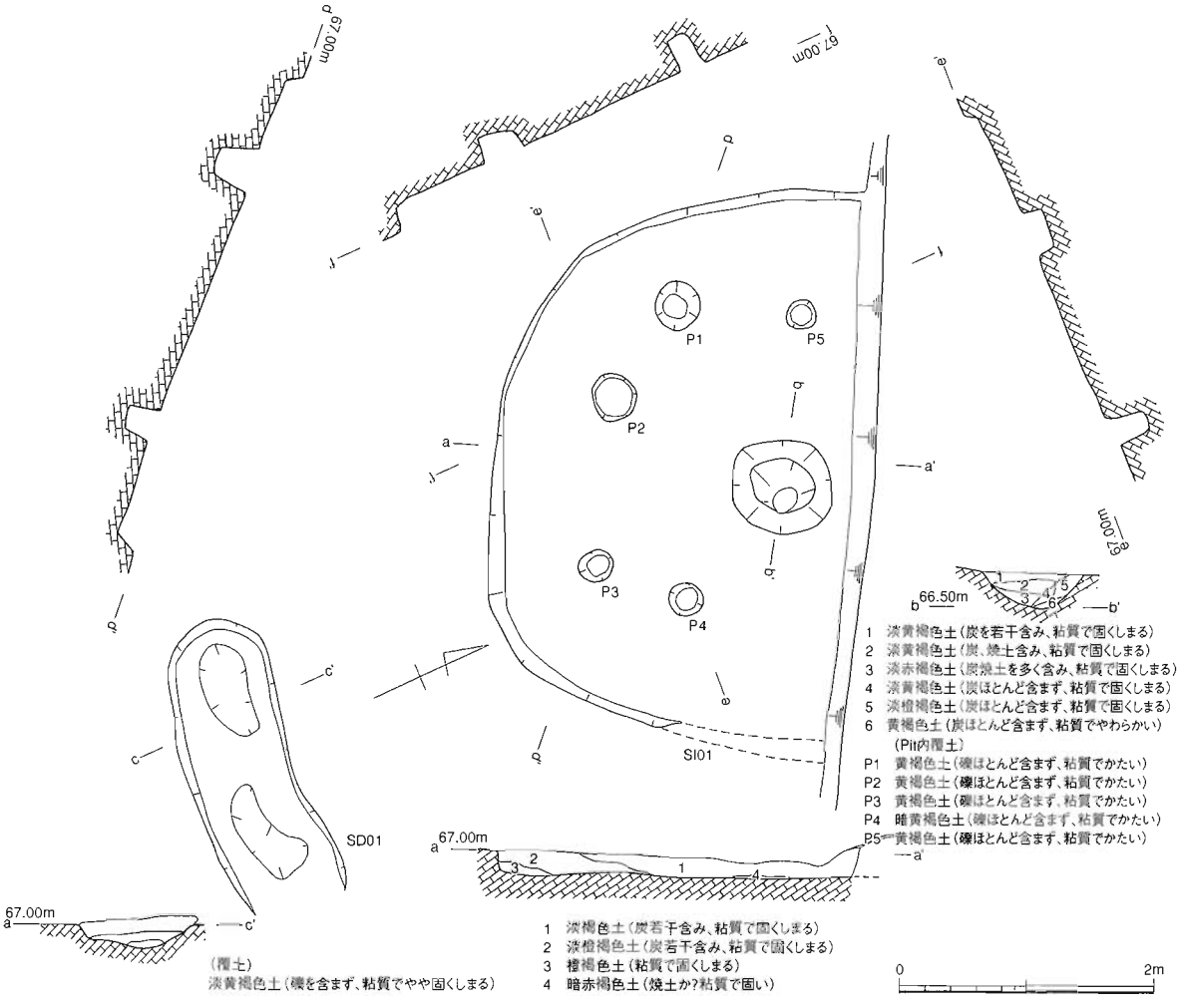
本調査区は、弥生時代後期の遺構が検出され、出土土器はすべてこの時期に属するものであった。遺構は、竪穴住居跡３、加工段２、溝状遺構（竪穴住居跡を廻るものを含む）４、土坑２、不明遺構１を検出している。以上の各遺構について順次述べていきたい。

（１）竪穴住居跡

ＳＩ０１・ＳＤ０１（第８１図）

調査区北東端の標高６７ｍ付近で検出した遺構である。遺構の一部は、現在の町道によって切り通しになっている部分に当たるために調査が不可能であったが、おそらく遺構の１／３はすでに失われているものと考えられ、遺構全体の様相については、確認できなかった。なお、調査は遺構の１／２程が対象となっている。

遺構は隅丸方形プランになるものと考えられ、壁の高さは約１８㎝を測るが、東側の壁は根による攪乱で明確に検出できなかった。また、壁際には周溝がめぐるものだが、調査では確実に押さえることが出来なかったが、本来は存在していたものと推測される。規模は、東西４.６ｍ、南北３.１ｍを測る。床面からはピット５基と、中央と考えられる部分から土坑を１基検出している。ピット



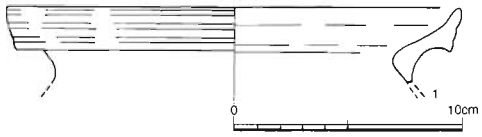
第81図　山守免遺跡１区SI01.SD01実測図（S=1/60）

の中で主柱穴については、遺構をすべて調査していないことから明確にはできないが、おそらく４本柱の建物であったと考えられる。床面はほぼ平坦で、土坑付近では焼土が認められた。遺構は基本的に南側からの流入土によって埋没しているものと考えられ、遺物は覆土に含まれる形で少数出土している。また、中央土坑の覆土は焼土、炭化物が含まれるものであった。

遺物は、床面から出土したものは無く、覆土に含まれたものと土坑中からの少数が出土している(第８２図)。このうち図化できたものは１のみである。複合口縁の弥生土器甕で口径２０㎝を測る。口縁帯外面には櫛描きの沈線が３条施されているものである。口縁の形態等から草田編年(註1)１～２期に相当する資料と考えられる。

またＳＩ０１の南側にはＳＤ０１が存在している。おそらくＳＩ０１に伴う溝と推測されるものである。溝は現状で長さ２.４ｍ、幅０.８ｍ、深さ０.２ｍの規模であるが、本来はＳＩ０１の周囲をめぐっていたものと考えられる。覆土は淡黄褐色土で、弥生土器の小片が出土している。

以上のことから本竪穴住居跡は、隅丸方形のプランで周囲に溝がめぐるものと考えられ、時期は確実に供伴する遺物はないが、弥生時代後期前半頃と考えて良いものと思われる。



第82図　山守免遺跡１区　SI01出土土器実測図（S=1/3）

ＳＩ０２・ＳＤ０３（第８４図）

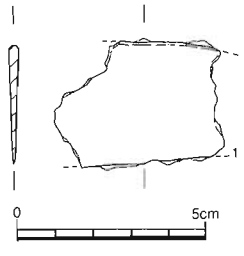
調査区の南西端に位置し周囲に溝（ＳＤ０３）がめぐる竪穴住居跡である。後世の削平によりほとんど壁が消滅しており、東側の一部が残存しているのみである。壁は高さ０.１ｍ程で壁際には幅０.２ｍ程の溝が添うものである。床面からはピット８基と中央付近から土坑１基を検出している。ピットは深さとその位置、覆土からＰ１、Ｐ４、Ｐ７、Ｐ８のグループ（Ａ群）とＰ２、Ｐ３、Ｐ５、Ｐ６のグループ（Ｂ群）の２つに分かれる。２つのピット群は、それぞれが主柱穴の４本柱の建物になり、おそらく立て替えの結果によるものと考えられる。Ａ群のピットは、径０.４ｍ前後、深さ０.４ｍ前後のもので、Ｂ群のピットは、径０.４ｍ前後で深さ０.２ｍ前後のものである。中央に位置すると考えられる土坑は円形を呈し、２段掘り状になっており、径０.７ｍ、深さ０.７ｍを測る。土坑の覆土は、２層に分かれ、下層程炭化物が多量に含まれていものである。これらのＡ、Ｂ両群のピット群の前後関係については、遺構の残存状況が悪いため、調査では明らかにできなかった。

出土遺物は、全く存在しないことから確実な時期は不明であるが、周辺の状況から考えて弥生時代後期前半頃に属するものと考えられる。

住居跡に伴い周囲をめぐる溝（ＳＤ０３）は幅０.７ｍを測り、円形に近い形でめぐっている。径は１０ｍ程であり、北西端は地滑りによりすでに失われている。覆土は白灰色で鉄器（第８３図－1）が１点出土している。

ＳＤ０３出土遺物（第８３図）

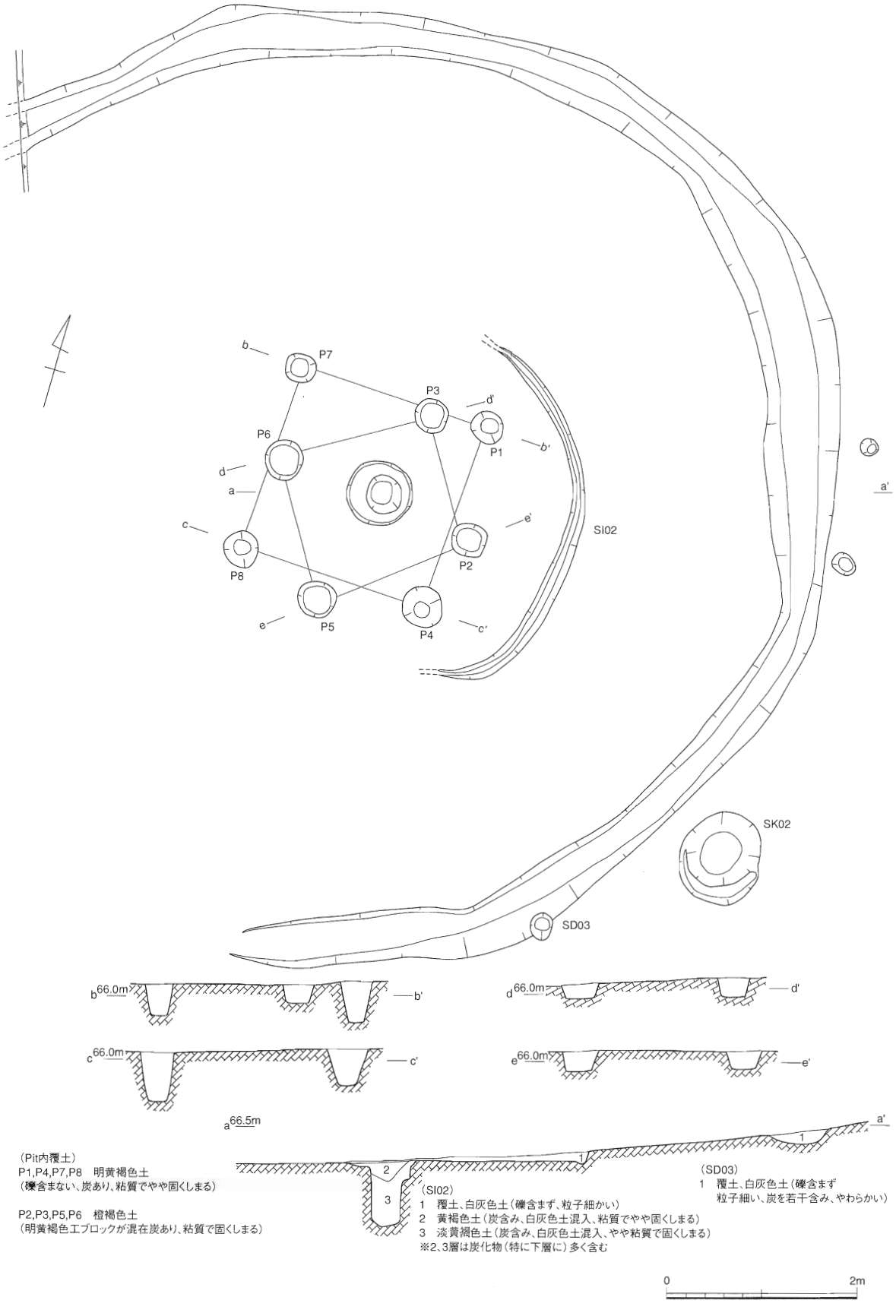
鉄器は、鉄鏃の破片と考えられるものである。幅３.３㎝、厚さ０.２㎝、長さ４.６㎝以上を測る。



第83図　山守免遺跡１区SD03出土鉄器実測図(S=1/2)

ＳＩ０３・ＳＤ０４（第８５図）

ＳＩ０２の北側に存在し、尾根頂部西側にあたる遺構である。ちょうど才地区の谷が見渡せる位置にあり、眺望の最も良い場



第84図　山守免遺跡１区　SI02.SD03実測図（S=1/60）

所である。

遺構は、隅丸方形プランの他の住居跡と同様周囲に溝（ＳＤ０４）が伴うものである。壁の高さは０.３１ｍを測り、壁際には幅０.２ｍ深さ０.０５ｍ程の浅い溝があるが、全周するものではなく北側と西側で途切れている。規模は東西５.５ｍ、南北５.７ｍを測り、北側へいく程東西の長さが狭い。

床面はほぼ平坦で、ピット１０基、土坑１基の外に北側と南側の２カ所に幅０.２ｍ、長さ１.５ｍ程の浅い溝を検出し、土坑周辺４カ所から焼土が確認された。ピットは、その深さ、位置、覆土からＰ１～Ｐ４（Ａ群）とＰ５～Ｐ８（Ｂ群）の２つのグループに分かれる。それぞれのピット群は、４本柱の建物の主柱穴になるものと考えられ、立て替えがおこなわれた結果と考えられる。Ａ群のピットの規模は、径０.３ｍ前後、深さ０.３５ｍ前後のものであり、Ｂ群のピットの規模は、不整形で、径は０.３ｍ～０.５ｍ、深さは０.１ｍ程と非常に浅いという特徴がある。

中央土坑は、不整円形を呈し径０.８ｍ、深さ０.４ｍを測る。覆土には、炭化物、焼土を含み最下層には砂が堆積していた。

建物跡に伴う溝（ＳＤ０３）は、幅０.６ｍ程、深さ０.１５ｍ程を測り、北西コーナーに添うように約２ｍ間隔を置いて存在している。東側部分のみが残存し、他の部分については、後世の改変により消滅していると考えられる。覆土より弥生土器（第８３図１）が出土している。

ＳＩ０３遺物出土状況（第８６図）

遺物は覆土から出土するものと、床面付近から出土するものの２つが存在する。量的にも少なく、小片であるため、器種等が判明するものは少数であった。床面から出土したものは弥生土器２点（第８７図６，７）と黒曜石の剥片１点（第８７図９）であった。

ＳＩ０３・ＳＤ０４出土遺物（第８７図）

弥生土器の甕口縁部（１，２，６）、底部（３，７）、甑形土器（４，５）、器台脚部（８）、黒曜石剥片（９）、黒曜石製石鏃（１０）が出土している。このうち、８の器台脚部は、溝（ＳＤ０４）から出土したものである。

２は、口径１１.２㎝で、口縁部はゆるやかにカーブを描いて若干外反し、端部は丸みを帯びる。口縁部外面には、風化で不明瞭だが、３条以上の擬凹線文を施す。

４は、甑形土器の把手部分で、下方部分に縦方向に取り付けられたものである。全体にナデにより仕上げられている。

５は、甑形土器の口縁部に付けられた「タガ」であり、幅が３㎝程のものである。

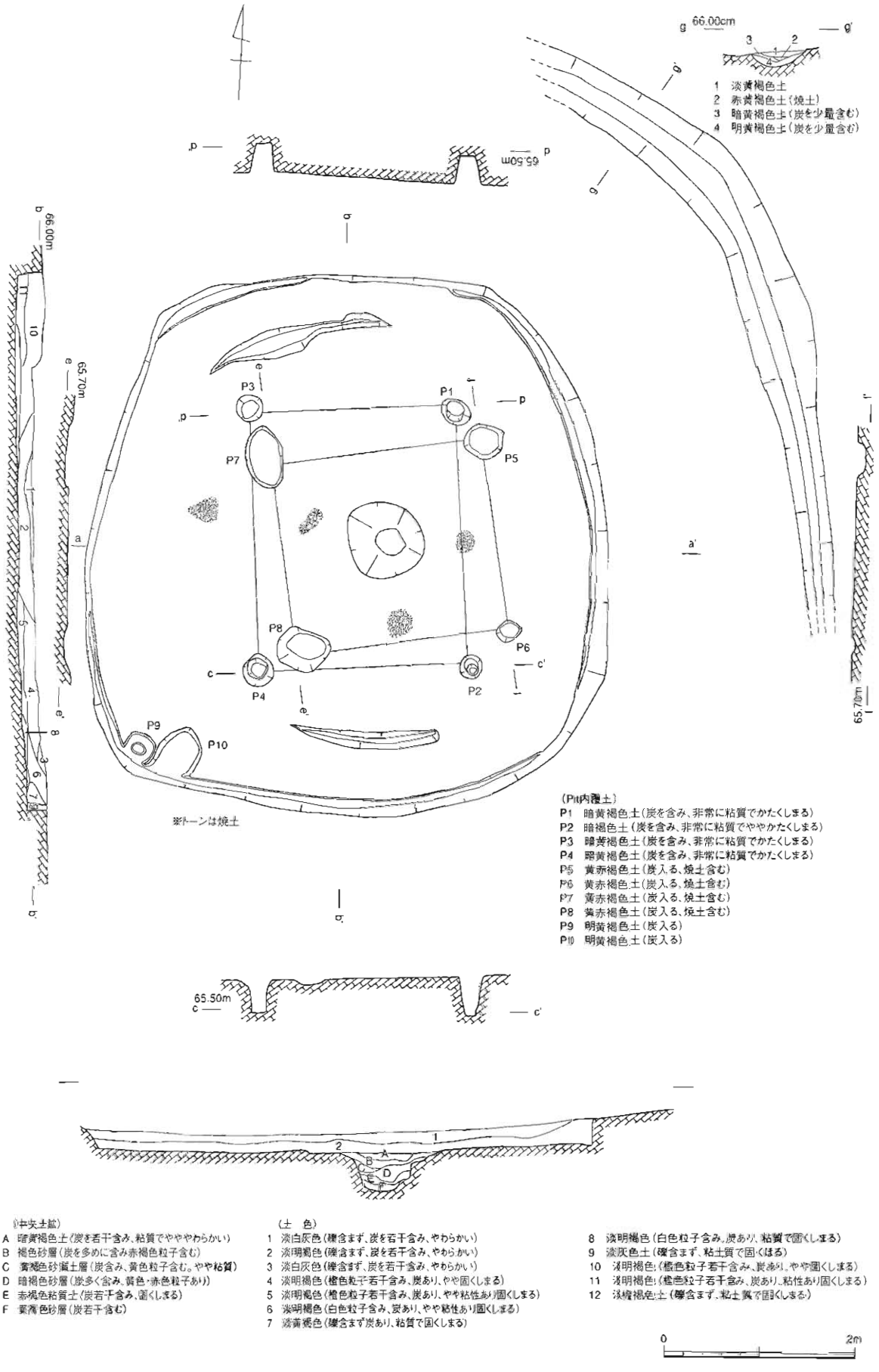
６は、口径１９.３㎝で、口縁部は、やや外反して立ち上がり、端部は面をもち、端部外面には８条の擬凹線文が認められる。

８は、脚径１６㎝で、脚端部には２条の擬凹線文が施されている。内面には、不明瞭であるが横方向のヘラケズリの痕跡が認められる。

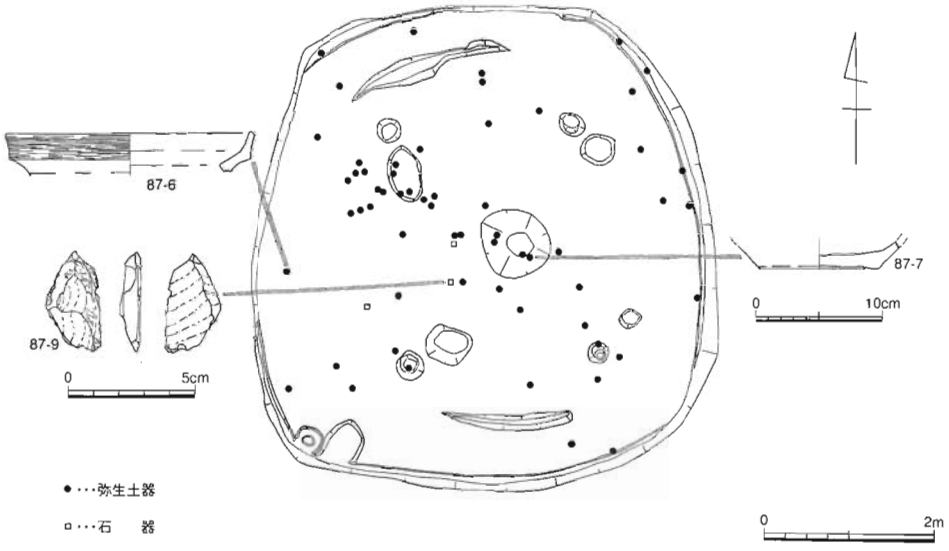
９は、長さ３.９㎝、幅２㎝、厚さ０.８㎝を測る。

１０は、凹基式の石鏃で、全長１.８㎝、幅１.１㎝、厚さ０.３㎝である。

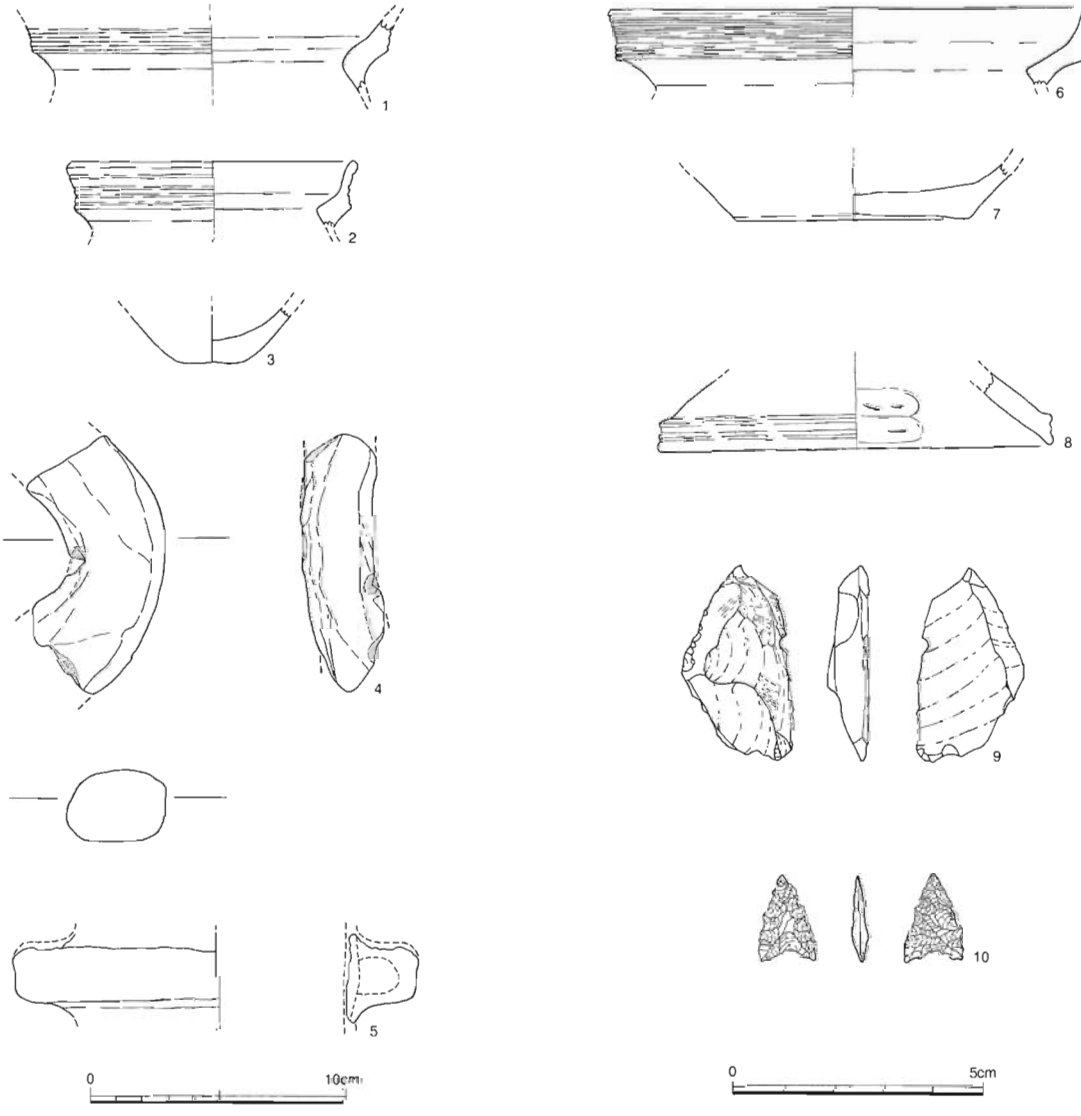
出土した弥生土器は、甕の口縁部の形態、擬凹線文の特徴から概ね草田１～２期としているものと同一と考えられ、検出した遺構もその時期のものと考えられる。



第85図　山守免遺跡１区　SI03.SD04実測図（S=1/60）



第86図　山守免遺跡１区SI03遺物出土状況（遺構S=1/90.土器S=1/6.石器S=1/3）



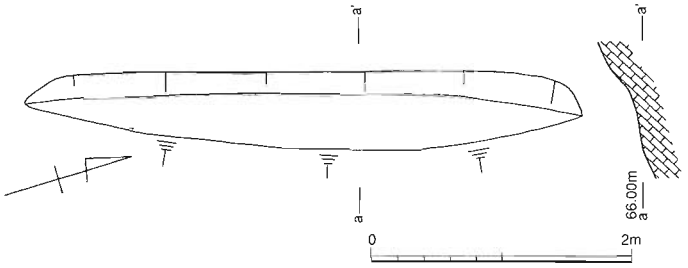
第87図　山守免遺跡１区　SI03.SD04出土遺物実測図（土器S=1/3.石器S=2/3）

（2）加工段状遺構

調査区の南西側の尾根頂部よりやや下方の斜面には、テラス状に加工した遺構を２つ検出した。２つともほぼ標高６６ｍ付近に存在しており、同時期で同一の性格をもっていたものと考えられるが、詳細については不明である。

ＳＢ０１（第８８図）

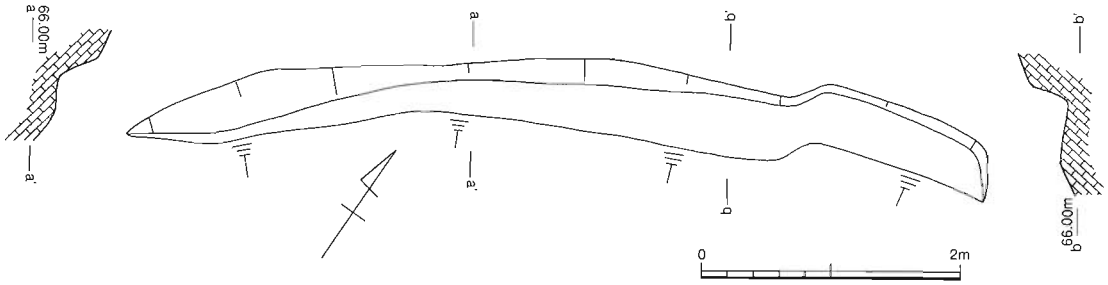
ＳＢ０１は、平面帯状を呈し、現存する規模は長さ４.３ｍ、幅は残りの良い部分で０.３ｍ、壁の高さは約０.１５ｍを測る。床面からは、壁際の周溝及びピット等は認められなかった。覆土は、黄褐色土で、遺物は、出土していない。



第88図　山守免遺跡１区SB01実測図（S=1/60）

ＳＢ０２（第８９図）

ＳＢ０１の南側に存在し、平面帯状を呈し、規模は長さ３.３ｍ、幅は残りの良い部分で０.２５ｍ、壁の高さは、約０.１５ｍを測る。床面からは、壁際の周溝及びピット等は、ＳＢ０１同様認められなかった。覆土は黄褐色で、遺物は出土していない。



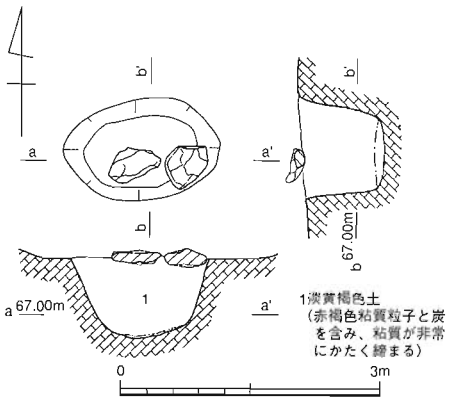
第89図　山守免遺跡１区SB02実測図（S=1/60）

（3）土坑

ＳＫ０１（第９０図）

調査区の南西側の尾根頂部６７m付近で検出し、後述する溝状遺構（ＳＤ０１）に囲まれるようにして存在する。

規模は、長径０.６ｍ、短径０.４ｍで、深さは０.３ｍを測る、平面が楕円形の土坑である。覆土は、淡黄褐色土で、覆土上面からは、石材が２点出土している。石材は、２点とも径２０cm程の扁平なもので、加工の痕等は認められないものである。また、この２点の石材と土坑の関係については、現状では不明である。遺物は出土していないため、遺構の時期は分からない。

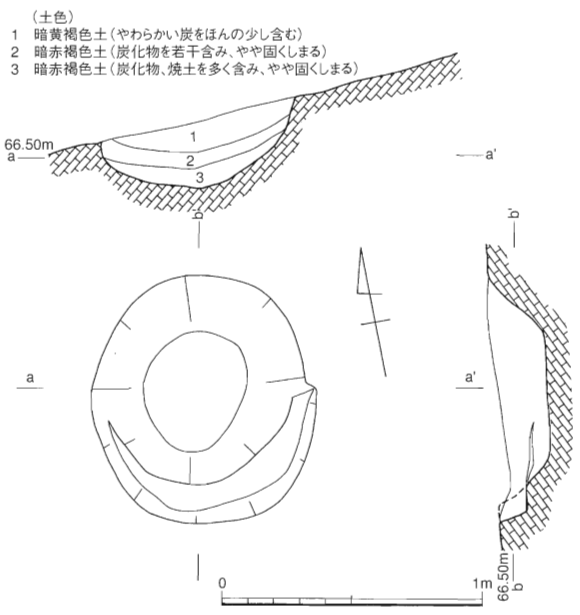


第90図　山守免遺跡１区SK01実測図（S=1/30）

ＳＫ０２（第９１図）

調査区の南西端のＳＩ０２の周囲を廻る溝（ＳＤ０３）に近接して存在し、壁面の焼けたいわゆる焼土土坑である。

規模は、径０.８５ｍ、深さ０.３５ｍ、の平面がほぼ円形の土坑である。覆土は３層に分かれており、下層に行くほど炭化物や焼土を多く含み、土が締まるものである。遺物は出土せず、時期については不明である。

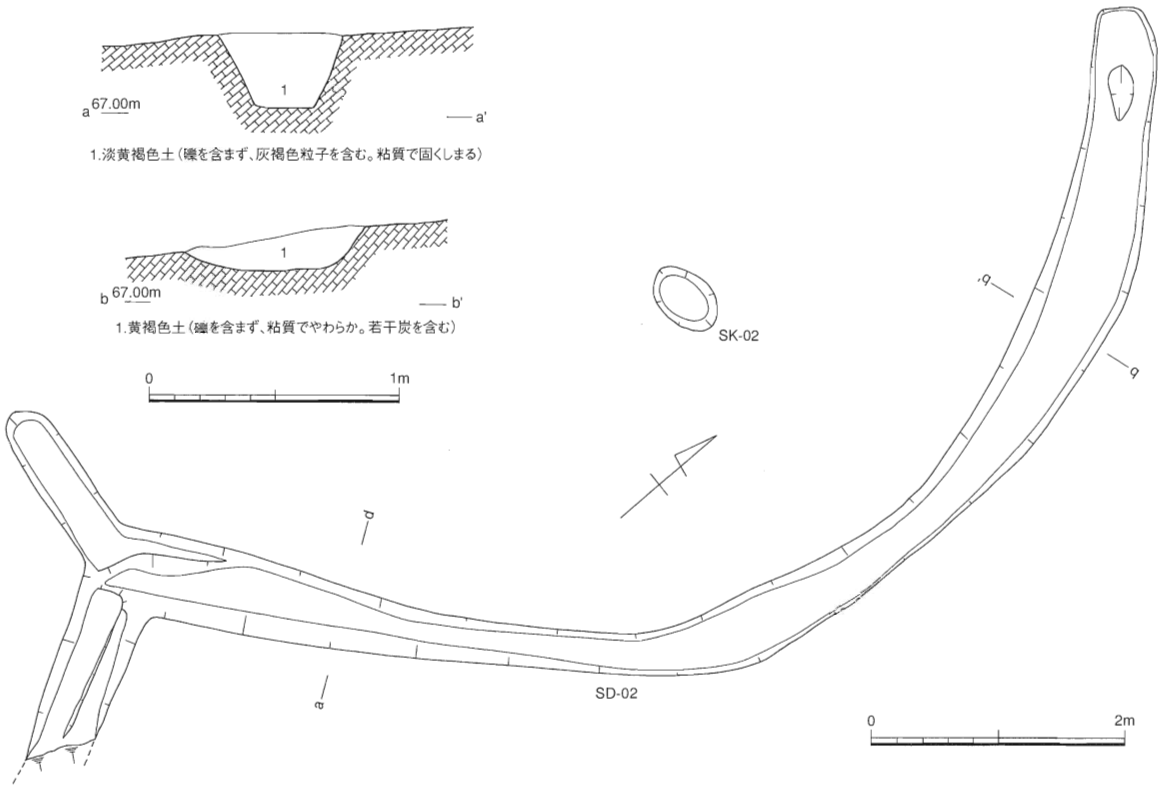


第91図　山守免遺跡１区SK02実測図（S=1/30）

（４）溝状遺構

ＳＤ０２（第９２図）

調査区の南西側の標高６７ｍ付近で検出し、尾根頂部から斜面に変わる場所に存在する。平面形は、弧を描いており、南側で２又に分かれる。規模は、径３.５ｍ程、幅０.３５～０.７ｍ、深さ０.３５～０.６ｍであり、底は、南側に向かって低く傾斜している。覆土は、黄褐色系の粘質土で、弥生土器が２点（第９３図１，２）出土している。また、溝で囲まれた部分（遺構の西側）からは、土器溜まりを検出し、弥生土器が１点（第９３図３）出土している。この溝の性格については、他で検出した住居跡を廻る溝である可能



第92図　山守免遺跡１区SD02実測図（平面図　S=1/60.土層図S=1/30）

性も考えられるが、明確には分からない。

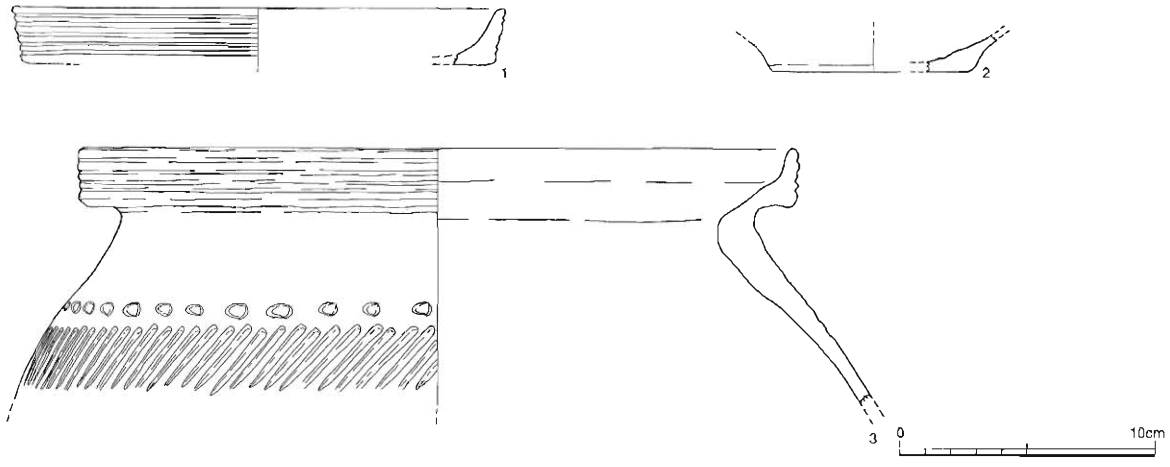
ＳＤ０２・土器溜まり出土遺物（第９３図）

弥生土器の甕口縁部（１，３）と底部（２）がある。いずれも風化が著しく、調整等が不明瞭である。

１は、口径１９cmを測り、口縁部は直線ぎみにやや外向きに立ち上がり、端部は丸みを帯びる。口縁部外面には、５条の擬凹線文を施す。

３は、口径２８.１cmを測り、直立ぎみに立ち上がり、端部は丸みを帯びる。口縁部外面には、４条の擬凹線文を施し、胴部上半には、竹管文と板状工具による刺突文が認められる。

出土した弥生土器は、概ね草田１～２期としているものと同一のものと考えられ、検出遺構もその時期と推定される。

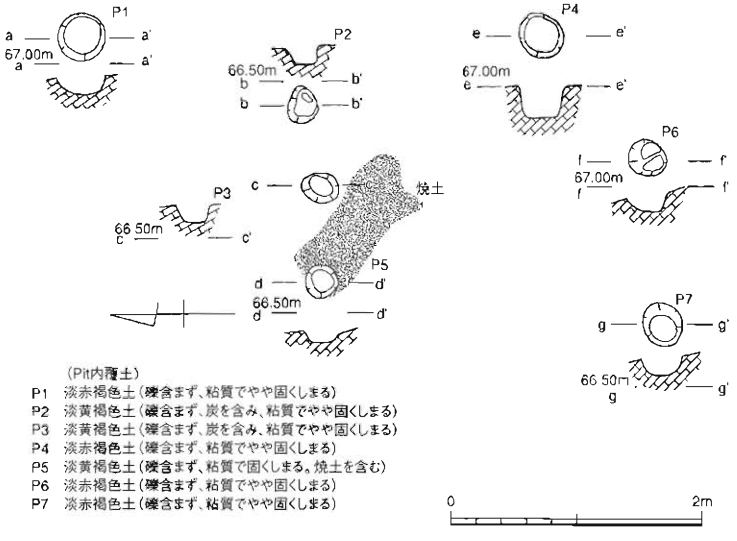


第93図　山守免遺跡１区SD02・土器溜まり出土土器実測図（S=1/3）

（５）不明遺構

ＳＸ０１（第９４図）

遺構は、尾根頂部のＳＩ０２，０３の西側標高６７m付近で検出し、焼土と周辺のピット群からなる。焼土は、東西１.２m、南北０.４mの範囲で広がり、この範囲からは、粘土が火を受け土器状になった塊（図版６９）がいくつか出土している。



第94図　山守免遺跡１区SX01実測図（S=1/30）

ピットは７つあり、いずれも径０.２５m程のものであり、深さは０.１５～０.２５mと比較的小さく浅いものである。また、ピットは不規則に存在し、並ぶものではなく、遺物の出土もない。

この遺構については、竪穴住居跡の壁体の失われたものである可能性も考えられるが、規則的に

並ぶピットがないことから、性格についての詳細は不明である。

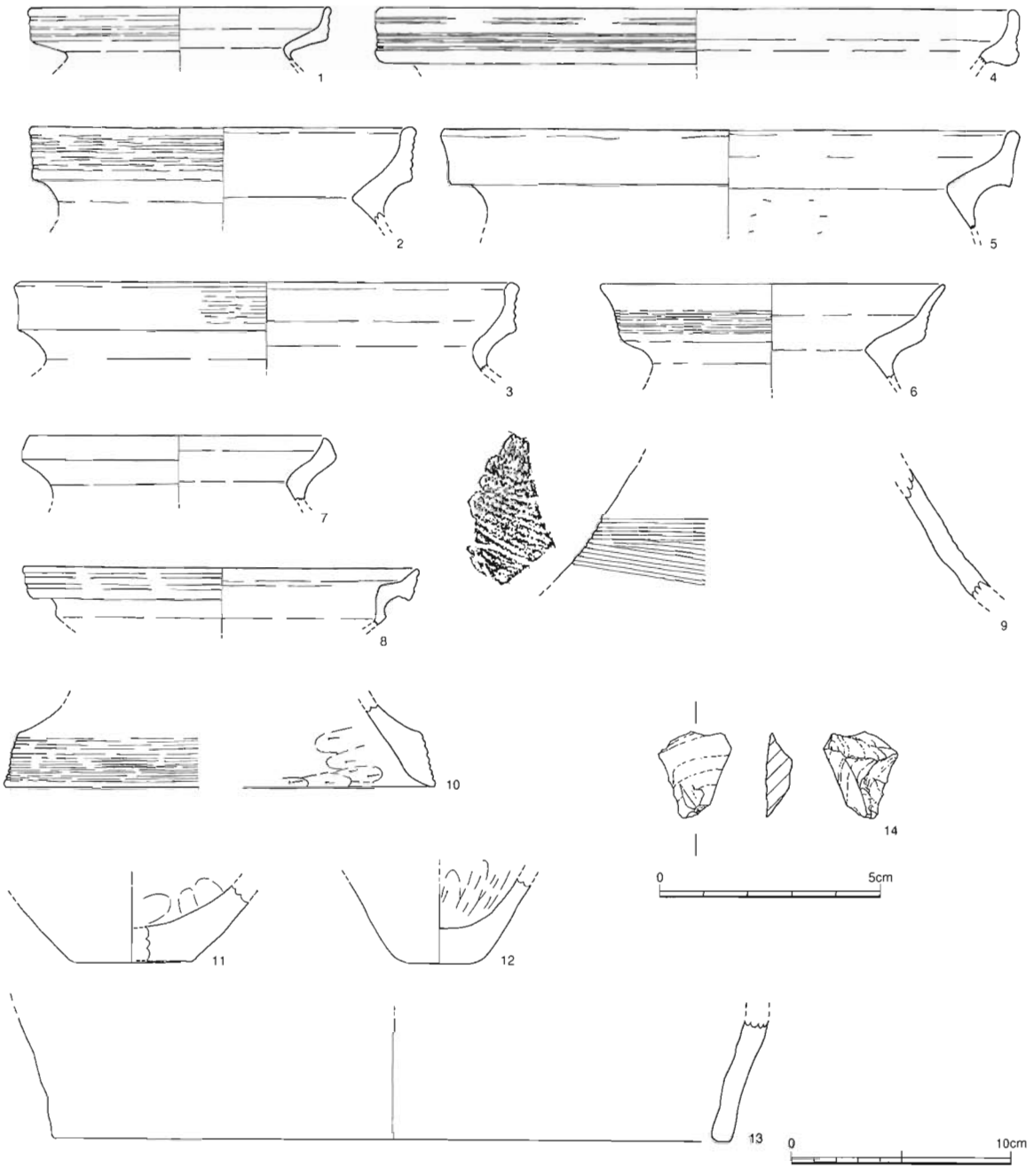
（６）遺構外出土遺物（第９５図）

遺構に伴わない遺物のうち図化できたものは計１３点あり、弥生土器甕（１～６）、壷（７）、高坏（８）、器台・高坏の脚か壷の頸部と思われる破片（９）、器台（１０）、底部（１１，１２）、甑形土器（１３）、剥片（１４）がある。

１は、口径１３.６cmで、口縁部は直立し、端部は丸みを帯びるものである。口縁部外面には、風化のため不明確だが、３条ほどの擬凹線文が認められる。

２は、口径１７.６cmで、口縁部は直立し、端部はやや肥厚し、丸く収まる。口縁部外面には５条の擬凹線文が施されている。

３は、口径２２.９cmで、口縁部の形態は２と類似している。口縁外面は、風化が著しく不明瞭



第95図　山守免遺跡１区遺構外出土遺物実測図（土器S=1/3.石器S=2/3）

だが、４条ほどの擬凹線文が施されていたものと考えられる。

４は、口径２９.２㎝を測り、口縁外面に５条の擬凹線文を施すものである。

５は、口径２５.８㎝を測る。口縁外面の施文状況は風化のため不明である。

６は、口径１５.６㎝を測り、口縁部は外反し端部は薄手である。外面には４条以上の擬凹線文を施すが、上半は風化のため分からない。

７は、口縁部が拡張せず、施文をしないもので、口径１３.４㎝を測る。

８は、口径１８㎝を測り、口縁外面に２条の擬凹線文を施すものである。

９は、小片のため詳細は分からないが、外面に３条単位の櫛描によるものと考えられる浅い沈線が認められ、内面には、ヘラケズリがおこなわれている。また、他の出土土器と胎土が異なり暗赤褐色を呈している点が注目され、搬入品である可能性が推測されるものである。

１０は、小片であり、脚径は不明である。外面には７条の擬凹線文を施し、ヘラミガキによる調整が認められ、内面の調整は、横方向のヘラケズリをおこなっている。

１１は、底径5.２㎝を測り、内面に指による押さえの痕が残るものである。

１２は、底径2.８㎝を測り、内面に縦方向のヘラケズリが施されているものである。

１３は、底径３１.５㎝を測り、大型品であることから甑形土器と推定しているものである。風化のため内外面の調整は不明である。

１４は、黒曜石の剥片であり、長さ1.９㎝、幅1.６㎝、厚さ0.６㎝を測る。

以上の出土遺物のうち、弥生土器は概ね草田１～２期に併行する時期のものと考えられ、遺構出土の土器と合わせて考えても、本調査区出土の弥生土器は非常に時期幅の狭いことが分かる。

２．２区の調査（第９７図）

本調査区は、弥生時代後期と古墳時代後期の遺構が検出され、弥生土器と須恵器が出土している。

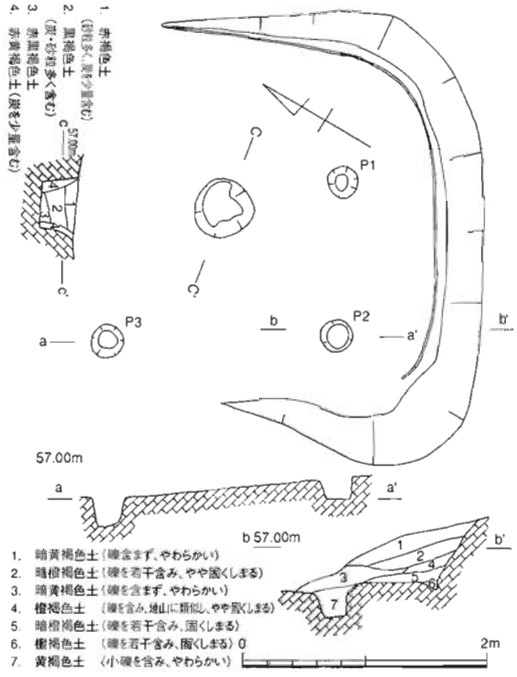
調査区の標高５８ｍ付近の平坦面の基本的な層序（第９７図下）は、地山上に淡赤褐色土、淡褐色土の順に堆積していた。遺構は、竪穴住居跡１、土坑４、不明遺構２を検出している。以下、各遺構について順次述べていきたい。

（１）竪穴住居跡

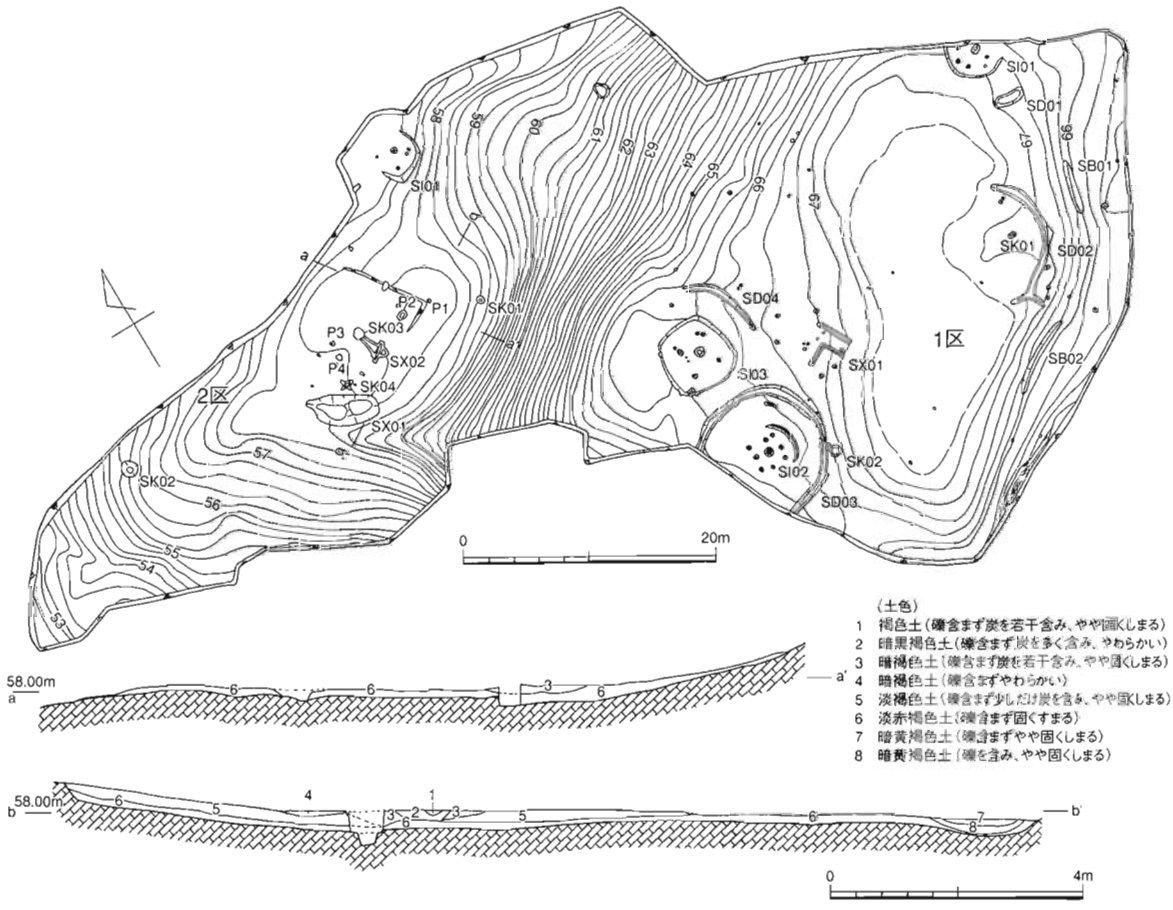
ＳＩ０１（第９６図）

遺構は、調査区の北端の標高５７ｍ付近で検出し、斜面側をカットして作っており、下方部分の壁体はは残存していなかった。平面形は、隅丸方形を呈し、壁の高さ０.５５ｍを測り、壁際には幅０.１ｍ、深さ０.１ｍの溝が沿っている。規模は、南北２.６ｍ以上、東西３.７ｍを測る。

床面は、ほぼ平坦で、ピット３基、土坑１基を検出している。ピットの規模は、径０.２８ｍ、深さ０.２ｍ前後のものであり、おそらく４本柱の建物の主柱穴になるものと考えられるが、北側



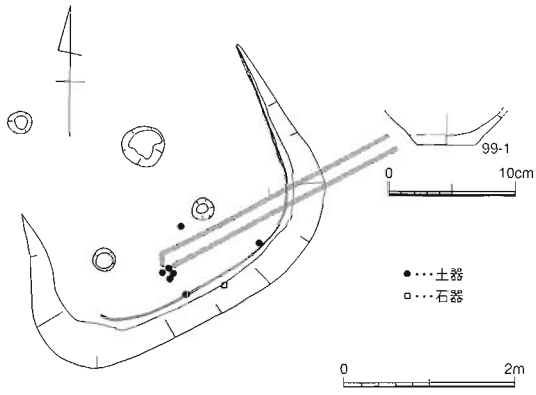
第96図　山守免遺跡２区　SI01　実測図（S=1/60）



第97図　山守免遺跡　１区・２区遺構配置図（S=1/600）２区土層図（S=1/120）

に存在すべき４つめの柱穴は、調査では検出できなかった。

土坑は、ほぼ円形の平面形を呈し、径０.２８ｍ、深さ０.２ｍを測る。覆土は、炭を含むもので、中層の２層は炭と砂を多く含むものであった。また、土層観察から切り合いが認められ、１度掘り返しをおこなっている可能性が考えられる。



第98図　山守免遺跡２区SI01遺物出土状況
（遺構S=1/90.遺物S=1/6）

ＳＩ０１遺物出土状況（第９８図）

遺物は非常に少量であるが出土している。地山から出土した底部（第９９図１）と甕胴部片の小片以外は、すべて覆土から出土している。

ＳＩ０１出土遺物（第９９図）

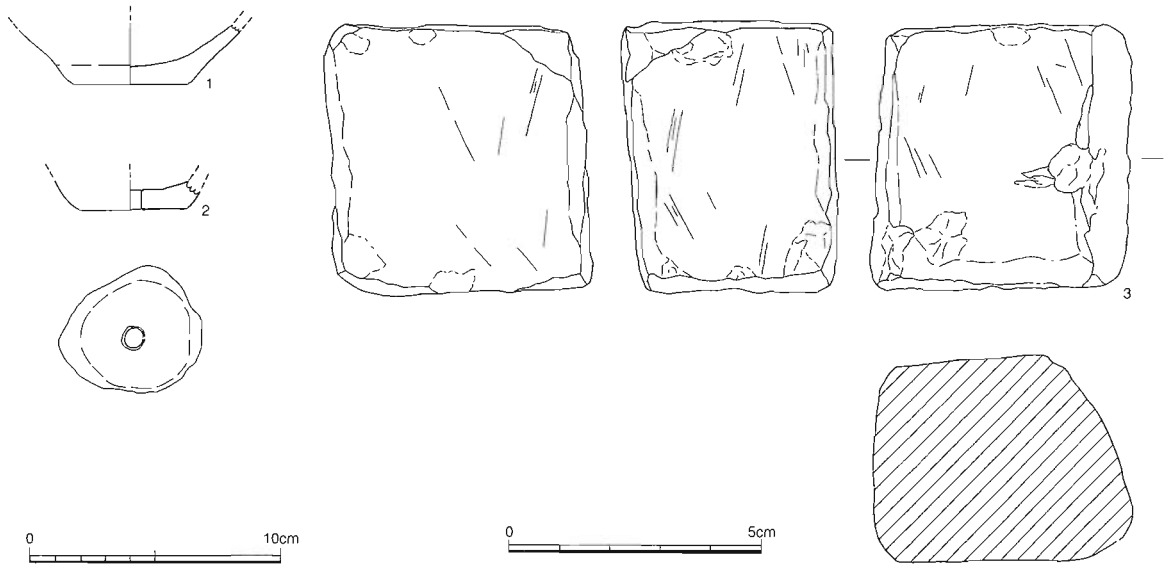
弥生土器と考えられる底部（１，２）と砥石（３）が出土している。

１は、底径４.８㎝を測る平底のものであるが、風化が著しく、調整等の詳細は不明である。

２は、底径４.３㎝を測り、底部に径０.８㎝の孔が穿たれている。風化のため明瞭ではないが、おそらく焼成後の穿孔によるものと考えられる。調整は風化のため不明である。

３は、白色を呈す非常に肌理の質の細かい岩石による砥石であり、長さ５.１㎝、幅５.１㎝、厚さ４㎝を測る。形状は、若干縦長の直方体であり、６面のうち小口以外の４面に研磨面が認められる。擦痕から見た研磨方向は、主軸からやや斜行するものがほとんどである。

以上述べてきた遺物のうち弥生土器は、底部であるため、詳細な時期については不明であるが、１区で出土している土器と胎土等が類似していることや、他の時期のものと考えられる遺物が無いことから、弥生時代後期前半頃の所産と推測される。

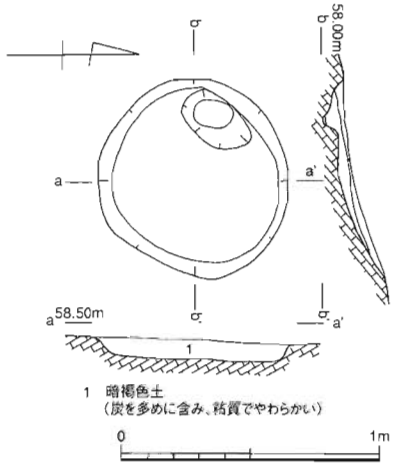


第99図　山守免遺跡２区SI01出土遺物実測図（土器S=1/3.砥石S=2/3）

（2）土坑

ＳＫ０１（第１００図）

遺構は、調査区の東側の標高５８ｍ付近の緩斜面で検出した。平面形はやや不整な円形を呈し、径０.８ｍ、深さ０.０７ｍを測る浅いものである。底の西側端には、径０.３ｍ、深さ０.７ｍ程の楕円形のピット状のくぼみが存在している。このピット状の窪みの性格については、良く分からないものである。覆土は暗褐色土で炭を含む。遺物は出土していないため、時期、性格等については不明である。

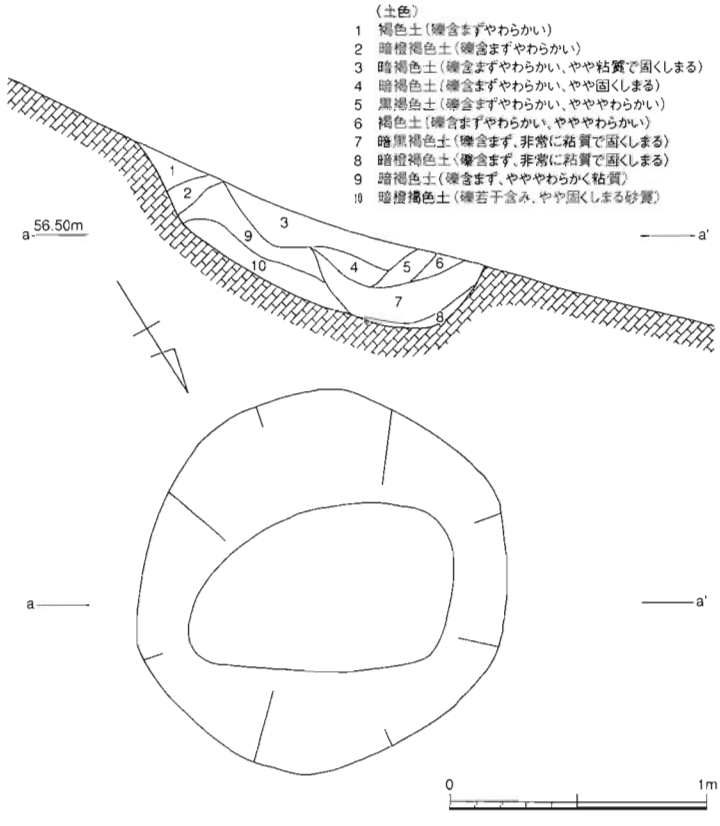


第100図　山守免遺跡２区、SK01実測図（S=1/30）

ＳＫ０２（第１０１図）

遺構は調査区の西側標高５６ｍ付近の斜面で検出した。周辺からは遺物、遺構等が見られず、単独で存在している。平面形はやや不整な円形を呈し、底面は西側に低く傾斜している。規模は、上端で径１.５ｍを測り、底面は楕円形を呈し、長径１.０２ｍ、短径０.６５ｍで、深さは０.３ｍを測る。遺物は、覆土の暗褐色土（３層）上面からは、須恵器壷（第１０３図１）が１点出土している。

出土した須恵器は、直口壷と考えられるもので口縁が欠けている。胴部最大径が１２㎝前後と考えられ、胴部外面下半を回転ヘラケズリ、上半を回転ナデするものである。焼成はやや不良で、軟質で淡灰色を呈している。時期については、この器種についての編年が整理されていないため明確にできないが、胴部の調整や形態から見て、大谷晃二の須恵器編年における出雲４期～５期のものと考えられ、古墳時代後期に属するものと考えて良いであろう。



第101図　山守免遺跡２区SK02実測図（S=1/30）

ＳＫ０３（第１０２図）

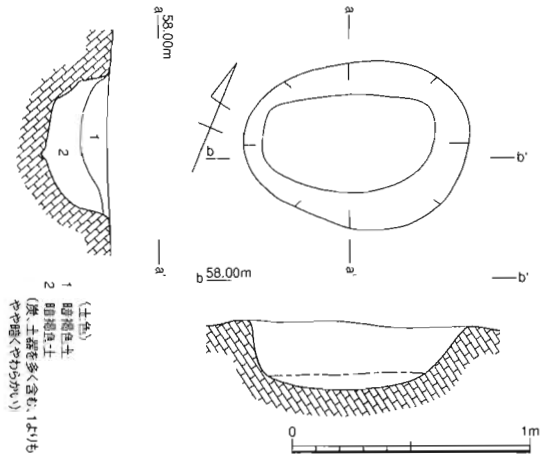
遺構は、調査区の中央部分、標高５８ｍ付近の平坦面で検出した。平面形は楕円形を呈し長径０.９５ｍ、短径０.７２ｍ、深さ０.２８ｍを測り、底は平坦である。覆土は２層で、下層からやや多めの炭化物と土器片（第１０３図２）が出土している。

出土した土器は、小片のため詳細は分からないが、上方の１区や本調査区で出土する基本的な土器が弥生時代後期に属しているものがほとんどであることから、おそらく弥生土器と考えられる。そういう見方をすれば、甑形土器の口縁付近に付く把手と推測されるものである。断面は径１.７㎝の方形を呈し、やや湾曲するものである。調整は、風化が著しく不明である。

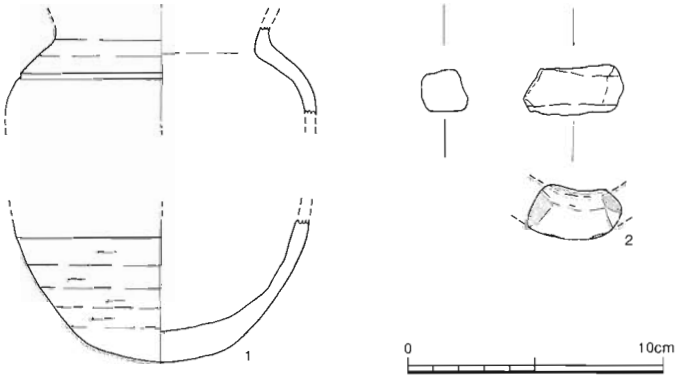
ＳＫ０４（第１０４図）

遺構は、ＳＫ０３が存在する同一の平坦面で検出した。一見、小形の箱式石棺にも見えるが、地山に含まれている軟質の板状の石材が割れているだけの可能性が高い。現地調査では遺構として判断していなかったが、一応報告するものである。

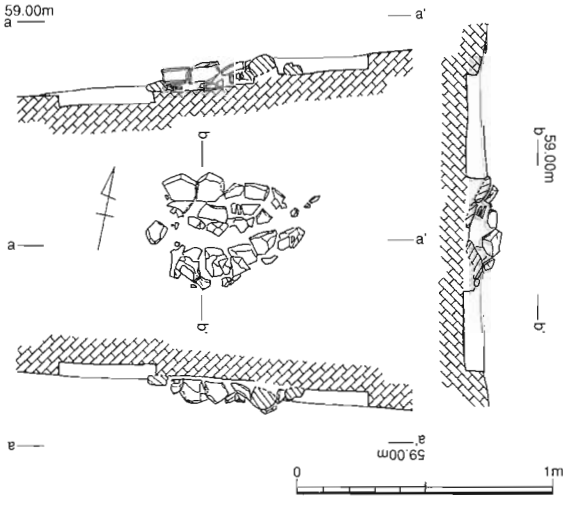
遺構の規模は、石棺としてみた場合内法で長径０.４５ｍ、短径０.２ｍ、深さ０.１５ｍを測り、平面形は、長方形を呈すもので、高さは０.１ｍ程と考えられる。覆土は暗褐色土層で、遺物の出土はなかった。



第102図　山守免遺跡２区SK03実測図（S=1/30）



第103図　山守免遺跡２区SK02・SK03出土土器実測図（S=1/3）



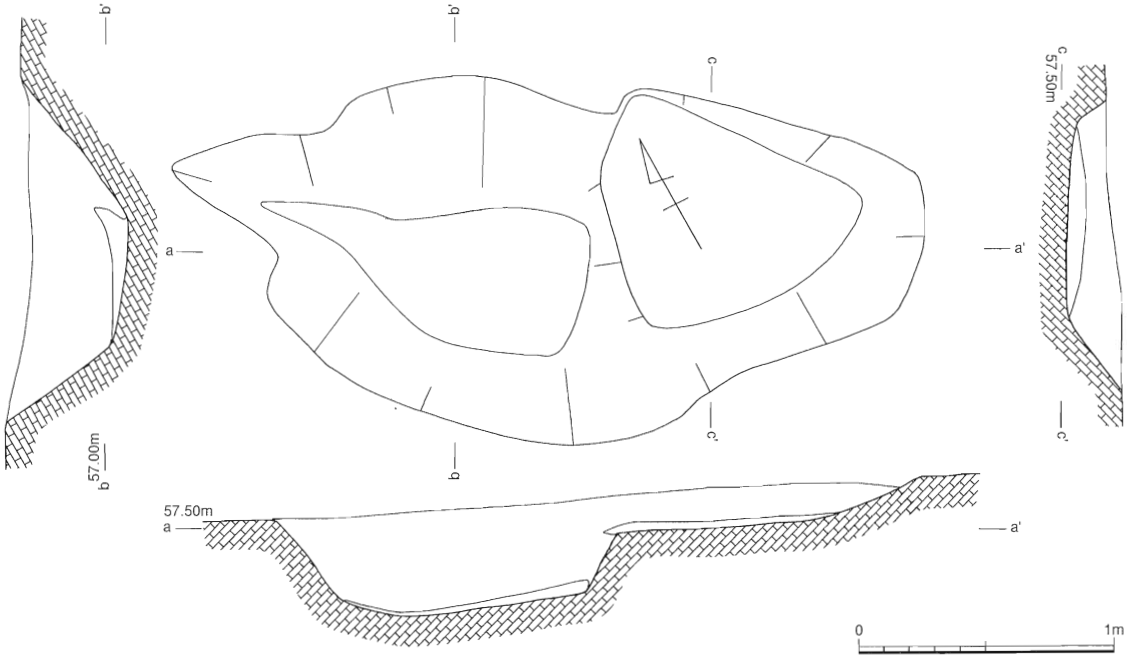
第104図　山守免遺跡２区SK04実測図（S=1/30）

（3）不明遺構

ＳＸ０１（第１０５図）

遺構は、平坦面の南端標高５７m付近で検出した。不整形な平面プランを呈し、西側で一段深くなっている。また、この遺構は人為的に掘られたものである可能性と地滑り等の影響によりできた窪みである可能性がある。また、検出面は地山ではなく、平坦面全体に堆積している淡赤褐色土（第９７図）であった。

規模は、長径３m、短径１.５m程で、東側で深さ０.１５m、西側で深さは０.４mを測る。覆土



第105図　山守免遺跡２区SX01実測図（S=1/30）

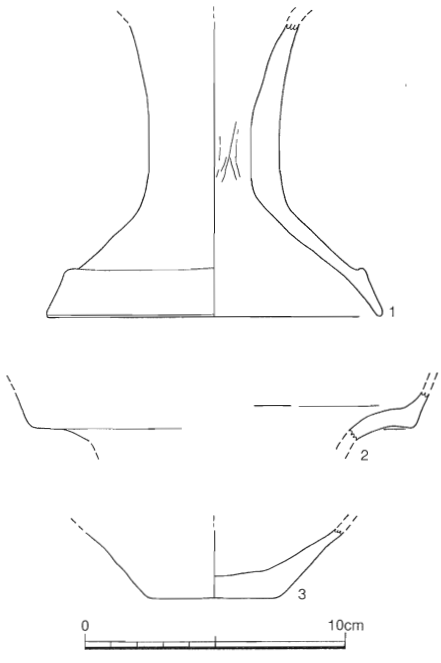
（第９７図）は、暗黄褐色土で、下層は地山礫を含むものである。また、上層からは、弥生土器が１点出土している。

出土した弥生土器は、器台の脚部（第１０６図１）であり、脚径１３.０cmを測る。脚端部は有段状を呈しており、端部外面には擬凹線文などの文様は認められないが、全体的に風化が著しい個体であるため、本来は文様等施されていた可能性も残る。また、調整についても不明である。時期は、草田１～２期に相当するものと考えられる。

ＳＸ０２（第１０７図）

遺構は、標高５８m付近の平坦面の中央付近で検出した。ＳＸ０１と同じく不整形な平面プランを呈し、南側で一段深く落ちる、この遺構も人為的に掘られたものであるか不明確なものである。

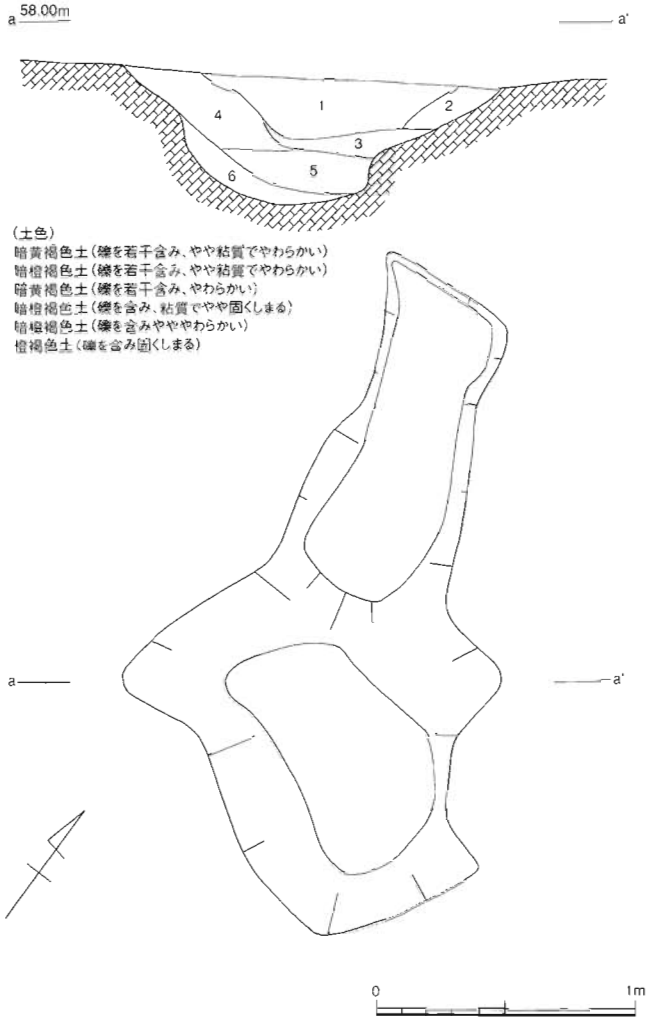
規模は、長径２.７m、最大幅１.５mで、最深部で深さ０.５mである。また、覆土の暗黄褐色土（１層）からは弥生土器が２片出土している。



第106図　山守免遺跡２区SX01・02
出土土器実測図（S=1/3）

出土した弥生土器は、甕口縁（第１０６図２）と底部（第１０６図３）である。２は、端部が欠損しており、口径などは不明であるが、二重口縁の段部分である。

３は平底で、底径４.８㎝を測り、内外面の調整は、風化のため不明である。



第107図　山守免遺跡２区SX02実測図（S=1/30）

山守免遺跡２区　竪穴住居跡調査風景

（４）遺構外出土遺物（第１０８図）

遺構に伴わない遺物のうち図化できたものは計５点あり、弥生土器甕（１）、器台脚部（２）、石鏃（３）、剥片（４，５）がある。

１は、口径１６.４cmで、口縁部は直立し、端部は丸みを帯びるものである。口縁部外面には、風化のため不明確だが３条ほどの擬凹線文が認められる。

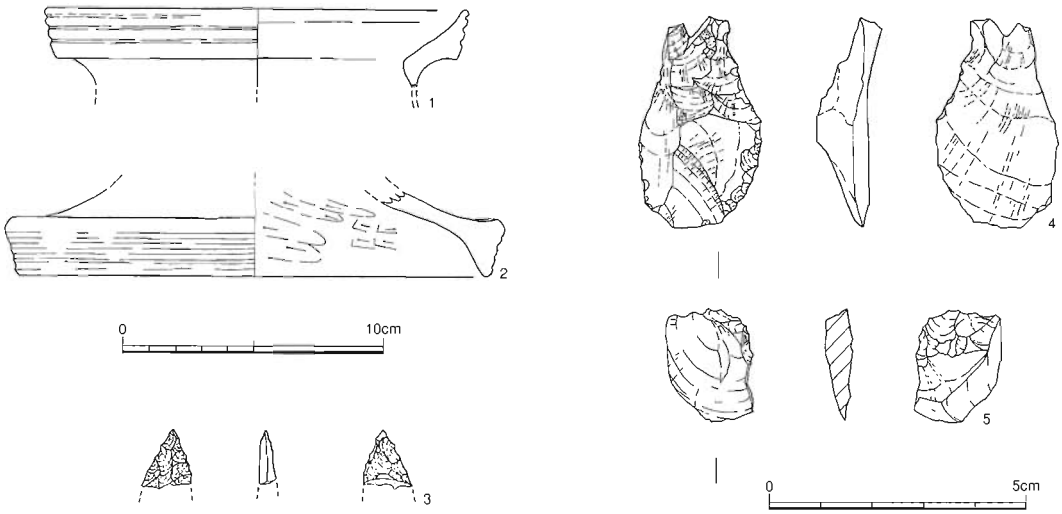
２は、脚径１８.４cmで、色調は黄褐色を呈す。脚端部は外傾し、外面には４条の擬凹線文が施されている。調整は、外面はヨコナデ、内面には横方向のヘラケズリが認められる。

出土した１，２の両者の弥生土器の時期は、ほぼ草田１～２期に収まるものと考えられる。

３は、黒曜石の石鏃の先端部分で、長さ１.１cm、最大幅１.０cm、厚さ０.４cmを測る。

４は、黒曜石の剥片で、長さ４.１cm、幅２.４cm、厚さ１.０cmを測る。

５は、黒曜石の剥片で、長さ２.２cm、幅１.７cm、厚さ０.５cmを測る。

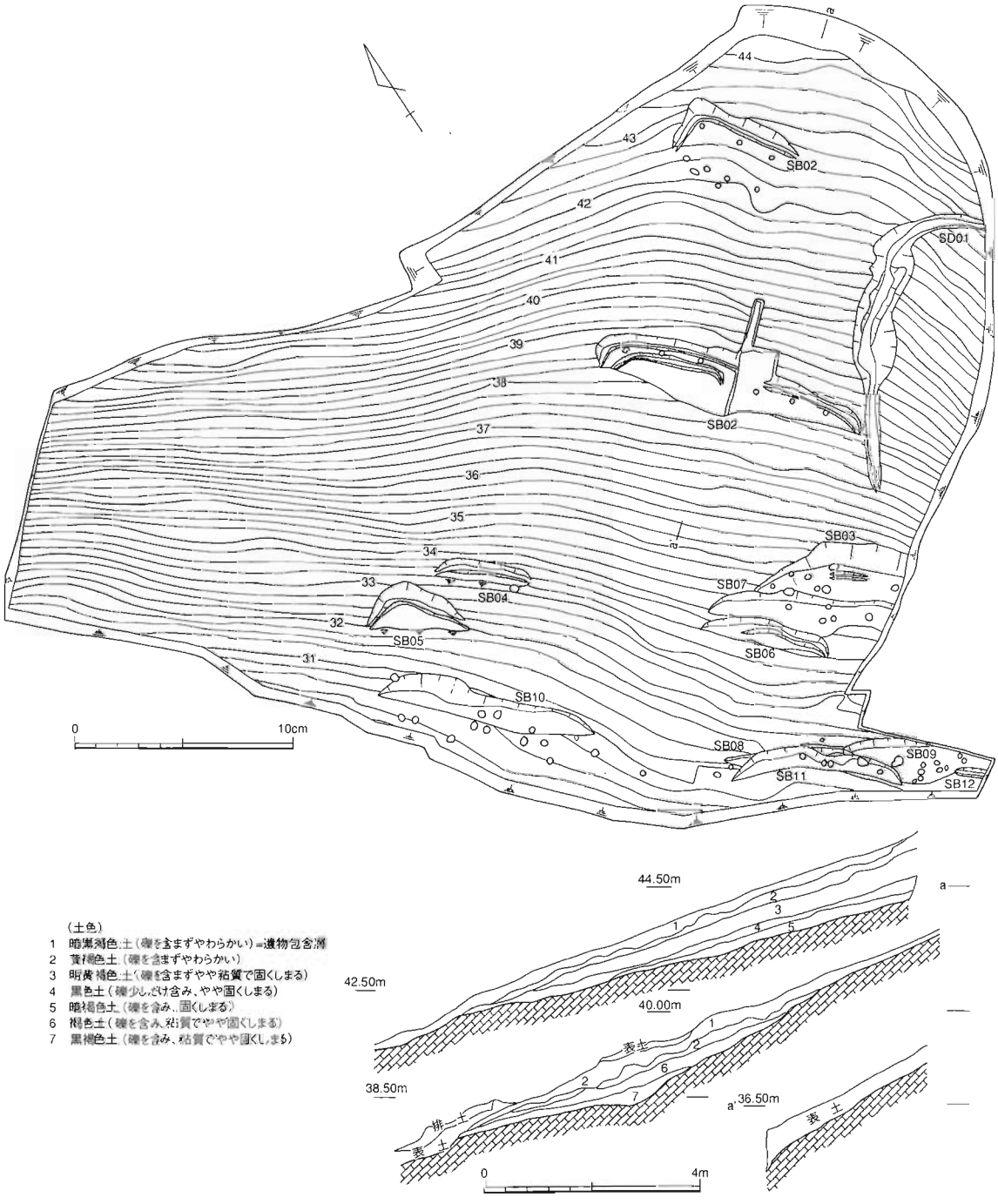


第108図　山守免遺跡２区遺構外出土遺物実測図（土器S=2/3.石器S=2/3）

山守免遺跡３区　掘立柱建物跡調査風景

３．３区の調査（第１０９図）

本調査区では、古墳時代後期と奈良時代末頃の遺構を検出し、その時期の遺物と弥生時代後期、古墳時代前期の遺物が出土している。調査区の層序（第１０９図下）は、基本的に地山の上に暗褐色土（５層）、黒色土（４層）、明黄褐色土（３層）、黄褐色土（２層）、暗黒褐色土（１層）、明黄褐色土、表土の順に堆積しており、４層及び１層は旧表土と推測されるものである。土層から２度にわたって上方から土砂の堆積があったものと考えられる。平成９年度に検出した遺構は、掘立柱建物跡（加工段）７、溝状遺構１である。以下各遺構について順次述べていきたい。

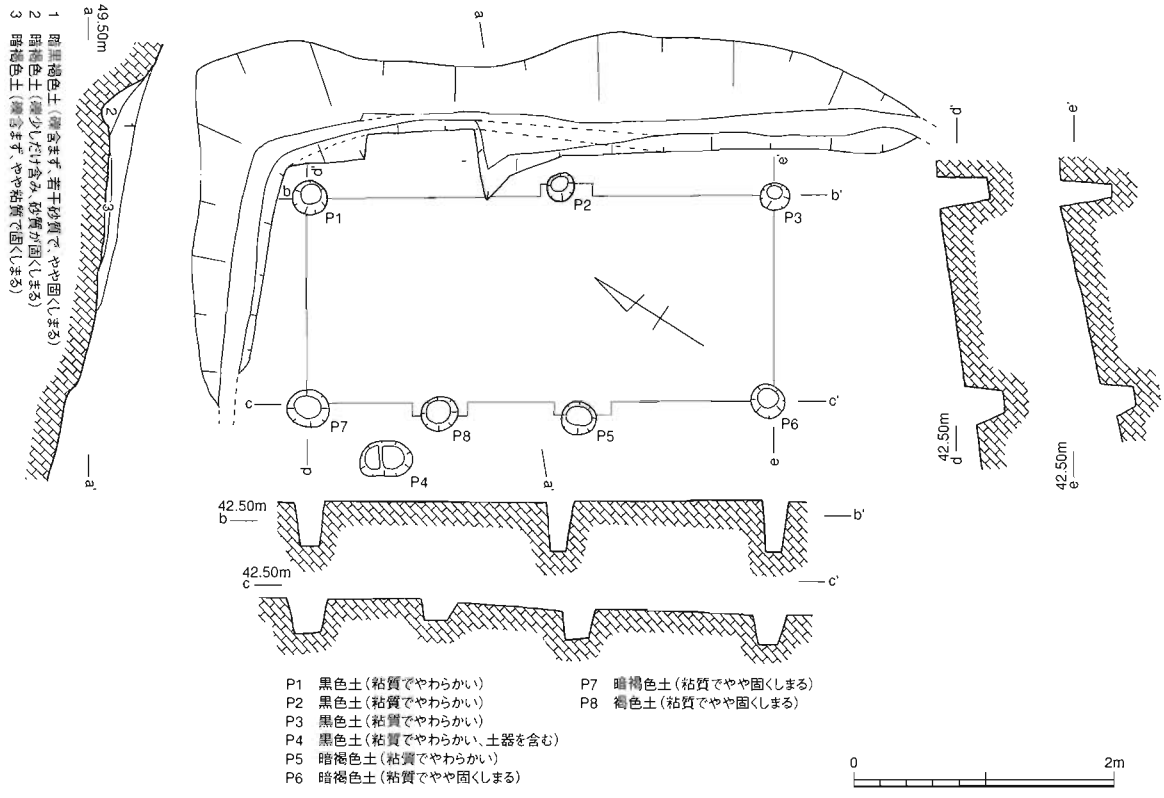


第109図　山守免遺跡３区遺構配置図（S=1/300）、土層図（S=1/120）

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ０１（第１１０図）

遺構は、調査区の北端の標高４２ｍ付近で検出し、地山を掘り込んだ加工段上につくられた掘立柱建物跡である。加工段の規模は、長さ５.２ｍ、幅２.９ｍを測り、壁の高さは０.３ｍ程である。床面はほぼ水平で、壁際には、幅０.３ｍ、深さ０.１ｍの浅い溝がめぐっており、北側隅は壁に沿って西側に直角に折れている。加工段平面上からは８基のピットを検出し、１棟分の掘立柱建物跡を確認することができた。建物跡は、桁行２間（３.６ｍ）×梁間１間（１.６ｍ）のものである。桁行の柱間距離は、北側で２.１ｍ、南側で１.７ｍとやや北側の方が距離が長い。柱穴は、径０.３ｍ前後と小規模なものであり、深さは残りの良いもので０.４ｍを測る。



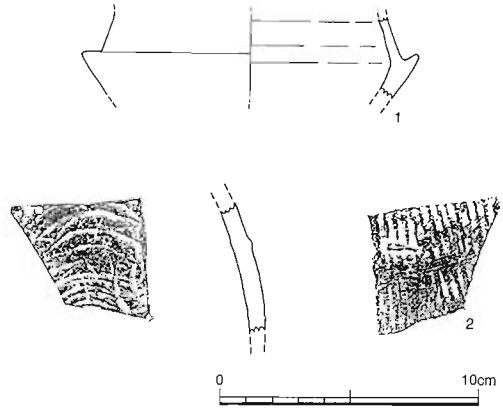
第110図　山守免遺跡３区SB01実測図（S=1/60）

ＳＢ０１出土遺物（第１１１図）

遺物は、覆土から須恵器が２点出土したのみである。１は、蓋坏の坏身であり、受部径１３cmを測る。口縁は、やや内傾して立ち上がり、口径が１０.５cm前後のものと考えられる。

２は、甕の胴部片であり、外面は平行タタキのちカキメ、内面は同心円状当具痕が残る。

出土した須恵器のうち坏身は、大谷氏の編年[註３]でいうと出雲１～２期に相当するものと考えられ、建物の時期もおそらくその前後である可能性が考えられる。



第111図　山守免遺跡３区SB01出土土器実測図（S=1/3）

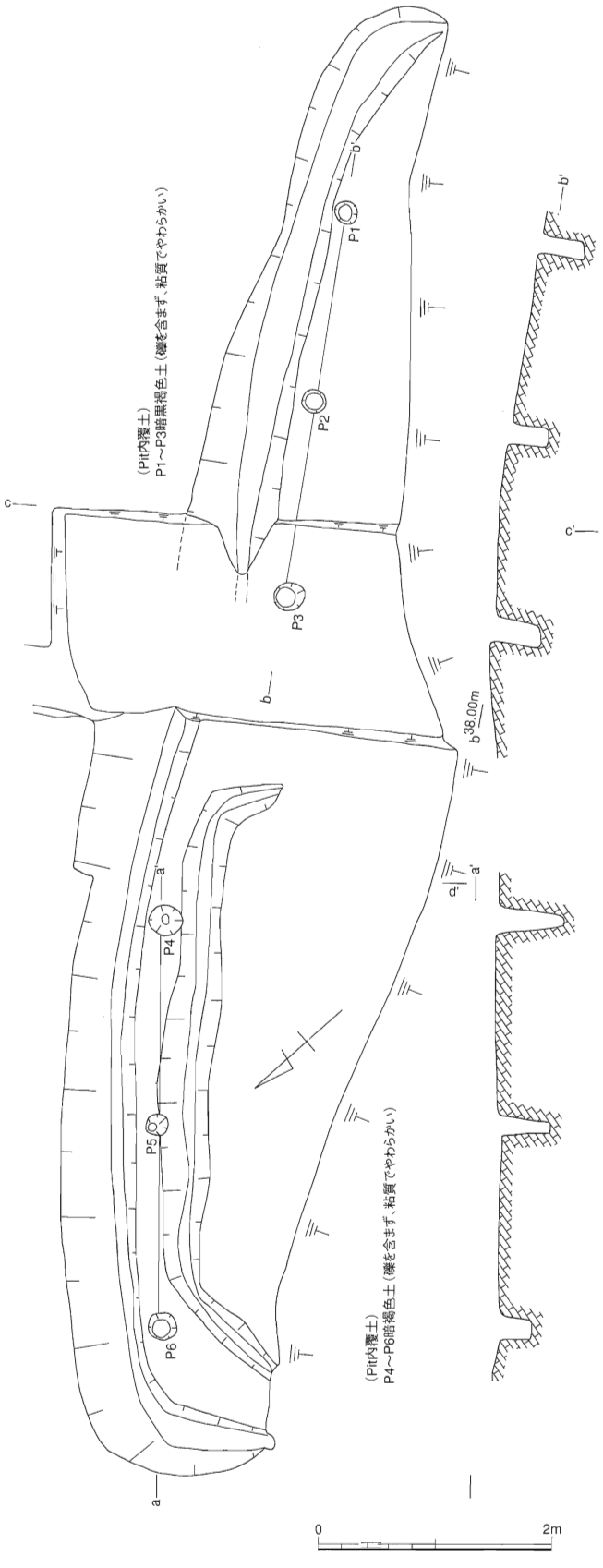
ＳＢ０２（第１１２・１１３図）

遺構は、標高３９ｍ付近の調査区中程で検出し、加工段上に作られた掘立柱建物跡である。加工段は、おそらく北西側の１棟と南東側の１棟の２つが切り合っていたものと推測されるが、切り合う部分にすでにトレンチが重なっており不明確である。また、北西側には幅０.４ｍ、深さ０.１ｍ程度の浅い溝が「コ」の字状にめぐっていることから、ＳＢ０２は、３つの加工段が重なっているものと考えられる。

加工段の規模は、長さ６.２ｍ、幅１.２ｍ、壁の高さ０.６４ｍを測る。床面はほぼ水平で、壁際には幅０.３ｍ、深さ０.１ｍ程の浅い溝がめぐり、北側隅は壁に沿って西側にやや折れている。加工段平面上からは、６つのピットを検出し、北側と南側の２棟分の掘立柱建物跡を検出することができた。

北側建物跡は、Ｐ４～Ｐ６で構成され、桁行２間（３.５ｍ）で梁行は不明である。桁行の柱間距離は１.８ｍで、柱穴は径０.３ｍ前後と小規模なもので、深さは深いもので０.６ｍを測る。なお、同一平坦面にある溝は、床面検出時に確認できたことから、建物跡に伴う加工段より古い加工段の周溝と推測される。

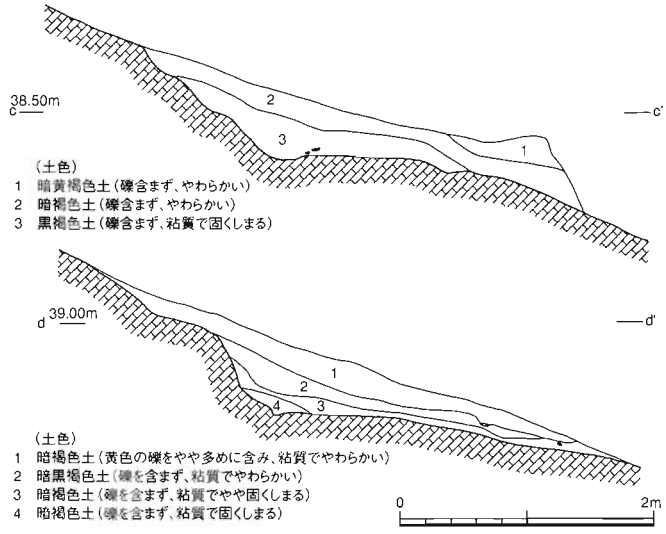
南側建物は、Ｐ１～Ｐ３で構成される。桁行２間（３.４ｍ）で、梁行は不明である。桁行の柱間距離は１.７ｍで、柱穴は径０.２ｍ前後と小規模で、深さは０.３５ｍほどである。



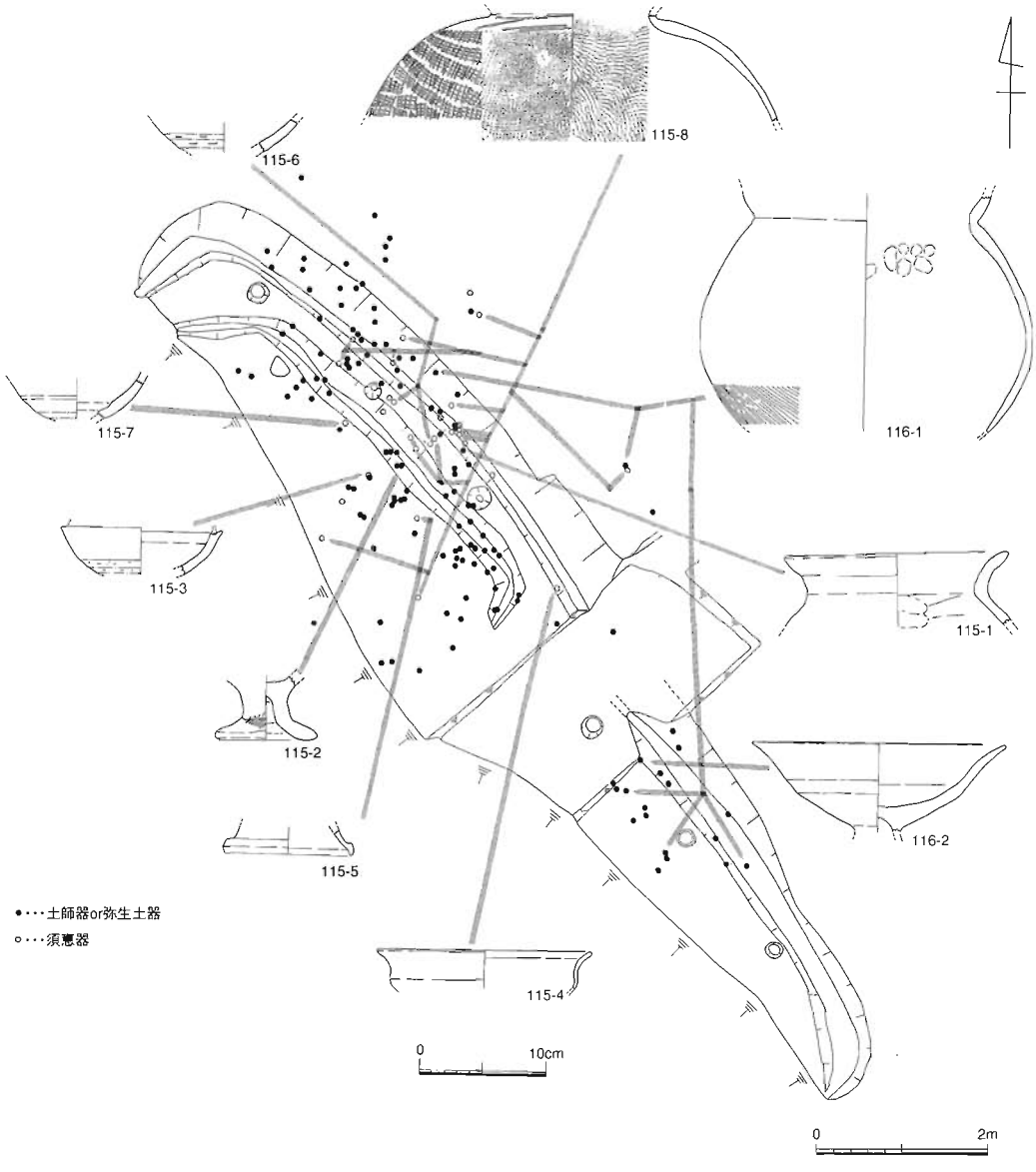
第112図　山守免遺跡３区SB02実測図（S=1/60）

ＳＢ０２遺物出土状況（第１１４図）

遺物は須恵器と土師器が出土しており、覆土からのものと、床面付近からのものの２者が存在する。そのうち図化できたものが１０点（第１１５・１１６図）あり、須恵器甕（第１１５図８）以外は床面付近から出土したものである。また、その出土層位と平面的な位置から、北側建物と南側建物に伴うものの２者に分けて考えることができた。



第113図　山守免遺跡３区SB02土層図（S=1/60）



第114図　山守免遺跡３区SB02遺物出土状況（遺構S=1/90.土器S=1/6）

ＳＢ０２（北側建物）出土遺物（第１１５図）

土師器（１，２）と須恵器（３～８）が出土している。

１は、甕の口縁から頸部にかけての破片で、口径１７.４㎝を測り、口縁部が長く外反した単純口縁のものである。内面頸部以下は、横方向のヘラケズリを施す。外面は口縁部が横ナデ、頸部以下は風化のため明確でない。

２は、鉢などの脚部と考えられるもので、脚径７.８㎝を測る。脚端部は丸みを帯び、全体的に器壁が厚いものである。調整は、外面縦方向のハケメ、内面ヨコナデである。

３は、口縁部が欠損している器壁の厚い蓋坏の坏身で、受部径が１２.８㎝を測る。色調は淡青灰色を呈し、底部外面には、ヘラ切り後に回転ヘラケズリを比較的丁寧に施している。

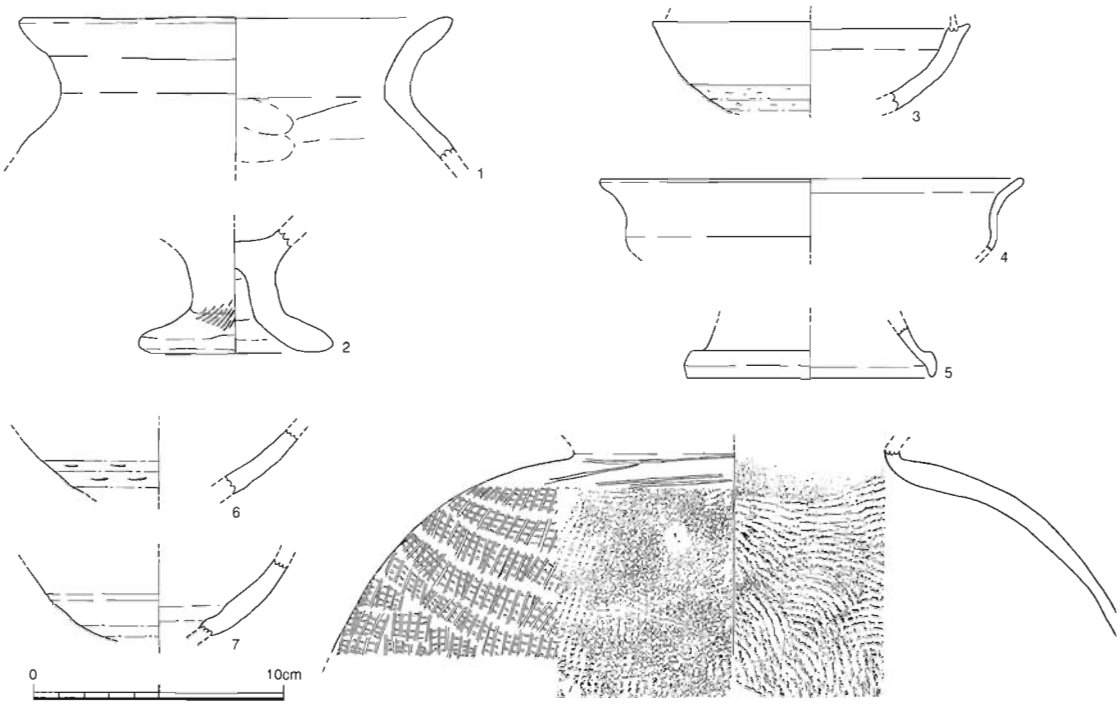
４は、口径１７㎝を測る器壁の薄い口縁部である。調整は、内外面とも回転ナデを施す。器種については明確ではないが、おそらく坏類と思われる。

５は、高坏の脚部で、脚径１０㎝を測り、脚台部は、若干「く」字状に内折するが、丸みを帯びている。透かしについては、不明である。

６と７は、蓋坏の天井部か底部と考えられる個体で、６はヘラ切り後に回転ヘラケズリを施しており、７は、回転ナデを施しているものと考えられる。

８は、甕の胴部上半部分である。外面平行タタキ、内面に同心当具痕が認められる。

以上述べてきた出土遺物で、甕以外の須恵器は概ね出雲１期～２期に相当するものと考えられ、土師器についても矛盾はないものと考えられる。このことから建物の時期は、古墳時代後期前半に位置づけることができると思われる。



第115図　山守免遺跡３区SB02（北側建物）出土土器実測図（S=1/3）

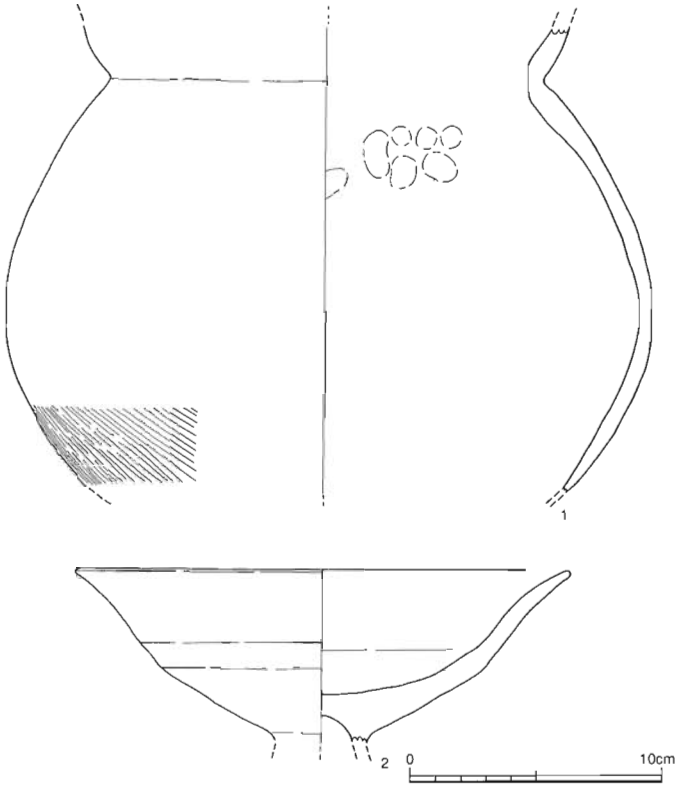
ＳＢ０２（南側建物）出土遺物（第１１６図）

遺物は、土師器が２点出土している。１は、口縁端部が欠損しているが、おそらく単純口縁の甕と考えられる。胴部は球形に近いもので、外面に縦方向の粗いハケメ、内面頸部付近には指頭圧痕

が認められるが、全体的に風化が著しく、調整などの詳細については分からない。

２は、高坏の坏部で口径１９.４cmを測る。松山分類[註2]の「高坏Ｂ」としているものに該当し、坏部下半にやや稜があり口縁は外反し、端部はやや尖り気味で丸くおさめる。調整は、風化が著しく明確ではないが、坏部内面に赤色顔料が付着しているのが確認できる。

以上の土師器は、松山編年のⅣ期以降のものに相当すると考えられ、建物の時期は古墳時代後期前半に位置づけられる。



第116図　山守免遺跡３区SB02（南側建物）出土土器実測図（S=1/3）

ＳＢ０３（第１１７図）

遺構は、調査区南端の標高３５ｍ付近で検出した加工段で、調査区外にも遺構が続いている。また、ＳＢ０３とＳＢ０７は、切り合い関係にあり、土層（第１１７図下）からも分かるように、ＳＢ０７（古）→ＳＢ０３（新）といった前後関係にある。

加工段の規模は、長さ（東西）が6.3m以上、幅（南北）は１.６５ｍを測り、壁の高さは、０.８５ｍ程である。床面はほぼ水平で、壁から１.４５ｍまでは地山が床面であるが、それより南西側はＳＢ０３の覆土が床面になる。なお、壁際には、溝などは検出されなかったが、壁際より０.２５ｍ程離れて南側に幅０.２５ｍ、深さ０.１ｍ程、長さ２ｍ程の溝を検出している。検出した溝の付近からは、径１.２５m程の不整形な範囲で床が赤く焼けた焼土面があり、溝と焼土は関連するものである可能性が一つ考えられる。また、加工段平面上からは、１４のピットを検出したが、建物を復原可能な並びを確認することができなかった。

ＳＢ０７（第１１７図）

遺構はＳＢ０３の下方で検出し、ＳＢ０３より古い加工段である。また、下方のＳＢ０６によって切られているため、近接するＳＢ０３，０６，０７の中では、最も古い加工段である。

加工段の現状での規模は、長さ8.2ｍ、幅１.４５ｍ、残っている壁の高さは０.１５ｍである。床面はほぼ水平であり、壁体溝、ピットなどは、確認できなかった。なお床面中央より北側の地山が不明確なため、一部掘りすぎて失ってしまった。

ＳＢ０３・０７遺物出土状況（第１１８図）

近接する３つの加工段（ＳＢ０３，０６，０７）から出土した遺物のうち、大部分がＳＢ０３に伴うものであり、ＳＢ０６，０７に伴うものは、わずかであった。

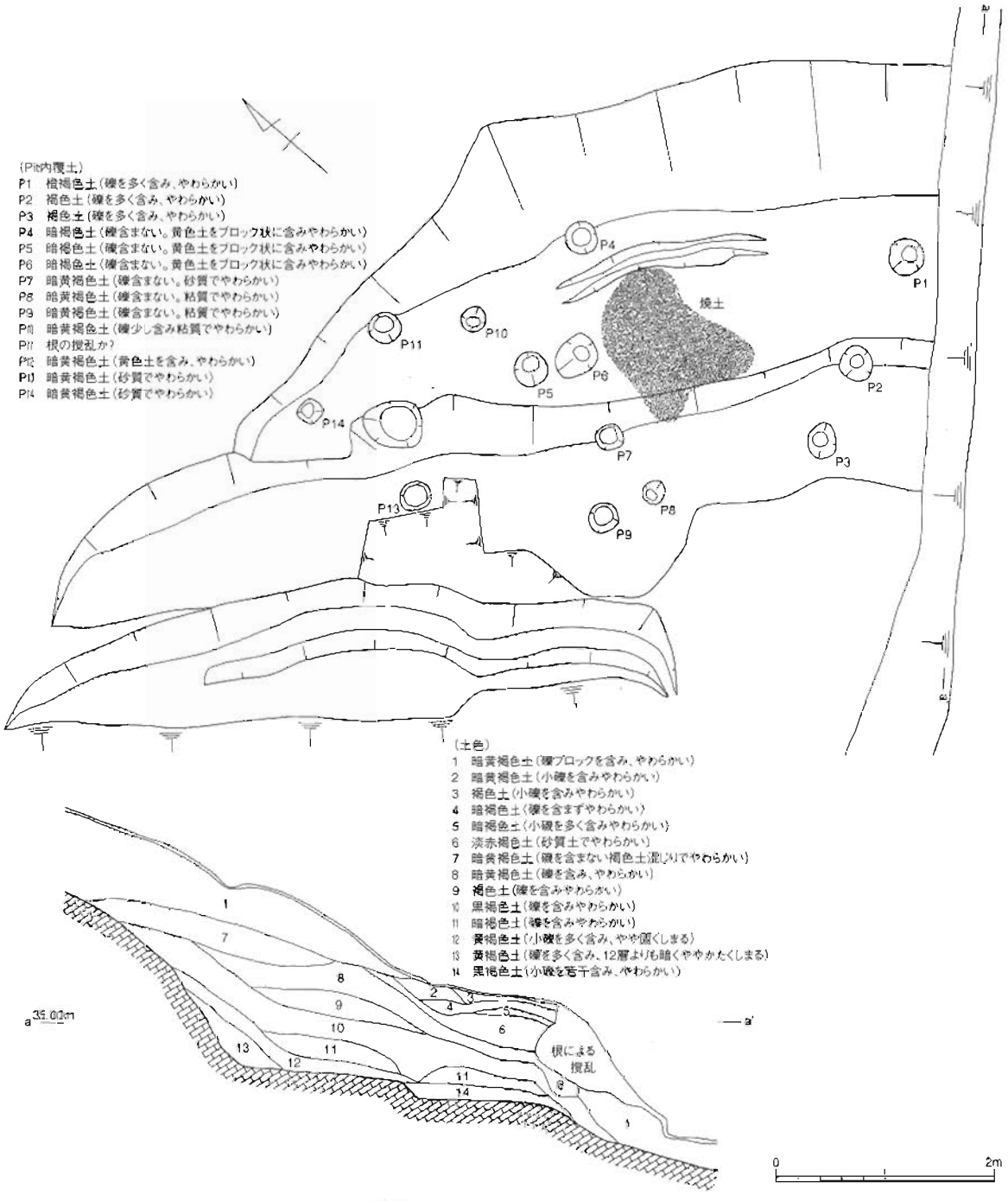
ＳＢ０３から出土した遺物は、層位では覆土から出土するものと床面から出土するものの２者が存在する。覆土から出土するものは土師器片で、小片のため図化はしていない。一方、床面から出

土するものには、須恵器（第１１９図）と鉄釘（第１２０図）が存在している。須恵器と鉄釘は平面的に出土状況が異なり、須恵器は北側に、鉄釘は南側に集中しており、両者が混在して出土していない点が特徴的である。この特徴的な出土状況と鉄釘が出土する点から、ＳＢ０３が一般的な建物跡が伴う加工段とは異なる性格をもった遺構である可能性も考えられる。

ＳＢ０３出土須恵器（第１１９図）

須恵器は、坏（１～６）、皿（７，８）、底部（９，１０）、平瓶（１１）、甕片（１２，１３）の１３個体が図化可能なものであった。

１は、口径１１.２cmを測り、口縁は若干内湾し、端部が外反するものである。全体は、回転ナデにより仕上げられている。



第117図　山守免遺跡３区SB03.SB06.SB07.実測図（S=1/60）

２は、口径１１.８㎝を測り、１と同様に口縁端部が外反するが、口縁は直立気味である。底径７.２㎝、器高４.０㎝を測り、底部は回転糸切りと思われるが、風化のため明確ではない。

３は、口径１１.６㎝を測り、口縁は直線的に外傾するものである。調整は、回転ナデにより仕上げられたものである。

４は、口径１２.２㎝を測り、３と同様に口縁が直線的に外傾するものである。調整は回転ナデにより仕上げられているが、表面の凹凸が激しいものである。

５は、口径１２.６㎝を測り、口縁が直線的に外傾するが、３，４と比較して体部が浅いものである。

６は、底径８.６㎝を測り、高台が付くものである。底部はおそらく回転糸切りと考えられるが、摩滅のため不明確である。口縁は、おそらく直線的にのびるタイプと推測される。

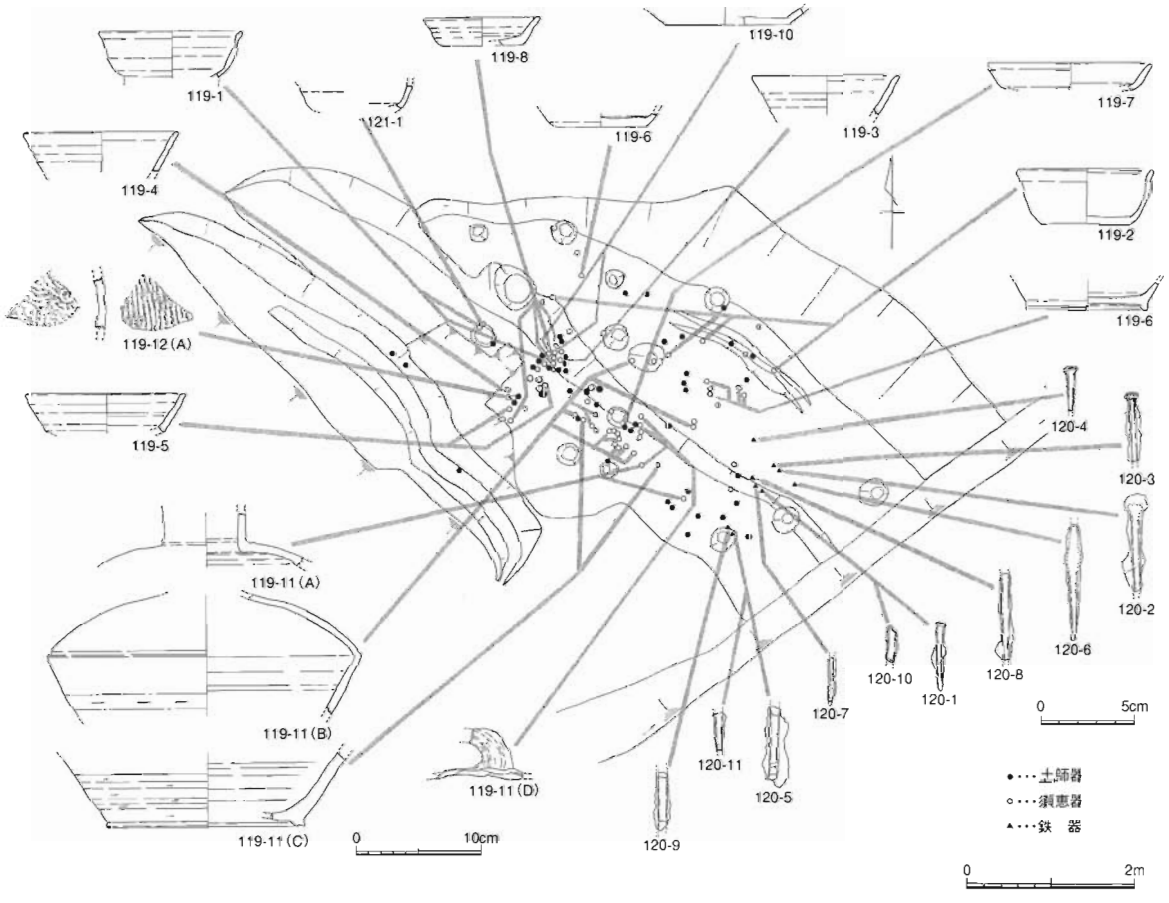
７は、口径１３.２㎝を測り、口縁端部が若干外反する、器高の低いものである。

８は、口径９.２㎝、底径６.４㎝、器高２.３㎝を測り、口縁は端部でやや外反するものである。底部は、おそらく糸切りによるものと思われるが、明確でない。

９は、坏の底部と考えられ、底径７.２㎝を測り、底部は回転糸切りである。

１０は、底径９.２㎝を測り、底部は回転糸切りである。

１１の（A）～（D）は、同一個体の平瓶である。（A）は、口縁部分であり、頸部で径６.８㎝を測る。（B）は、胴部であり、肩の張るタイプで、最大径で１５㎝を測る。肩部には、一条の沈線が施されている。胴部下半は、回転ヘラケズリで調整されている。（C）は、底部であり、高台が付くもので、底径は最大部分で１５.６㎝を測る。高台は、接地部分が沈線上にくぼむものであ



第118図　山守免遺跡３区SB03.SB07遺物出土状況（遺構S=1/90.土器S=1/6.鉄器S=1/4）

る。（D）は、把手部分で、器面はヘラケズリにより仕上がられている。

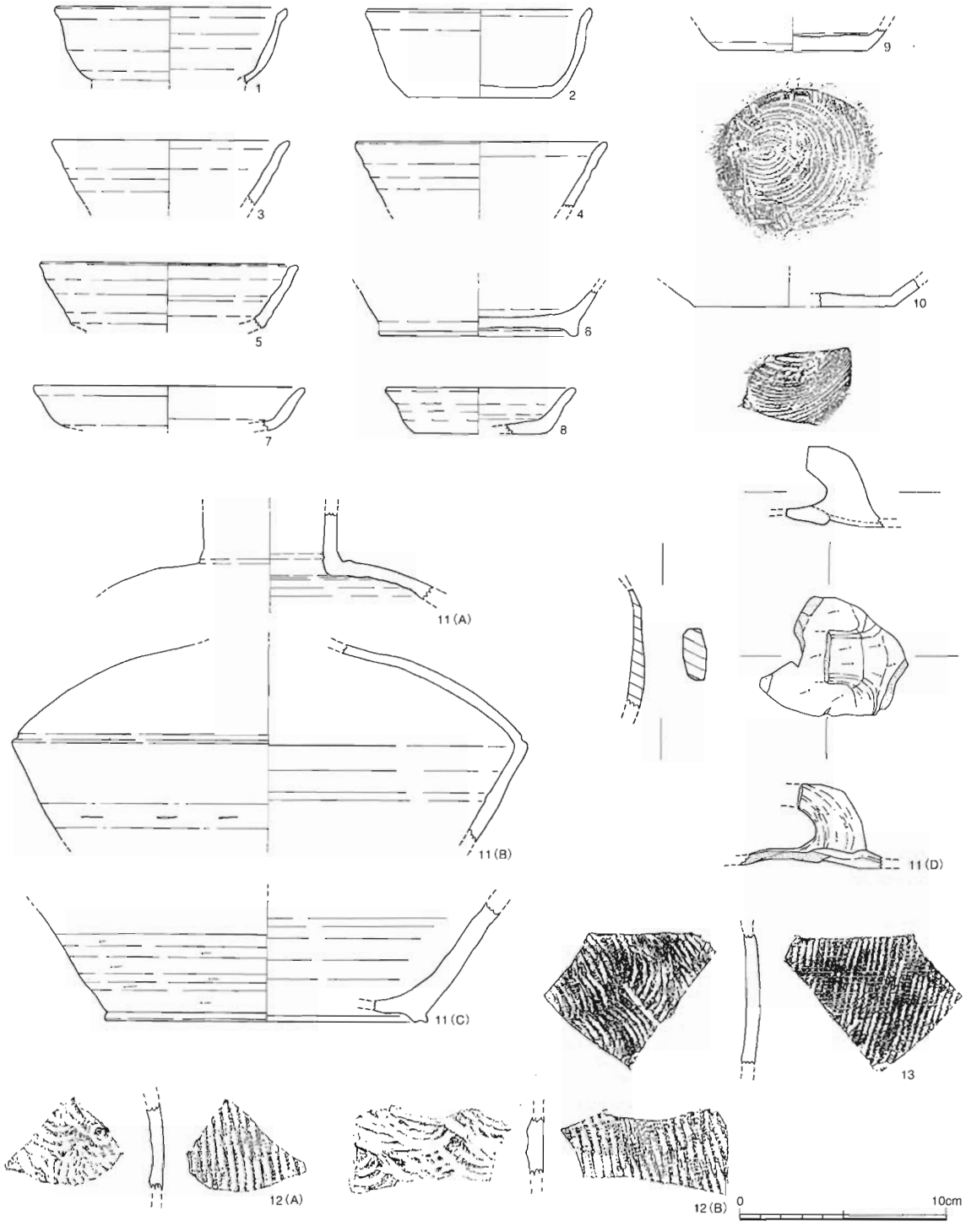
１２の（A,B）は、同一個体の甕片であり、外面平行タタキ、内面円形当具痕が観察される。

１３は、甕片で、外面平行タタキ後にカキメが施され、内面には同心円当具痕が見られる。

以上述べてきた須恵器は、おおよそ高広ⅣB期[注4]に相当するものと考えられる。

ＳＢ０３出土鉄釘（第１２０図）

釘は１１片出土しており、完形が１点（１）、先端欠損３点（２～４）、頭部欠損２点（６，７）、



第119図　山守免遺跡３区SB03出土土器実測図（S=1/3）

胴部のみ５点（５，８～１１）である。また個体数は、最低でも５点以上は存在するものと考えられ、木質が付着している個体は認められなかった。なお、実測図作成にあたっては、Ｘ線撮影によるフィルムを参考にしておこなった。

１は、全長３.６㎝を測る。断面方形を呈し、頭部と胴部との境にはくびれ込みを有するものである。

２は、Ｘ線でも頭部の状況が明確にできない個体であるが、全長４.５㎝以上を測り、断面方形を呈すものである。これも１と同様に、くびれ込みを有するものと推測される。

３は、先端が欠けているが、残存長３.６㎝を測り、頭部と胴部の境にくびれを有する。

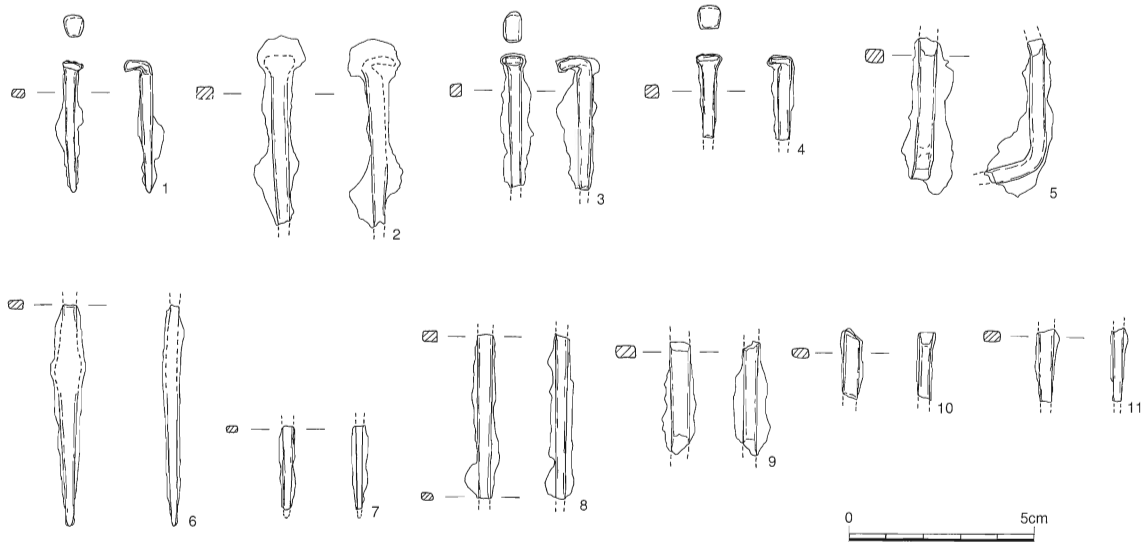
４は、残存長２.３㎝を測り、頭部と胴部の境にくびれを有する。

５は、胴部の折れ曲がった個体で、のびた状態の残存長は５㎝ほどである。

６は、頭部の欠けた個体と考えられるが、やや幅が広くなる部分が存在しているようにも見える。Ｘ線撮影ではこの部分が不明瞭であり、明確なことは分からないが、釘以外の可能性も考えられる。全長は６.１㎝を測る。

７は胴部の破片で、残存長２.３㎝を測る。おそらく先端部分が少しだけ欠けている個体と考えられる。

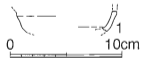
８～１１は、胴部の破片である。それぞれの残存長は、８が４.５㎝、９が３.１㎝、１０が１.８㎝、１１が２.０㎝を測る。



第120図　山守免遺跡３区SB03出土鉄器実測図（S=1/2）

ＳＢ０７出土遺物（第１２１図）

須恵器の小片である。器種は不明であるが、坏類である可能性が考えられるものである。胎土は青灰色を呈し、調整は回転ナデである。

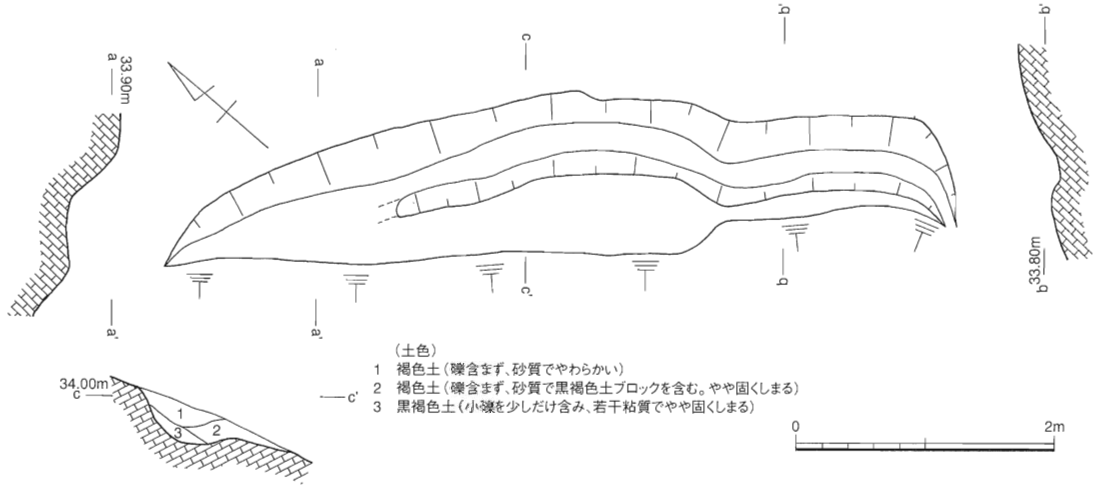


第121図　山守免遺跡３区SB07出土遺物実測図（S=1/3）

ＳＢ０６（第１２２図）

遺構は、標高４０ｍ付近に存在する加工段で、ＳＢ０７の下方に近接している。ＳＢ０７と切り合い関係にあるものと考えられるが、調査では、明確にすることができなかった。地山を掘り込んだ加工段で、規模は、長さ６.２ｍ、幅１.０ｍを測り、壁の高さは０.３ｍ程である。床面は平坦で、壁際には、幅０.４ｍ、深さ０.０８ｍの浅い溝が存在するが、西側では不明瞭になる。なお、床面からは、ピット等は検出しなかった。

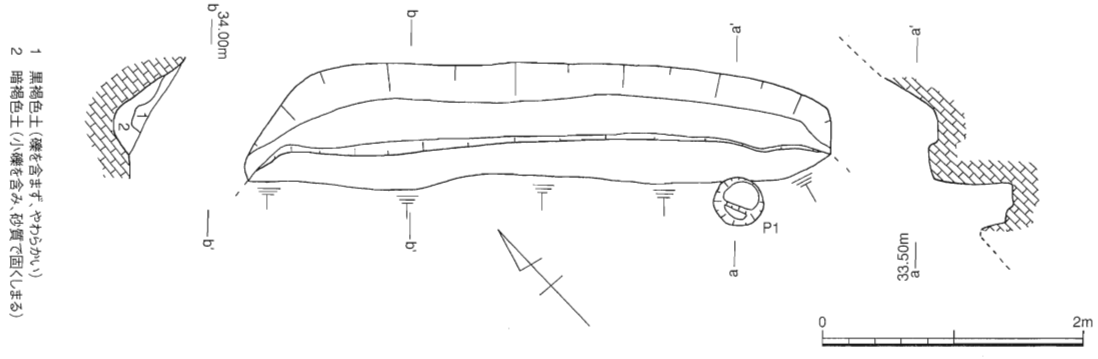
遺物は出土していない。



第122図　山守免遺跡３区SB06実測図（S=1/60）

ＳＢ０４（第１２３図）

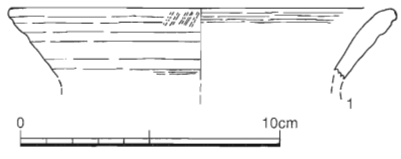
遺構は、標高３４ｍ付近の調査区南西側の下方に存在する加工段で、壁際の溝と若干の平坦面が残存するのみである。加工段の規模は、幅０.６ｍ、長さ４.５ｍを測り、壁の高さは、０.３ｍ程である。壁際の溝は、幅０.３４ｍ、深さ０.０８ｍの浅いものである。ピットは、床の平坦部分からは検出しなかったが、斜面側に１つ検出している。ピットの規模は、径０.４ｍ、深さ０.６ｍである。出土遺物は土師器片のみで、すべて覆土中から出土している。



第123図　山守免遺跡３区SB04実測図（S=1/60）

ＳＢ０４出土遺物（第１２４図）

１は、土師器の甕の口縁部分である。口径１５.５㎝を測り、明黄褐色を呈し、調整はヨコナデである。時期は小片のため不明であるが、古墳時代中期末～後期前半のものと推測される。



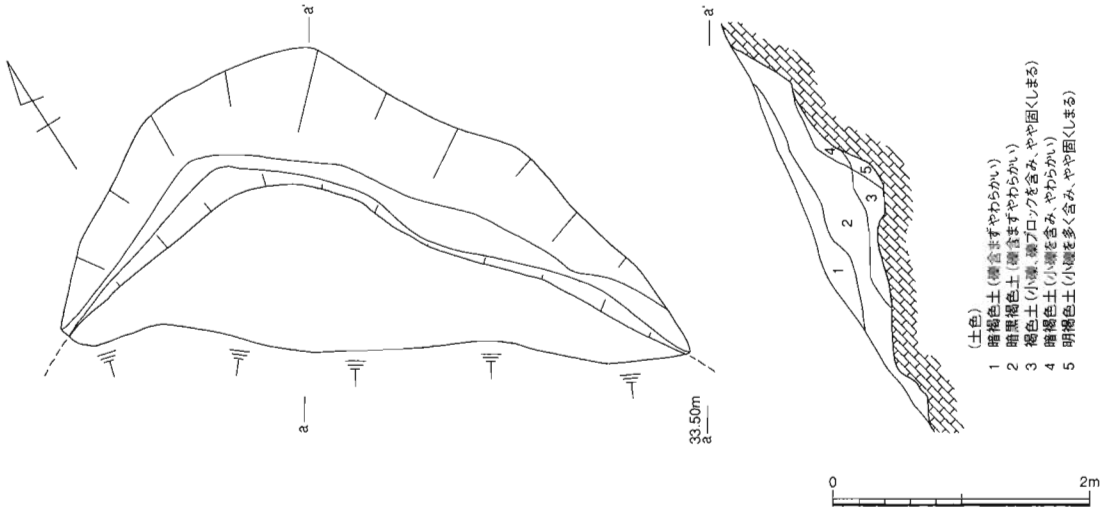
第124図　山守免遺跡３区SB04出土土器実測図（S=1/3）

ＳＢ０５（第１２５図）

遺構は、ＳＢ０４の下方、標高約３３ｍ付近に存在する加工段である。北側隅部分のみを残して、他は流失したものと考えられる。規模は、幅２.１ｍ、長さ４.１ｍを測り、壁の高さは１.３ｍ程である。壁際には、幅０.３ｍ、深さ０.０６ｍの溝がめぐり、北側は、隅に沿って南西側にほぼ直角に折れる。床面はほぼ水平で、ピット等は検出しなかった。

ＳＢ０５遺物出土状況（第１２６図）

遺物は、覆土から出土するものと、床面付近から出土するものの２つが存在する。小片が多く量的にも少ないものであった。図化できたものは、床面出土の土師器甕（第１２７図１）と、覆土から出土した土師器甕（第１２７図２）、土師器高坏（第１２７図３）である。



第125図　山守免遺跡３区SB05実測図（S=1/60）

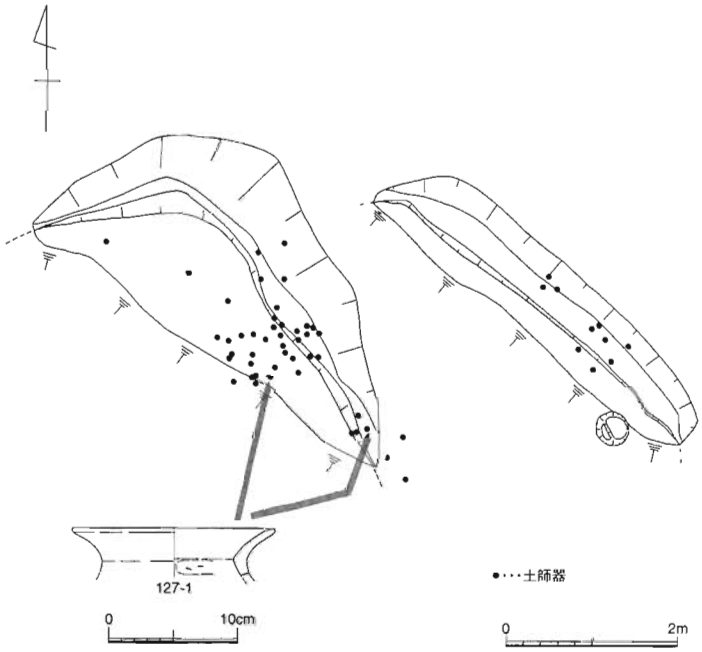
ＳＢ０５出土遺物

（第１２７図）

１は、口径１６㎝を測る甕の口縁部である。口縁部は、長く直線的に外反し、内面頸部より下は横方向のヘラケズリを施している。

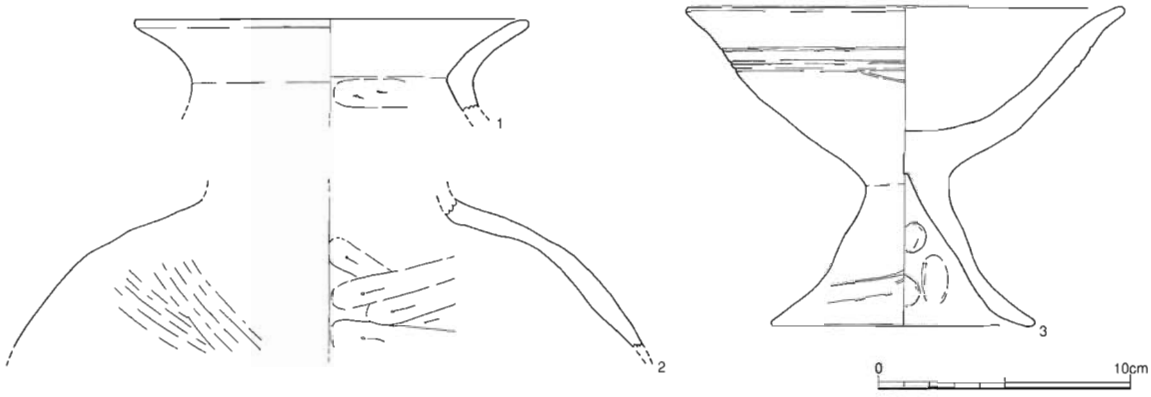
２は、甕の胴部で、頸部より下の部分にあたるものと考えられる。調整は、外面に斜方向のハケメ、内面に斜め及び横方向のヘラケズリを施す。

３は、口径１７.５㎝、器高１２.９㎝、脚径１０.５㎝を測る高坏である。坏部は、口縁部と坏底部の境に若干のアクセントを持ち、端部がやや外反するものであり、３条の沈線が施されている。調整は、内外面とも基本的にナデにより仕上げられており、脚部内面には、指頭圧痕が見られる。また、内外面とも赤色の顔料が所々付着しているのが確認できる。



第126図　山守免遺跡３区SB04.SB05遺物出土状況（S=1/90）
（遺物S=1/6）

以上出土している土師器は、古墳時代中期末～古墳時代後期前半のものと推測される。

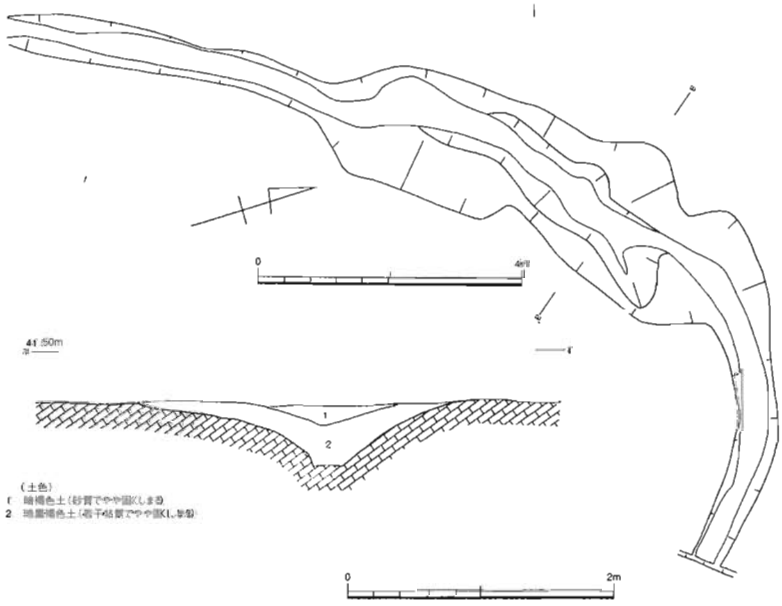


第127図　山守免遺跡３区SB-05出土遺物実測図（S=1/3）

（２）溝状遺構

ＳＤ０１（第１２８図）

遺構は、調査区上方の北東端の標高３７ｍ～４３ｍ付近に存在し、調査区外にも続くものである。規模は、幅０.３～０.８ｍ、深さ０.４５ｍ程で東西方向に１.６ｍ程コンターを斜行し、９０度南西方向にコンターに直交して降っている。覆土は、暗黒褐色土、暗褐色土の順に堆積しており、遺物の出土はなかった。この溝状遺構の性格については、全体像が不明である点と、遺物の出土が無いことなどから、不明である。



第128図　山守免遺跡３区SD01実測図
平面図（S=1/80）断面図（S=1/40）

（３）遺構外出土遺物（第１２９図）

遺構に伴わない土器のうち、図化できたものは計１９点である。ほとんどの土器は、暗黒褐色土（第１０９図１層）及び黒色土（第１０９図４層）から出土しているものである。土器の種類は、弥生土器（１～５、１０，１１）、土師器（６～９）、須恵器（１２～１９）である。

１は、口径１３.２㎝を測る甕で、口縁部は直立し、外面には４条の擬凹線文を施すものである。色調は、橙褐色を呈し、内外面ともナデにより仕上げられている。

２は、口径１６㎝を測る甕で、口縁部は若干カーブを描いて外反する。おそらく口縁部外面には、擬凹線文が施されていたものと推測されるが、風化が激しく不明である。

３は、口径２０.２㎝を測る甕で、口縁部は真っ直ぐにやや外反し、外面には、３条の擬凹線文が施されているが、下半部はヨコナデである。

４は、口径１６,４㎝を測る甕で、口縁部は真っ直ぐに外反し、端部は丸くおさめている。口縁部外面には４条の沈線が施されている。

５（Ａ）及び（Ｂ）は、器台の受部と脚部である。（Ａ）は、内面に赤色顔料が付着するもので、口径２２㎝を測る。口縁は直立し、外面には４条の擬凹線文が施されている。（Ｂ）は、内外面に赤色顔料が付着し、脚径２２㎝を測る。脚は直立し、外面には４条の擬凹線文が施され、調整は外面ヨコナデ、内面横方向のヘラケズリである。

６は、口径２４㎝を測る単純口縁の甕である。口縁部は外側に大きく屈曲し端部でやや肥厚する。調整は、外面ヨコナデ、内面頸部以下横方向のヘラケズリである。

７は、口径２５.２㎝を測る単純口縁の甕で、口縁部は外に大きく開き、端部でさらに外反する。調整は、風化により不明である。

８は、高坏の坏部片である。口縁部と底部の境に若干のアクセントを持つものである。

９も高坏の坏部片である。小片のため形態については不明であるが、底部に刺突痕が認められる。

１０は、高坏の脚部の破片である。脚部外面上半には縦方向のミガキ、内面下半には斜め方向のヘラケズリが認められる。

１１は、注口土器の注口部と考えられる。径2.8㎝、長さ５.５㎝であり、本体の甕の接合部から剥がれたものである。径１.５㎝程の円形に穴があき、中空になっている。

１２は、蓋坏の坏身の破片である。小片のため計測値は不明であるが、受部よりやや下の外面にヘラ記号が認められる。調整は、内外面とも回転ナデである。

１３は、蓋坏の坏身片であり、受部で径１２㎝を測る。調整は、内外面とも回転ナデである。

１４は、蓋坏の蓋天井部又は坏身底部の破片である。底部（又は天井部）は、ヘラ切り後に回転ヘラケズリが施され、ヘラ記号が認められる。

１５は、口径１４㎝、底径１０.４㎝、器高４.６㎝を測る坏である。口縁はやや内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめており、底部には糸切痕が認められる。調整は、内外面回転ナデである。

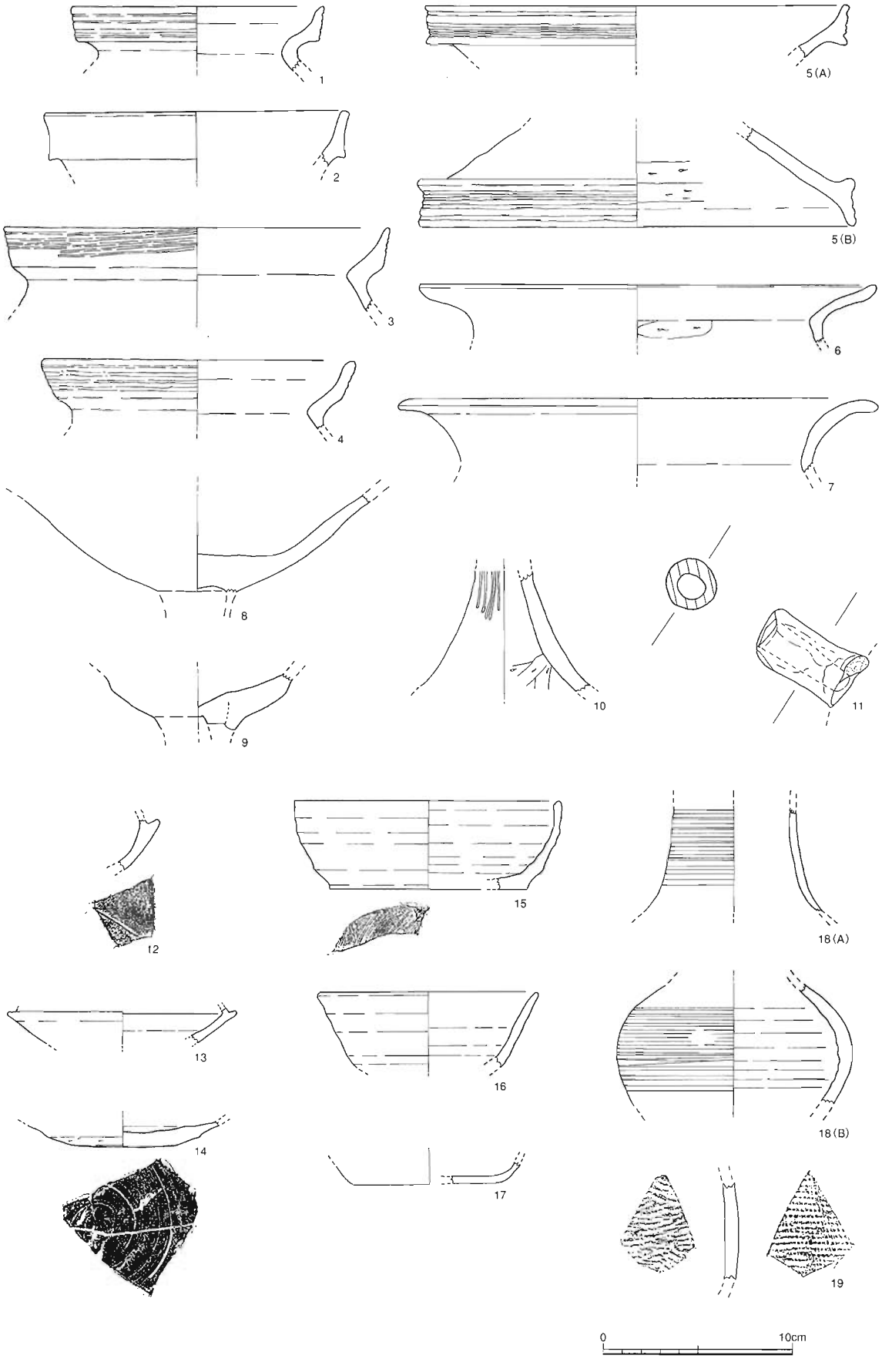
１６は、口径１１.６㎝を測り、口縁はほぼ真っ直ぐに外傾する。調整は内外面ともに回転ナデである。

１７は、底径７.８㎝を測る坏の底部である。焼成は良くなく土師質のもので、調整は不明確である。内面には、赤色顔料の付着が認められる。

１８（Ａ）及び（Ｂ）は、壷の口縁部と胴部の破片である。（Ａ）は頸部より上の破片で、端部が存在しない。調整は外面カキメ、内面回転ナデである。（Ｂ）は胴部の破片で、最大径が１２.２㎝を測る。調整は、外面カキメ、内面回転ナデである。

１９は、甕の胴部片である。色調は淡灰色を呈し、外面は平行タタキで、内面には同心円状当具痕が認められる。

以上述べてきた土器の時期的な位置づけについては、１～５，１０，１１は、草田１～２期に相当するものと考えられる。６～９については、全体のプロポーションの分かるものが少なく明確にできないが、古墳時代後期以降のものである可能性が考えられる。１２～１９の須恵器については、１２～１４，１８が６世紀代と考えられ、１５～１７が高広ⅣＡ期のものと推測される。基本的に、弥生時代に属する遺物は上方の１，２区のものが流れてきたものと考えられ、古墳時代後期以降の遺物は３区の建物跡で使用されていたものと推測される。

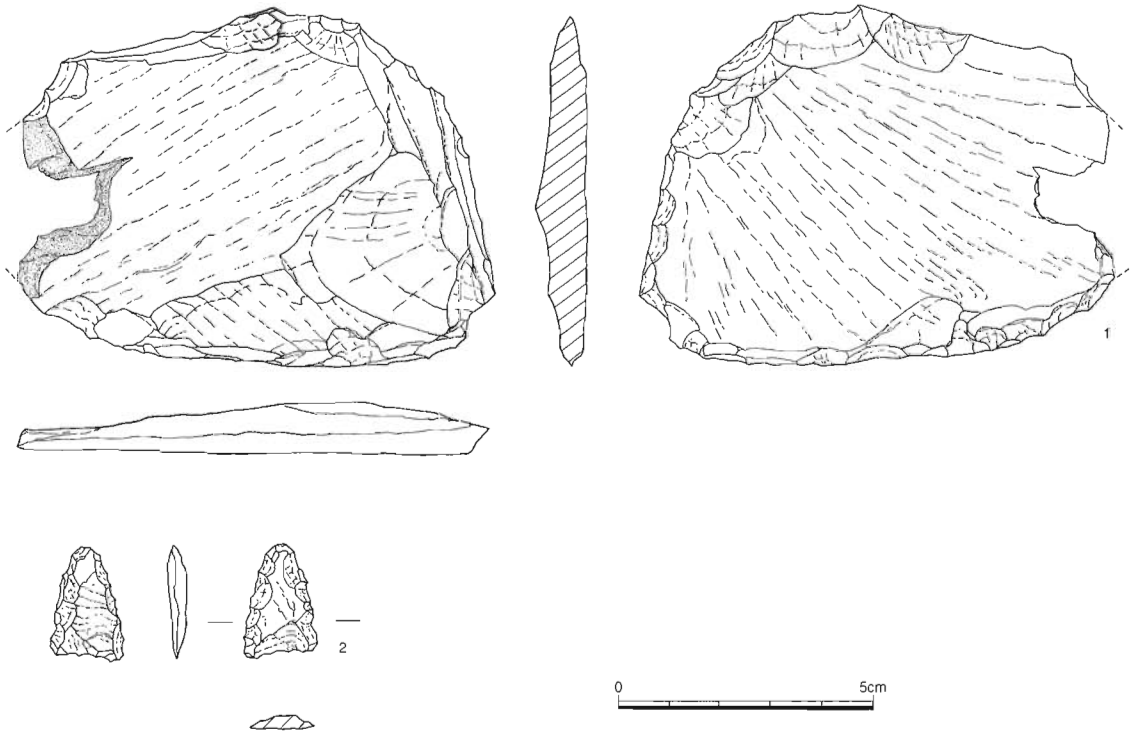


第129図　山守免遺跡３区遺構外出土土器実測図（S=1/3）

（4）遺構外出土石器（第１３０図）

本調査区では、２点の石器が出土している。１は、先端部が欠損した安山岩製のスクレーパーである。長さ９.２㎝、幅７.０㎝、厚さ１.０㎝を測る。

２は、安山岩製の石鏃である。無茎で凹茎式三角形鏃であるが、抉りが浅いものである。長さ２.２㎝、幅１.５㎝、厚さ０.３㎝を測る。



第130図　山守免遺跡３区遺構外出土石器実測図（S=2/3）

山守免遺跡３区　調査風景

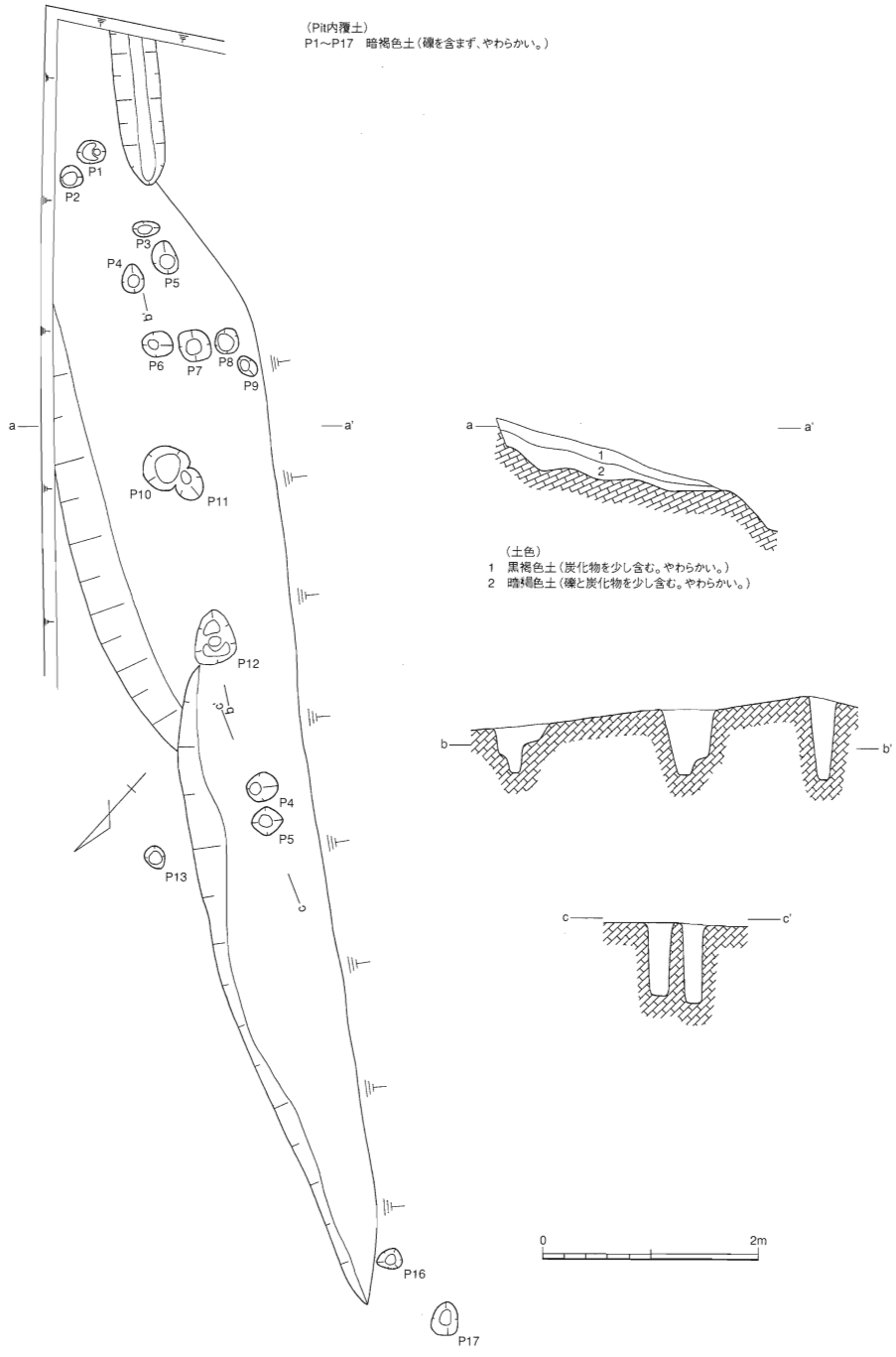
（5）平成１０年検出遺構（掘立柱建物跡）

（調査経過）

平成１０年度には、３区の南西斜面下方の調査を行った。調査面積は１６２㎡である。本調査を４月１日～４月１７日まで実施した。まず重機による表土除去を、４月６日～４月１０日まで実施した。その際、斜面の下方２ｍの部分で大きく削平を受けていることがわかり、この部分までを本調査の範囲とした。４月１３日から人力による掘削を開始し、古墳時代後期から奈良時代にかけての加工段を検出した。

ＳＢ０８　（第１３１図）

規模・形態　ＳＢ０８は３区南西斜面下方に位置する加工段で、ＳＢ０９・ＳＢ１１と切り合い関



第131図　山守免遺跡３区SB08・SB09・SB12実測図（S=1/60）

係にある。ＳＢ０９・ＳＢ１１との切り合いは、プラン検出時の所見・土層観察から、ＳＢ１１→ＳＢ０９→ＳＢ０８の前後関係にある。

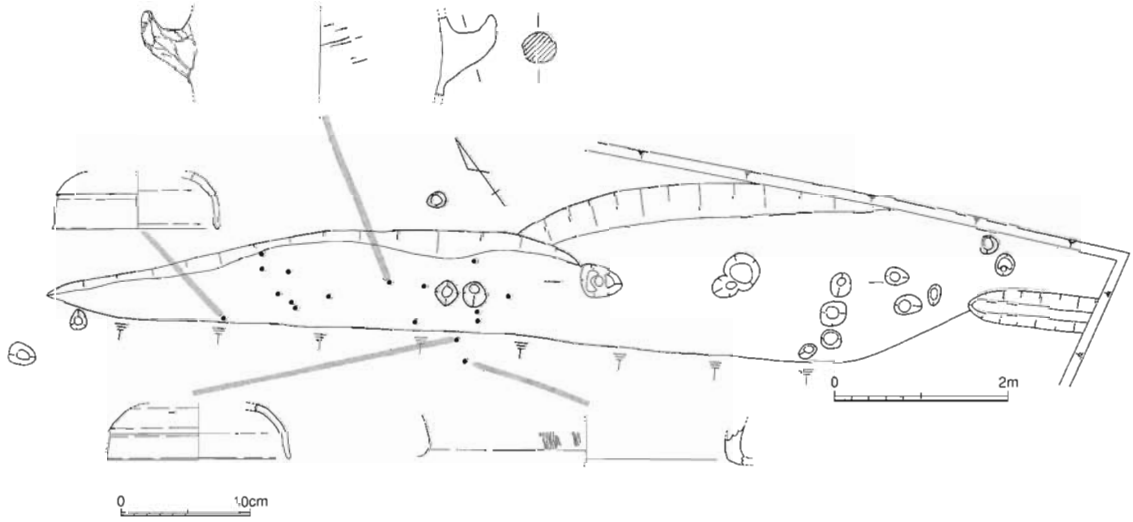
ＳＢ０８は緩斜面に営まれており、斜面下方側の大半は、すでに失われているものと思われる。遺構は隅丸方形プランになるものと考えられ、壁の高さは約０.２ｍを測る。規模は長軸６.２ｍ、短軸は不明である。

床面はほぼ平坦である。覆土は４層に分かれており、上から淡橙褐色土、暗褐色土、暗褐色土（小礫を含む）暗黒褐色土の順で堆積していた。

床面からは柱穴を２基（Ｐ１４，１５）を検出している。２基の柱穴は隣接しており、１度建て替えた可能性もある。

遺物の出土状況（第１３２図）

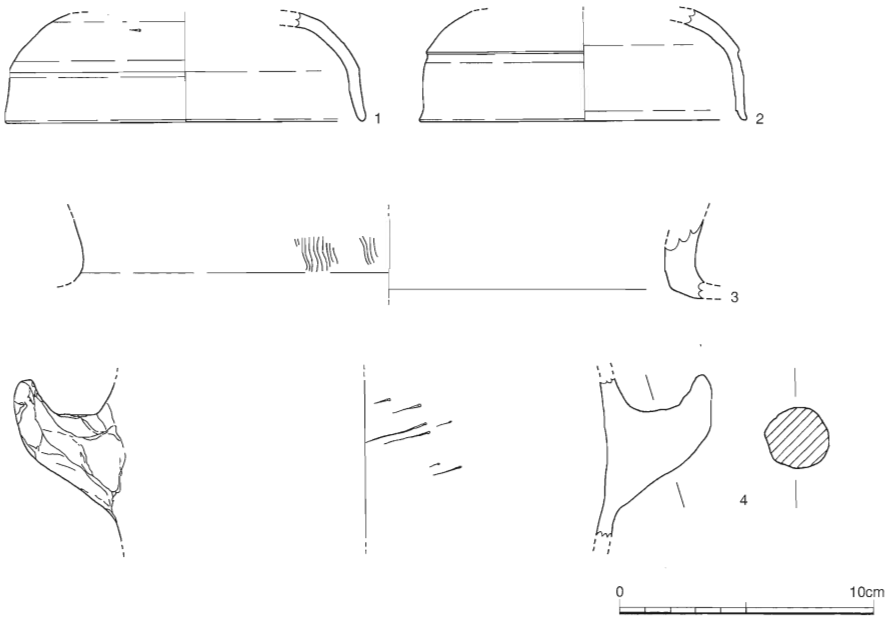
建物跡の大半が流出していたこともあり、遺物はあまり多くない。床面中央付近にまんべんなく出土した。大半が摩滅した土師器の破片であった。床面資料から、遺構の廃棄時期は古墳時代後期と思われる。



第132図　山守免遺跡３区SB08遺物出土状況（遺構S=1/90.遺物S=1/6）

ＳＢ０８出土遺物　（第１３３図）

建物跡内からは土師器、須恵器が出土している。１，３は床面直上から出土したものである。１は須恵器の坏蓋で口縁部径は１４.２㎝である。口縁部はやや外反しており、肩部に突帯はない。天井部には単位幅が約９㎜の回転ヘラケズリが施されている。２も須恵器の坏蓋で、口縁部径は１３.０㎝である。口縁端部に段を持ち、肩部の突帯は上下を強くナデて作っている。３は須恵器の甕の頸部で、頸部径は２４.３㎝である。口縁部の外側には縦方向のハケメ調整が施されている。器壁は厚く１.２㎝あり、口縁部の内側はヨコナデ調整を施し、頸部の下からはケズリ調整が施されている。４は土師器の甑の把手部分で、胴部径は１９.８㎝である。内側には横方向のケズリ調整が施されている。把手の径は約２.４㎝である。



第133図　山守免遺跡３区SB08出土土器実測図

ＳＢ０９（第１３１図）

ＳＢ０９は、３区南西斜面下方に位置する加工段で、ＳＢ０９，ＳＢ１１，ＳＢ１２と切り合い関係にある。ＳＢ０８，ＳＢ１１，ＳＢ１２との関係は、プラン検出時の所見・土層観察から、ＳＢ１１→ＳＢ１２→ＳＢ０９→ＳＢ０８の前後関係にあると考えられる。

ＳＢ０９は緩斜面に営まれており、斜面下方側の大半はすでに失われているものと考えられる。遺構は隅丸方形プランになるものと考えられ、壁の高さは約０.２５ｍを測る。規模は長軸６ｍ、短軸は不明である。ピットは残存する部分では１２基（Ｐ１～１２）検出した。その内柱穴は５基ある。２基ずつが隣接しており、１度建て替えが行われたと考えられる。柱穴間の距離は、仮に建物をそれぞれＡ・Ｂとすると、建物Ａは1.５ｍと２.０ｍ、建物Ｂは1.７ｍと1.８ｍで建物Ｂの多さはほぼ同じである。また、両建物とも西側の柱穴間の方が長くなっている。床面はほぼ平坦である。

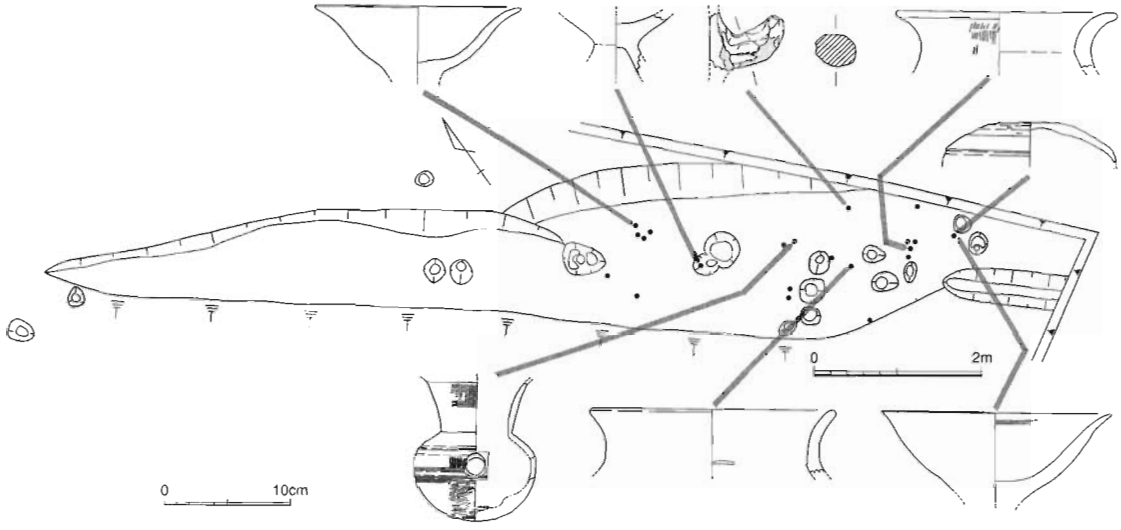
覆土は２層に分かれており、上から黒褐色土、暗褐色土の順で堆積していた。

遺物の出土状況　（第１３４図）

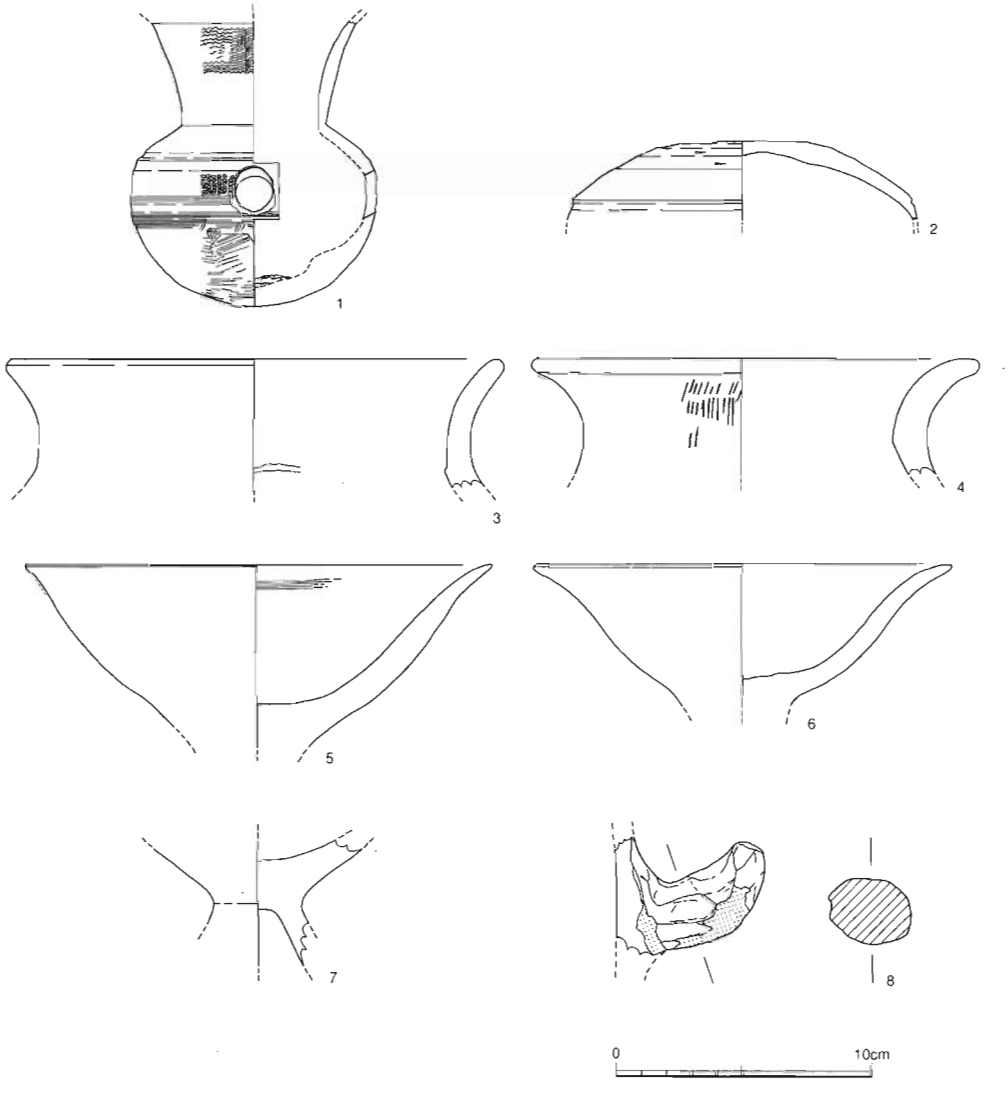
建物跡の大半が流出していたこともあり、遺物はあまり多くない。床面中央と壁際にややかたまって出土している。またピットからもいくつかの土器片が出土した。床面資料から遺構の廃棄時期は古墳時代後期と考えられる。

ＳＢ０９出土遺物　（第１３５図）

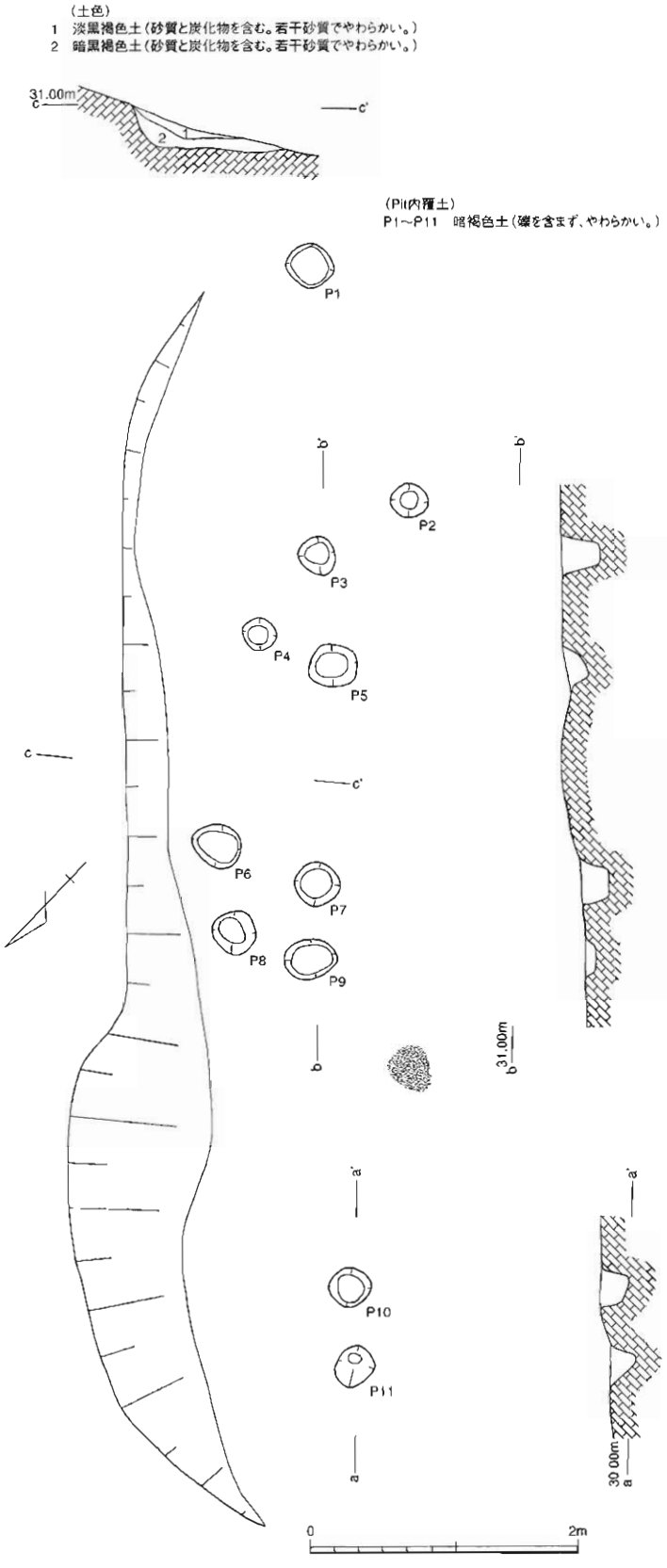
建物跡内からは土師器、須恵器が出土している。１，６，７が床面直上から出土したものである。１～２は須恵器で、４～８は土師器である。１は胴部径９.７㎝の甕である。孔径は１.６㎝で、頸部には波状文が施されている。底部はヘラケズリを行ったあとハケメ調整を行っており、ハケメの



第134図　山守免遺跡 3 区SB09遺物出土状況（遺構S=1/90.遺物S=1/6）



第135図　山守免遺跡 3 区SB09出土土器実測図（S=1/3）



第136図　山守免遺跡３区SB10実測図（S=1/60）

見える多面的な底となっている。２は残存部径１３.７cmの坏蓋である。肩部には沈線が１条施されている。天井部には単位幅７～１０mmの回転ヘラケズリが施されている。３は口縁部径２４.４cmの甕である。内外面ともにナデ調整を施している。４は口縁部径３８.６cmの甕である。外面にタテ方向のハケメを口縁部まで施している。内面はナデ調整である。５は口縁部径１８.３cmの高坏の坏部である。口縁部はやや外反し、口縁外面はナデ調整を施し、内面の一部にはハケメが見える。６は口縁部径１６.３cmの高坏である。口縁部はやや外反している。外面はナデ調整を施している。内面は摩滅のため調整不明である。７は頸部径３.３cmの高坏である。内外面ともにナデ調整を施している。８は甑の把手部分である。把手の直径は３.２cmである。

ＳＢ１０（第１３６図）

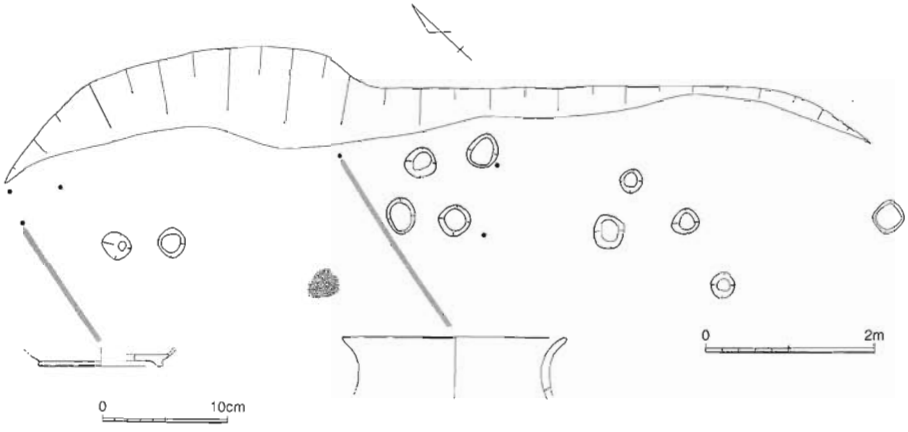
ＳＢ１０は３区南西斜面下方に位置する加工段で、ＳＢ０８の北西にやや離れて位置する。ＳＢ１０は緩斜面に営まれており、斜面下方側の大半はすでに失われているものと考えられる。遺構は隅丸方形プランになるものと考えられ、壁の高さは約０.２mを測る。規模は長軸１０m、短軸は不明である。ピットは残存する部分では１１基検出した。その内柱穴は４基ある。４本柱の建物があり、１度建て替えを

行ったものと考えられる。柱穴間の距離は、建物を仮にＡ・Ｂとすると、建物Ａは３.３ｍと２.５ｍ、建物Ｂは３.５ｍと２.８ｍで建物Ｂの方が若干大きい。また、両建物とも西側の柱穴間の方が長くなっている。　北西側にある２基の柱穴の東側には焼土があり、レベル的にはこの２基の柱穴と焼土は伴う可能性もある。それぞれの建物の切り合いは不明である。

覆土は２層に分かれており、上から淡黒褐色土、暗褐色土の順で堆積していた。

遺物の出土状況
（第１３７図）

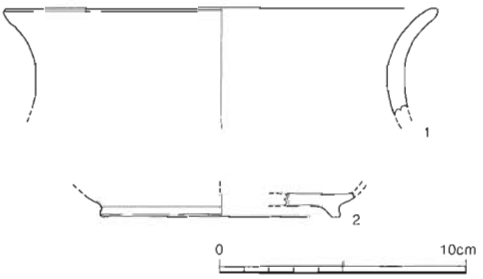
建物跡の大半が流出していたこともあり、遺物はかなり少ない。床面資料から、遺構の廃棄時期は奈良時代と思われる。



第137図　山守免遺跡３区SB09遺物出土状況（S=1/90）

ＳＢ１０出土遺物（第１３８図）

建物跡内からは土師器と須恵器が出土している。１は土師器の甕の口縁部で、口縁部径１７.５㎝である。内外面ともに摩滅のため調整は不明である。２は須恵器の皿の底部で、底部径は９.５㎝である。内外面ともに摩滅のため調整は不明である。



第138図　山守免遺跡3区SB10出土土器実測図（S=1/3）

ＳＢ１１（１３９図）

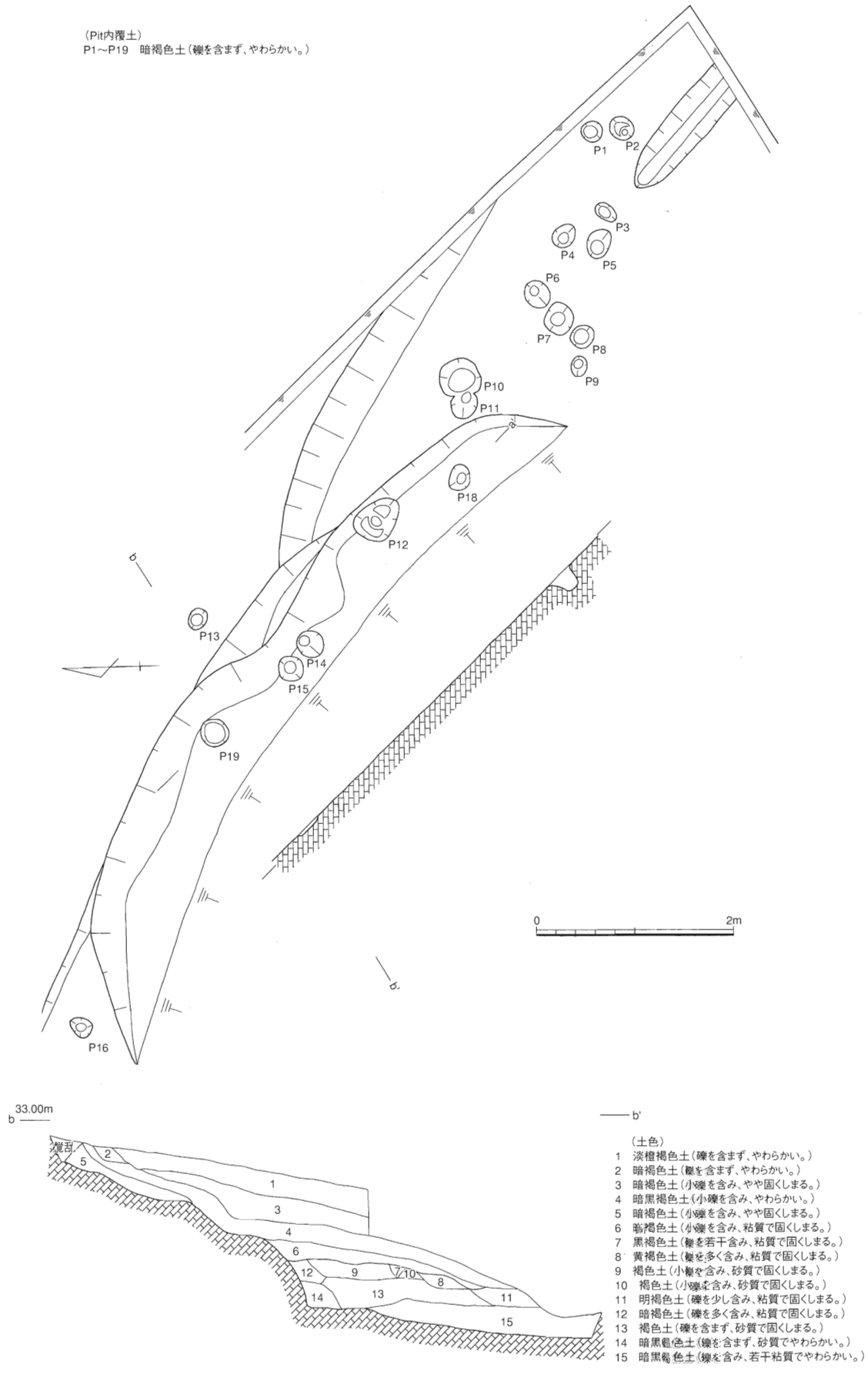
ＳＢ０１１は３区南西斜面下方に位置する加工段で、ＳＢ０９，ＳＢ１１と切り合い関係にある。ＳＢ０９９，ＳＢ１１との関係は、プラン検出時の所見・土層観察から、ＳＢ１１→ＳＢ０９→ＳＢ０８の前後関係にあると考えられる。

ＳＢ１１は緩斜面に営まれており、斜面下方側の大半はすでに失われているものと考えられる。遺構は隅丸方形プランになるものと考えられ、壁の高さは約０.７ｍを測る。規模は長軸７.８ｍ、短軸は不明である。柱穴は残存する部分では２基検出した。柱穴間は５.３ｍである。床面はほぼ平坦である。

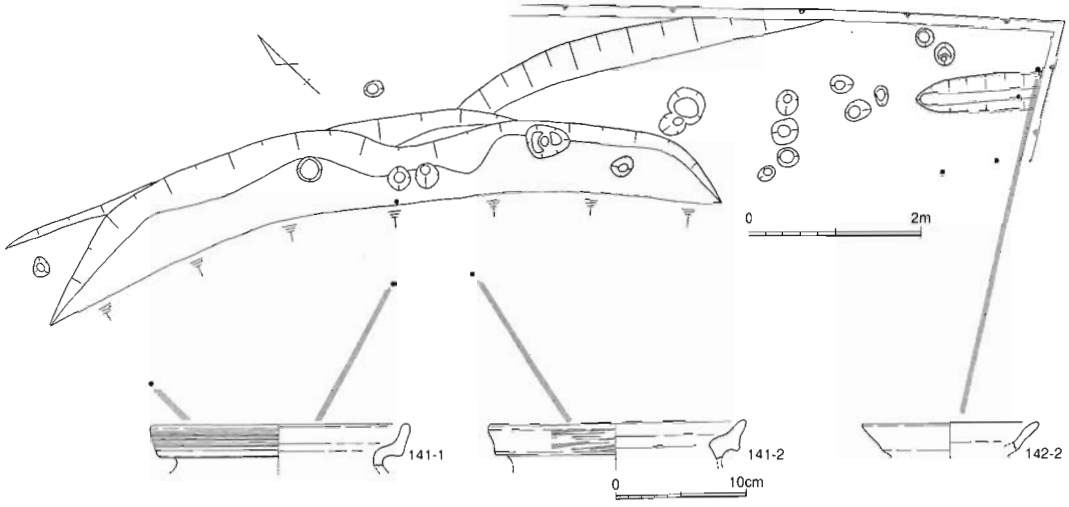
覆土は９層に分かれており、上から黒褐色土、横褐色土、褐色土、明褐色土、暗褐色土、褐色土、暗黒褐色土の順で堆積していた。

遺物の出土状況（第１４０図）

遺物は床面直上から出土した土師器の他、覆土中からは弥生土器が出土した。遺構の廃棄時期は、床面資料の土師器小片が実測不可能なため細かい時期は分からないが、その他の遺構との切り合い関係から、古墳時代後期前期～後期のものであろう。



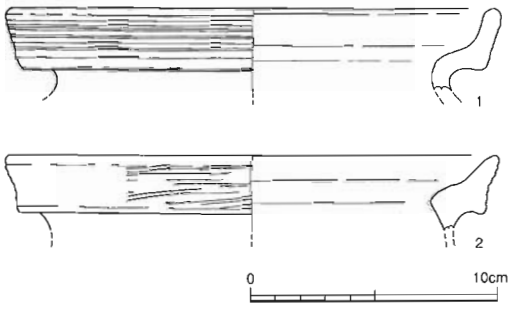
第139図　山守免遺跡３区SB11・SB12実測図（S=1/60）



第140図　山守免遺跡３区SB11・SB12遺物出土状況（S=1/90）（遺物S=1/60）

ＳＢ１１出土遺物（第１４１図）

実測可能な弥生土器を２点示した。１は甕の口縁部で、口縁部径は２０.０㎝である。口縁外面には擬凹線を施し、内側はナデ調整を施している。２も甕の口縁部で、口縁部径は１９.８㎝である。口縁外面にはやはり擬凹線を施し、内側はナデ調整を施している。内側の屈曲部より下にはヘラケズリを施している。



第141図　山守免遺跡３区SB11出土土器実測図（S=1/3）

ＳＢ１２（１３９図）

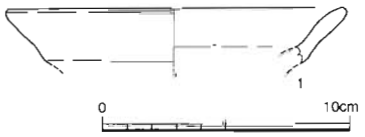
ＳＢ１２は３区南西斜面下方に位置する加工段で、ＳＢ０９と切り合い関係にある。観察からＳＢ１２→ＳＢ０９の前後関係にあると考えられる。ＳＢ１２は緩斜面に営まれており、壁体溝のみが残っている。規模は長軸２ｍ以上、短軸は不明である。床面からはピットは検出していない。床面はほぼ平坦である。覆土は１層で、暗褐色土が堆積していた。

遺物の出土状況（第１４０図）

建物跡の大半が流出していたこともあり、遺物は少ない。遺構の廃棄時期は、床面資料から古墳時代後期と考えられる。

ＳＢ１２出土遺物（第１４２図）

１は須恵器の高坏の口縁部で、口縁部径は１３.８㎝である。内外面ともに回転ナデ調整を施している。



第142図　山守免遺跡３区SB12出土土器実測図（S=1/3）

4．小結

これまで述べてきたように山守免遺跡では、主に弥生時代後期前半の遺構と古墳時代中期末～古墳時代後期前半の遺構の、２時期のものを検出している。これらのうち建物跡と考えられるものについては、下にまとめている。以下、調査の成果について簡単に整理し、結びとしたい。

山守免遺跡　検出建物跡一覧

種　類	区	遺　構	規　模	時　期	備　考
竪穴住居跡	1	ＳＩ０１	隅丸方形４.６m×３.１m以上	草田１～２期	周溝あり
		ＳＩ０２	円形？	弥生時代後期	周溝あり
		ＳＩ０３	隅丸方形５.５m×５.８m	草田１～２期	周溝あり
	2	ＳＩ０１	隅丸方形２.６m×３.７m	弥生時代後期	
掘立柱建物跡	3	ＳＢ０１	桁２間（３.６m）×梁１間（１.６m）以上	出雲１～２期	
		ＳＢ０２	桁２間（３.５m）×梁不明	出雲１～２期	北側建物
		〃	桁２間（３.４m）×梁不明	古墳時代後期	南側建物
		ＳＢ０３	不明（ピット検出）	高広ⅣＢ期	
		ＳＢ０４	不明（ピット有り）	古墳時代後期？	
		ＳＢ０５	不明（竪穴住居跡の可能性あり）	古墳時代後期	
		ＳＢ０６	不明（ピット無し）	不明	
		ＳＢ０７	不明（ピット無し）	不明	
		ＳＢ０８	不明（ピット有り）	出雲１期	
		ＳＢ０９	桁１間（１.５m）×梁１間（２.０m）以上	出雲１期	建物Ａ
		〃	桁１間（１.７m）×梁１間（１.８m）	出雲１期	建物Ｂ
		ＳＢ１０	桁１間（３.３m）×梁１間（２.５m）以上	奈良時代	建物Ａ
		〃	桁１間（３.５m）×梁１間（２.８m）以上	奈良時代	建物Ｂ
		ＳＢ１１	桁１間（５.３m）×梁不明	古墳時代	
		ＳＢ１２	不明（ピット無し）	古墳時代後期	

（１）弥生時代後期の竪穴住居跡について

検出した弥生時代後期の竪穴住居跡は、合計４棟であり、そのうち３棟には周溝がめぐり、時期的にはすべて弥生時代後期前半に属しているものと考えられる。

住居跡の平面形態は、残りの悪い１区ＳＩ０２を除いて隅丸方形プランである。出雲地方の平野部では、弥生時代後期の草田２期前後には、隅丸方形プランの例もいくつか存在するが、円形プランのものが主流である中で、本遺跡検出例は、隅丸方形プランを比較的早い時期から採用している例と考えられ、注目される。

また、住居跡のうち尾根頂部の３棟は標高６６～６７m付近に立地し、もう１棟は標高５７mに立地している。この非常に標高が高い位置に立地している点が、本遺跡の住居跡の特徴的である。さて、弥生時代後期の丘陵頂部に立地する集落の例が近年増えているが、山守免遺跡の検出例は、同一時期（草田２期）の類例の中では非常に標高が高い位置に立地[註5]している点はすでに指摘した通りで、今回の検出例は特異な例として考えられる。

（2）古墳時代の加工段・掘立柱建物跡について

検出した加工段の１２基のうち、ピット等から建物の存在や規模等を推定することが可能な例は少数であった。確実に掘立柱建物跡が存在するものと考えられる加工段は、ＳＢ０１，０２に存在する３棟であり、他は、加工段のみでピットの存在が不明確であるか、検出できなかったものである。ピットが検出できなかったものは、居住用としての性格以外の用途を検討すべきかも知れないが、残存状況の良好なものが少ない状況であり、今回は詳細な検討はできなかった。

また、検出した遺構の時期は、ＳＢ０３，１０を除くほとんどのものが古墳時代後期前半と推測されるものである。出雲地方では、丘陵斜面を加工して作った平坦面に掘立柱建物を立てる例がいくつか見られ、古墳時代では掘立柱建物が居住用の主要な建物になるのは、７世紀代に入ってからであることが指摘されており、また各小地域ごとに竪穴住居と掘立柱建物の割合の変化に時期差が存在する点も指摘されている(註6)。山守免で検出した建物跡と同一時期の出雲地方の集落例では、基本的に竪穴住居跡が主流であり、割合としても高いものである。この中で山守免の例は、いち早く掘立柱建物跡で構成された集落例として考えることができる。また、宍道町内においては、古墳時代の集落例は少なく、貴重な資料となった。

（3）まとめ

以上述べてきたように、山守免遺跡で検出された遺構は、弥生時代後期前半では、他の例に比して非常に高い標高に住居跡が立地している。そのような標高に立地する例は後期後半の例が出雲では一般的である中で、やや特異な例としてとらえることができる。

また、古墳時代後期前半の建物跡は、同時期では竪穴住居跡が主流の中で、加工段・掘立柱建物跡がほとんどを占めている点に特徴があることが指摘された。ただし、宍道町周辺の宍道湖南岸部の様相に未だ不明な点があり、今回の調査例が、この地域では一般的な様相であるかも知れず、今後の調査例を待って再検討していく必要があろう。

註１　鹿島町教育委員会１９９２『講武地区県営圃条整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』

註２　松山智弘１９９１「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根県考古学会誌』第８集

註３　大谷晃二１９９４「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第１１集

註４　島根県教育委員会１９８４『高広遺跡発掘調査報告書』

註５　島根県教育委員会１９９８『門生黒谷Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』

註６　島根県教育委員会１９９６『柳Ⅱ遺跡・古久白墳墓群・神庭谷遺跡』

第８章　石地蔵遺跡

第１節　遺跡の位置と調査の経過

石地蔵遺跡の名前は、この地にあった石造地蔵菩薩座像に由来するものである。この地蔵菩薩像は、高さ約２ｍ、幅約３ｍの巨大な岩の一面に地蔵菩薩座像を磨崖仏として彫り込んだもので、現在でも信仰の対象になっている。

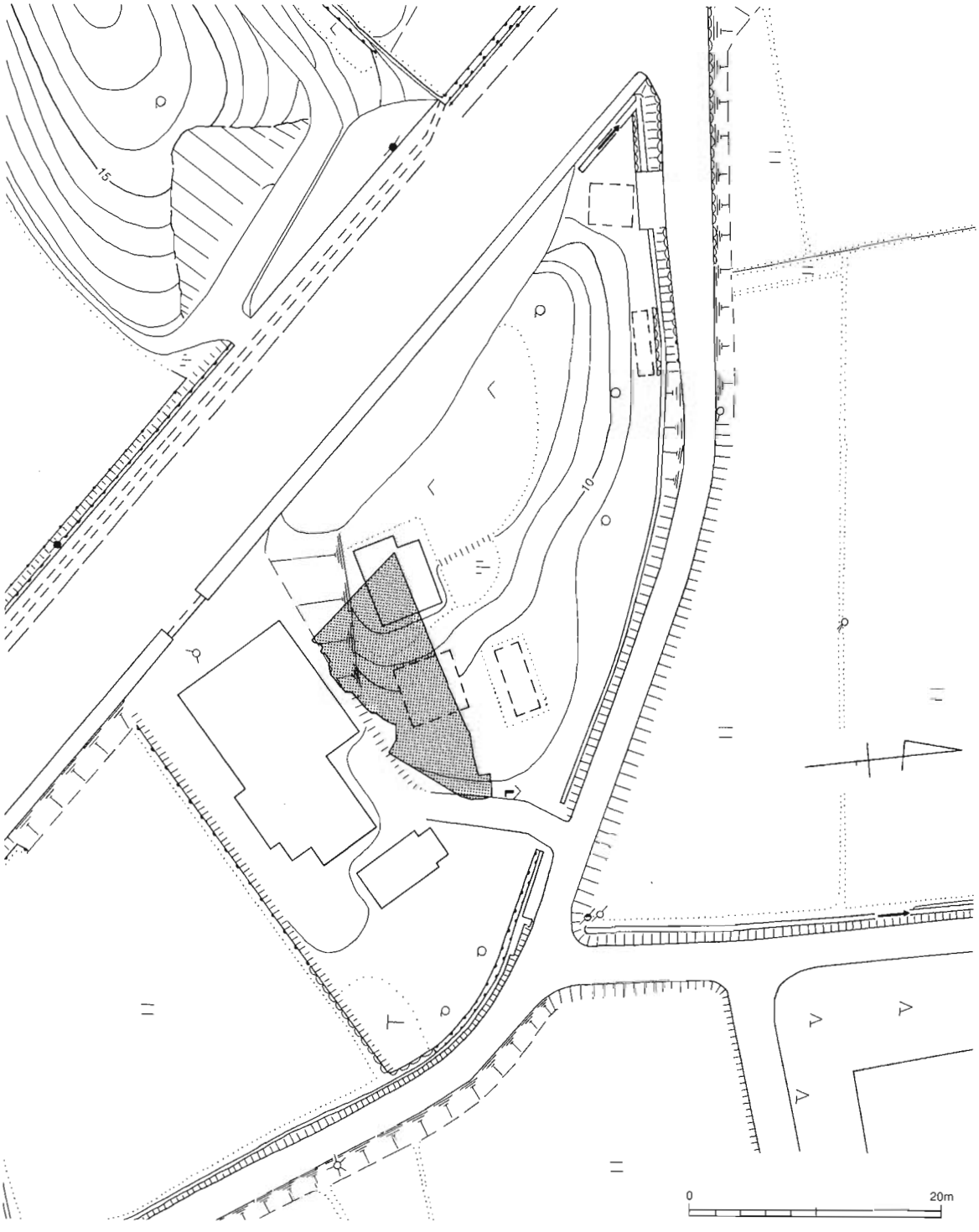
石地蔵遺跡は、宍道町佐々布の東に延びる尾根の先端、標高８～12mに位置し、前述の地蔵菩薩像設置位置と、その後方の斜面が調査対象範囲である。調査開始時の地形は 500㎡程の独立した小丘陵状の地形を呈しているが、元々は、西側から延びる丘陵の先端であったことは明白であり、昭和39年に国道54号線が現在の位置（本遺跡西側）に建設された際に残丘となったものである。元々、この小丘陵上には家屋が建っていたとのことで、国道54号線建設に伴い、家屋が東側に移転した後は、畑として利用されていた。遺跡周辺は水田に利用されており、小丘陵の南東側には、調査直前まで佐々布公民館が建っていた。公民館の建物は、元の水田を埋めて造成していたと思われ、小丘陵の周囲にはかなりの埋土があることが予想された。

遺跡西側の谷には、横穴墓２基の他、古墳時代を中心とする多量の遺物を出土した竹ノ崎遺跡が、竹ノ崎遺跡直上の丘陵には４世紀末頃の大型円墳である上野１号墳、弥生時代後期の高地性集落である上野遺跡などが位置している。また、遺跡東側の谷奥には、巨石祭祀遺跡である女夫岩遺跡や、弥生時代から古墳時代まで続く集落遺跡である矢頭・清水谷遺跡、古墳時代中期を中心とする水溜古墳群などがあり、東西両側の丘陵は、弥生時代から古墳時代の遺跡密集地である。また、中世以降の石地蔵遺跡周辺は、交通の要衝として発展していったことがうかがわれ、宍道要害山城、城山遺跡、佐々布要害山城などの多くの中世山城を見ることができる位置になっている。

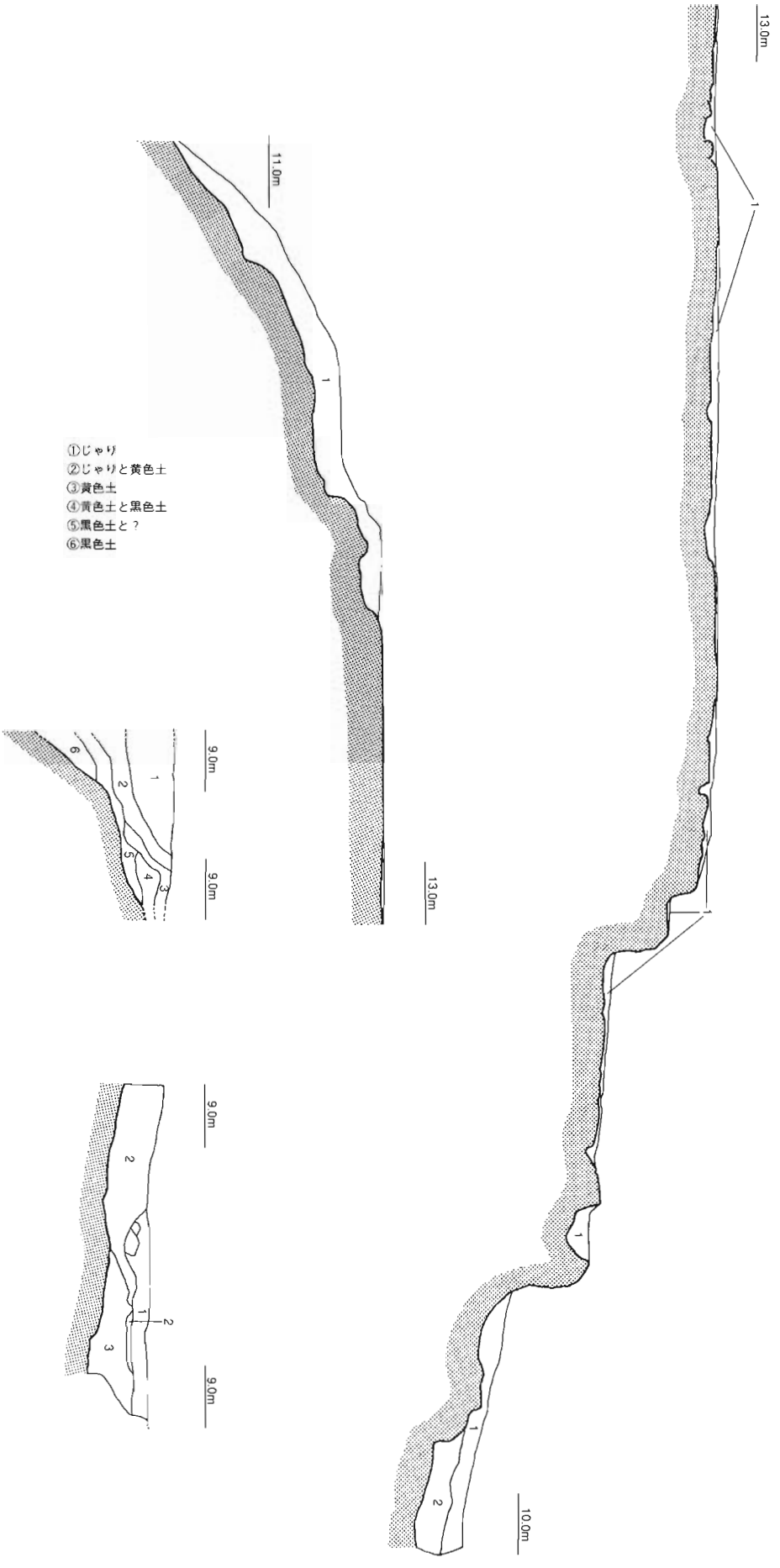
宍道町は、その加工のしやすさから様々な石造物の原石となり、現在でも採掘され続けている来待石の産出地である。宍道町東部の来待地区には多くの石切場が知られており、町内には様々な石造物がある。石地蔵遺跡の地蔵菩薩像もその一つであり、来待石産出地である宍道町の地域を特徴付ける重要な文化財の一つと位置付けられるものである。こうしたことから、島根県教育委員会では、地蔵菩薩像本体についての調査も含め、周辺を遺跡としていたが、その地蔵菩薩像が現在でも信仰の対象となっていることから、平成９年３月頃に約２ｍ北側に移設され、工事予定地内から外に出され、保存されることとなった。そのため、地蔵菩薩像本体の調査は写真測量に留め、地蔵菩薩像の元の設置位置の状況の確認と、その後背丘陵南斜面の掘削を行うことになった。平成１０年１２月８日から掘削を開始し、掘削面積は１２０㎡に及んでいる。１２月１４日には地蔵菩薩像設置痕跡を確認、少量の遺物を検出し、１２月１６日には掘削を終了した。また、１２月２３日に地蔵菩薩像本体の写真測量を行い、全ての現地調査を終了した。

第２節　遺構

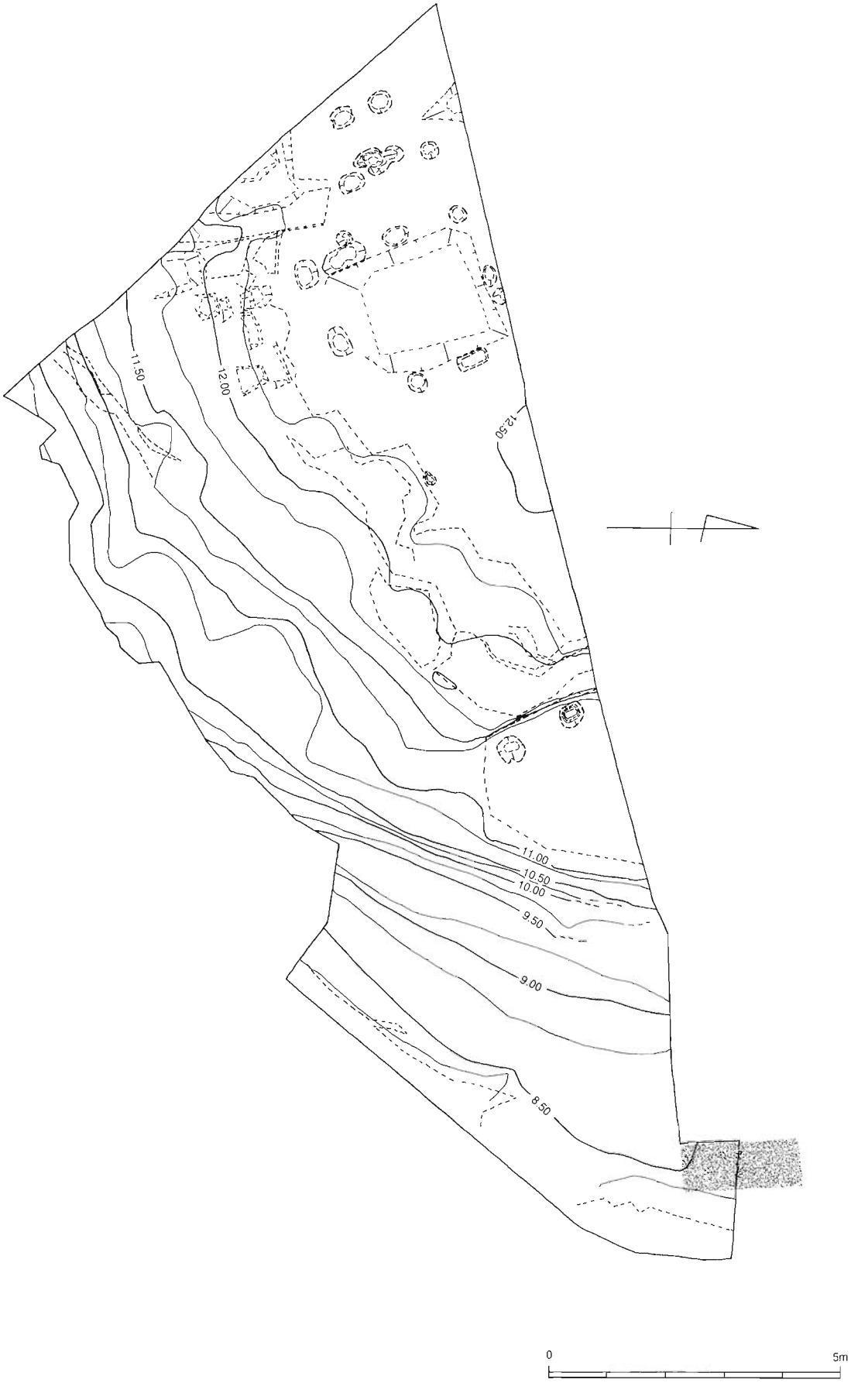
調査は、小丘陵頂部の掘削から開始した。小丘陵頂部は宅地によって削平が及んでおり、耕作土より下方にはほとんど埋土が見られなかった。地山は花崗岩質の脆い岩盤で、多数の柱穴や掘込みを検出したが、いずれも近代になって建てられた家屋に伴うものと思われる。この周辺からは、遺



第143図　石地蔵遺跡調査前地形測量及び調査区配置図（S＝1/500）



第144図　石地蔵遺跡土層断面図（S＝1/40）



第145図　石地蔵遺跡調査後地形測量図（S＝1/100）

物は出土しなかった。

南側斜面は、比較的厚い埋土が見られたが、非常に軟らかく、近代の耕作土かその流土と考えられる。岩盤の亀裂が多数見られ、一部に道と思えるような幅の狭い緩斜面も見られるが、確実な遺構は検出できなかった。また、石地蔵遺跡出土遺物の大半は、この南側斜面から出土したものであるが、いずれも小片であり、遺構に伴うものとは思えない。

東側斜面には、完全に水平に切り取られた、のみ状工具による加工痕を残す平坦面や石垣が見られた。地元の人の話によると、いずれも昭和39年以前の家屋に伴うものと思われる。斜面下方以外はにほとんど埋土が無く、遺物も出土しなかった。

地蔵菩薩像が設置されていた遺跡東側は、公民館への進入路として使用されていた部分で、地表近くは、非常に硬くしまった土が堆積していたが、下層は青みがかった還元細砂層で、緩やかに東へ落ち込んでいる。この位置が、公民館建設以前に水田として利用されていたことがうかがわれる。

調査直前に移転した地蔵菩薩像の元の設置位置は、岩盤の上に礫が敷き詰められた状態で、検出された。検出した礫は、地蔵菩薩像の設置のための根石と思われるが、その一連の土層中からは空き缶など比較的新しいものが出土しており、この位置への設置も比較的最近になってから行われた可能性がある。付近の住民の話では、地蔵菩薩像の前を小さな道が通っていたとのことであるが、発掘調査では確認できなかった。

第３節　遺物

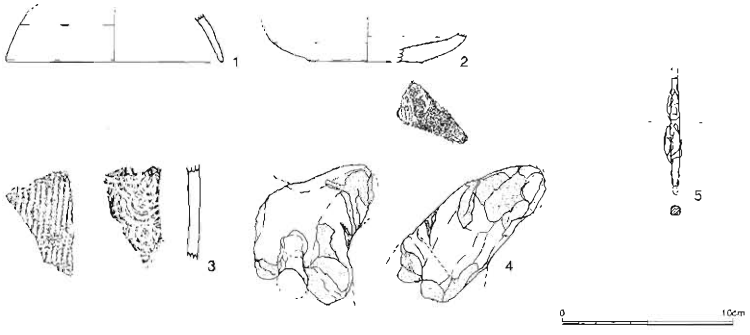
第１４６図は石地蔵遺跡出土遺物である。土器類は、いずれも南斜面から出土しており、地蔵菩薩像に伴うものではない。

１は、須恵器蓋の口縁部の小片である。両面ともナデ調整され、端部は丸くおさまる。明青灰色を呈し、胎土中にわずかに白色の砂粒を含む。６世紀後半～７世紀初めのものであろう。

２は、須恵器坏の底部付近の小片である。底部に回転糸切り痕を未調整で残し、体部や内面はナデである。高台は無く、底部と体部の境にわずかに段を持ち、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。赤みがかった灰色を呈し、やや酸化炎焼成気味である。８世紀前半のものであろう。

３は、須恵器甕片である。外面に平行タタキ痕を、内面に同心円文を明瞭に残す。青灰色を呈し硬質に焼成されている。

４は、土製支脚である。直立せず前傾する形状で、前方に２本の爪を持つものと思われるが、片側の爪と基部を大きく欠いている。背中から明けられた穴は、貫通するようである。橙褐色を呈し胎土中に白色・赤色の砂粒を含んでいる。



第146図　石地蔵遺跡出土遺物実測図

石地蔵遺跡で出土した土器類の時期幅は、６～８世紀の幅におさまる。この時期幅は、遺跡西側の竹ノ崎遺跡出土遺物の時期幅におさまるものである上に、石地蔵遺跡出土土器は小片しか見られない。こうした点から、石地蔵遺跡出土遺物の大半は、竹ノ崎遺跡や、その上方の上野遺跡などから流れてきたものである可能性が高い。

５は、鉄釘である。頭部と先端を欠き、残存長約７cmを測り、断面は正方形である。５は、遺跡東側の地蔵菩薩像の元の設置位置近くから出土した。

図版８３右下は古銭である。半銭と読めるが、全面を緑青が覆っており確認できない。地蔵菩薩像への賽銭と思われる。

第４節　石造地蔵菩薩座像

地蔵菩薩像は、幅約3.2m、高さ約1.9m、奥行き約1.0mの扁平な岩の一画に彫り込まれた磨崖仏である。「石地蔵」の名で現在でも信仰の対象になっており、時折参拝者が見られる。地蔵菩薩像本体の部分は、地表より約60cmの位置から、高さ約70cm、幅50cmの上側が丸くなった窓状に彫り込まれており、最も深い位置で表面から約30cmまで彫られている。

地蔵菩薩像は、高さ約60cmの座像として表現されており、右手に錫杖の表現が見られることから地蔵菩薩像であることは明白である。表面はかなり風化が進んでおり、細かい表現は解らない。肩幅から裳裾の幅までの差がほとんど見られず、足を組んで膝を横に出した部分の表現が省略されている。

地蔵菩薩像が彫り込まれている部分の左下に文字の彫り込みが見られる。風化が進んでおり判読し難いが、「南無」と書かれているものと思われる。

第５節　小結

石地蔵遺跡では、後世の地形の改変が著しく、明確な遺構を検出することはできなかった。また、出土遺物についても、その大半が、西側の竹ノ崎遺跡・上野遺跡方面から流れてきたものと推定された。更に、地蔵菩薩像についても、据え付け痕の状況から、当初からこの位置にあったとは考えにくくなった。

地蔵菩薩像は、座像でありながら、膝の表現が見られない点が特徴的である。膝の表現を省略するのは、室町時代と近世の仏像に見られる現象で、石地蔵遺跡の場合、顔や衣服の表現方法から近世のものと考えられる。

石地蔵遺跡に見られる地蔵菩薩像のような小型の磨崖仏は、近畿地方などでは一般的に見られるものであるが、山陰地方では丸彫りにするのが通例である。石地蔵遺跡のような小型の磨崖仏は、来待石の産地である宍道町域に特徴的に見られるものと言えるであろう。

註１　島根県立博物館学芸課長的野克之氏より指導を受けた。

第147図　石地蔵遺跡石造地蔵菩薩座像立面図（S＝1/20）

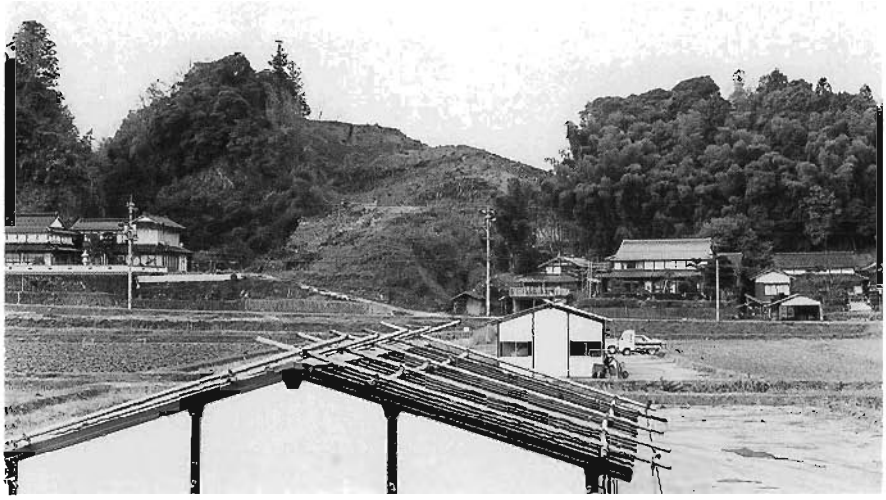
写真図版

勝負廻Ⅰ遺跡全景（西側上空から）

勝負廻Ⅰ遺跡全景（東側上空から）

図版2

勝負廻Ⅰ遺跡遠景
（東（来待の谷）から）



勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
第２郭検出状況（南から）

同
（北から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
第２郭検出状況
（南西から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
第２郭北西下方斜面土層

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
第２郭北側土層

図版4

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
ＳＫ０１土層

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
ＳＫ０１完掘状況

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
第３・第４郭検出状況
（西から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
第３・第４郭検出状況
（第２郭から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
第２・３・４郭
（北西下方から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
外郭３・東１郭間土層

図版6

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
外郭１・２検出状況
（第２郭から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
外郭・第２郭
（北東下方から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
石切り場検出状況

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区１・２号石棺上土層

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
１号石南側溝検出状況（西から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
１号石棺検出状況（西から）

図版8

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
2号石棺検出状況（東から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
2号石棺崩落石除去後状況（西から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区1・2号石棺完掘状況（西から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区１号石棺蓋石除去後状況（西から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
１号石棺床検出状況（東から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
１号石棺内完掘状況（西から）

図版10

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区石棺調査風景

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅱ区加工段（東２～８郭）検出状況（南から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅱ区
通路状遺構検出状況
（北から）

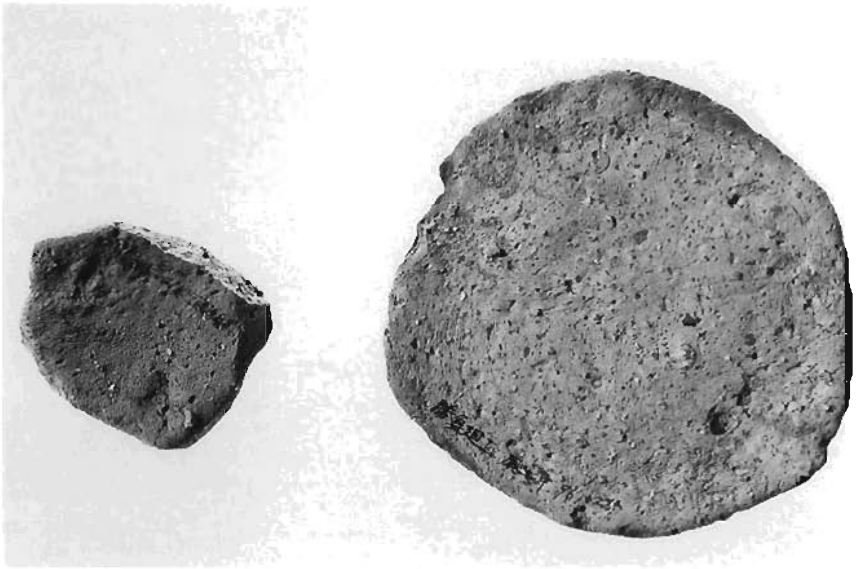
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅲ区全景
（第４郭から）

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅲ区
西２郭検出状況（北西から）

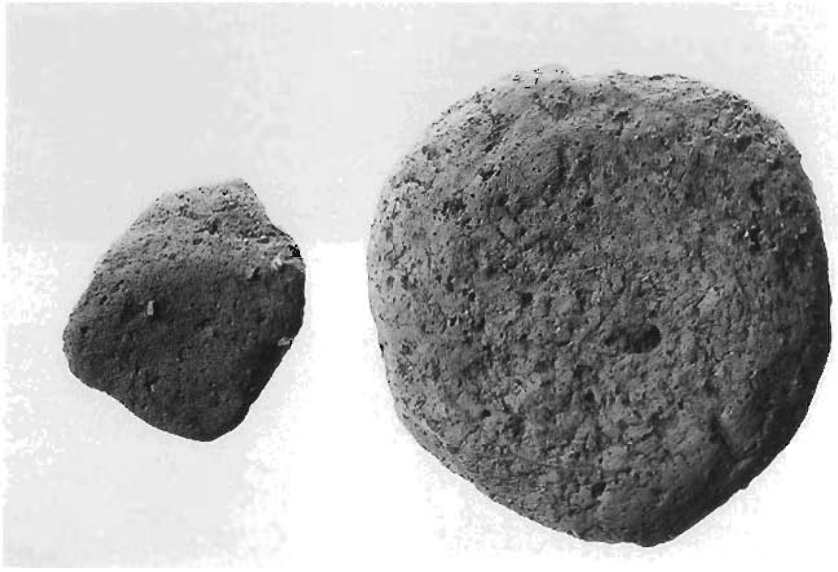
図版12

勝負廻Ⅰ遺跡Ⅲ区道路状遺構検出状況

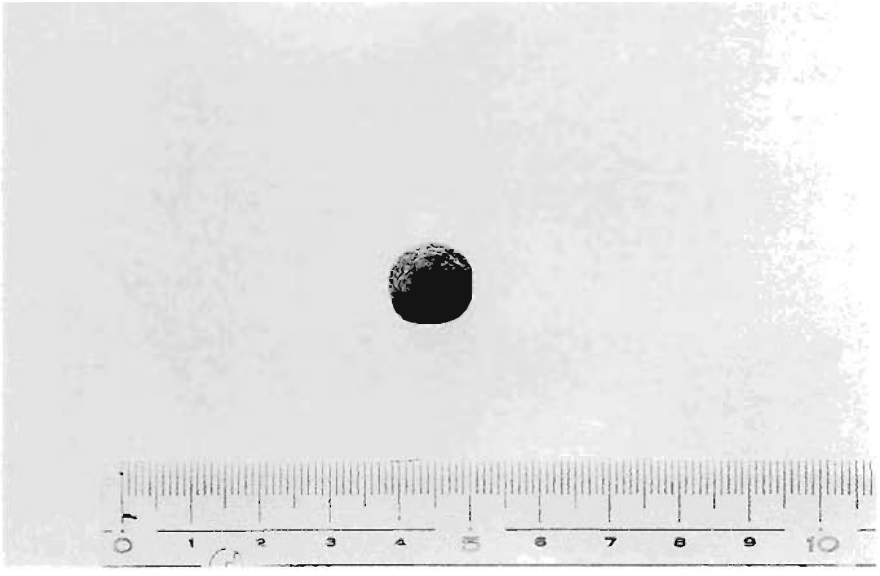
勝負廻Ⅰ遺跡Ⅲ区敷石遺構検出状況



勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
第２郭出土土器



勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
第２郭出土土器



勝負廻Ⅰ遺跡Ⅰ区
第２郭出土金属球

図版14

白石大谷Ⅱ遺跡調査前全景（東から）

白石大谷Ⅱ遺跡調査後全景（東から）

白石大谷Ⅱ遺跡加工段２検出状況（東から）

白石大谷Ⅱ遺跡加工段２検出状況（西から）

図版16

白石大谷Ⅱ加工段３完掘状況（南から）

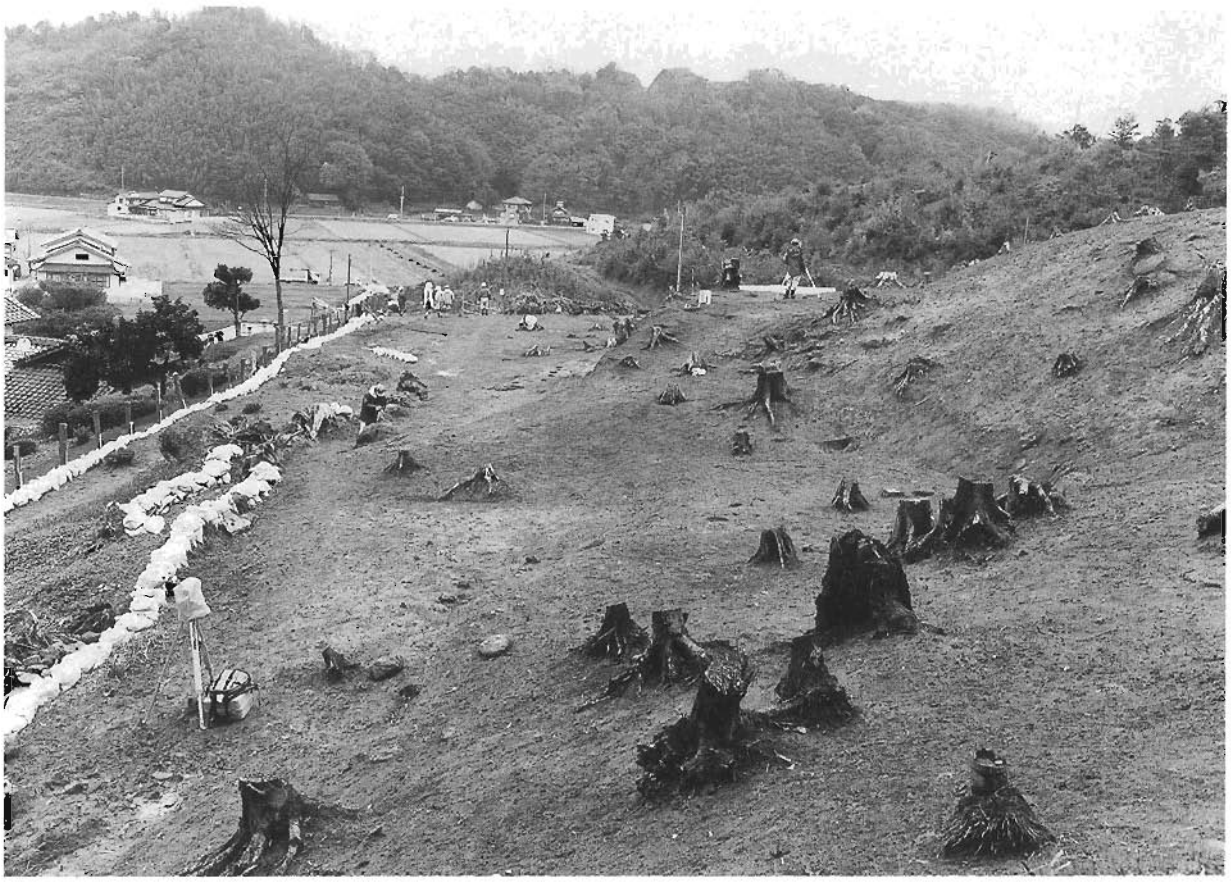
白石大谷Ⅱ加工段１遺物出土状況（北から）

白石大谷Ⅱ加工段１完掘状況（西から）

白石大谷Ⅱ加工段１完掘状況（東から）

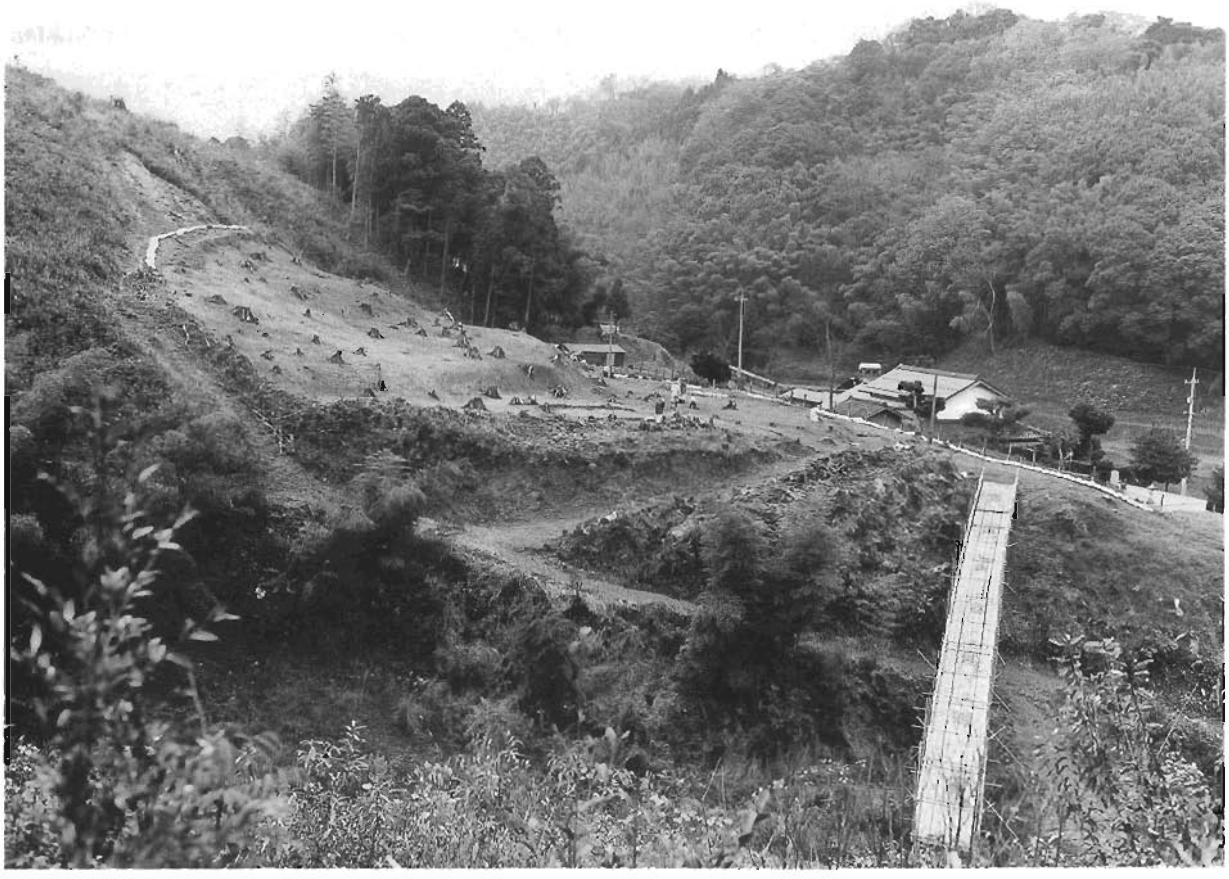
図版18

白石大谷Ⅱ西側谷部遺物出土状況（北から）



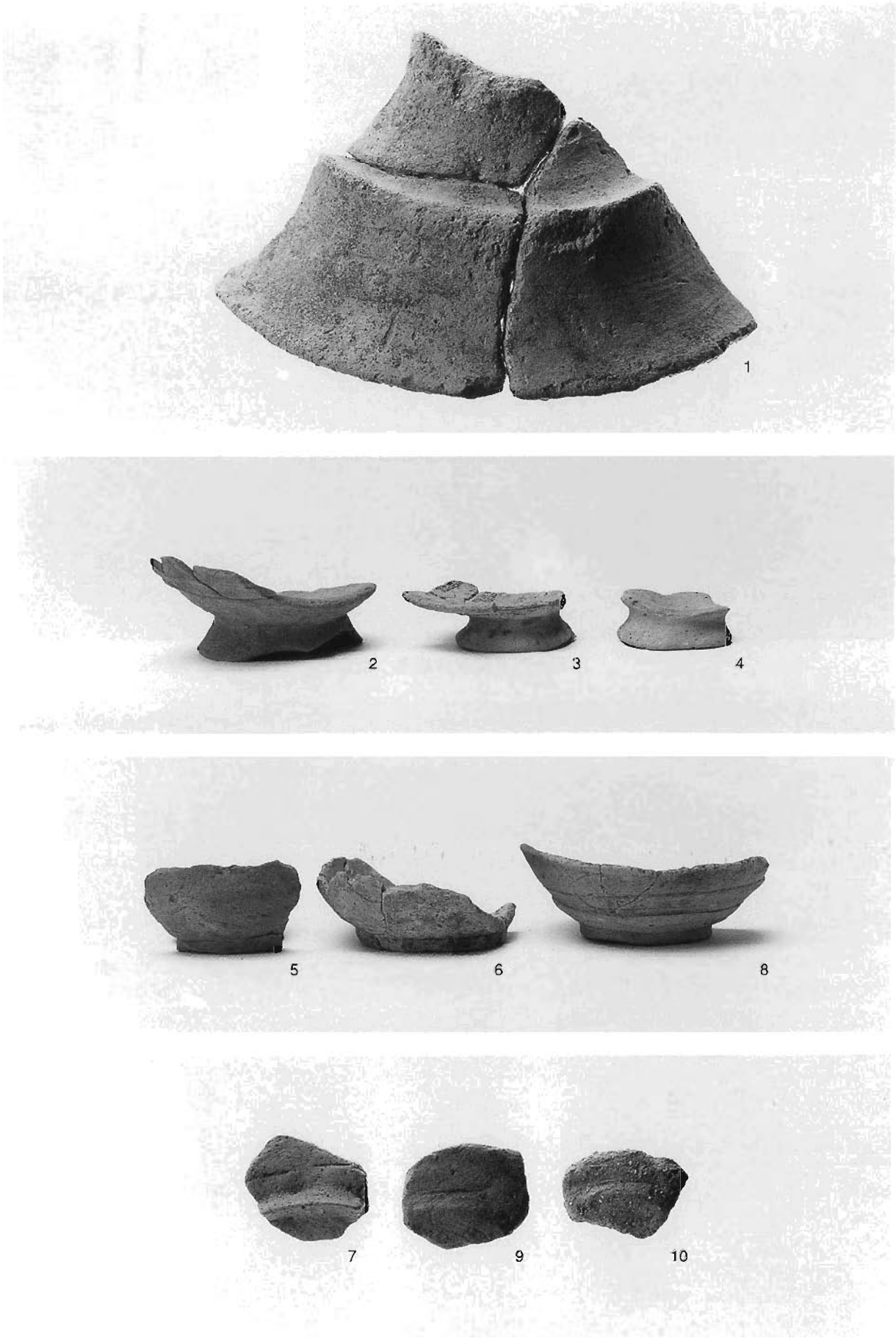
白石大谷Ⅱ調査後近景（西から）

白石大谷Ⅱ調査後近景（北から）

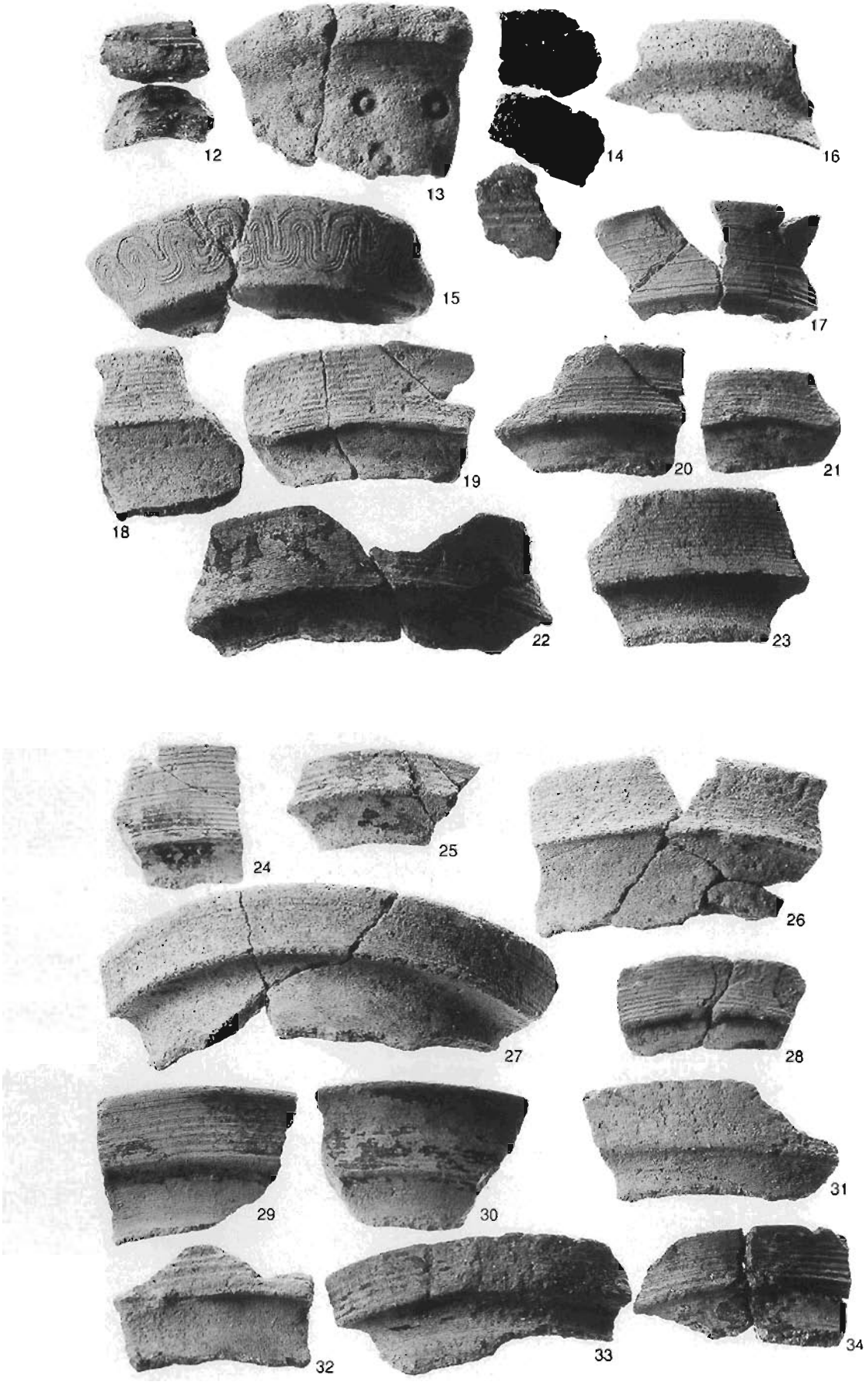


白石大谷Ⅱ調査後近景（東から）

図版20

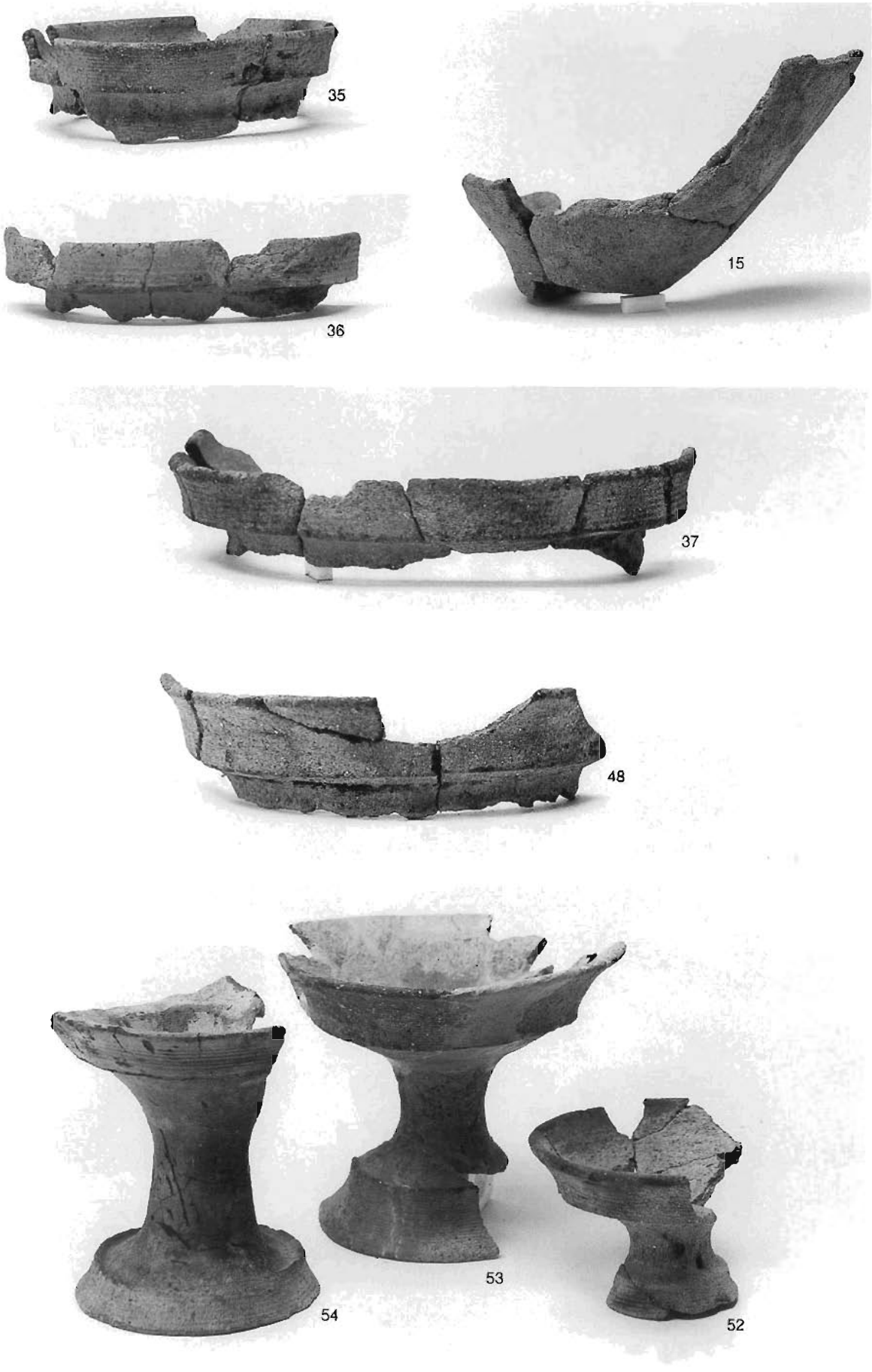


白石大谷Ⅱ遺跡出土遺物（１）

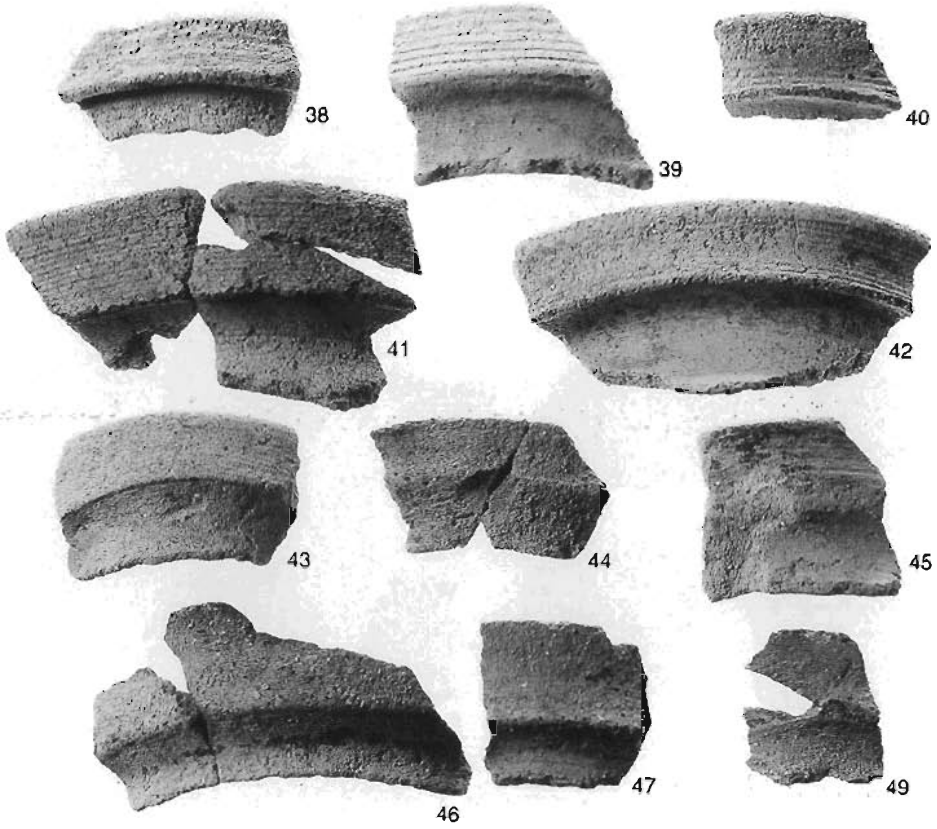


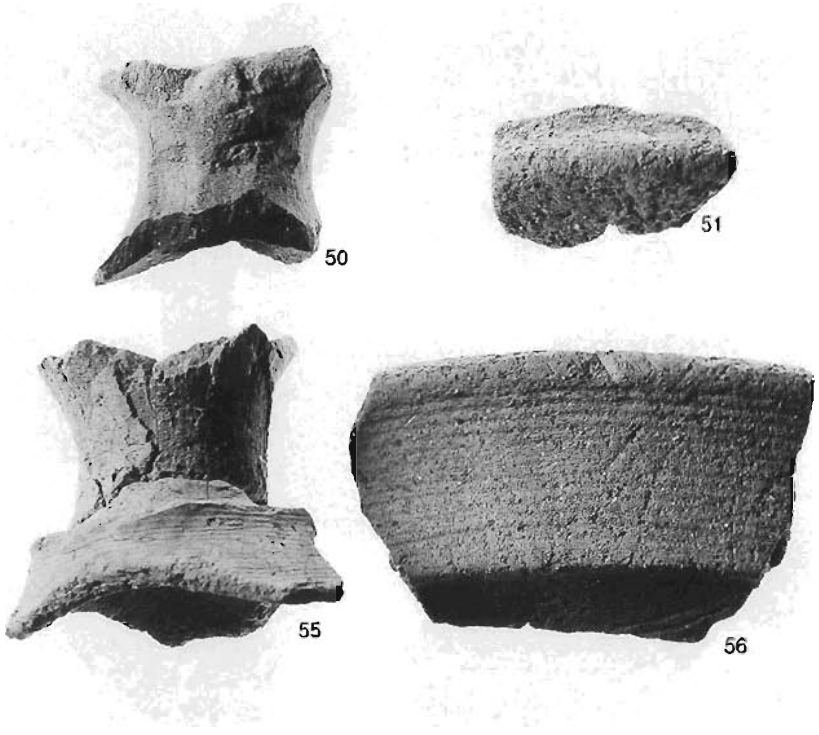
白石大谷Ⅱ遺跡出土遺物（２）

図版22



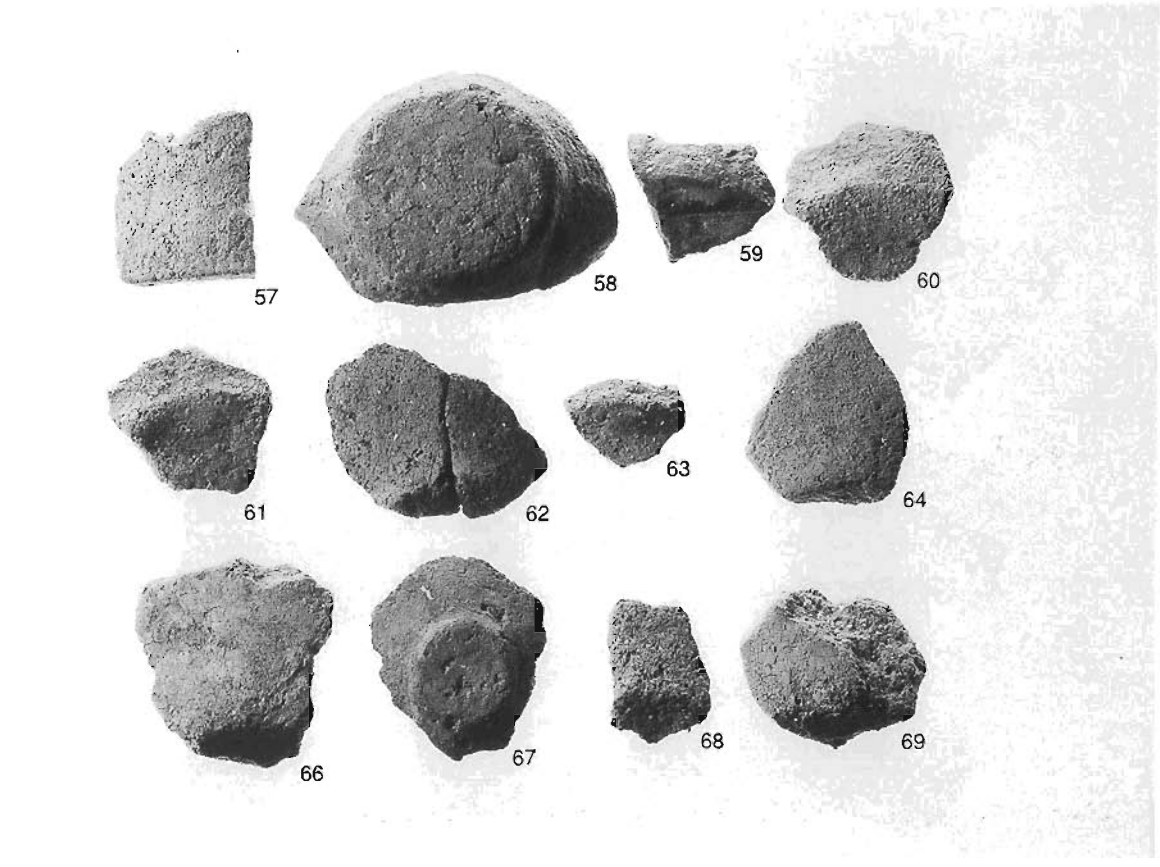
白石大谷Ⅱ遺跡出土遺物（３）

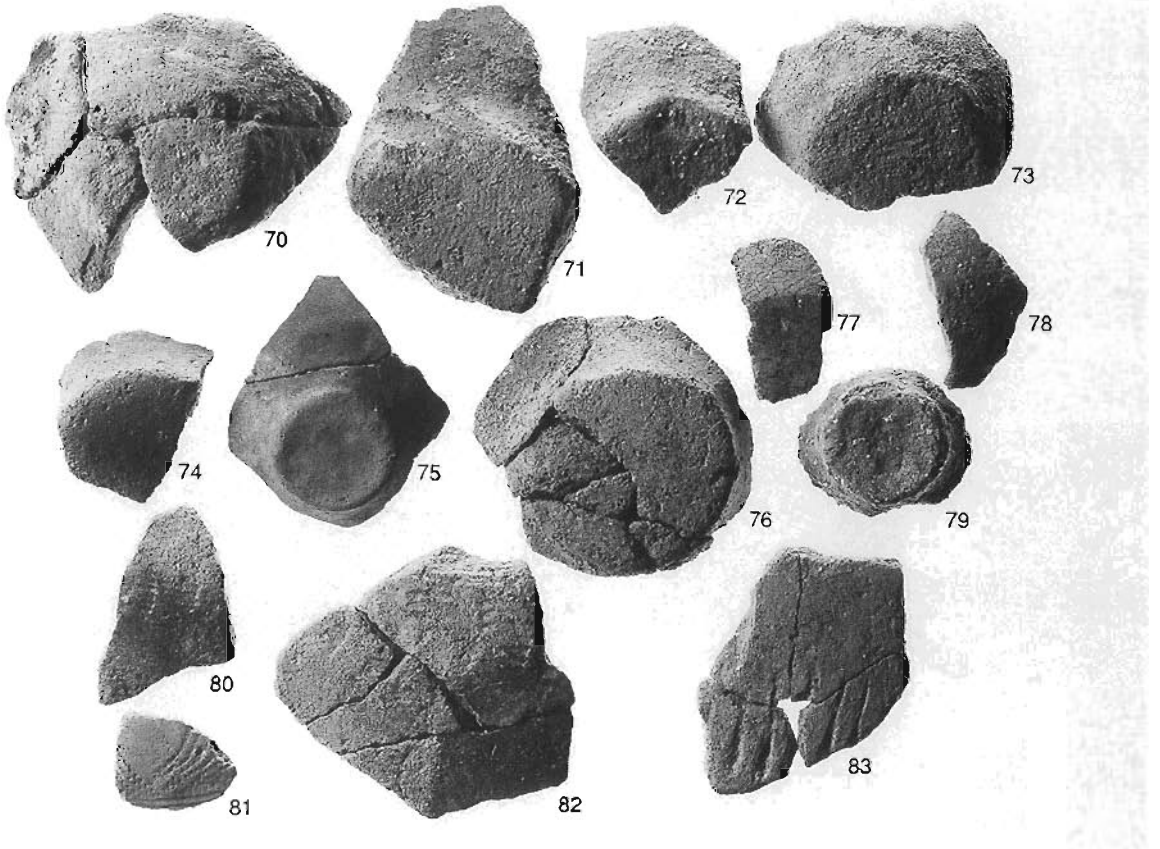




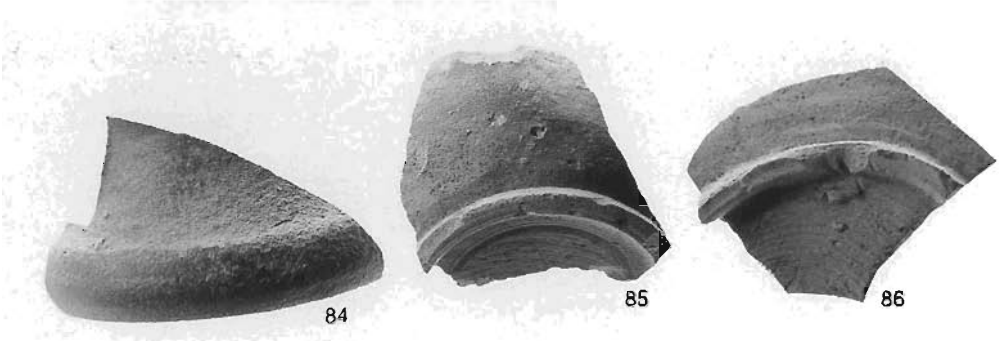
白石大谷Ⅱ遺跡出土遺物（４）

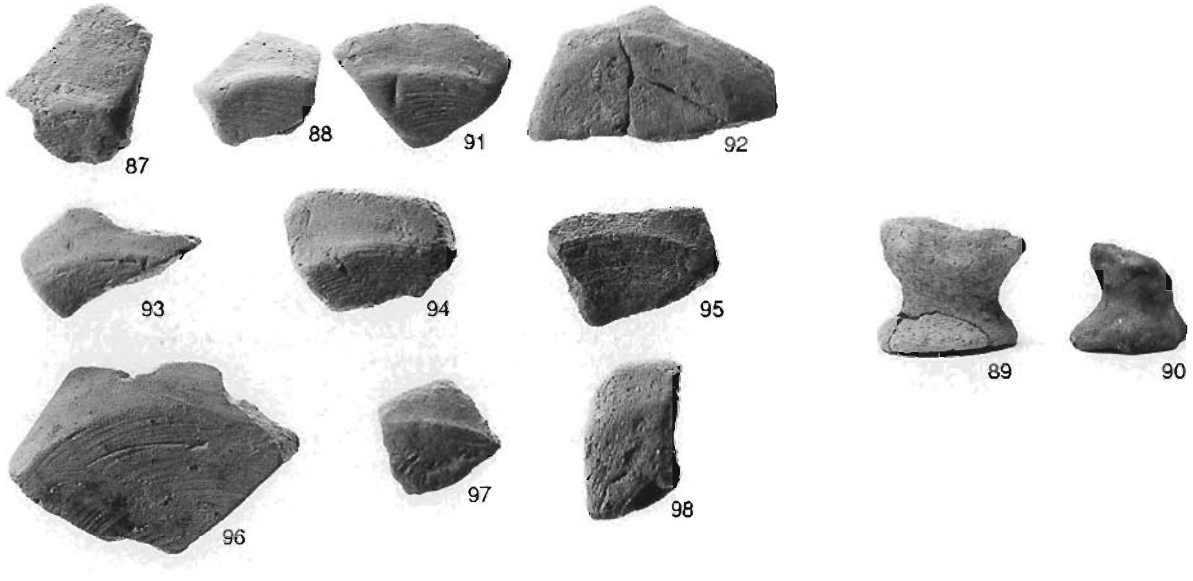
図版24





白石大谷Ⅱ遺跡出土遺物（5）





白石大谷Ⅱ遺跡出土遺物（6）

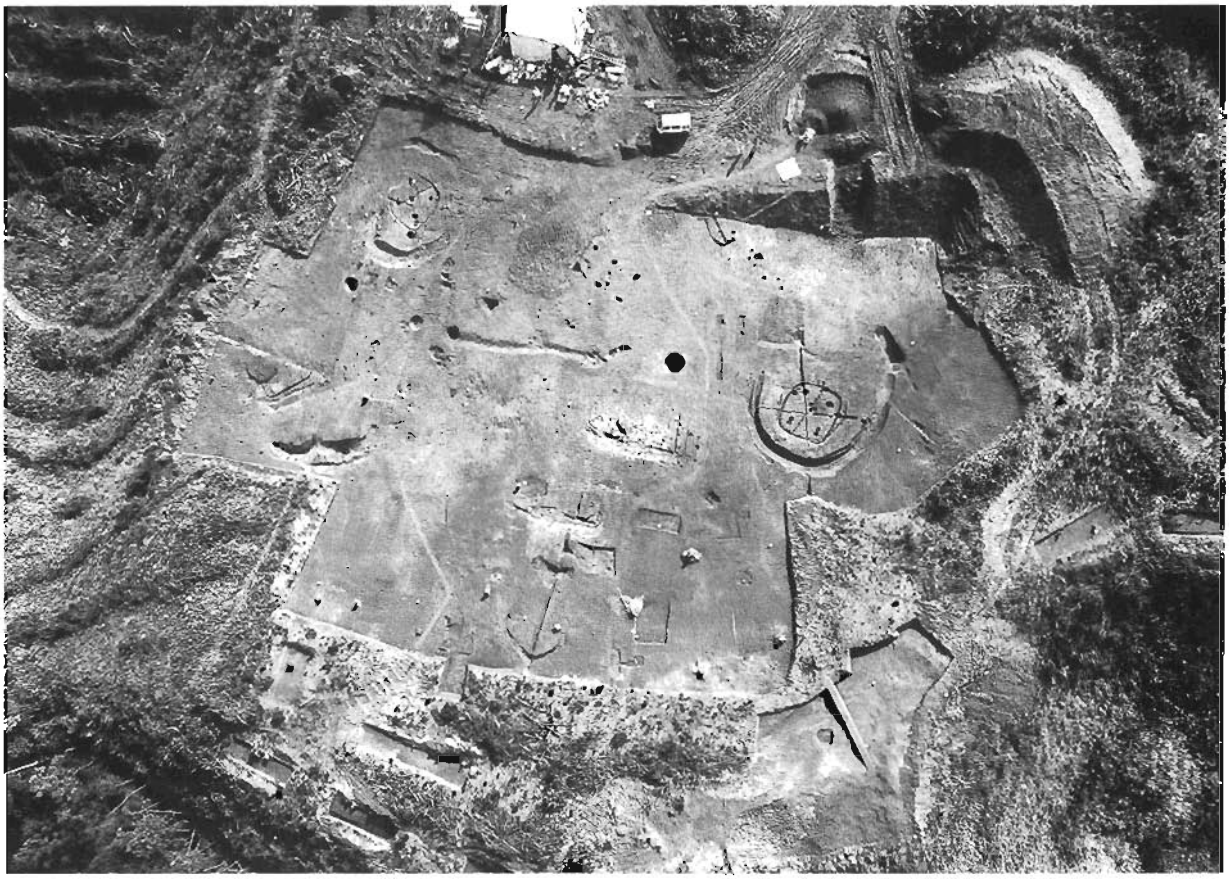
図版26

シトギ免古墳全景

シトギ免古墳周溝土層状況

シトギ免遺跡出土土器

図版28



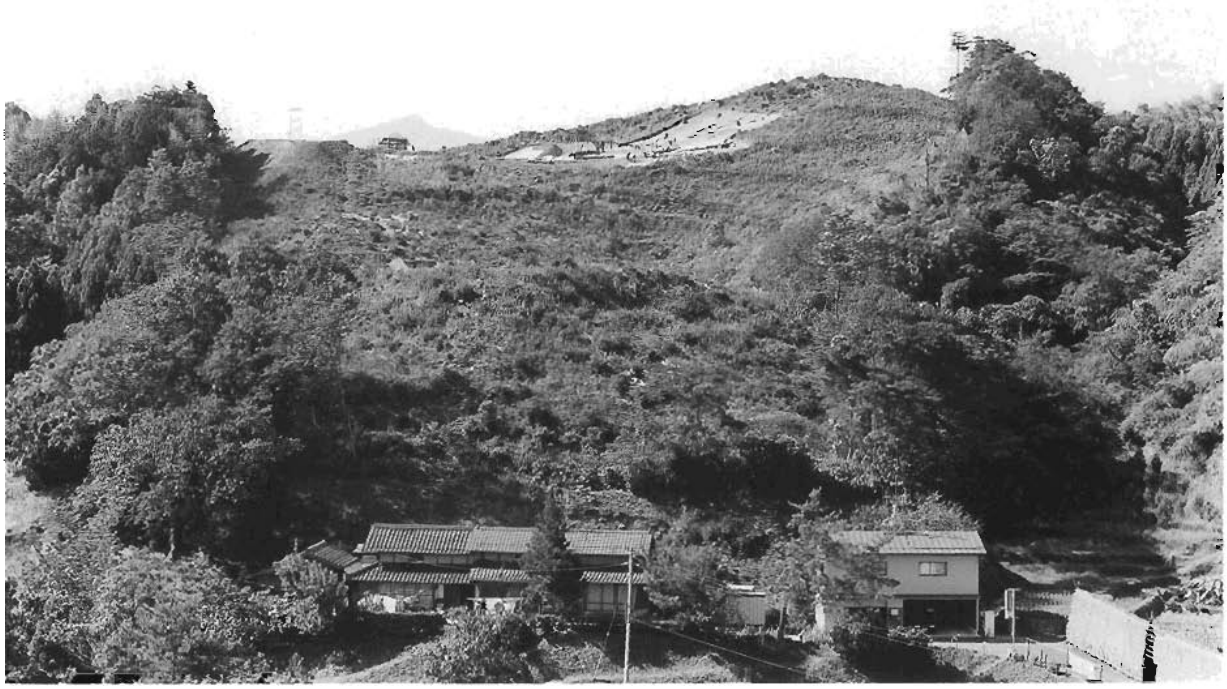
野津原Ⅱ遺跡東区全景　上空から

野津原Ⅱ遺跡東区全景　東側上空から

野津原Ⅰ遺跡東区全景　南側上空から

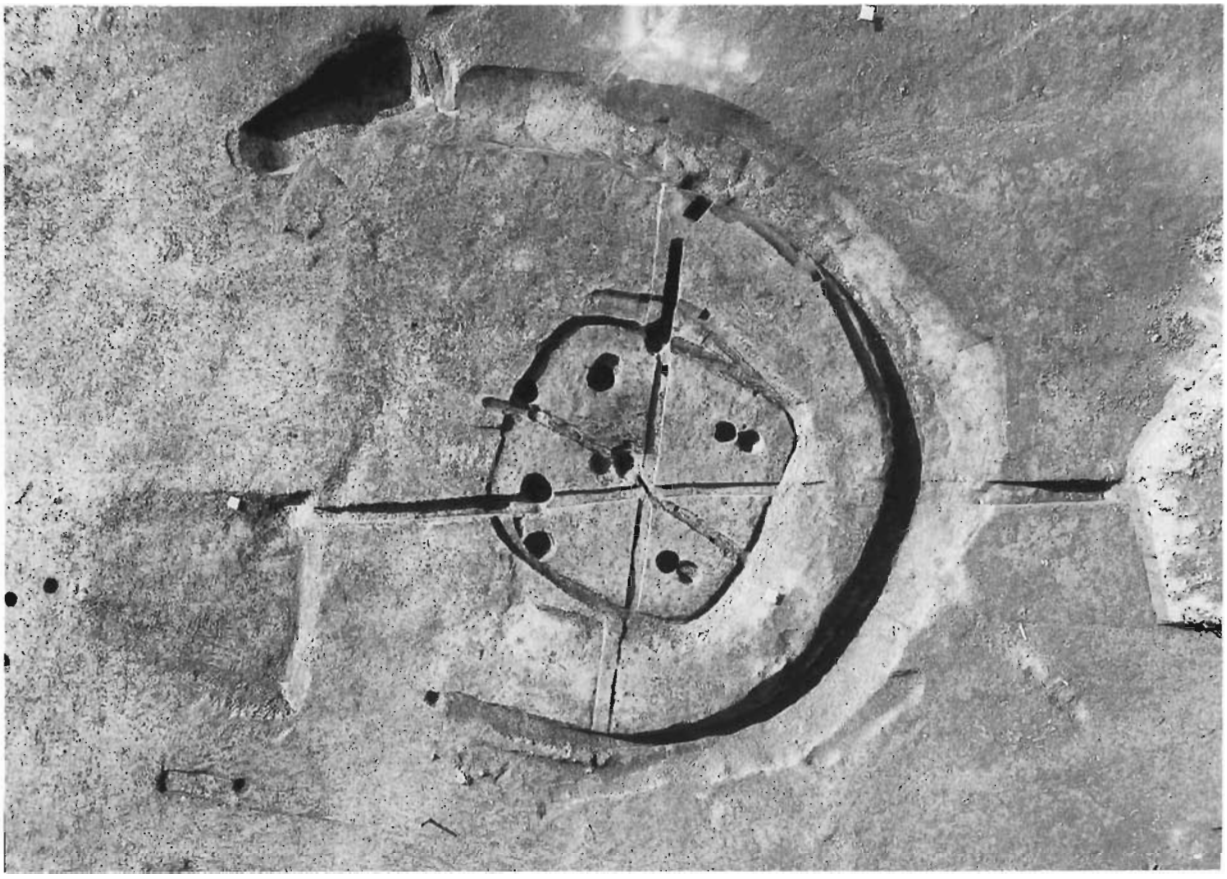
野津原Ⅱ遺跡東区全景　北側上空から

図版30



東側の谷から望む野津原Ⅱ遺跡東区

西側の丘陵から望む野津原Ⅱ遺跡（中央の山の禿げた部分。上野遺跡から）



野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０１全景　上空から

野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０１全景　北から

図版32

野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０１全景　東から

野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０１土層堆積状況　東から

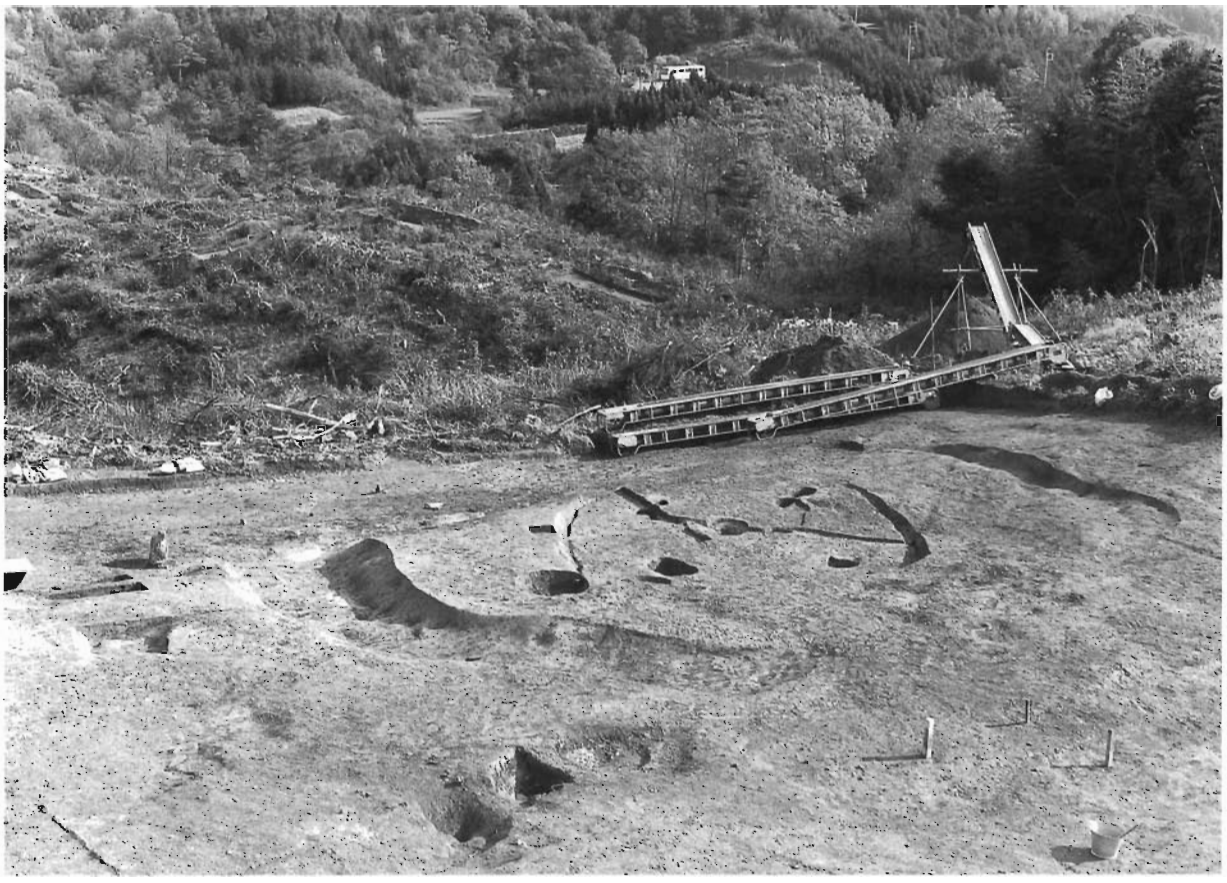
野津原Ⅱ遺跡東区
Ｓ１０１外周溝遺物
出土状況

野津原Ⅱ遺跡東区
Ｓ１０１外周溝土層
堆積状況

野津原Ⅱ遺跡東区
調査風景

図版34

野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０２全景　上空から

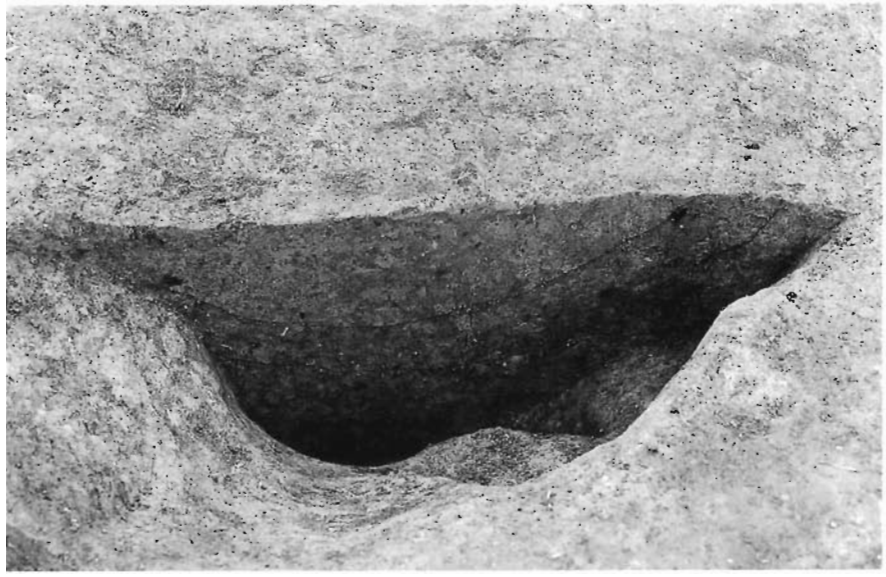


野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０２全景　西から

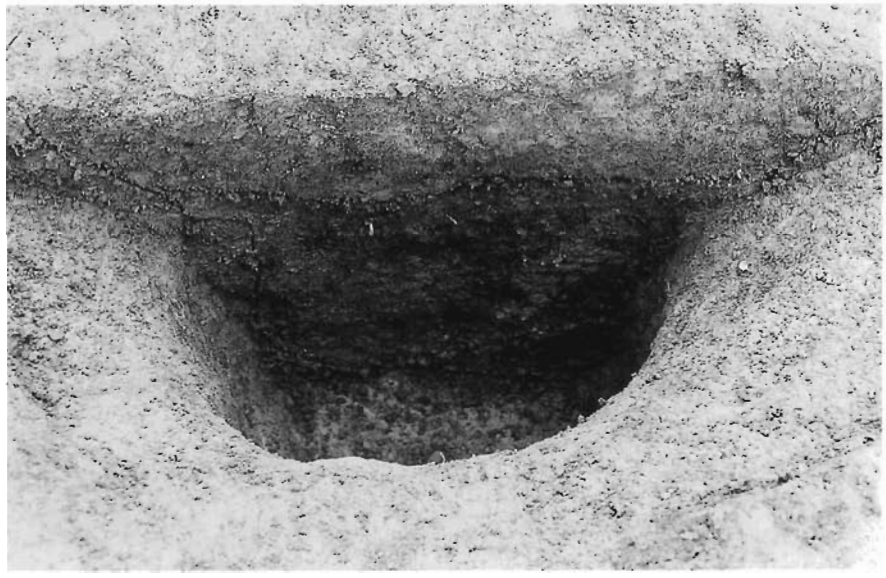
野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０２外周溝遺物出土状況

野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０２外周溝土層堆積状況

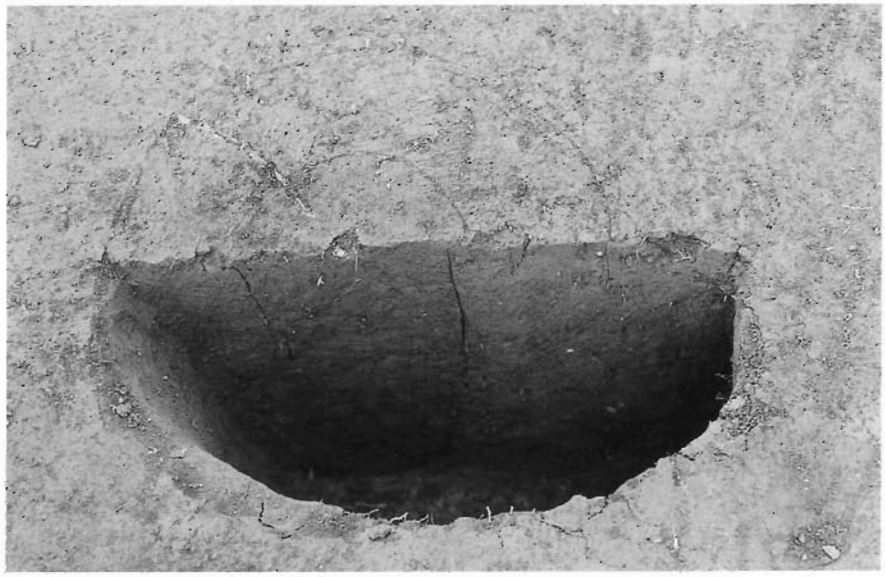
図版36



野津原Ⅱ遺跡東区
ＳＩ０１新中央ピット
土層堆積状況



野津原Ⅱ遺跡東区
ＳＩ０２中央ピット土層
堆積状況

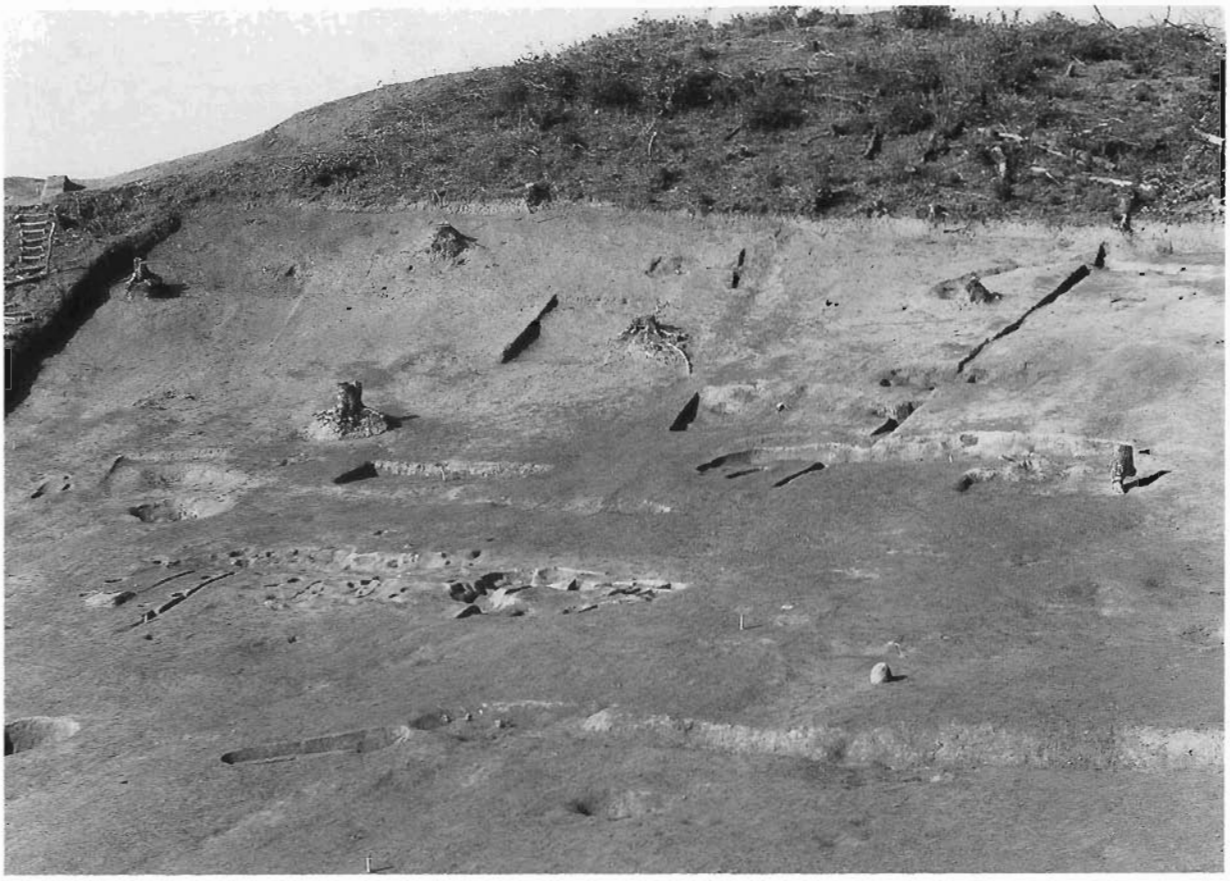


野津原Ⅱ遺跡東区
ＳＢ０１柱穴土層堆積状況

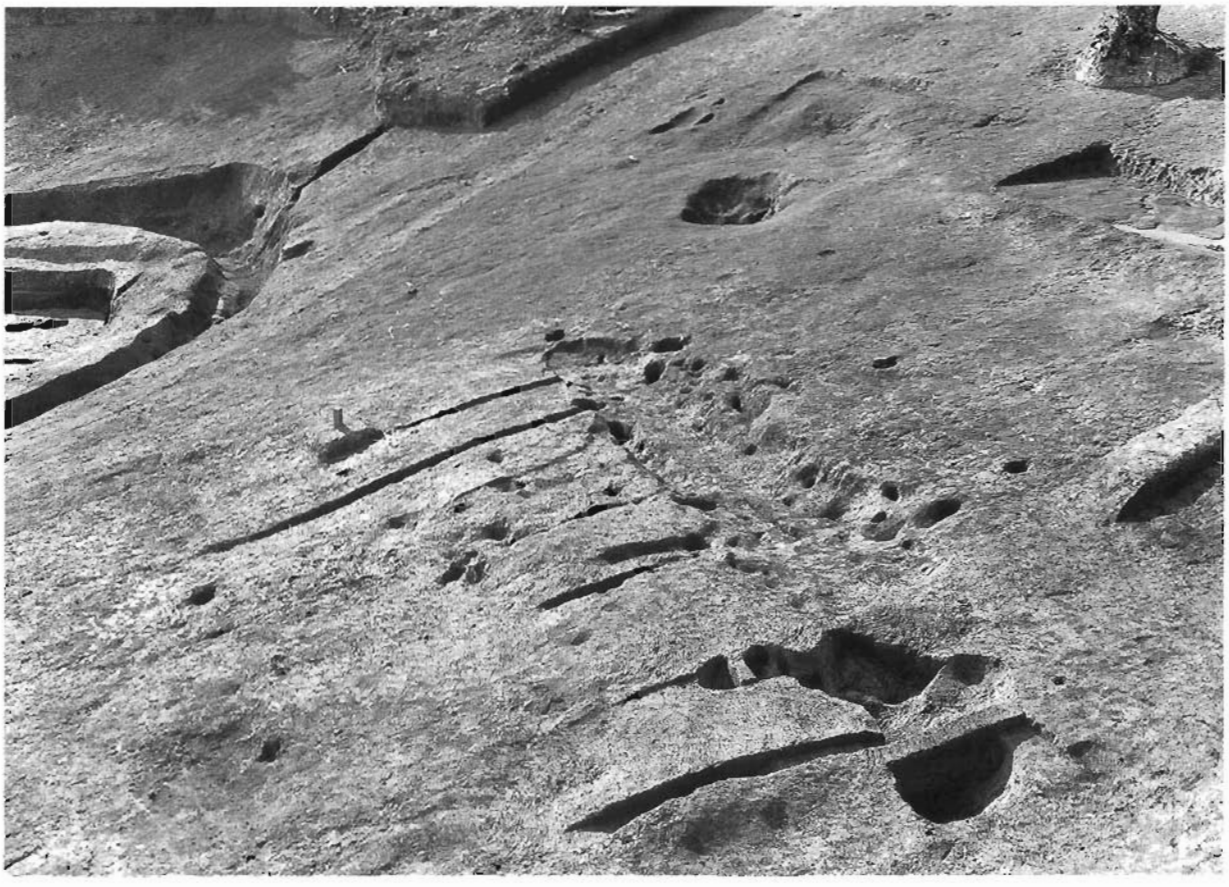
野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＢ０１全景　東から

野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＢ０１全景　北から

図版38



野津原Ⅱ遺跡東区　第１・第２加工段



野津原Ⅱ遺跡東区　第２加工段全景　東から

野津原Ⅱ遺跡東区
第２加工段東側炉状土坑
土層堆積状況

野津原Ⅱ遺跡東区
第２加工段東側炉状土坑
全景

野津原Ⅱ遺跡東区
第４・第５加工段

図版40

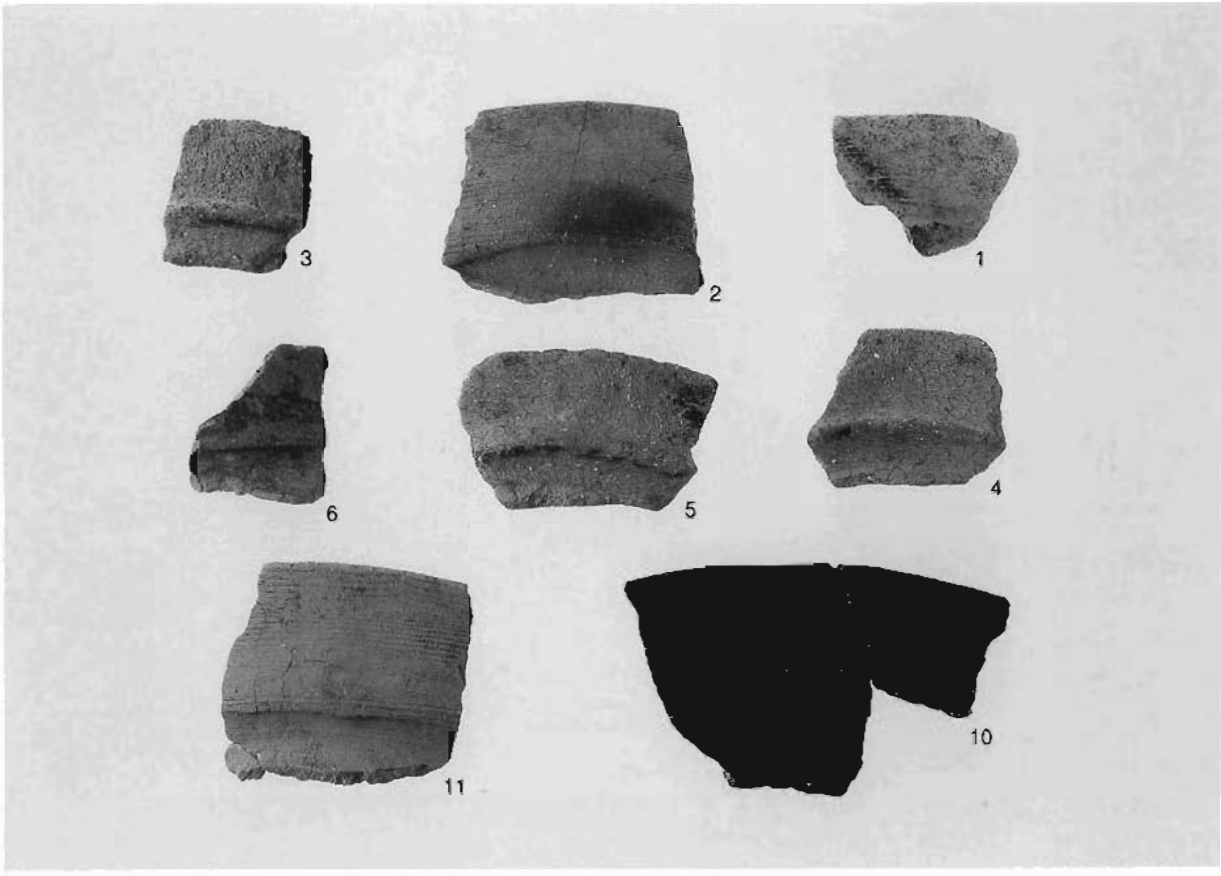
野津原Ⅱ遺跡東区　第３・第４・第５加工段

野津原Ⅱ遺跡東区　第４・第５加工段　土層堆積状況

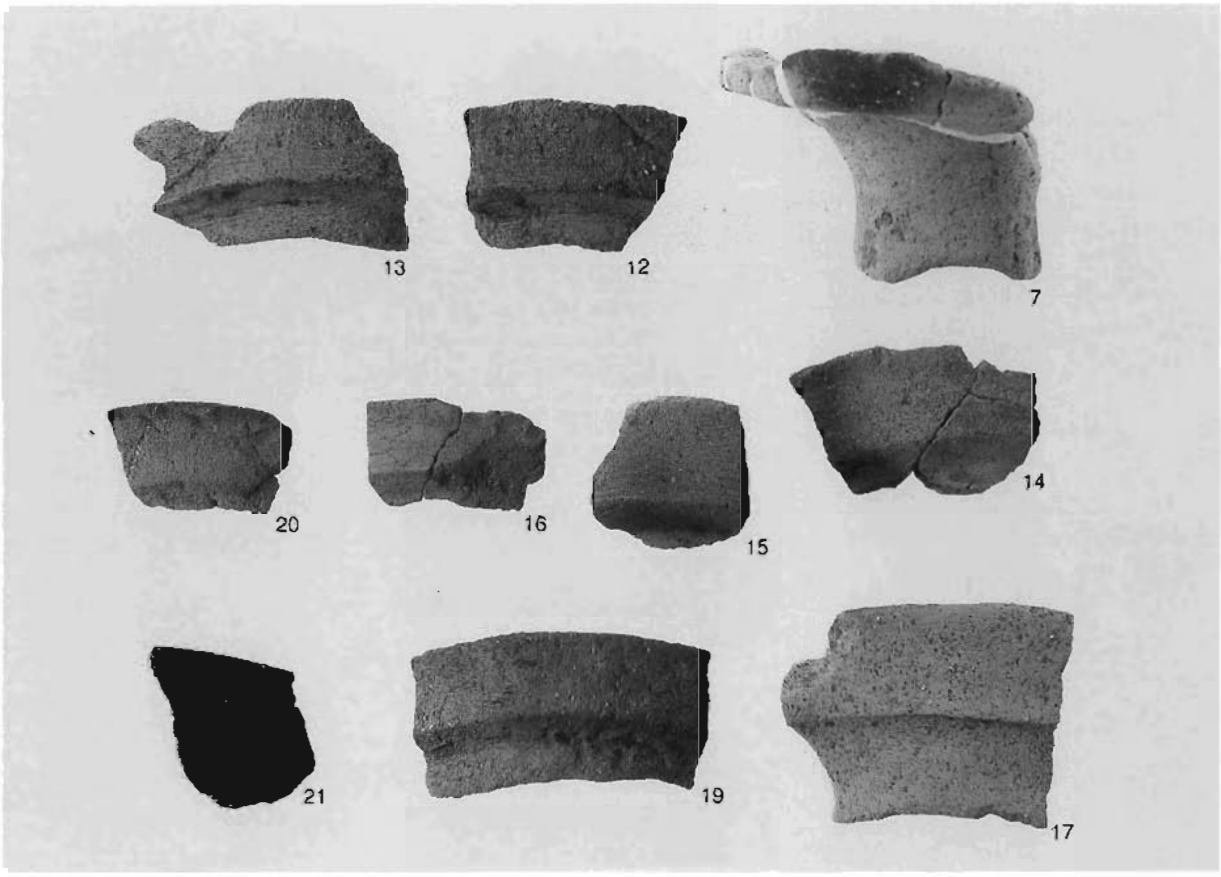
野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＫ０１全景

野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＫ０２全景

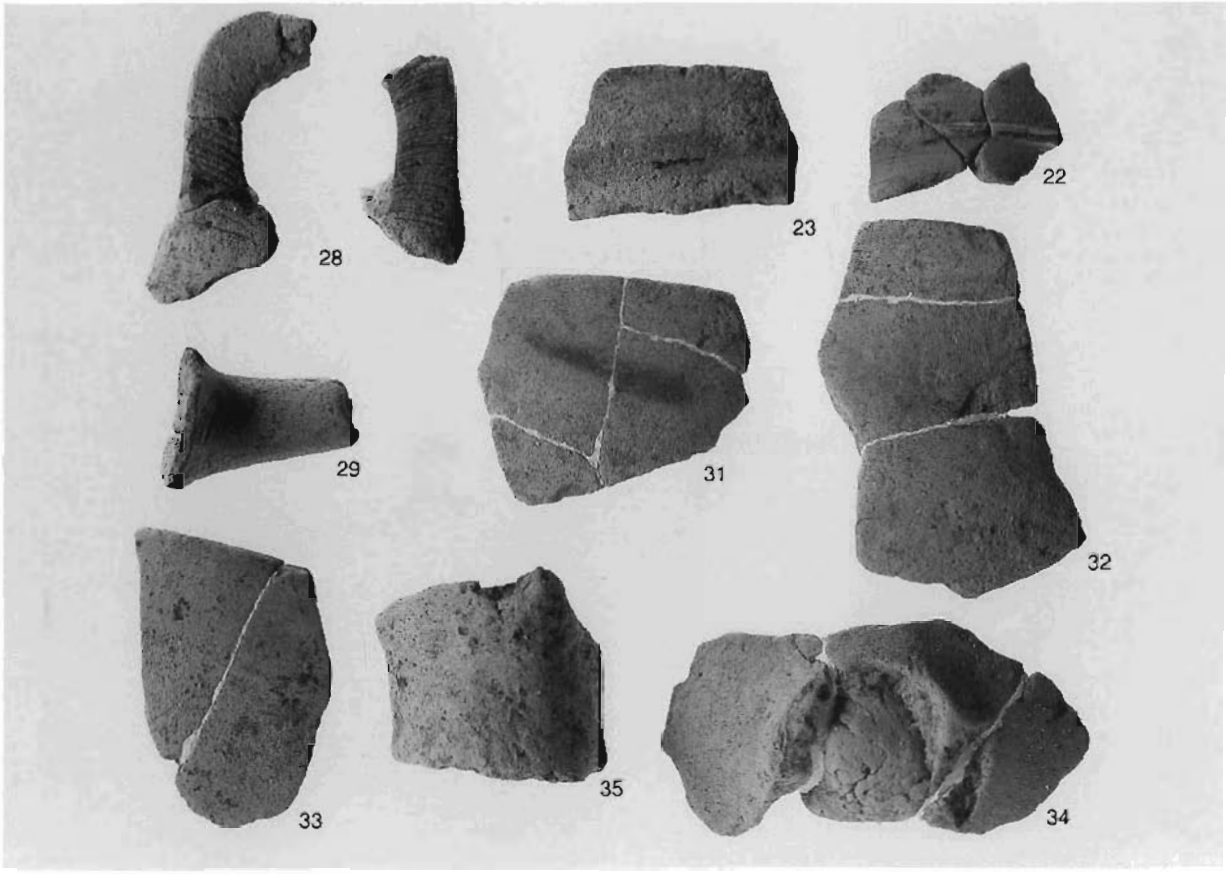
図版42



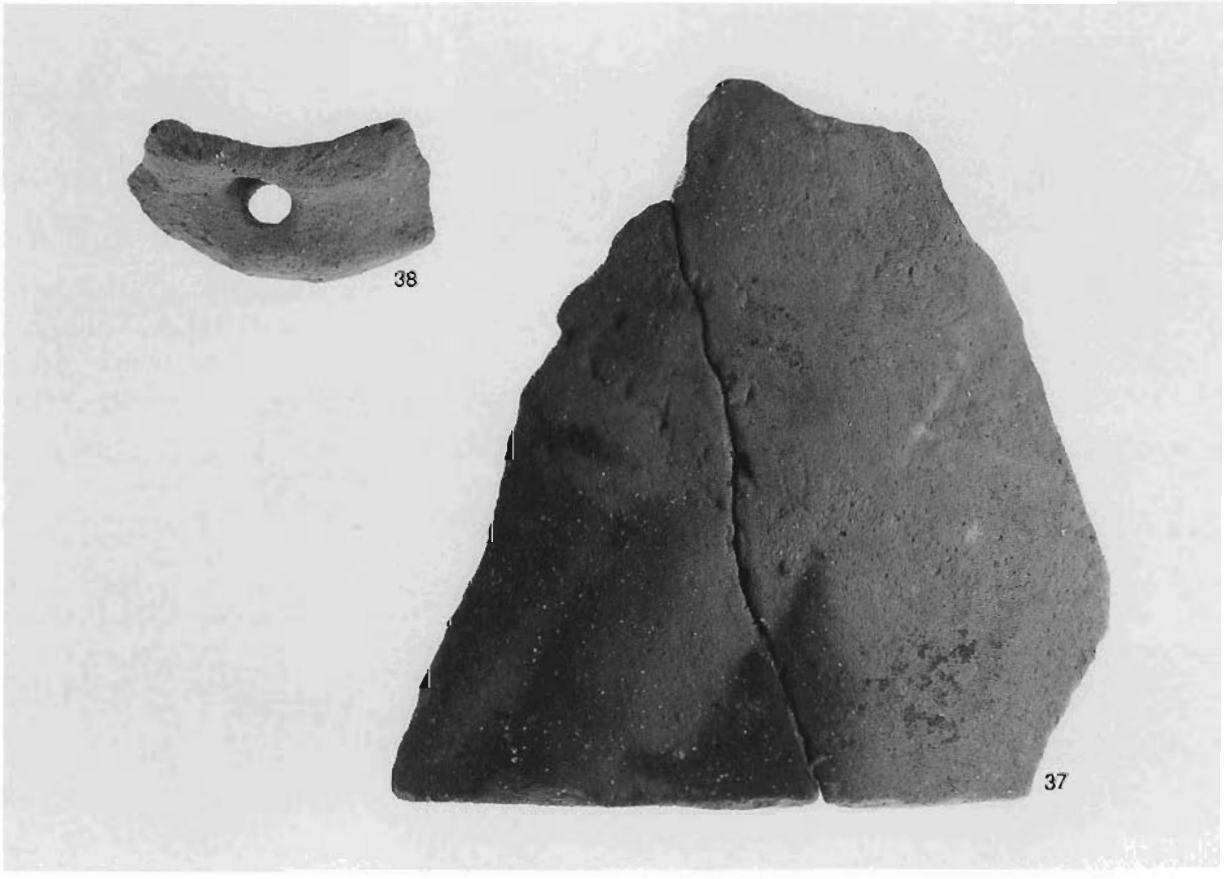
野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０１出土遺物



野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０１出土遺物

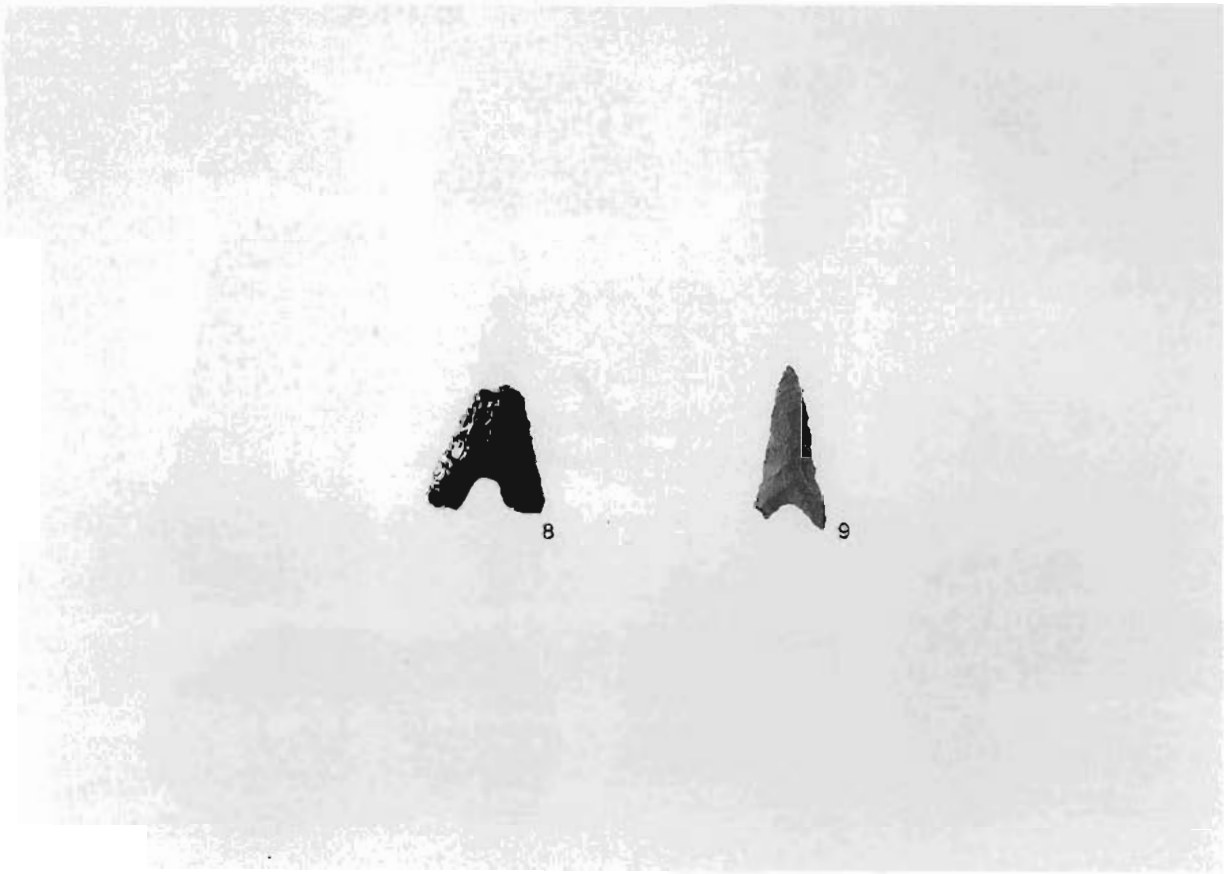


野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０１出土遺物

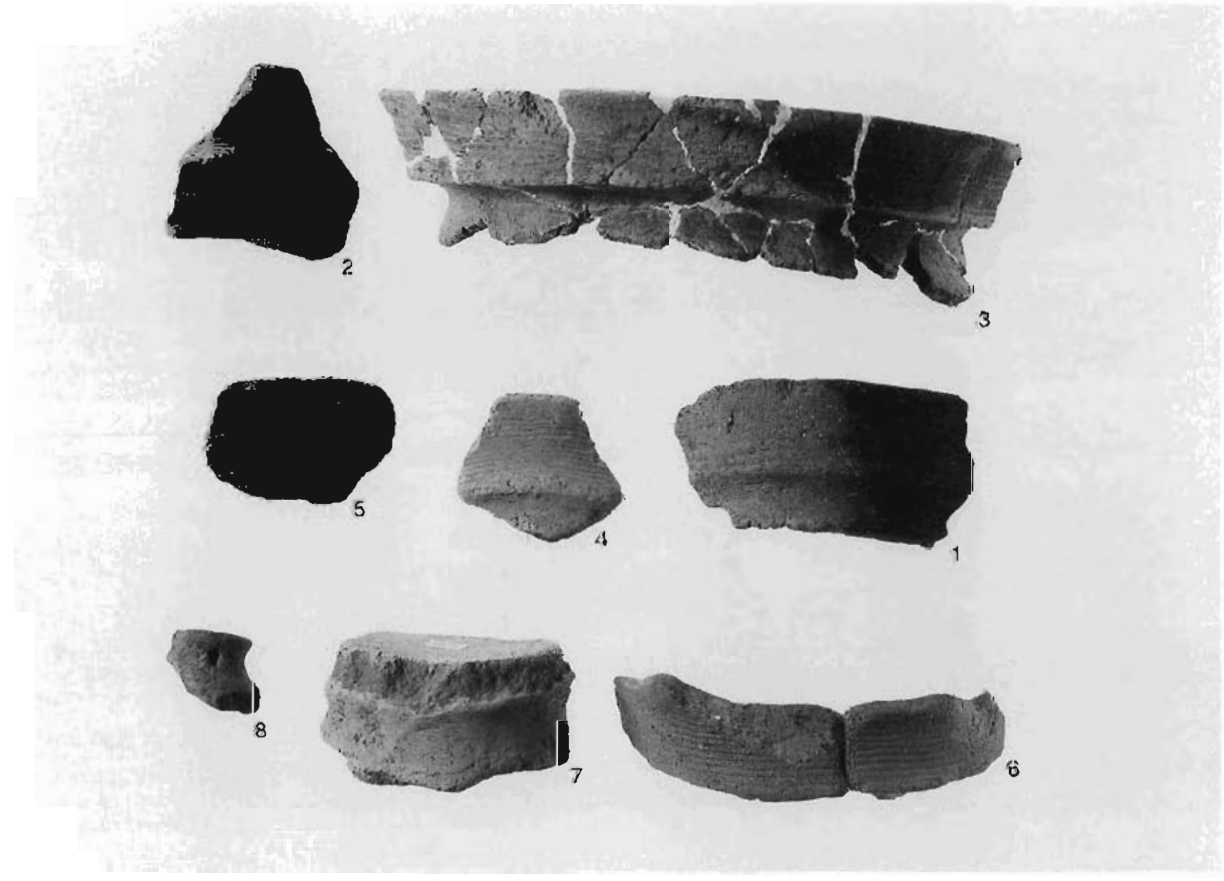


野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０１出土遺物

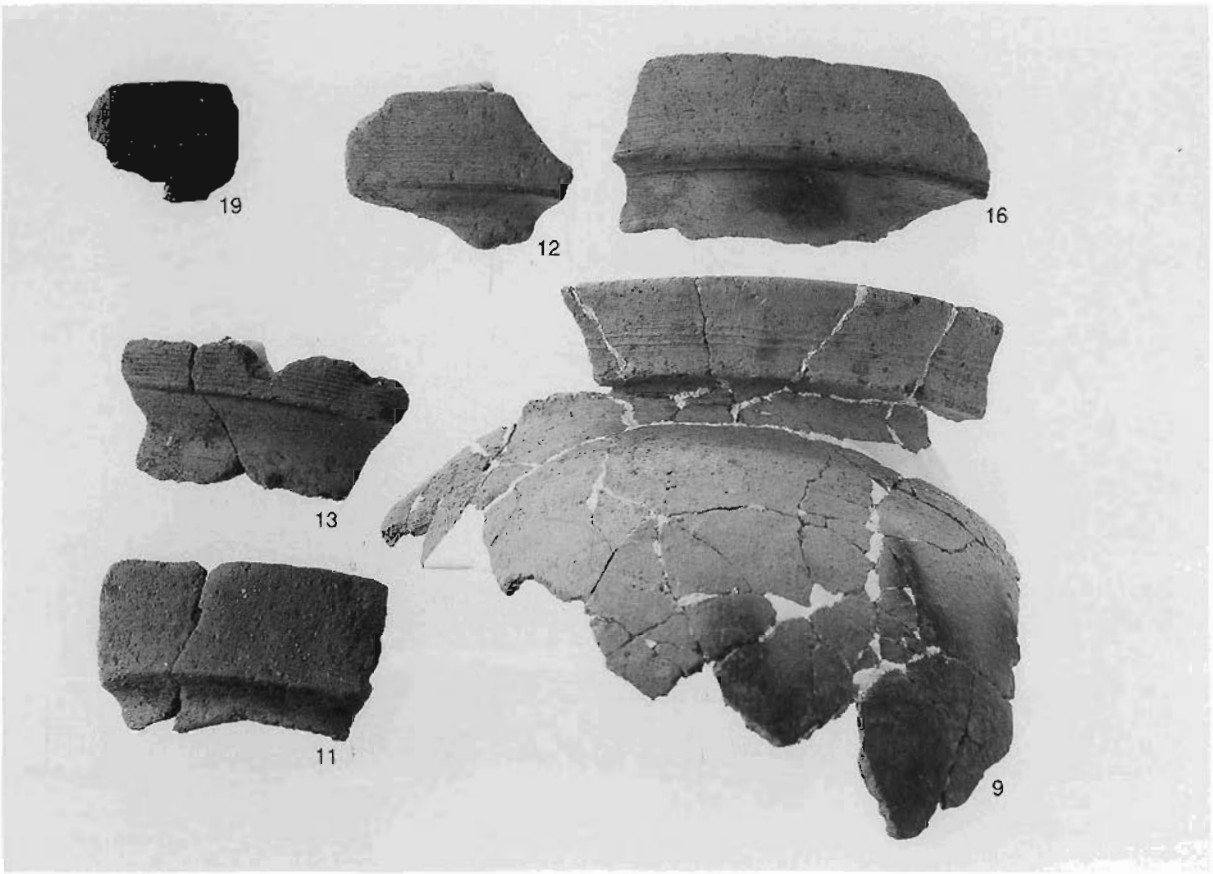
図版44



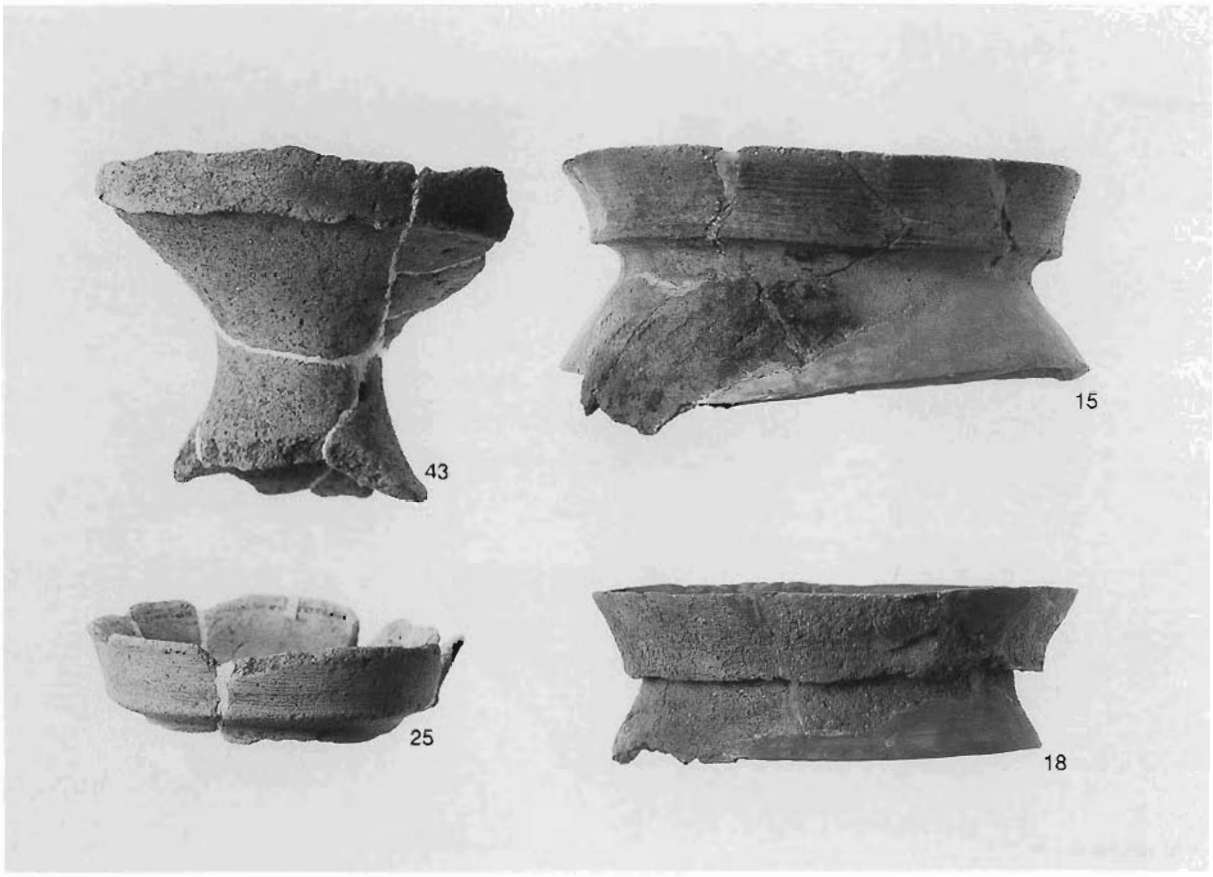
野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０１出土遺物



野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０２出土遺物

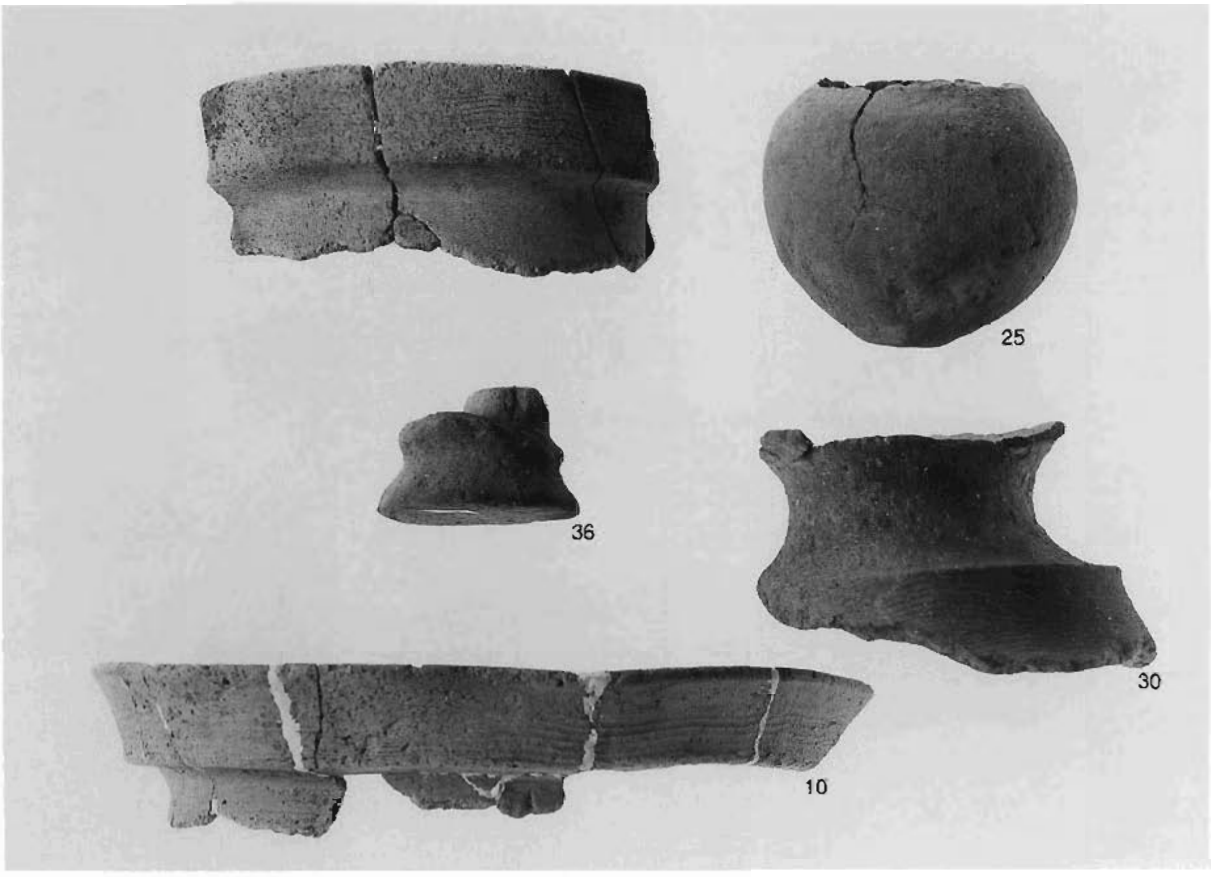


野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０２出土遺物

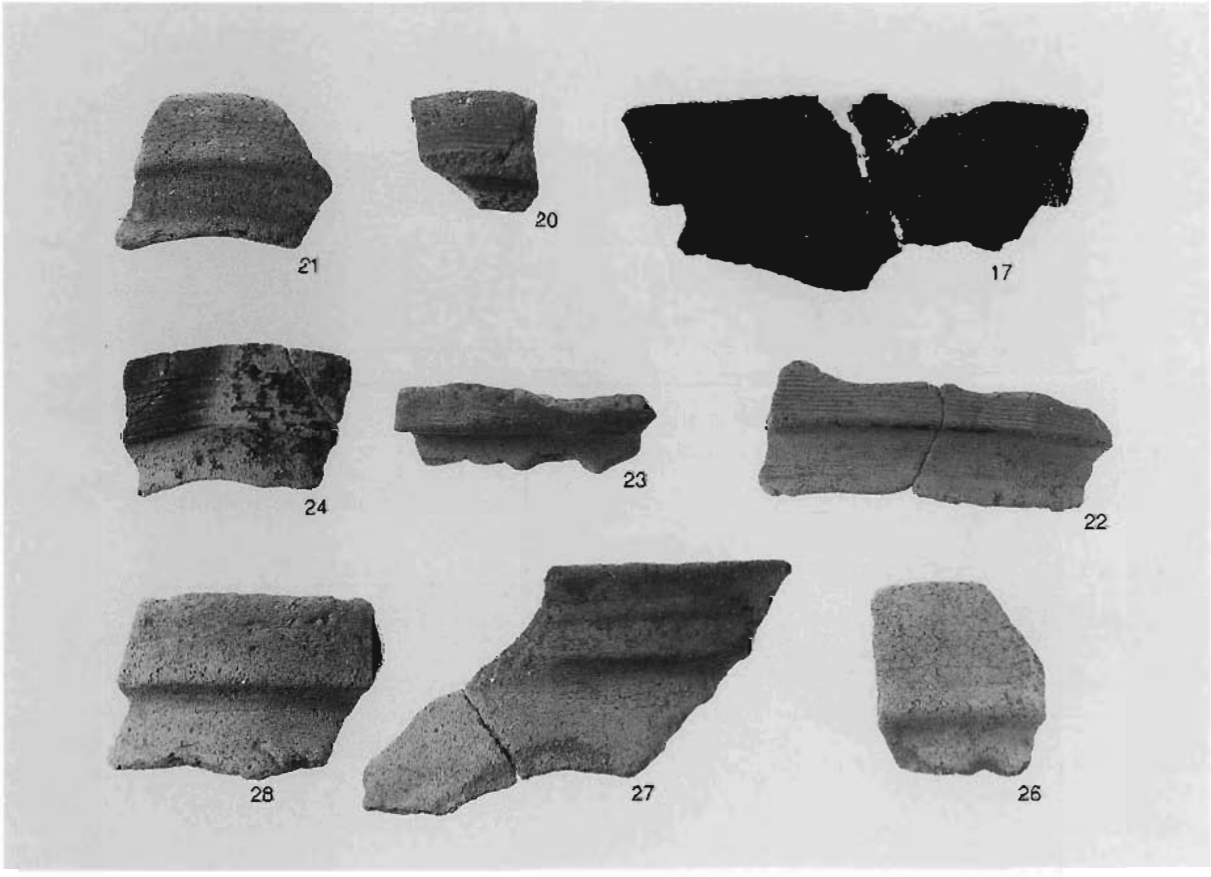


野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０２出土遺物

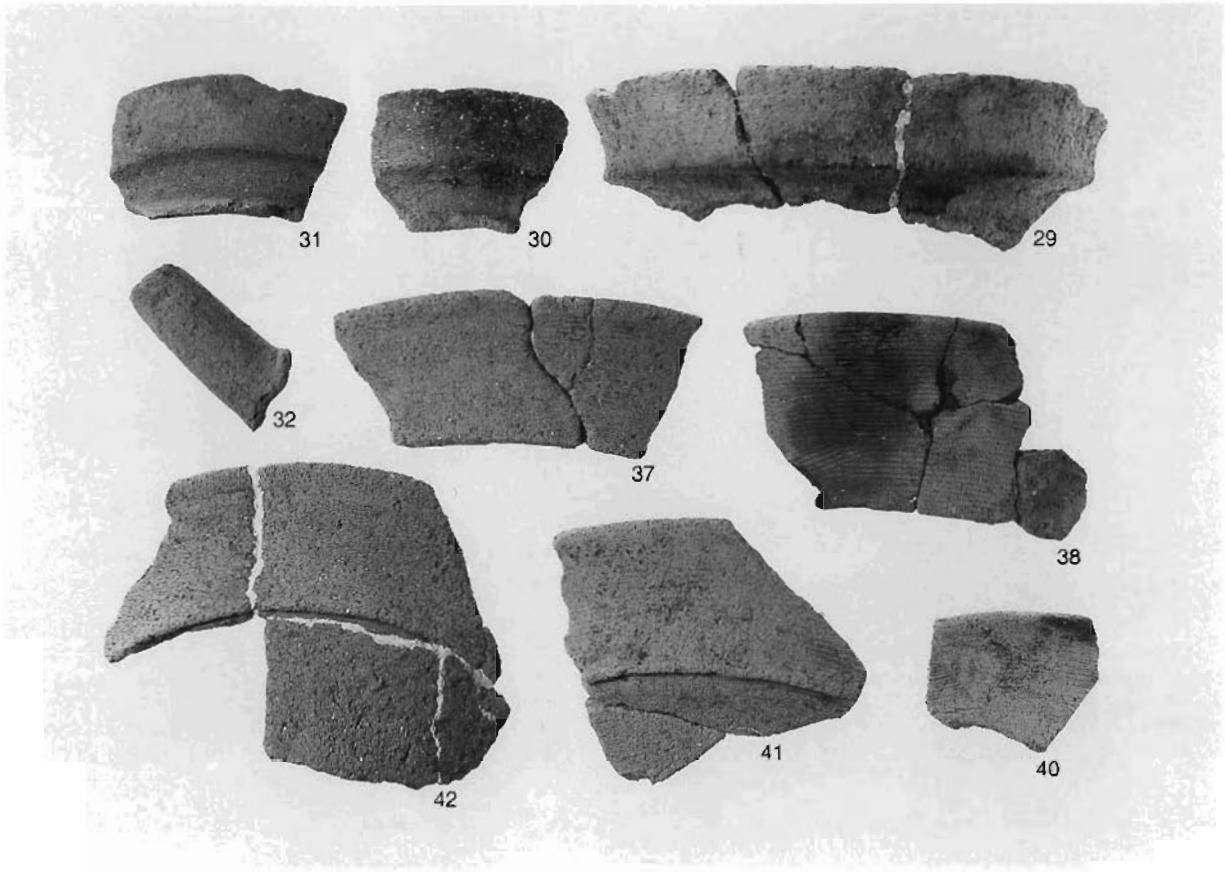
図版46



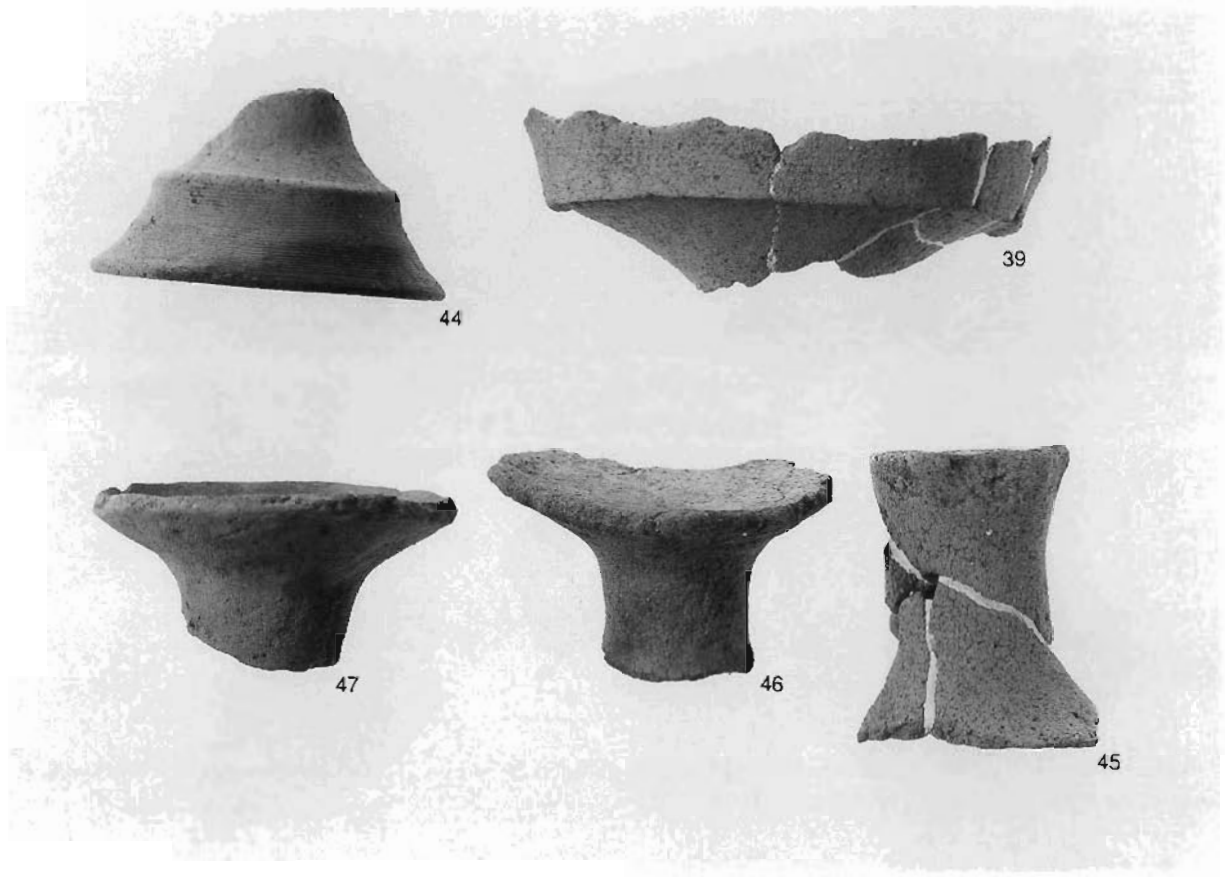
野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０２出土遺物



野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０２出土遺物

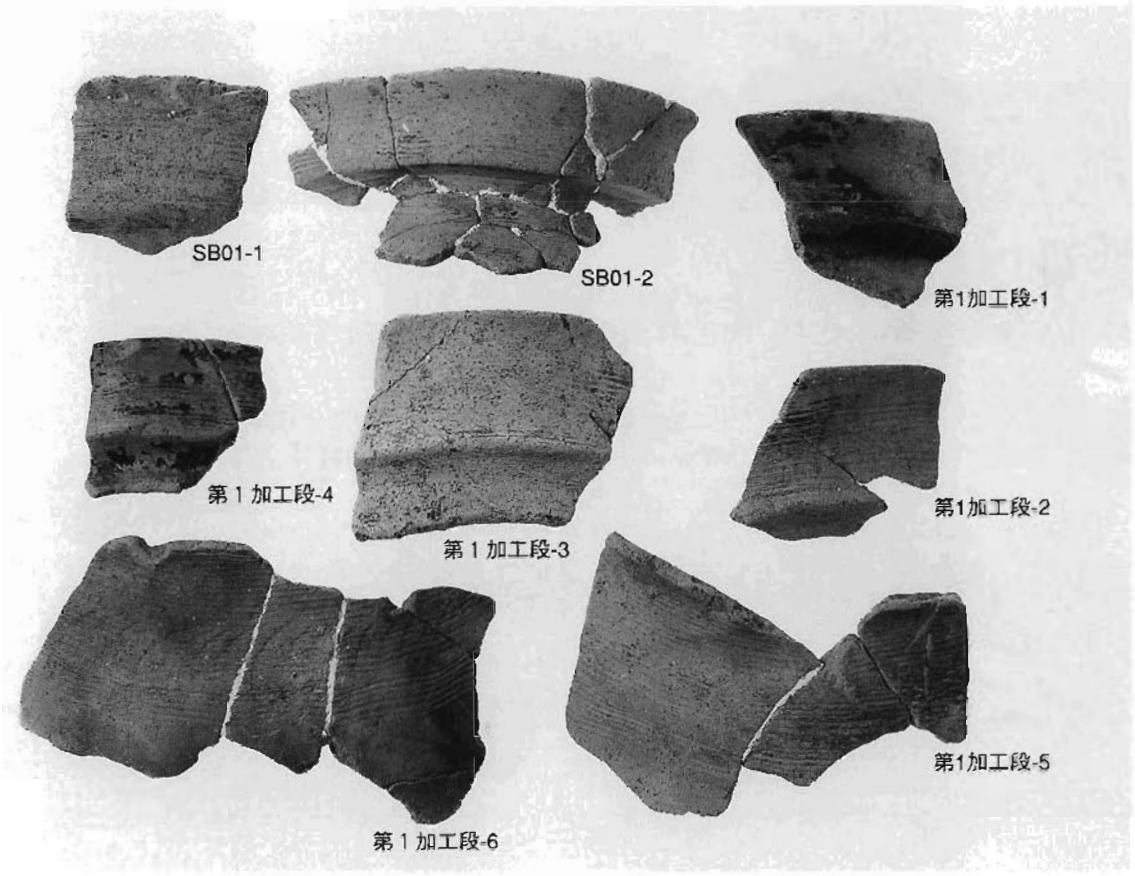


野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０２出土遺物

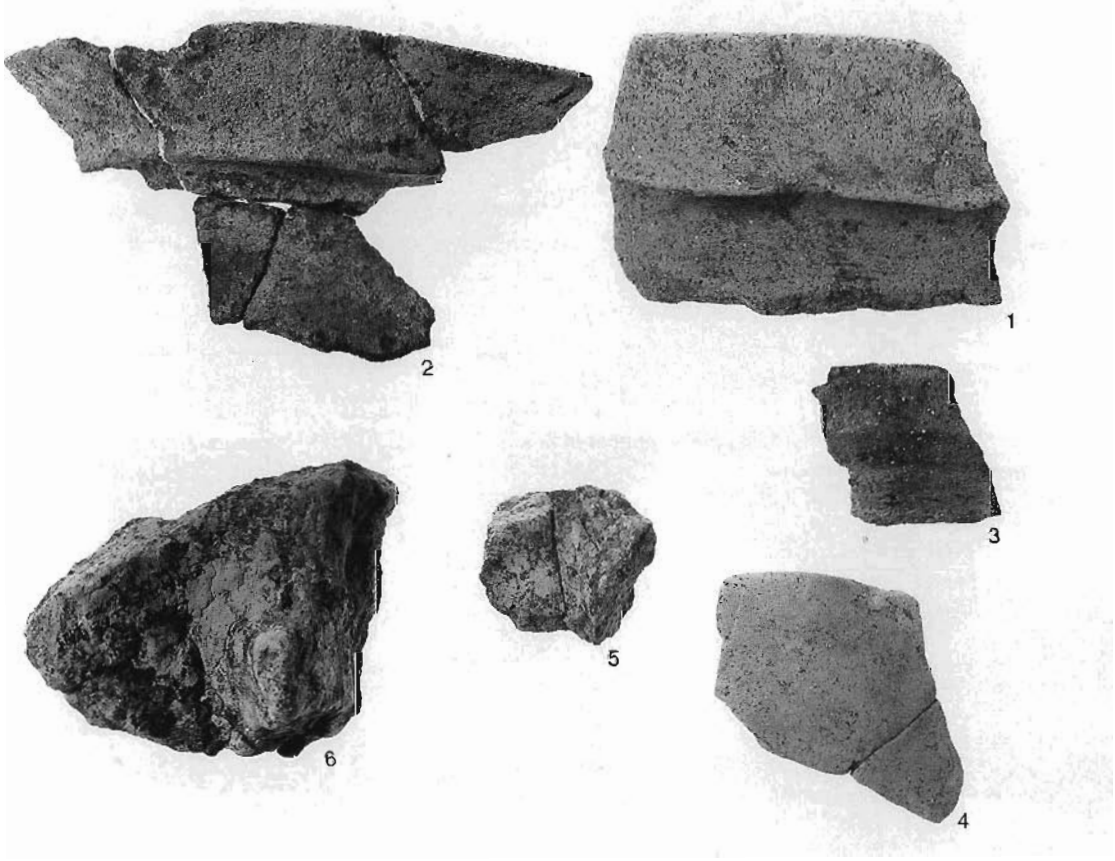


野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０２出土遺物

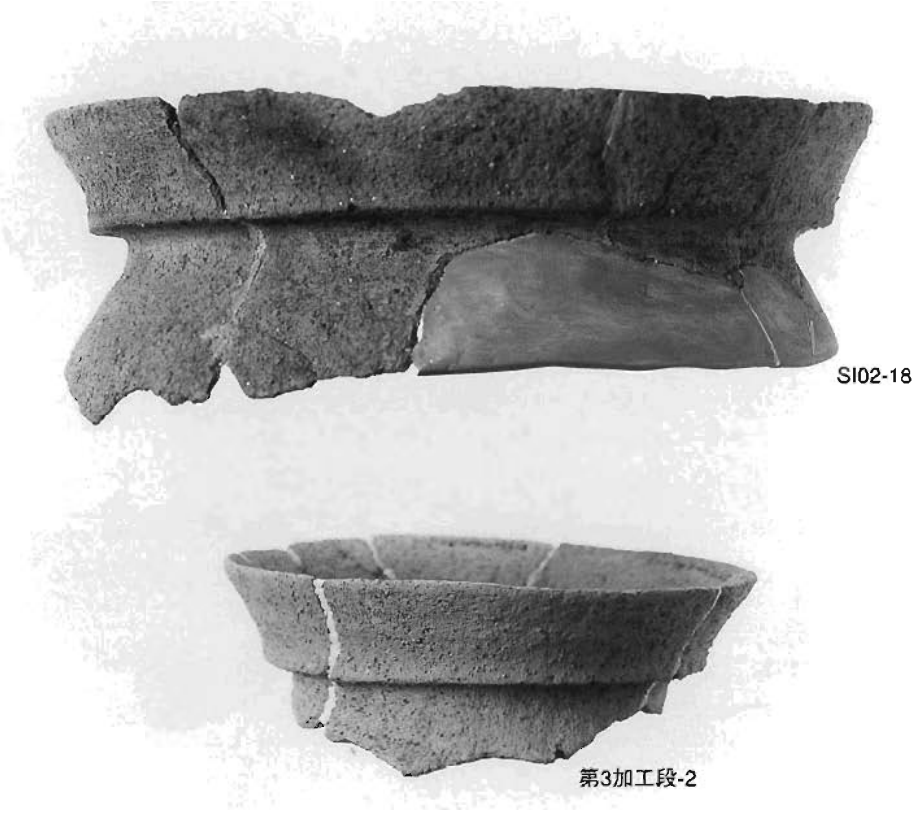
図版48



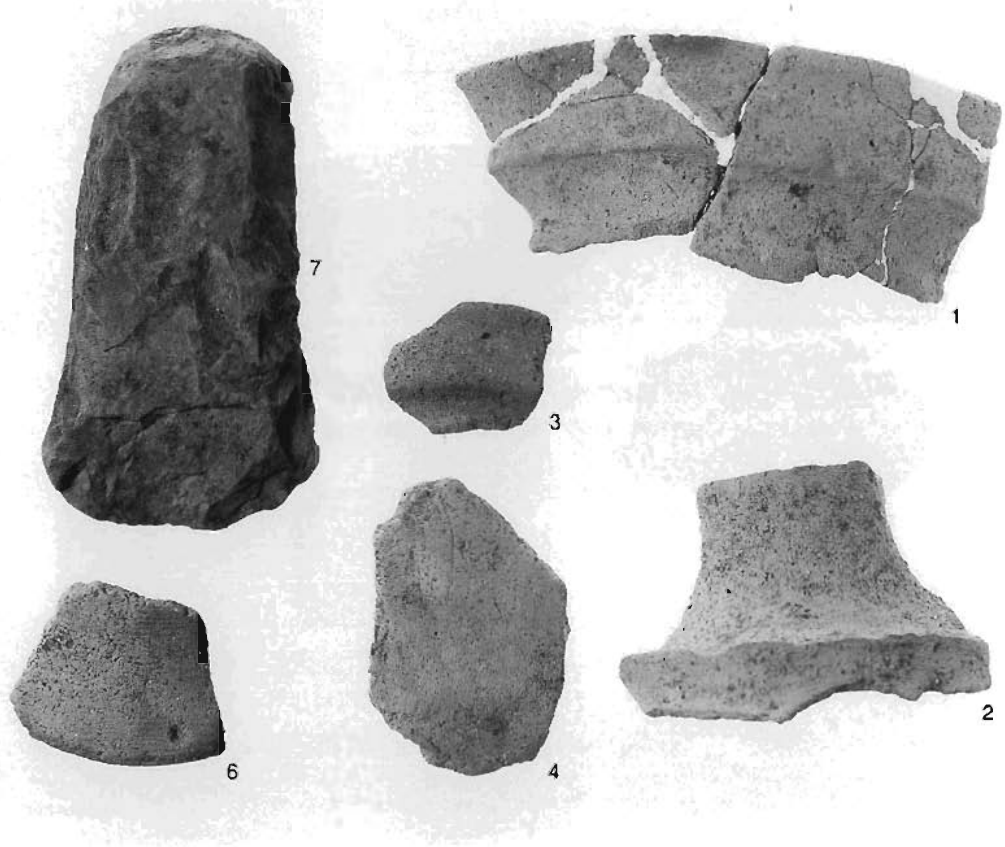
野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＢ０１・第１加工段出土遺物



野津原Ⅱ遺跡東区　第２加工段出土遺物

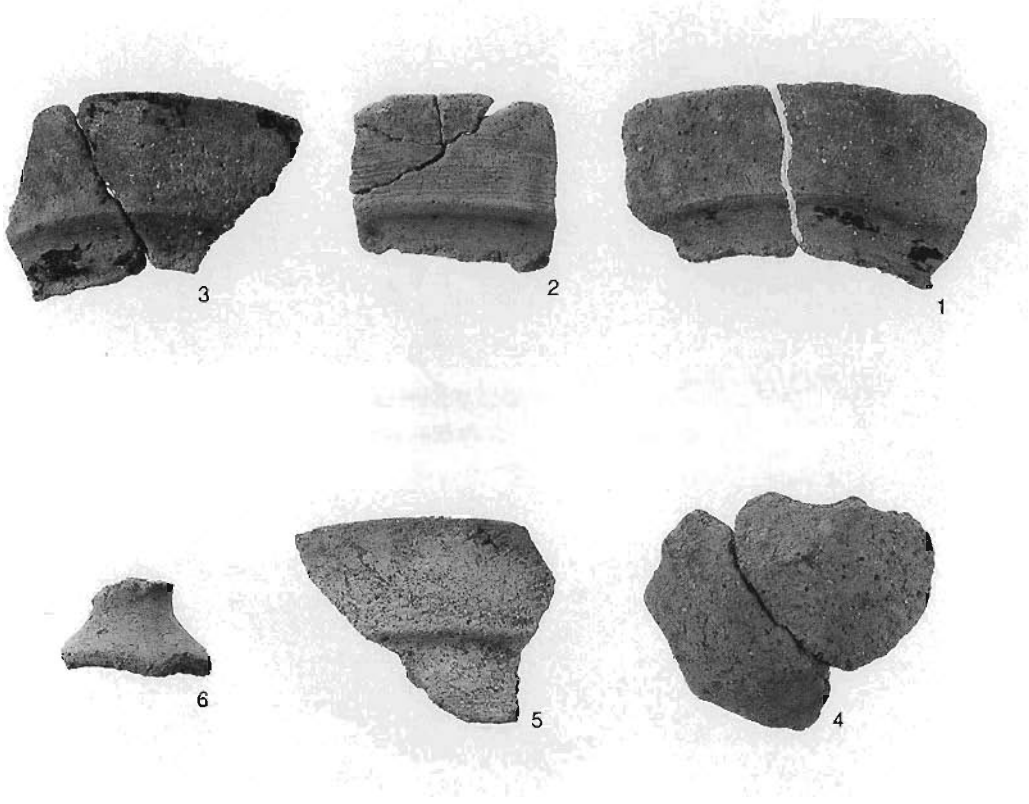


野津原Ⅱ遺跡東区　ＳＩ０２・第３加工段出土遺物

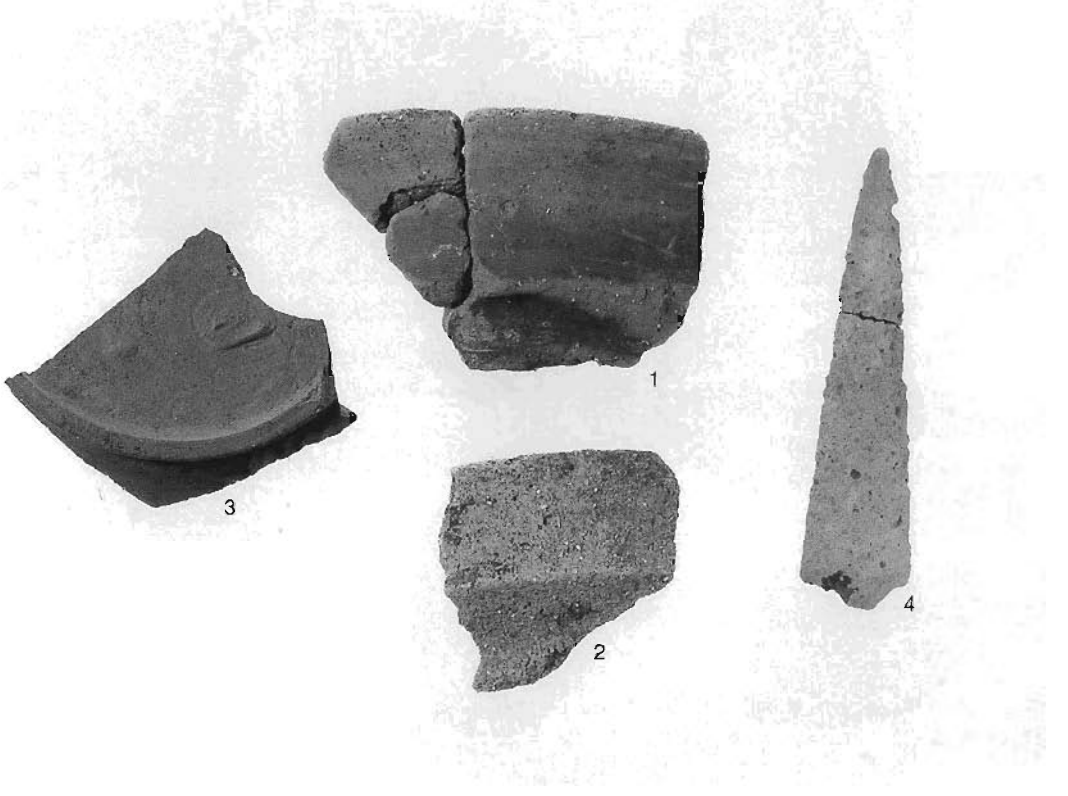


野津原Ⅱ遺跡東区　第４加工段出土遺物

図版50



野津原Ⅱ遺跡東区　第４・第５・第６加工段出土遺物



野津原Ⅱ遺跡東区　遺構に伴わない遺物

山守免遺跡全景

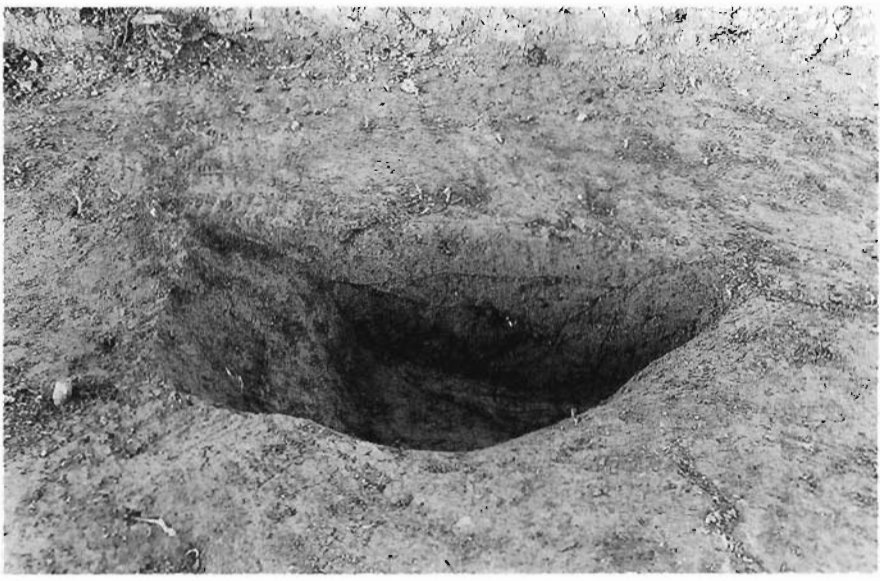
図版52

山守免遺跡１・２区全景

山守免遺跡３区全景

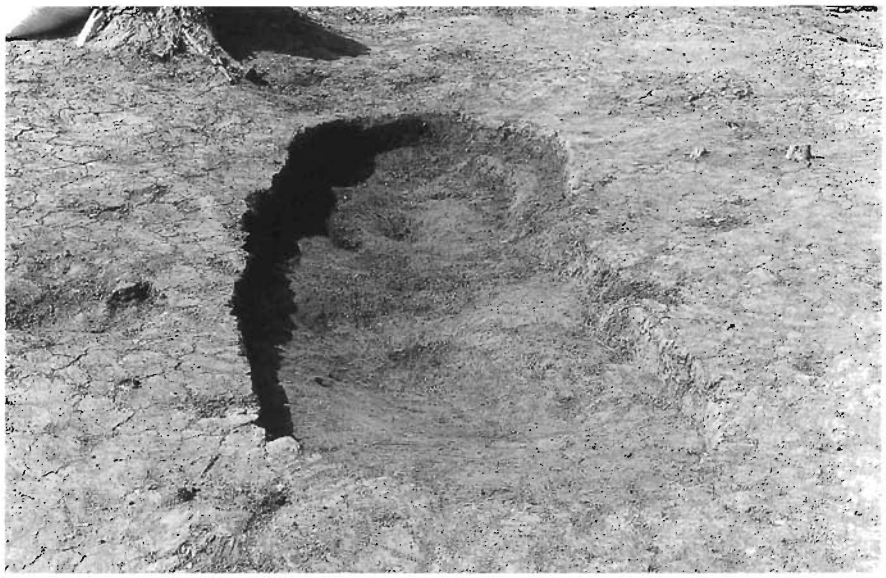
山守免遺跡調査前（３区）

山守免遺跡１区
ＳＩ０１完掘状況



山守免遺跡１区
ＳＩ０１中央土坑

図版54



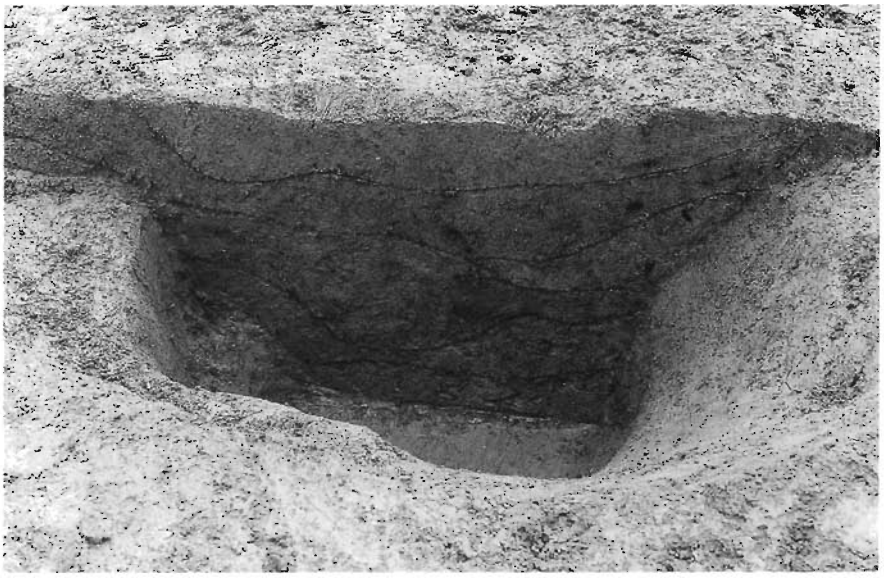
山守免遺跡１区
ＳＤ０１完掘状況

山守免遺跡１区
ＳＩ０２（ＳＤ０３）
完掘状況

山守免遺跡１区
ＳＤ０３鉄器出土状況

山守免遺跡１区
ＳＩ０３遺物出土状況

山守免遺跡１区
ＳＩ０３（ＳＤ０４）
完掘状況



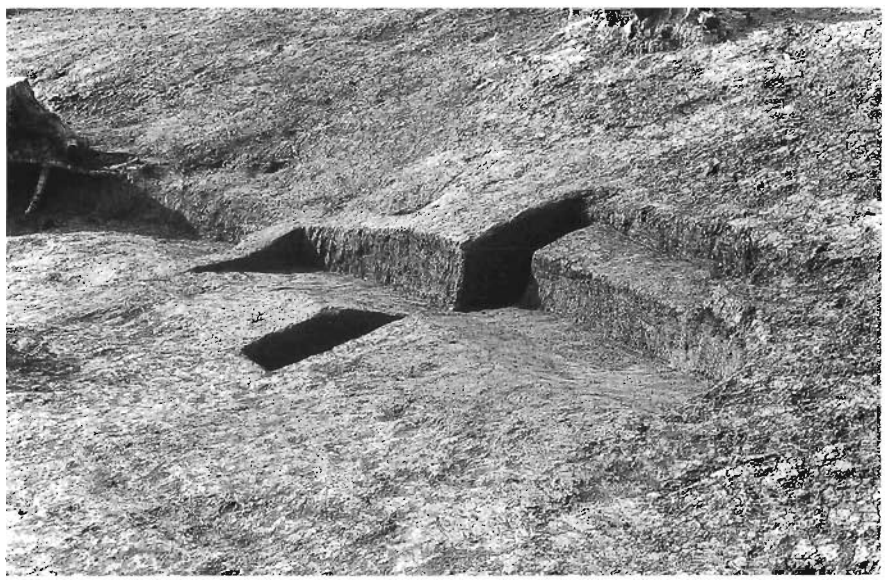
山守免遺跡１区
ＳＩ０３中央土坑土層断
面

図版56

山守免遺跡１区
ＳＤ０４土層断面

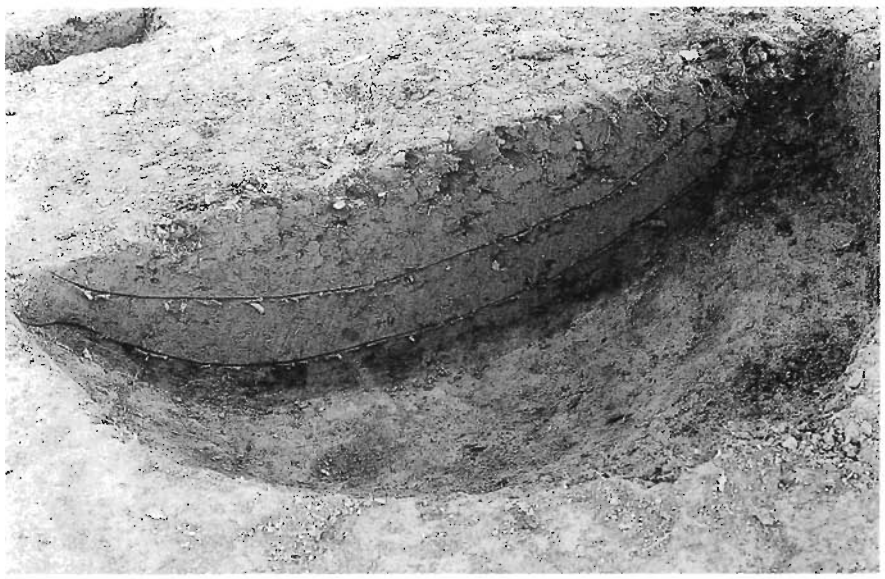
山守免遺跡１区ＳＢ０１

山守免遺跡１区ＳＢ０２



山守免遺跡１区
ＳＫ０１検出状況

山守免遺跡１区
ＳＫ０２完掘状況



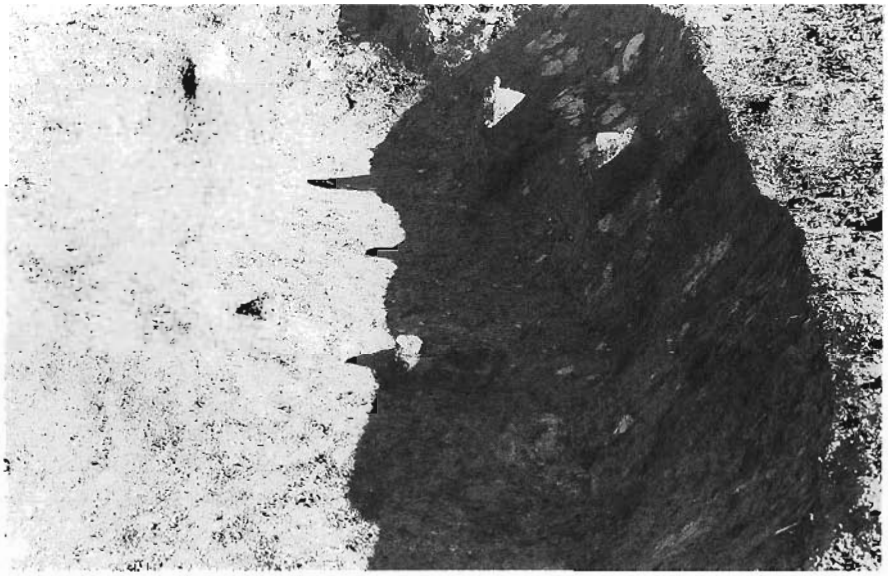
山守免遺跡１区
ＳＫ０２土層断面

図版58

山守免遺跡１区
ＳＤ０２完掘状況

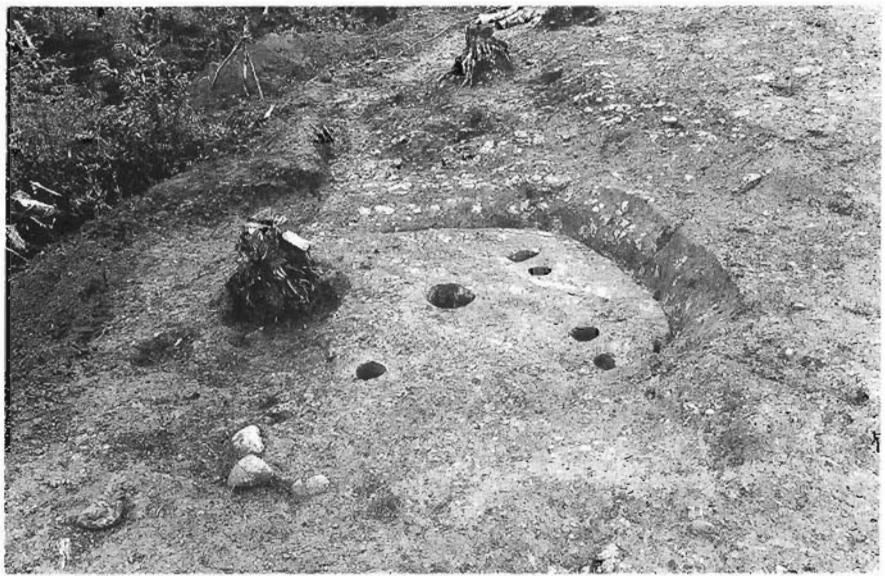
山守免遺跡１区
ＳＤ０２土層断面

山守免遺跡１区
ＳＸ０１調査状況



山守免遺跡２区
ＳＩ０１遺物出土状況

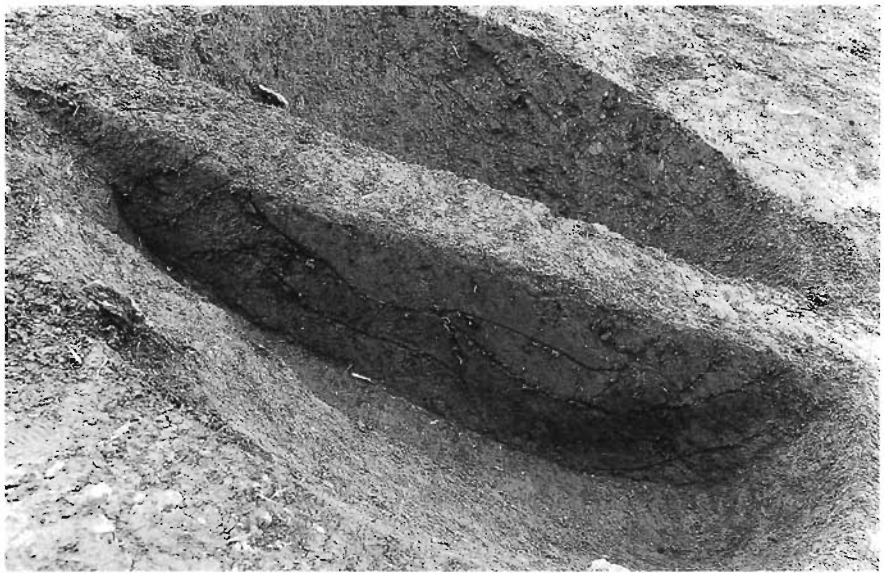
山守免遺跡２区
ＳＩ０１土層断面



山守免遺跡２区
ＳＩ０１完掘状況

図版60

山守免遺跡２区
ＳＫ０１完掘状況



山守免遺跡２区
ＳＫ０２土層断面

山守免遺跡２区
ＳＫ０４完掘状況

山守免遺跡２区
ＳＸ０１完掘状況

山守免遺跡２区
ＳＸ０２土層断面

山守免遺跡２区
調査後全景

図版62

山守免遺跡３区
調査区土層

山守免遺跡３区
ＳＢ０１土層断面

山守免遺跡３区
ＳＢ０１完掘状況

山守免遺跡３区
ＳＢ０２完掘状況

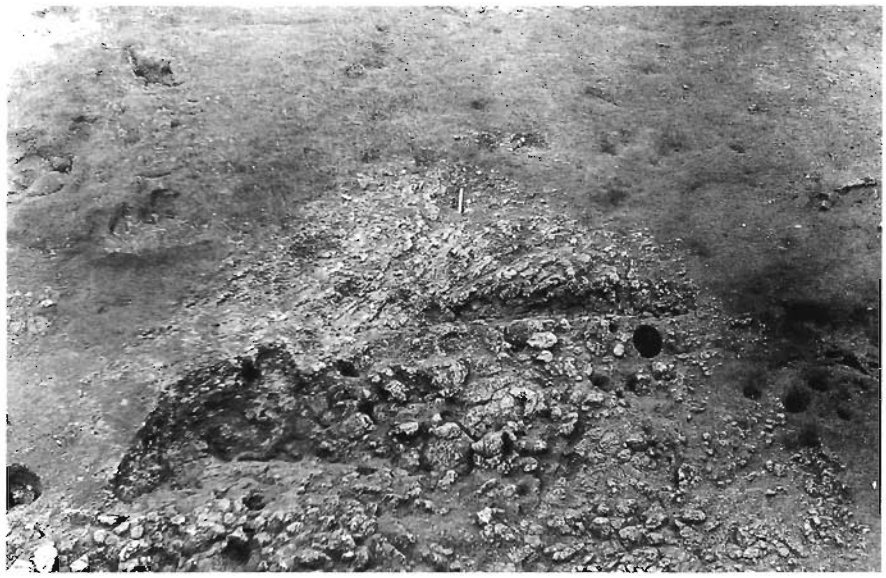
山守免遺跡３区
ＳＢ０２遺物出土状況

山守免遺跡３区
ＳＢ０２土層断面

図版64

山守免遺跡３区
ＳＢ０３・ＳＢ０７
完掘状況

山守免遺跡３区
ＳＢ０６完掘状況



山守免遺跡３区
ＳＢ０４・ＳＢ０５
完掘状況

山守免遺跡３区
ＳＢ０３・ＳＢ０６・
ＳＢ０７完掘状況

山守免遺跡３区
ＳＢ０３遺物出土状況

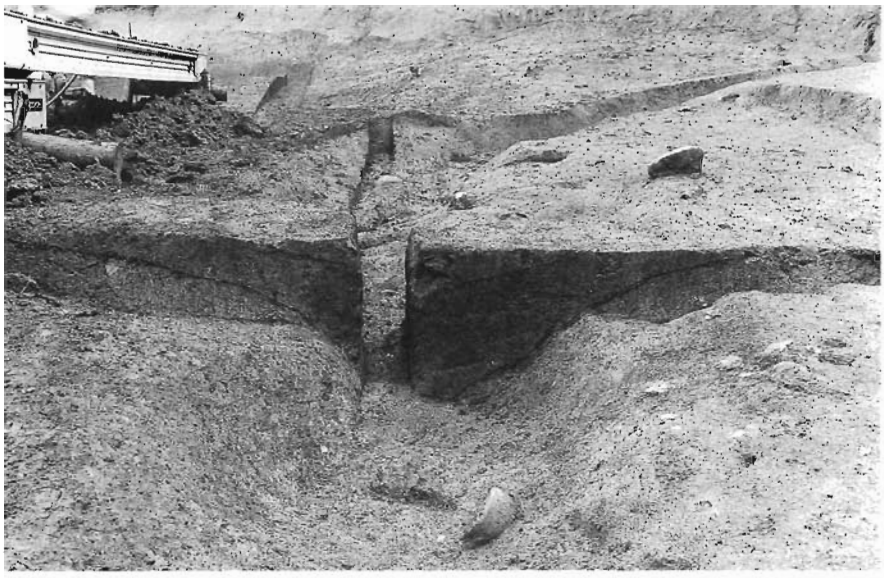
山守免遺跡３区
ＳＢ０３・ＳＢ０７
土層断面

図版66

山守免遺跡３区
ＳＢ０４土層断面

山守免遺跡３区
ＳＢ０５土層断面

山守免遺跡３区
ＳＢ０５遺物出土状況



山守免遺跡３区
ＳＤ０１土層断面

山守免遺跡１区・２区遠景

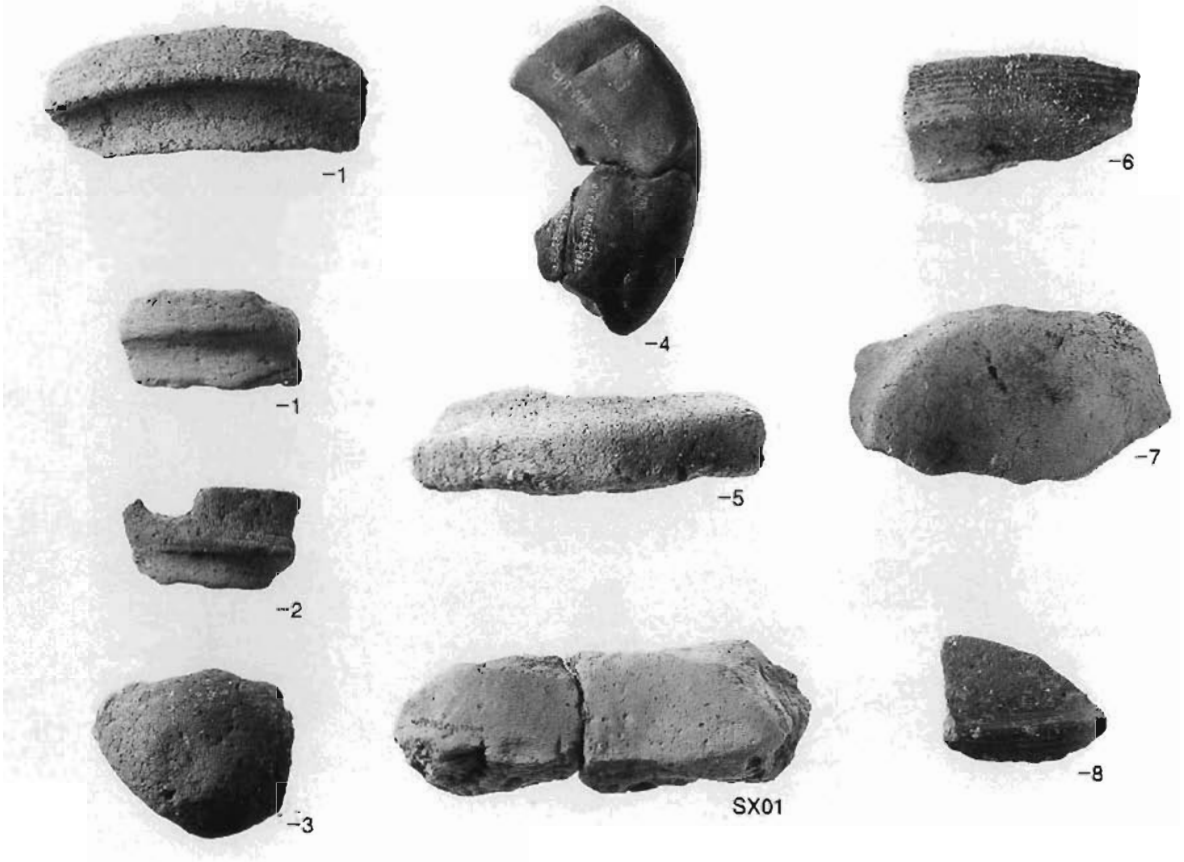
山守免遺跡３区全景

図版68

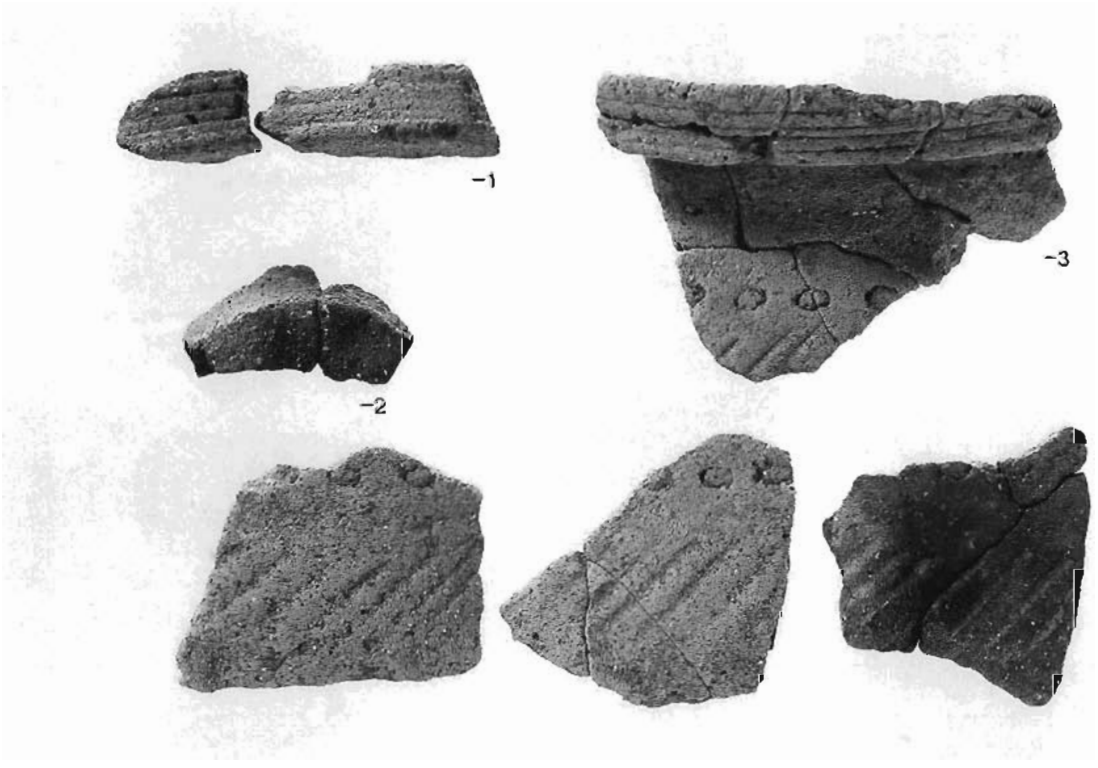
山守免遺跡３区
ＳＢ０８完掘状況

山守免遺跡３区
ＳＢ０９・ＳＢ１１・
ＳＢ１２完掘状況

山守免遺跡３区
ＳＢ１０完掘状況

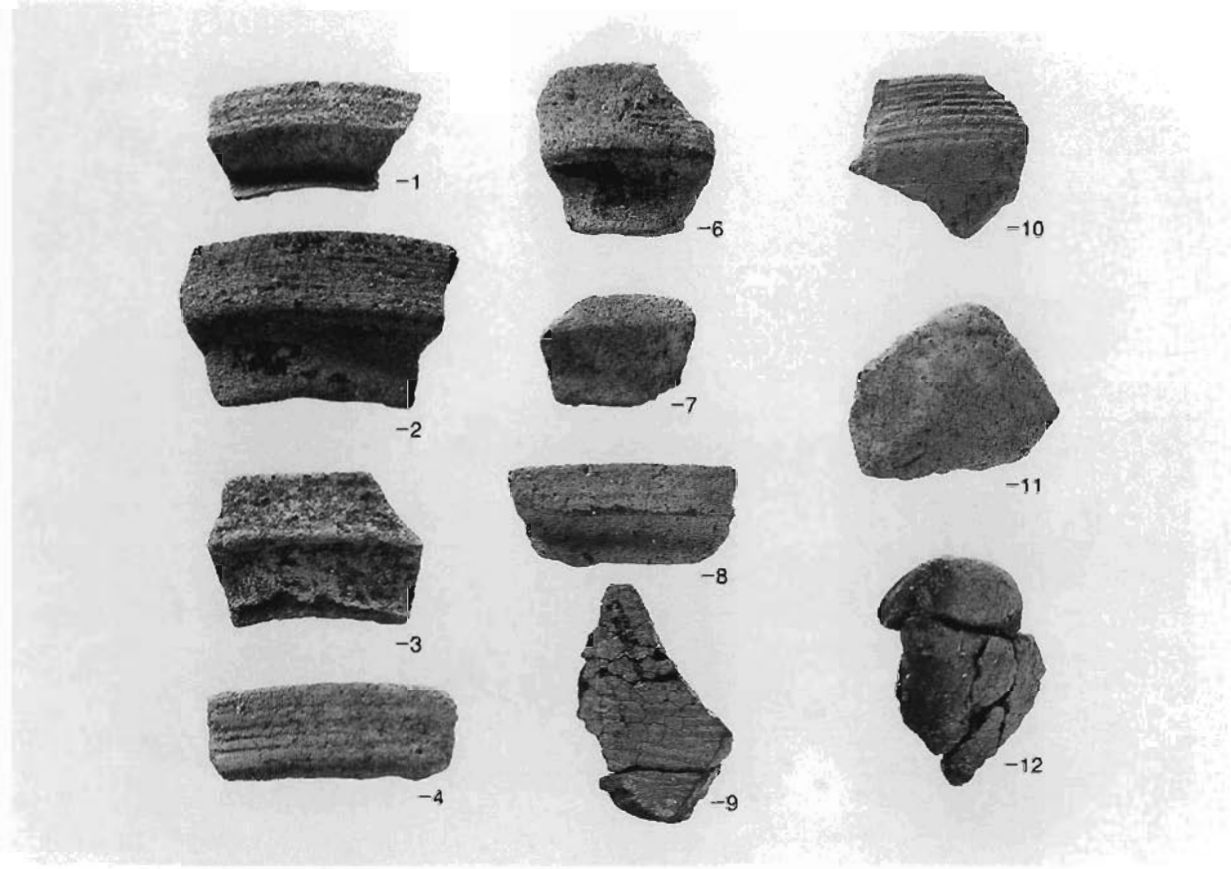


山守免遺跡１区ＳＩ０１・ＳＩ０２出土弥生土器

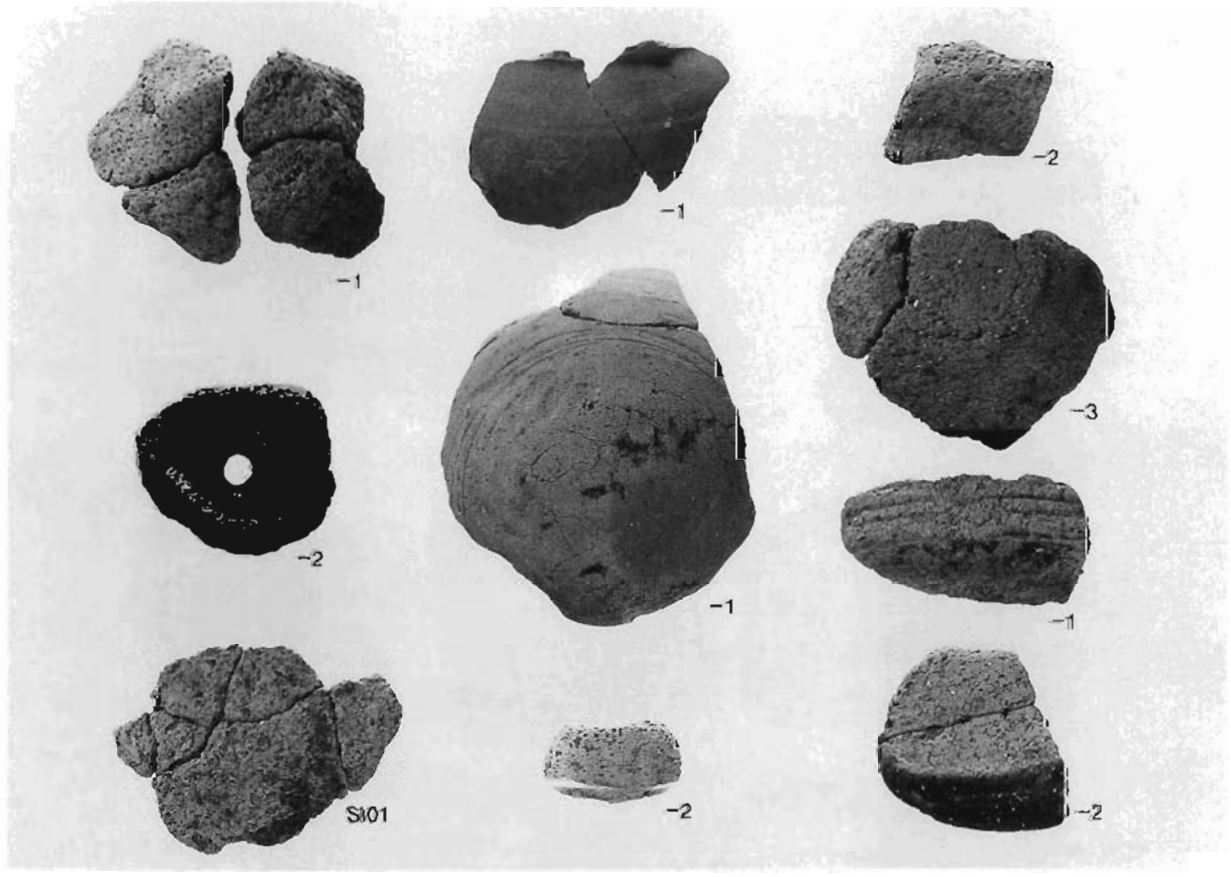


山守免遺跡１区ＳＤ０２（土器溜まり）出土弥生土器

図版70

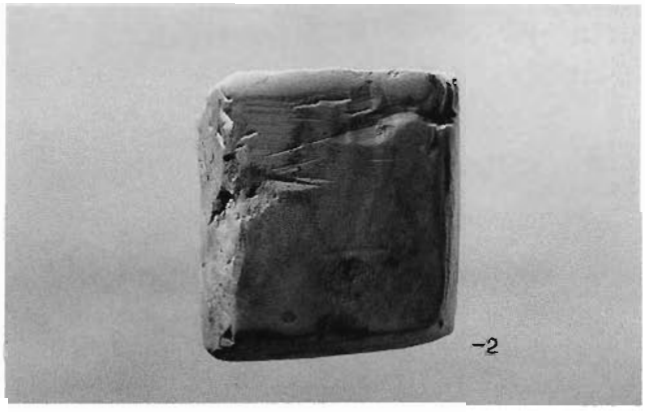


山守免遺跡１区遺構外出土弥生土器



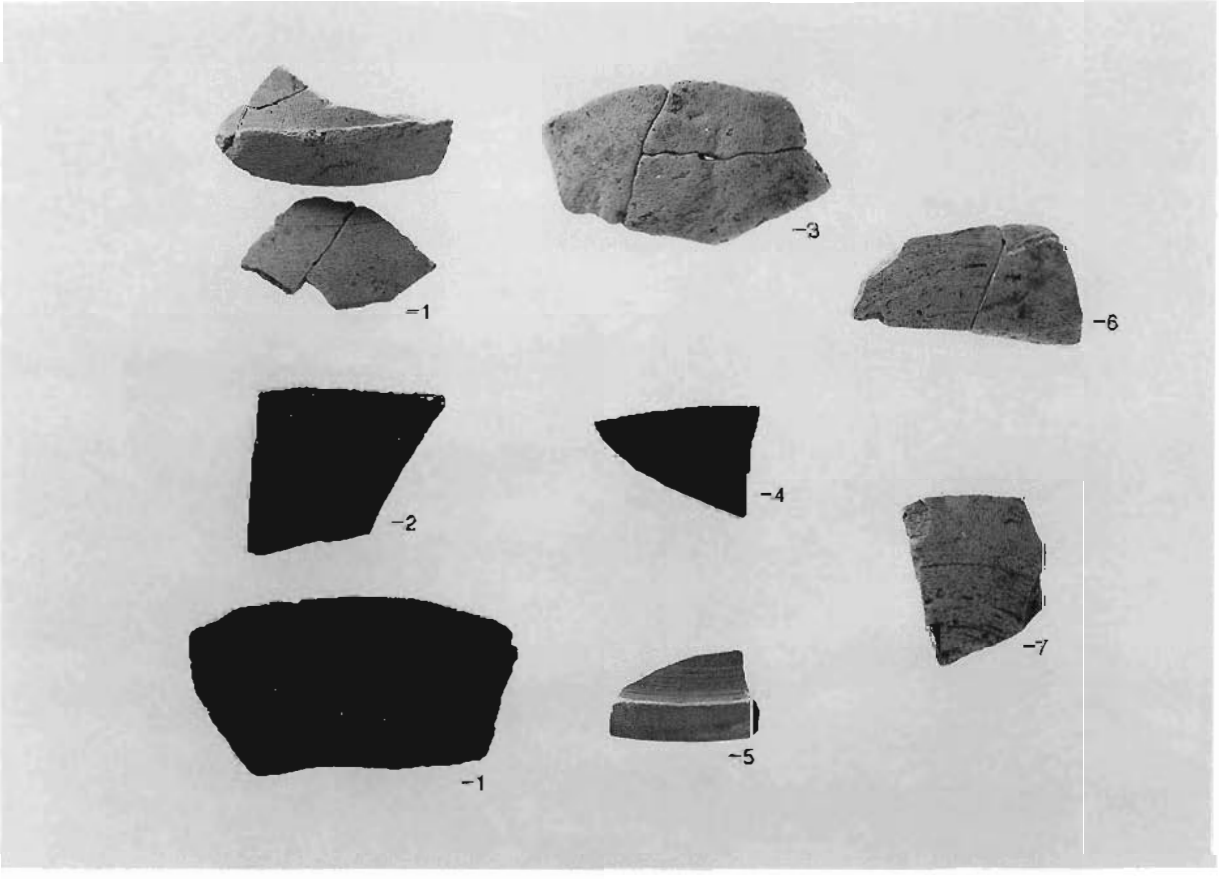
山守免遺跡２区ＳＩ０１・ＳＫ０２・ＳＫ０３・ＳＸ０２遺構外出土土器

山守免遺跡３区ＳＢ０２（北側建物）出土土器



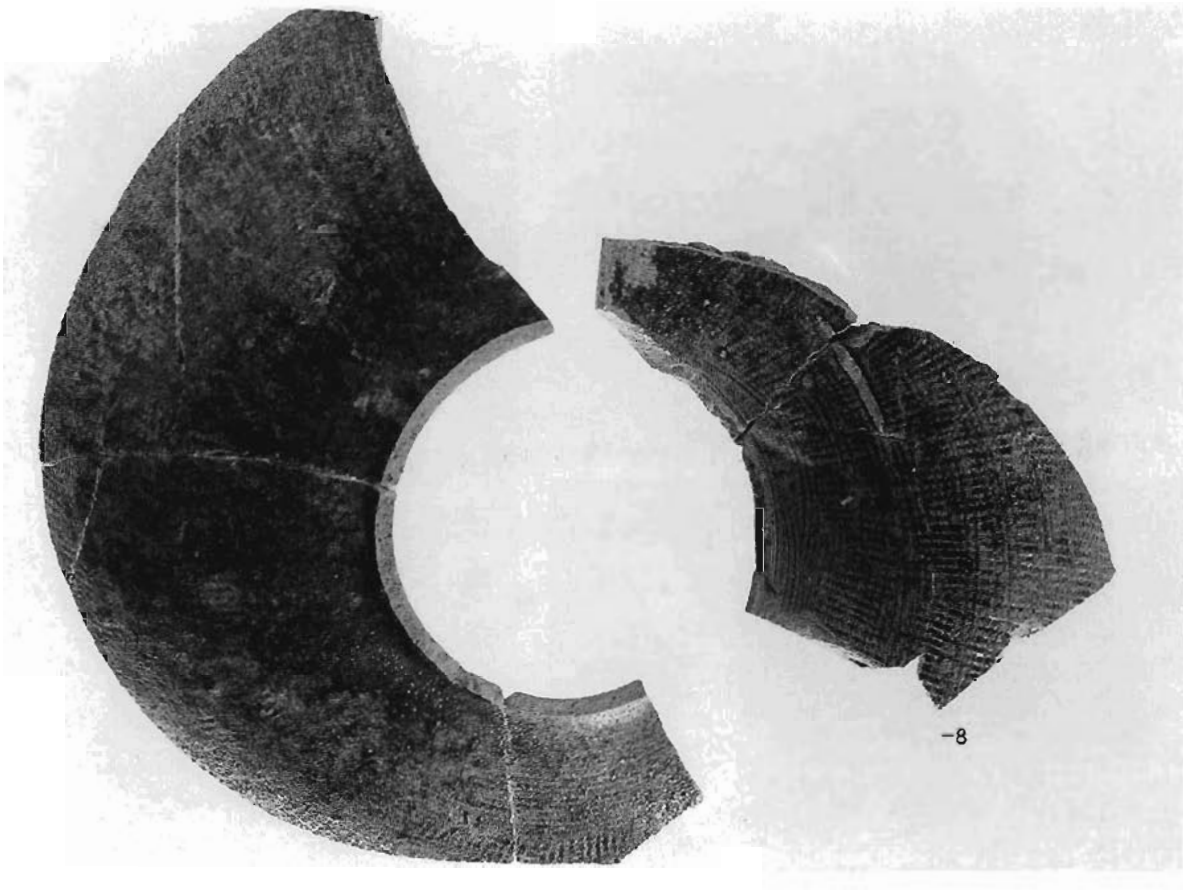
山守免遺跡２区ＳＩ０１出土砥石

山守免遺跡２区ＳＸ０１出土弥生土器

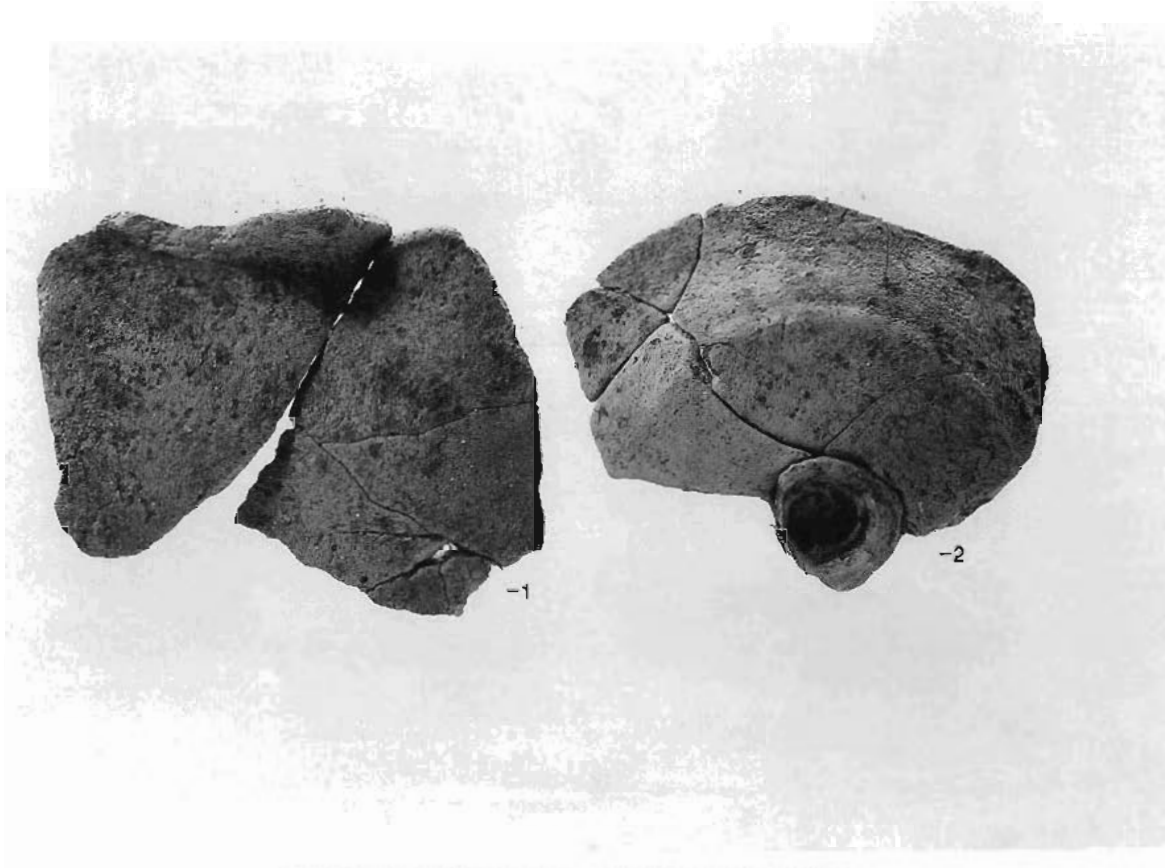


山守免遺跡３区ＳＢ０１・ＳＢ０２（北側建物）出土土器

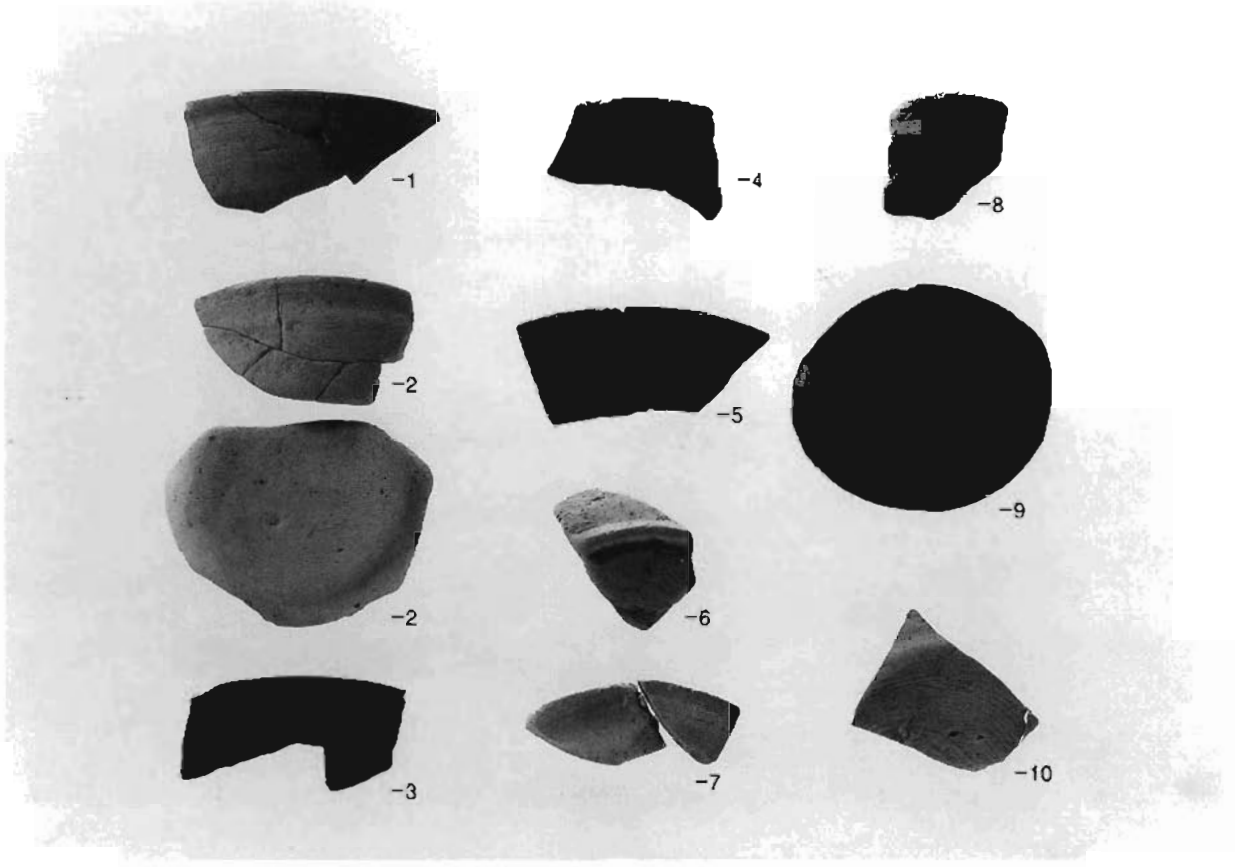
図版72



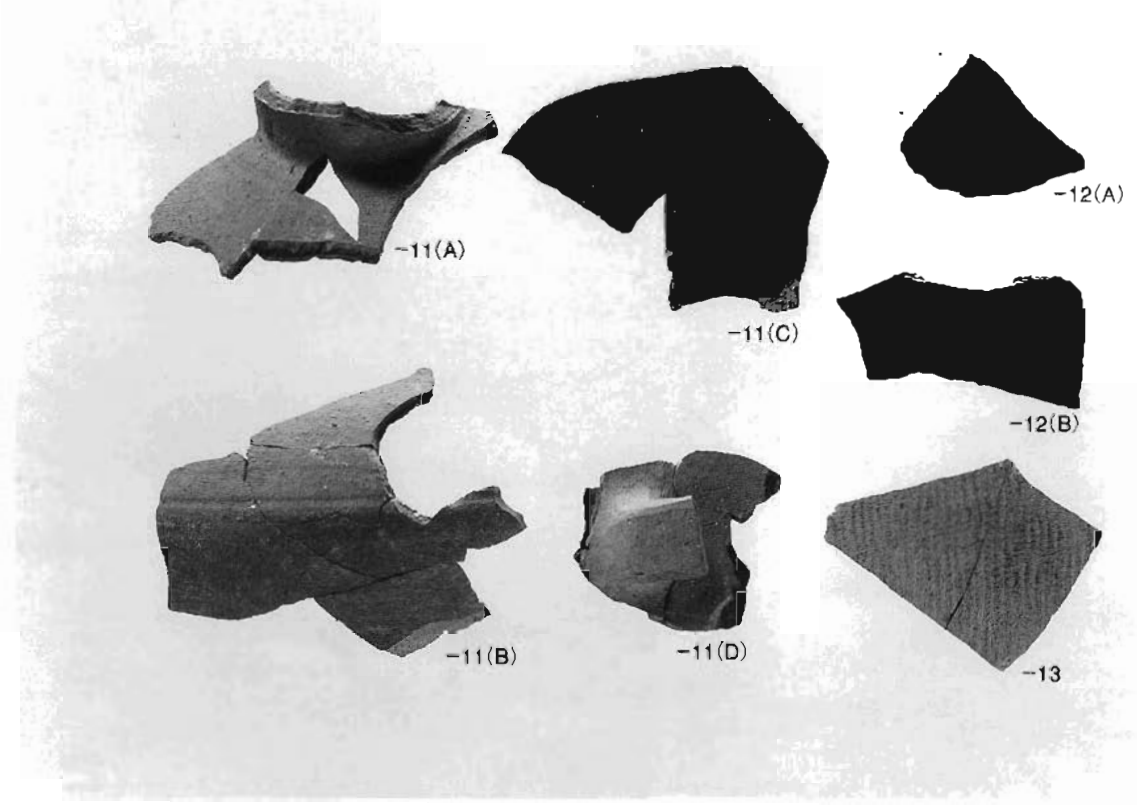
山守免遺跡３区ＳＢ０２（北側建物）出土須恵器甕



山守免遺跡３区ＳＢ０２（南側建物）出土土器

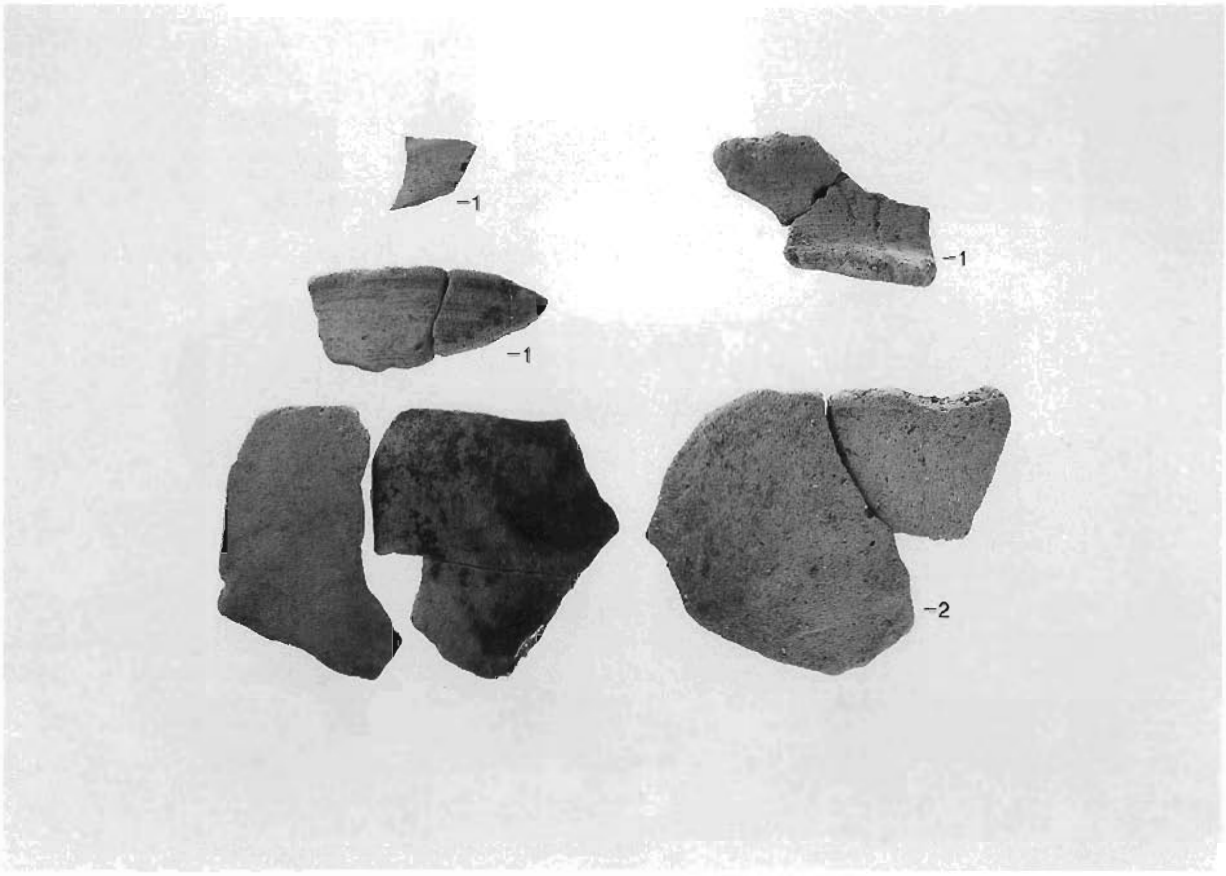


山守免遺跡３区ＳＢ０３出土須恵器



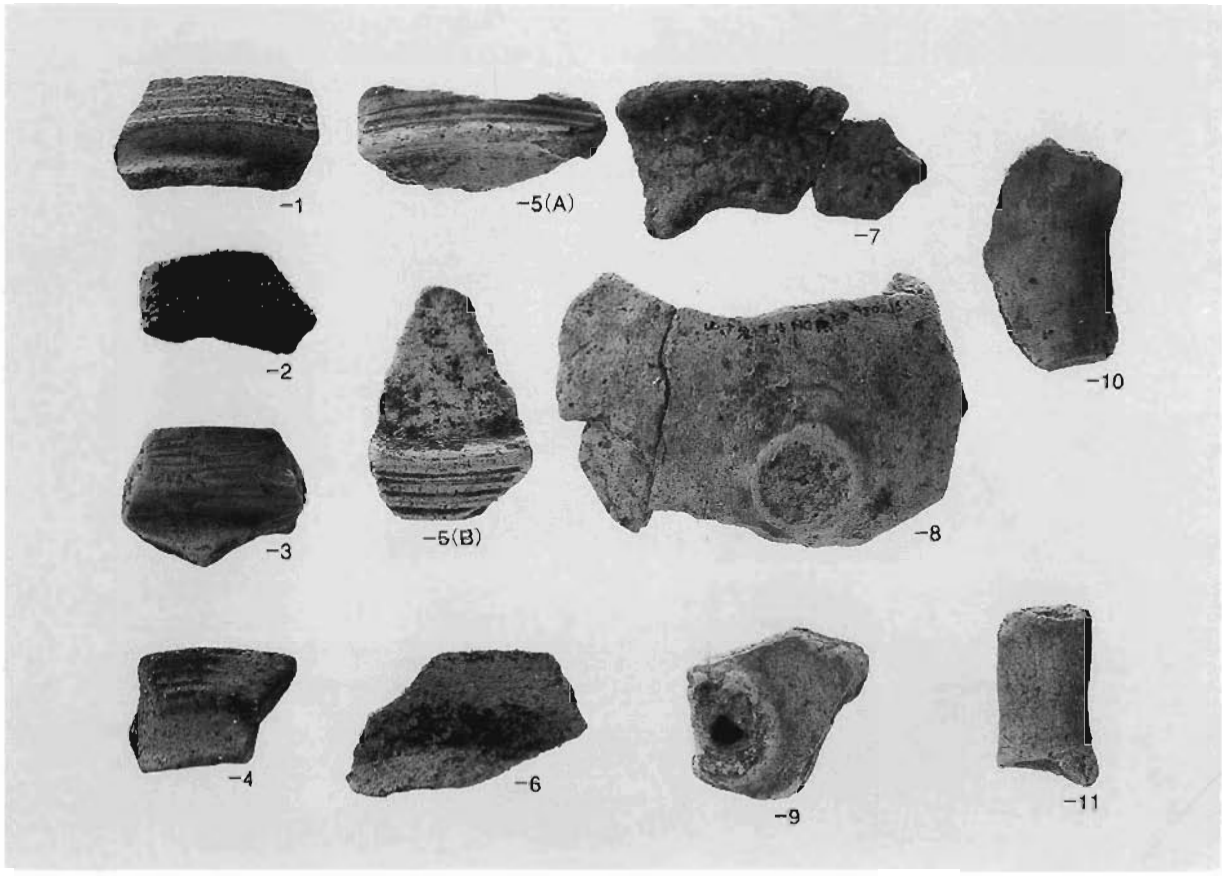
山守免遺跡３区ＳＢ０３出土須恵器

図版74

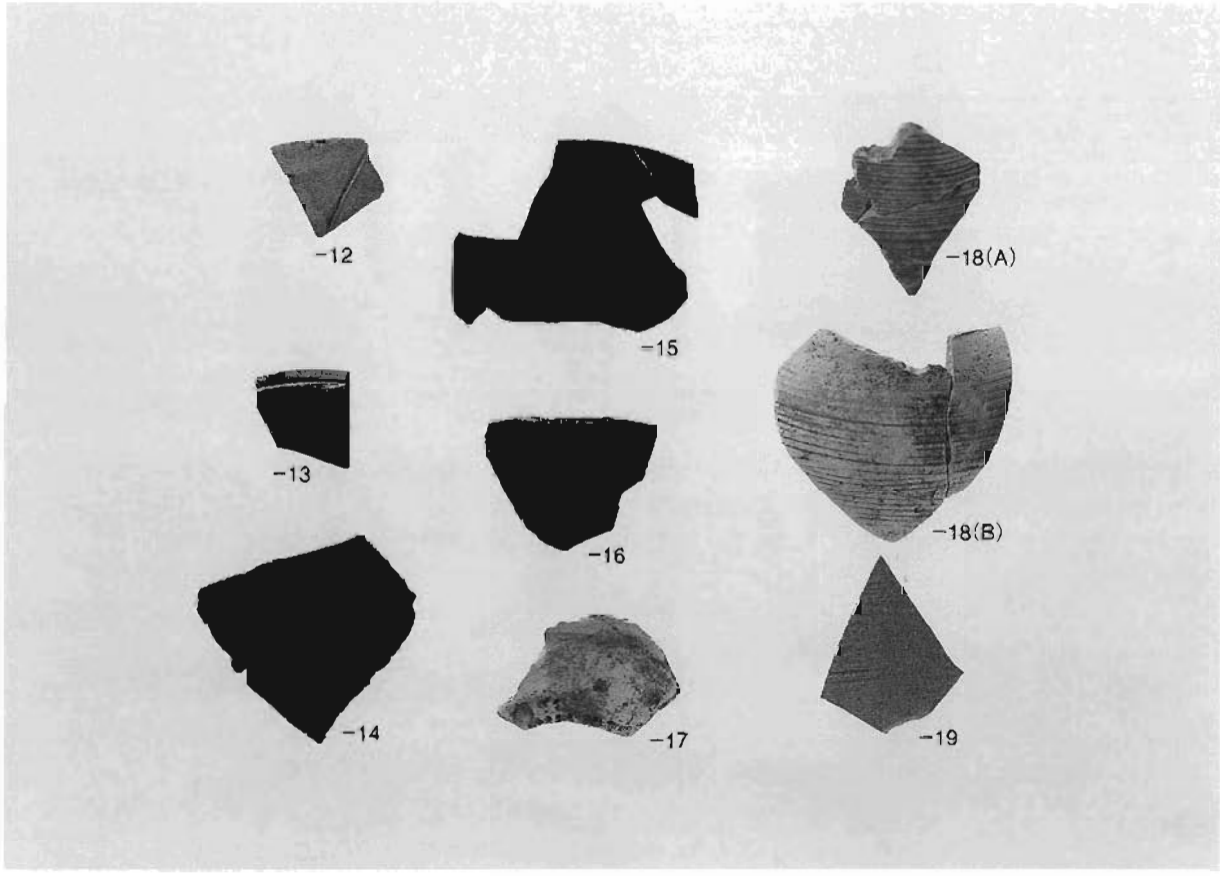


山守免遺跡３区ＳＢ０７・ＳＢ０４・ＳＢ０５出土土器

山守免遺跡３区ＳＢ０５出土土器

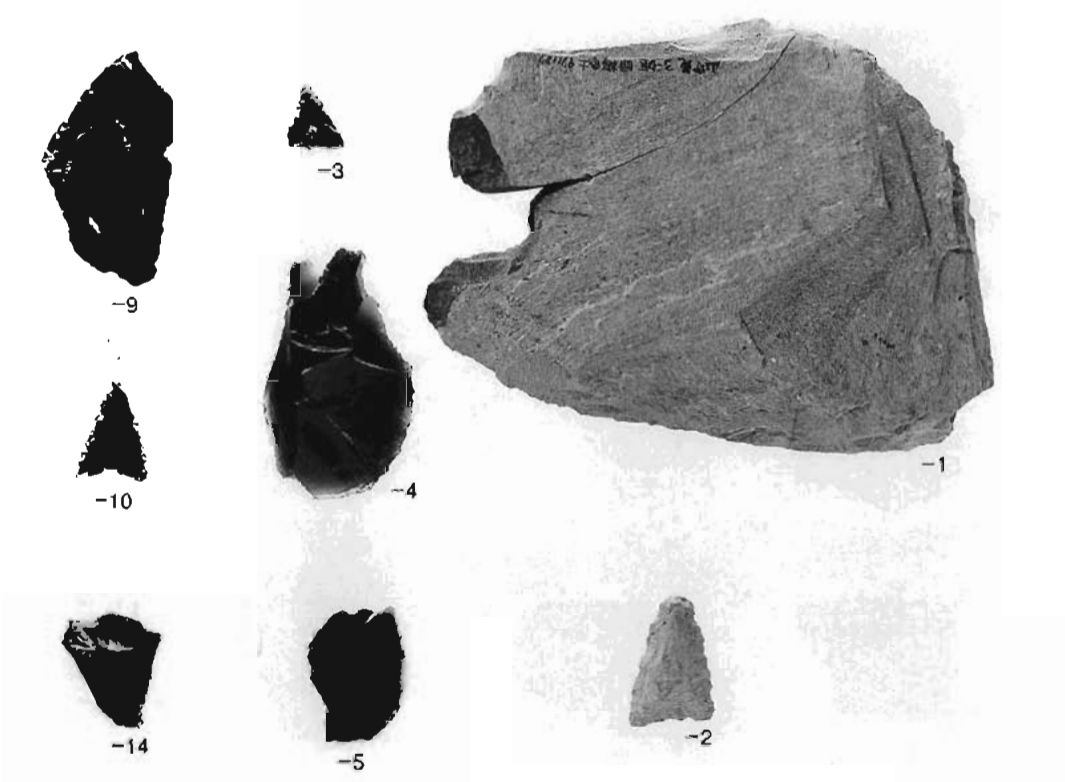


山守免遺跡３区遺構外出土土器

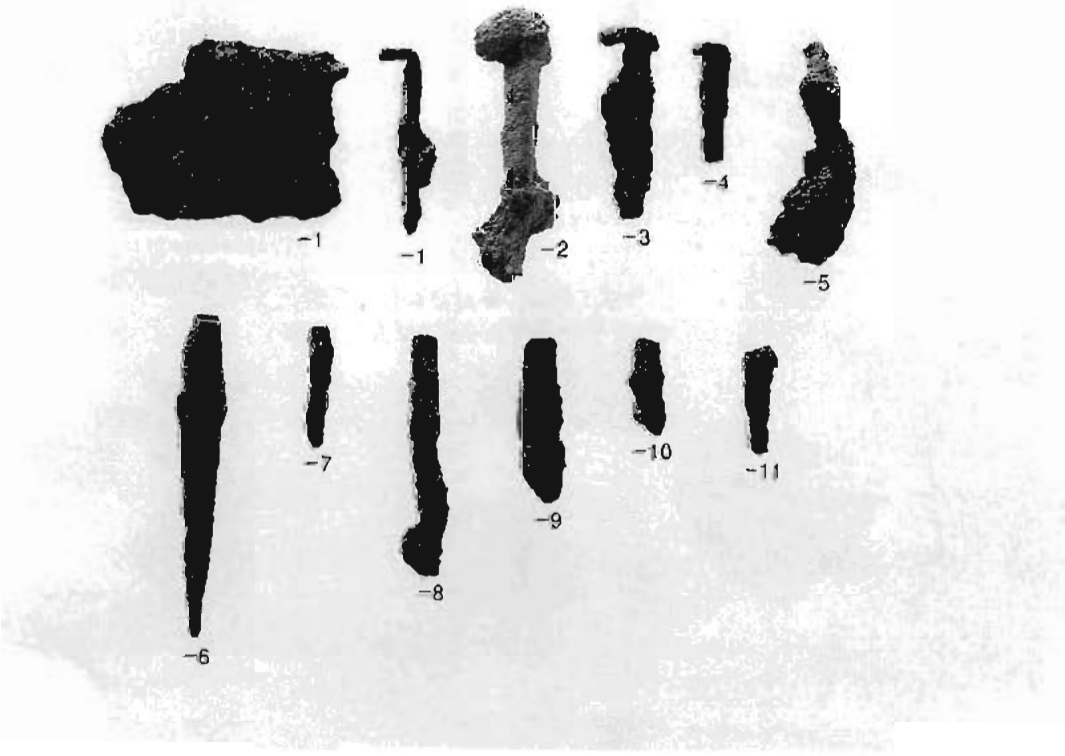


山守免遺跡３区遺構外出土須恵器

図版76



山守免遺跡１区ＳＩ０３・２区遺構外・３区遺構外出土石器



山守免遺跡１区ＳＤ０３・３区ＳＢ０３出土鉄器

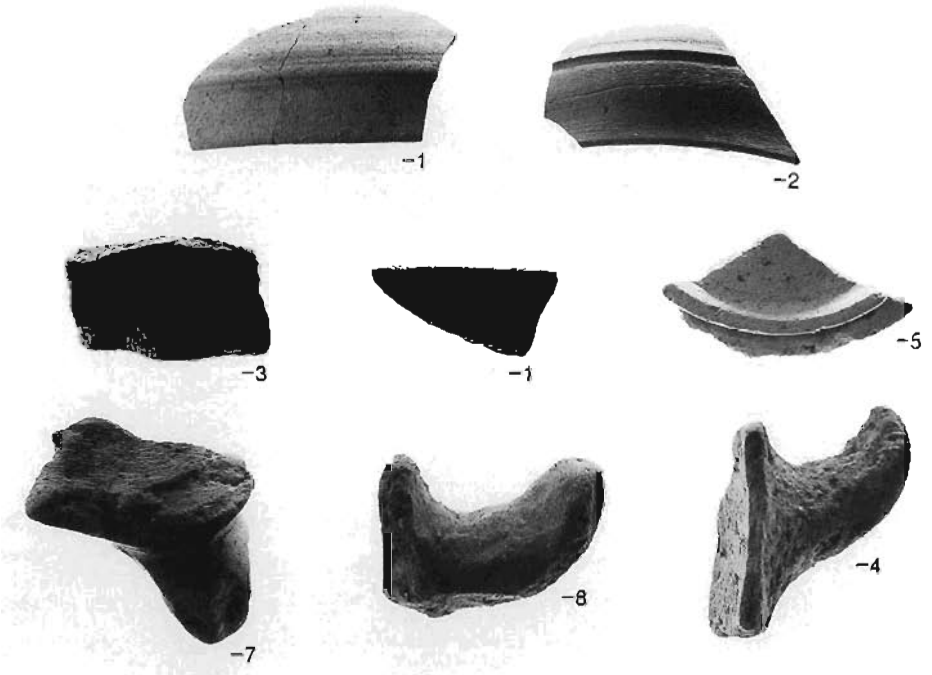
山守免遺跡３区ＳＢ０９出土土器

山守免遺跡３区ＳＢ０９出土土器

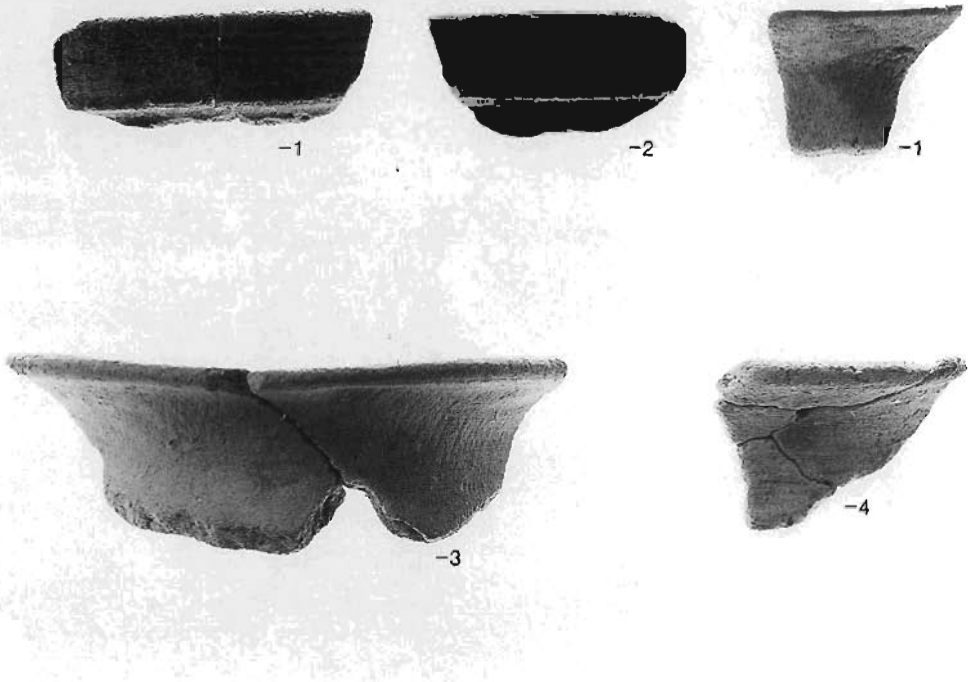
図版78

山守免遺跡ＳＢ０９出土土器

山守免遺跡ＳＢ０９出土土器



山守免遺跡３区ＳＢ０８・ＳＢ０９・ＳＢ１０・ＳＢ１２出土土器



山守免遺跡３区ＳＢ０９・ＳＢ１１出土土器

図版80

石地蔵遺跡調査前全景（東から）

石地蔵遺跡石造地蔵菩薩像据え付け痕跡（東から）

石地蔵遺跡頂部
完掘状況
（西から）

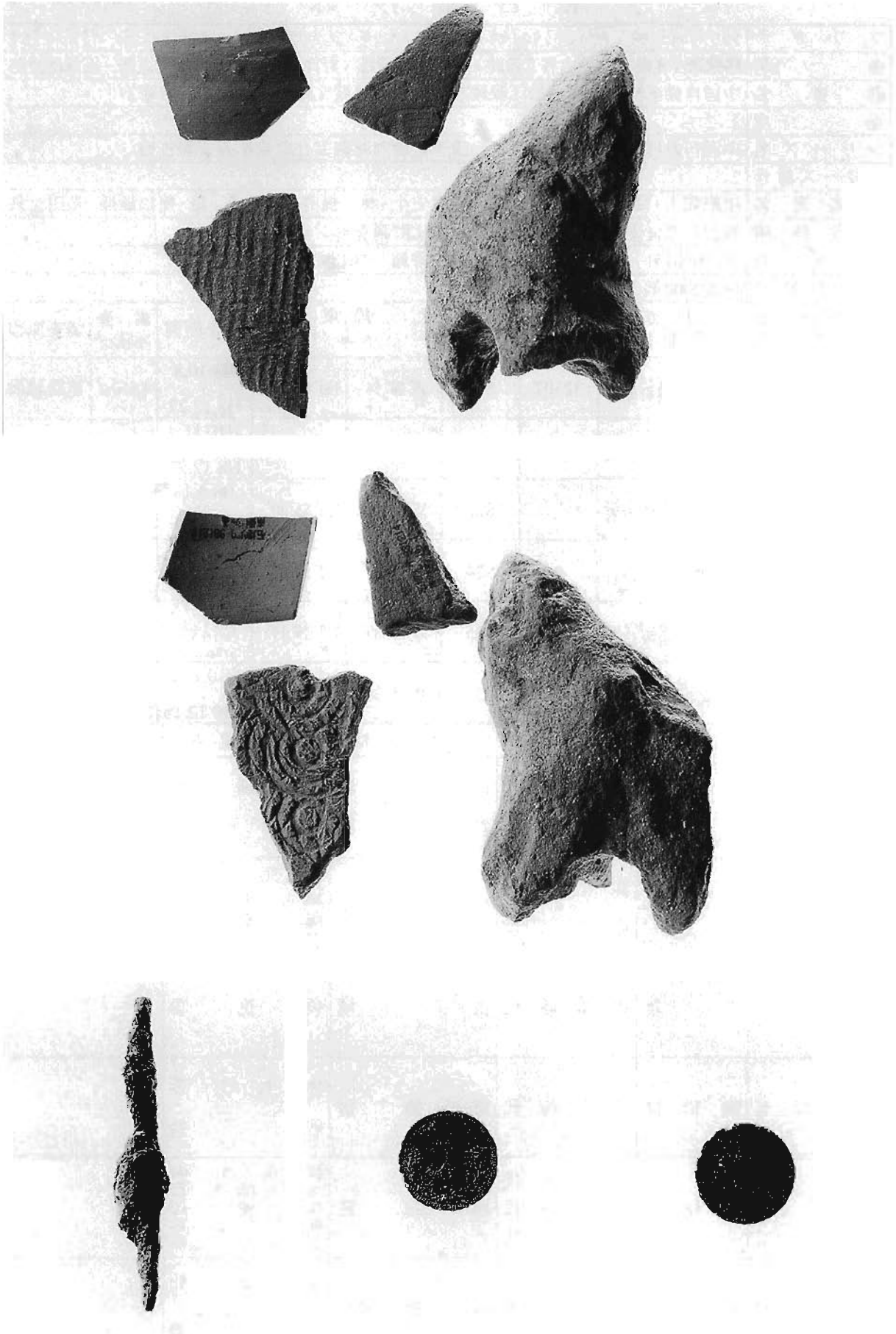
石地蔵遺跡
石造地蔵菩薩像据え付け
痕跡跡完掘状況（南から）

石地蔵遺跡
調査後全景（東から）

図版82

石造地蔵菩薩座像全景

石造地蔵菩薩座像部分



石地蔵遺跡出土遺物

報告書抄録

フリガナ	ショウブザコイチイセキ　ハクイシオオタニイセキ　シトギメンイセキ　ノツバラニイセキ　ヤマモリメンイセキ　イシジゾウイセキ
書名	勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡・シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡
副書名	中国自動車横断道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2
巻次	2
シリーズ名	中国自動車横断道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	2
編集者名	川原和人・橘　弘章・石橋俊朗・田中史生・林　健亮・丹羽野　裕・原田敏照・是田　敦
編集機関	島根県教育委員会文化財課　埋蔵文化財調査センター
所在地	〒690-0131　島根県松江市打出町33番地　TEL0852-36-8608(代)
発行年月日	西暦2000年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所収遺跡名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
ショウブザコイチ 勝負廻Ⅰ	ヤツカグンシンジチョウキマチ 八束郡宍道町来待	32307	S12	35°24′54″	133°00′47″	H8.10.8 ～ H8.12.27	1,650㎡	道路建設
ハクイシオオタニニ 白石大谷Ⅱ	ヤツカグンシンジチョウハクイシ 八束郡宍道町白石		S21	35°23′52″	132°35′43″	H10.11.4 ～ H8.12.27	1,500㎡	同上
シトギメン シト ギ 免	ヤツカグンシンジチョウハクイシ 八束郡宍道町白石		S22	35°23′50″	132°55′40″	H8.8.18 ～ H8.9.24	2,040㎡	同上
ノツバラニ 野津原Ⅱ	ヤツカグンシンジチョウハクイシ 八束郡宍道町白石		S24	35°23′42″	132°55′26″	H8.7.29 ～ H8.8.25	3,000㎡	同上
ヤマモリメン 山守免	ヤツカグンシンジチョウハクイシ 八束郡宍道町白石		S25	35°23′39″	132°55′19″	H9.10.13 ～ H9.12.22 H10.4.1 ～ H10.4.17	4,200㎡	同上
イシジゾウ 石地蔵	ヤツカグンシンジチョウサツウ 八束郡宍道町佐々布		S33	35°18′36″	132°54′21″	H10.12.8 ～ H10.12.16	120㎡	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
勝負廻Ⅰ	城跡 古墳	古墳時代 中世	山城 石棺	土師器 鉄器	
白石大谷Ⅱ	建物跡	弥生時代 中世	建物跡	弥生土器 須恵器 陶磁器 石器	
シトギ免	古墳	古墳時代	古墳	須恵器	
野津原Ⅱ	建物跡	弥生時代	建物跡	弥生土器 石器	
山守免	建物跡	弥生時代 古墳時代 古代	建物跡	弥生土器 土師器 須恵器 鉄器 石器	
石地蔵	石造仏	近世	石造仏	須恵器 鉄器	

勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡
シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡
山守免遺跡・石地蔵遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書２

平成12年３月印刷
平成12年３月発行

発行　日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

印刷　渡部印刷